

国立歴史民俗博物館外部評価報告書

～ 歴博の資源について～

2012年3月

国立歴史民俗博物館

緒 言

1981（昭和 56）年、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は大学共同利用機関として設置され、1983（昭和 58）年 3 月開館し、総合展示が一般公開された。

歴博の最大の特色は、博物館という形態の大学共同利用機関として設置され、学術資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することにある。

また 2007（平成 19）年、歴博独自の新しい研究スタイル「博物館型研究統合」を提唱した。「博物館型研究統合」とは、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という三つの要素を有機的に連鎖させ、さらにそれらの要素を国内外の幅広い人々と〈共有・公開〉することによって、博物館という形態を最大限に活かした研究を推進することである。

今回の評価は、その最も根幹となる〈資源〉についてお願いした。その際、2011 年度から歴博が「歴博の資源活用に関する評価項目」にそった「自己点検評価」を提示し、それを踏まえて外部評価を実施していただくこととした。

歴博の〈資源〉としては、膨大な歴史資料・情報や図書をはじめ、共同研究によってえられた研究成果および共同研究を遂行する過程で収集された資料、データ、新たな研究課題がある。また、実験・分析・調査等のための各種機器や施設（調査室・展示室・写場など）も共同利用のための重要な研究資源である。さらにこの共同研究のなかで構築された研究者のネットワークも〈資源〉と考えることができよう。

〈資源〉の評価は、歴博創設以来、その収集方針にもとづいて所蔵する資料群が〈研究〉〈展示〉に十分に活用されているかという観点と、さらに資源活用の個別例として企画展示・特集展示・データベース・映像資料についても幅広い観点から検討していただいた。特に「博物館型研究統合」の根幹をなす〈資源〉が〈研究〉〈展示〉と有機的に連鎖し、歴博の機関としての特性が十分に発揮されているかの検証を重点的に評価していただくこととした。

歴博が所蔵する資料群の活用については、安齋實炮術関係資料をはじめとする所蔵資料群は研究・展示と有機的な結合が果たされているとの評価を受けた。今後はさらに多様な視点から研究が蓄積され、発展させていく必要があると指摘された。

資源活用の総論的評価として、資源活用の研究水準はおおむね高く、学界に的確に貢献しており、研究体制においても館内研究者と館外研究者の連携が確認でき、資源の活用は、博物館型研究統合の一環に組み込まれ、適切に機能していると評価された。

しかしながら、各委員から次のような要望が提示された。主な要望として「人」の「生活史」にとっての「資料」とは何か、あるいはどこからどこまでを資料とするのか、という根源的なテーマについての問いかけを継続すること、積極的に社会に提示し活用を図ること、国際的な発信に課題があることなどが指摘された。

以上のような「資源」について、いくつかの課題を残しながらも歴博が目指す「博物館

型研究統合」の実践を明確に検証できると評価していただいた。なお、今期以降の外部評価の方法および委員の選出方法の検討をも伴わせて要望された点については、歴博として責任をもって対処したい。

いずれにしても、今回の評価を受けて、今後、“博物館という形態の大学共同利用機関”の特性を十分に発揮した研究をはじめ各種事業を推進するよう努めてゆく所存である。

あらためて、歴博外部評価委員会の方々に心から御礼を申し上げたい。

2012年3月

国立歴史民俗博物館長 平 川 南

外部評価報告書

～ 歴博の資源について～

歴博外部評価委員会

はしがき

本報告書は、2010年4月から2012年3月までの、歴博外部評価委員会の活動をまとめたものである。

歴博外部評価委員会では、1年目に「歴博が所蔵する資料群の活用について」の評価を行い、2年目には、国立歴史民俗博物館における評価の方法を検討・提起し、外部評価を国立歴史民俗博物館の側から自己評価を行っていただいたあとで行う方式にあらため、「企画展示・特集展示・データベース・映像資料について」についての外部評価を行った。以上の経緯の詳細については、以下の「Ⅰ 外部評価」の「1. 企画展示・特集展示・データベース・映像資料について」のなかに収録した大門の文章に「1. 外部評価の方法的提言と実践」として記しているので参照されたい。

報告書は、「Ⅰ 外部評価」「Ⅱ 自己点検評価」と大きく分けてある。「Ⅰ 外部評価」では、歴博外部評価委員会が2年目に行った「企画展示・特集展示・データベース・映像資料について」の外部評価が総括的な内容を示しているのを「1」とし、1年目に行った「歴博が所蔵する資料群の活用について」の外部評価を「2」として配置した。

「Ⅰ」の「1」の「(1) 外部評価」は、「Ⅱ 自己点検評価」に収録した館側の、企画展示・特集展示・データベース・映像資料についての自己点検評価をふまえて書かれたものである。「1」の「(1) 外部評価」の冒頭には、「(1)」の外部評価委員の評価をふまえ、全体を総括した大門の文章を掲載してある。

「Ⅰ」の「2」の「(1) 外部評価」は、館側の自己点検評価が出される前年に、「2」の「(2) 外部評価のための参考資料」に基づいて行われたものである。1年目の「Ⅰ」の「2」の「(1) 外部評価」と2年目の「Ⅰ」の「1」の「(1) 外部評価」では、外部評価の方法が異なることを付記しておく。

2012年3月

歴博外部評価委員会
委員長 大門正克

国立歴史民俗博物館外部評価委員会

委員名簿

(2010.4.1～2012.3.31)

委員長 大門正克 (横浜国立大学経済学部教授)

副委員長 白川琢磨 (福岡大学人文学部教授)

荒野泰典 (立教大学文学部教授)

小川義和 (国立科学博物館
事業推進部学習企画・調整課長)

坂井秀弥 (奈良大学文学部教授)

三浦定俊 (財団法人 文化財虫害研究所理事長)

目 次

I. 外部評価

1. 企画展示・特集展示・データベース・映像資料について

(1) 外部評価

国立歴史民俗博物館の資源活用に関する外部評価 <委員長総括>

大 門 正 克・・・ p 13

国立歴史民俗博物館の資源活用に関する外部評価 <各委員の評価>

荒 野 泰 典・・・ p 18

小 川 義 和・・・ p 21

坂 井 秀 弥・・・ p 27

白 川 琢 磨・・・ p 30

三 浦 定 俊・・・ p 34

(2) 外部評価のための参考資料

①資料の特別利用実績一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p 39

②寄贈資料とその活用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p 41

③寄贈資料を出品した企画展示等一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ p 53

④民俗研究映像DVD貸出実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p 54

⑤資料の受入と館蔵資料データベース・・・・・・・・・・・・ p 55

⑥データベースれきはくの作成・公開・・・・・・・・・・・・ p 56

⑦収蔵資料の調査・研究等の実施状況・・・・・・・・・・・・ p 57

⑧民俗研究映像に関連する研究及び映像制作等・・・・・・・・ p 58

⑨平成22年度企画展示「侯爵家のアルバムー孝允から幸一にいたる木戸家写真資料ー」開催要項、終了報告書、実績報告、アンケート集計結果・・・ p 59

⑩平成23年度企画展示「紅板締めー江戸から明治のランジェリーー」開催要項、終了報告書、実績報告、アンケート集計結果・・・・・・・・ p 69

⑪データベース作成・公開状況（平成16～22年度）・・・・・・・・ p 79

- ⑫データベースの整備・公開・利用の状況（平成16～22年度）・・・ p 93
- ⑬民俗研究映像リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p 97
- ⑭共同研究計画書、研究目的、研究経過、研究成果等（平成19・20・21・22年度 民俗研究映像制作関係）・・・・・・・・ p 98
- ⑮平成20年度歴博フォーラム実施計画書、映像フォーラム3「海を渡った仏教 儀礼と芸能」開催要項、実施報告・・・・・・・・ p 121
- ⑯平成21年度歴博フォーラム実施計画書、映像フォーラム4「筆記の近代史－万年筆をめぐる人びと－」開催要項、実施報告・・・・・・・・ p 124
- ⑰平成22年度歴博フォーラム実施計画書、映像フォーラム5「平成の酒造り」開催要項、実施報告・・・・・・・・ p 127

<関連するDVD、レジュメ等>

DVD「薬師寺花会式－行法と支える人々－」

DVD「筆記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－」

DVD「平成の酒造り「製造編」「継承・革新編」」

映像フォーラム3レジュメ『海を渡った仏教 儀礼と芸能』（2008.11 発行）

映像フォーラム4レジュメ『筆記の近代史－万年筆をめぐる人びと－』

（2009.12 発行）

映像フォーラム5レジュメ『平成の酒造り』（2010.9 発行）

2. 歴博が所蔵する資料群の活用について

（1）外部評価

平田篤胤関係資料	荒野泰典・・・ p 133
砲術関係資料	荒野泰典・・・ p 138
見世物関係資料コレクション	大門正克・・・ p 143
直良信夫コレクション	小川義和・・・ p 146
瓦コレクション	坂井秀弥・・・ p 150
死絵	白川琢磨・・・ p 153
紀州徳川家伝来楽器コレクション	三浦定俊・・・ p 156

(2) 外部評価のための参考資料

- ①歴博における資料収集の基本方針について・・・・・・・・・・・・・・・・ p 163
 - 歴博における資料受け入れの流れ（参考）・・・・・・・・・・・・・・・・ p 169
 - 館蔵資料活用の諸形態（参考）・・・・・・・・・・・・・・・・ p 170
- ②収蔵資料の調査・研究等の実施状況・・・・・・・・・・・・・・・・ p 171
- ③収蔵資料点数及び蔵書冊数一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ p 178
- ④国立歴史民俗博物館所蔵国指定文化財一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ p 180
- ⑤資料購入・受贈の状況・・・・・・・・・・・・・・・・ p 184
- ⑥資料製作の状況・・・・・・・・・・・・・・・・ p 191
- ⑦資料の修理・修復状況・・・・・・・・・・・・・・・・ p 194
- ⑧総合的有害生物管理の状況・・・・・・・・・・・・・・・・ p 196
- ⑨資料の特別利用実績一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ p 197

<関連する目録・図録・報告書等>

歴博のめざすもの（2007.3 刊行）

歴博のめざすもの 事例集1（2010.3 刊行）

資料目録『平田篤胤関係資料目録』（2007.3 刊行）

研究報告第122集『平田国学の再検討（一）』（2005.3 刊行）

研究報告第128集『平田国学の再検討（二）』（2006.3 刊行）

研究報告第146集『平田国学の再検討（三）』（2009.3 刊行）

研究報告第159集『平田国学の再検討（四）』（2010.3 刊行）

展示図録『明治維新と平田国学』（2004.10 刊行）

資料目録『安齋實炮術関係資料及び所荘吉「青圃文庫」コレクション目録』（2007.3 刊行）

展示図録『歴史のなかの鉄炮伝来—種子島から戊辰戦争まで—』（2006.10 刊行）

資料目録『見世物関係資料コレクション目録』（2010.1 刊行）

資料目録『直良信夫コレクション目録』（2008.3 刊行）

展示図録『縄文はいつから！？—1万5千年前に何がおこったのか—』（2009.10 刊行）

資料図録『瓦コレクション』（2006.2 刊行）

資料図録『死絵』（2010.2 刊行）

展示図録『錦絵はいかにつくられたか』（2009.2 刊行）

展示図録『弾・吹・打—日本の楽器とその系譜』（1992.10 刊行）

資料図録『紀州徳川家伝来楽器コレクション』（2004.3 刊行）

II. 自己点検評価

国立歴史民俗博物館の自己点検評価について・・・・・・・・・・・・・・・・ p 201

I . 外部評価

1. 企画展示・特集展示・データベース・映像資料について

(1) 外部評価

国立歴史民俗博物館の資源活用に関する外部評価

<委員長総括>

歴博外部評価委員会

委員長 大門 正 克

1. 外部評価の方法的提言と実践

歴博の外部評価委員会は、今期で3期目にあたる。2006年度から2007年度の1期目は、「共同研究」を対象にし、2008年度から2009年度の2期目は、「展示」を対象にし、2010年度から2011年度の今期は、「資源」を対象にした。「資源」の具体的内容は、展示のうちで外部評価の対象にならなかった「企画展示」及び「データベース」「映像資料」の3つである。

「資源」は、「研究」「展示」「資源」の3つの有機的連関からなる博物館型研究統合の柱の1つであり、歴博の重要な屋台骨である。しかし、「企画展示」に「データベース」「映像資料」を加えた3者の関連が見えにくかったことも手伝い、3期の1年目最後の外部評価委員会にあたる第12回歴博外部評価委員会（2011年3月8日）では、外部評価の方法が議論になった。

歴博の今までの外部評価委員会は、依頼された評価対象について「評価書」をまとめることを仕事とした。そこでは貴重な提言がなされてきたが、他の大学・機関の多くの外部評価では、大学・機関の側が自己評価を行い、それを踏まえて外部評価委員が外部評価を行うことが多い。それに加えて、歴博の外部評価委員のなかには、運営会議委員のなかから選ばれている人がいるが、他の大学・機関の外部評価委員の場合には、他の会議の委員と重ならず独立していることが多く、この点も他と異なる点である。

以上のうち、外部評価委員の選出方法については、3期目の委員がすでに選ばれているので歴博の今後の検討課題として委ね、外部評価の方法について改善を申し入れた。具体的には、2011年度に外部評価を進めるにあたっては、歴博の側からまず評価についての基本的な考え方や評価のポイントを示していただき、それにもとづいて外部評価委員が評価をする方法への改善である。この点が受入れられ、第13回歴博外部評価委員会（同年8月11日）では、歴博側から「歴博の資源活用に関する評価項目」が示され、審議して了承された。そのうえで、2011年度は、歴博側から、「歴博の資源活用に関する評価項目」にそった「自己点検評価」をあらかじめまとめ、それを踏まえて外部評価を実施するという提案があり、了承された。これに基づき、2011年11月には、歴博側でまとめた「国立歴史民俗博物館の自己点検評価について」が提示された。この自己点検は、「資源」に関する歴博の担当プロジェクトが自己評価を行い、それを踏まえて館

内評価委員会がまとめたものである。2012年1月、外部評価委員がこの「自己評価」に基づいた「資源活用に関する外部評価」をまとめ、その後、外部評価委員長が全体をまとめる本文書を作成することで、「資源活用に関する外部評価書」の作成に至った。

以上のように、3期目の外部評価委員会は、歴博の外部評価の方法について提言を行い、歴博側からまず「歴博の資源活用に関する評価項目」及び「国立歴史民俗博物館の自己点検評価について」が示され、それを受けて外部評価を実施するというように、外部評価の方法を大きく変えることとなった。外部評価の方法については、坂井委員から、「評価ポイントを決めた横断的な自己評価がはじめて実施されたことは、担当者自身が事業の目的と意義、成果についてあらためて確認し、重要な自己評価と改善意見が得られたことにつながったと思う。それとともに、博物館内で総括する過程において、それを相対化・客観化することができ、この取り組みの意義が大きいことを示すといえよう」という意見が出されているように、3期目の外部評価委員会では、外部評価の方法を望ましい方向に改善できたと考えている。来年度以降の外部評価にあたっては、3期目の取り組みを踏まえて外部評価の方法を定めていただきたく、この点の検討を歴博側に要望する。また、あわせて外部評価委員の選出方法についても検討を要望したい。

2. 資源活用の総論的評価

歴博が掲げる基本理念である「博物館型研究統合」は、歴博の設置目的である、「生活史という分野にとっての重要な資料を収集し、それを研究し、併行して整理、展示する」という活動サイクルのなかで提唱されたものであり、この点を踏まえれば、歴博の資源活用は、全体として歴博の目的や活動理念にかなった成果をあげている。たとえば、今期の企画展示「侯爵家のアルバム－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－」（以下、「侯爵家のアルバム」と表記）、企画展示「紅板締め－江戸から明治のランジェリー－」（以下、「紅板締め」と表記）、特集展示「妖怪変化の時空」は、いずれも歴博の目的や基本理念にそって資料を収集し、それを研究・整理し、その成果を展示するという活動サイクルのなかで実現されたものである。資源活用の研究水準はおおむね高く、学界的確に貢献しており、研究体制においても館内研究者と館外研究者の連携が確認できる。資源の活用は、「博物館型研究統合」の一環に組み込まれ、適切に機能しているといっていだろう。

以上の総論的評価を踏まえたうえで、委員からは、さらに次の要望が出されている。たとえば、荒野委員は、「日本人」、あるいは「人」の「生活史」にとっての「資料」とは何か、あるいは、どこからどこまでを資料とするのか、という根源的なテーマについての問いかけ、あるいは、チャレンジを継続されることを切望したい」と述べており、具体的に、特集展示「妖怪変化の時空」は、「人の生活史における「心」の領域の広さ、奥深さを垣間見せて、非常に興味深く、「このような分野の史・資料の収集と整理研究、展示という活動は、今後さらに重要になってくるだろう」と指摘している。白川委

員からは、「博物館に関わる考古・歴史・民俗・保存科学においては、学問の垣根を廃し、研究を統合していこうという志向性」が大事であり、企画展示は、いずれも「素晴らしいタイトル」がつけられているものの、「拡がり」という点で「物足りなさ」を感じたといい、たとえば、企画展示「侯爵家のアルバム」では、「写真」や「記憶」に関心が導かれ、企画展示「紅板締め」では、「下着」や「着る」「飾る」という「人間の営みへの想像力をかき立てられる」が、いずれもその方面への啓発は与えられなかったと指摘されている。また、坂井委員からは、資源の所在する地域との連携、地域への還元という課題が提言されている。紅板締めの京都、民俗映像の各地域に資源活用の成果が還元されることにより、伝統的な技術や慣習はさらに継承されるのではないかという提言である。以上の3人の委員の指摘には、「博物館型研究統合」の今後の課題、あるいは考古・歴史・民俗の今後の連携の方向性が示されているとあっていいだろう。

資源活用については、自己評価において、「積極的に社会に提示し、活用を図る点では改善の余地がある」（自己点検評価2（1）4.（P207））と指摘されているように、社会への発信という課題が残されている。従来から指摘されている広報に加え、英文表記による国際的発信の課題がある。この点に関連して、三浦委員からは、「歴博の英文ホームページにデータベースへの入り口がない」ことが指摘されている。国際的な発信の課題として検討を願いたい。

小川委員からは、国際的な表記の問題への配慮にとどまらず、国際的な研究協力について積極的な提言がなされている。「歴博は日本を代表するナショナルセンターとして国際的な研究協力を行い、アジアを代表し、研究拠点となるなど、国内外の同種の研究機関や博物館をリードするとともに、国際シンポジウムや国際的な雑誌への投稿など積極的に情報発信に取り組むべきである」。その際に、開発した展示方法やデータベースなど、資源の活用方法を発信することも重要だと指摘されている。

3. 資源活用の個別評価

（1）企画展示

企画展示「侯爵家のアルバム」と「紅板締め」は、自己評価において、いずれも資料目録と図録が完売した（自己点検評価2（1）3.①（P206））と言われているように、反響も大きく、「博物館型研究統合」の成果がよくあらわれたものであった。特集展示「妖怪変化の時空」は、自己評価で、「特に学界は意識していない」（自己点検評価2（1）3.①（P206））と書かれていたが、今後の新しい研究領域を提示したものとして評価したい。

企画展示について、具体的に指摘すると、「侯爵家のアルバム」は『旧侯爵木戸家資料目録』の刊行とほぼ同時期に写真資料を中心に開催されたものであり、資源の研究・整理・展示の連関がよく見えるものであった。と同時に、「写真」を活用したはじめての本格的な展示であり、今後の可能性を感じた展示だった。先の白川委員の指摘ともど

も、「写真」には資源として多くの可能性が秘められている。「写真」に映しだされた時代性、「写真」と人びとのかかわり、「写真」の普及（カメラ、写真館など）、「写真」を写す人、「写真」の保存方法（アルバムなど）などは、いずれも今後の検討課題である。

「写真」は「研究」「展示」「資源」の「博物館型研究統合」を基本理念とする歴博にとって格好の資源であり、「写真」というモノの可能性をひらく資源活用を期待したい。

企画展示「紅板締め」については、三浦委員が、「他の博物館における展示とは違う歴博の特色が感じられた」と指摘している。それは、「一連の歴史資料に関する製作の技術、道具および製作された品とその流通を、生業という観点から見て構成する企画展示」だったからであり、「単なる美術品の展示とは異なって歴博らしい特色と魅力を持つもので、今後とも積極的に行って欲しい」と指摘されている。生業に長年視点をすえてきた歴博の成果を反映したものであり、「博物館型研究統合」を基本理念にすえた歴博ならではの企画展示だといえよう。

特集展示「妖怪変化の時空」については、先の荒野委員の指摘にあるように、今後の可能性を秘めた展示であった。

（２）データベース

データベースについては、外部評価委員で分担し、研究水準や独創性、有用性などについて評価を行った。データベースは、主に共同研究の成果をもとに構築されたものであり、外部評価委員の評価は、研究水準、資料的根拠、歴博ならではの独創性、有用性（学界への貢献や他の研究者との連携、国際的に役立つ、一般利用者の需要に応える、など）について、おおむね高い評価を与えている。使いやすさの点では、どのデータベースも自由な検索が可能であり、専門家や一般の人でも利便性が高い。

たとえば、「江戸商人・職人データベース」は、現在の東京 23 区名が項目になっており、現在の地図と比較可能になっている。「民俗俗信データベース」は、単なる迷信と片づけられてしまいそうな内容について、俗信内容、伝承地、報告者、発行年、収録文書などを整理したものであり、今後の活用範囲の広さがうかがえる。特集展示「妖怪変化の時空」とあわせて、今後の研究課題を深める資源であり、その有効利用の方向性を示した好例である。あるいはまた、「古代中世都市生活史データベース」は、データベースの構築自体を研究として位置づけているものである。データベースの構築には、成果の発信とあわせて、研究課題を提示する可能性も含まれていることがよくわかるものである。

データベースについては、委員から 2 つ要望がだされている。荒野委員は、「江戸商人・職人データベース」について、自己評価でも、「近世史のみならず、近世文学、近世考古学など関連する諸分野にも貢献できる」（自己点検評価 2（2）3. ①（P208））と述べているように、「非常に有用であることは言うを俟たない」と評価したうえで、今後の入力データの増加を要望している。「現在のところ、入力されているデータの原

史資料は、『江戸買物独案内』のみであり、まだ、このプロジェクトの意図を十分体现したものになっていない。ただし、データが充実していくにつれて、加速度的にその有用性が高まることは言うまでもないので、このプロジェクトの進展を強く望みたい、これが荒野委員の意見である。白川委員からは、「民俗俗信データベース」の「分類の原理」について検討がなされ、意見が付されている。いずれもデータベースの構築にあたって、参照していただきたい指摘である。

(3) 映像資料

映像資料については、「薬師寺花会式一行法と支える人々」「筆記の近代誌一万年筆をめぐる人びと」「平成の酒造り」の3つについて評価を行った。外部評価委員の評価は総じて高く、共同研究を踏まえ、制作・編集においても学術検討を加えるなど、博物館における映像資料の学術的価値を主張するものになっている点や有用性などについて高い評価を与えている。それに加えて小川委員は、「近年、博物館が扱う資料の定義が広がり、従来の有形の資料に加え、無形の文化遺産なども含むようになってきている（国際博物館会議による博物館の定義：2007年採択）。このような国際的な流れの中で、無形文化財などを記録した映像資料は博物館が扱う新たな資源として位置づけられる」として、無形文化財を対象にしている点そのものに、博物館の新しい役割を認めている。

ただし、詳しいナレーションをとまなわない映像資料では、予備知識がないと工程の意味や含意がわからない場合が多く、外部評価委員からは、その点の改善を求める意見が多かった。今後の検討課題にしていきたい。

＜各委員の評価＞

荒 野 泰 典

I. 総論的評価—事業自体の意味について—

今回の評価対象は、(1) 企画展示、(2) データベース、(3) 映像資料、の3項目である。問われているのは、資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるかどうか、ということである。

結論から言えば、個別の項目（プロジェクト）については、次に述べるように、いくつかの付随的な問題点はあるものの、全体としては、歴博の設置目的である、「生活史という分野にとっての重要な資料を収集し、それを研究し、併行して整理、展示する」という活動サイクルにおいて実現したものであり、歴博の目的や活動理念にかなったものという自己評価（自己点検評価2（1）1.（P206））は、納得できるものである。

それについて、さらに次の2点を付け加えたい。

(1) 「日本人」、あるいは「人」の「生活史」としての「資料」とは何か、あるいは、どこからどこまでを資料とするのか、という根源的なテーマについての問いかけ、あるいは、チャレンジを継続されることを切望したい。例えば、特集展示「もの」から見る近世「妖怪変化の時空」（2011年8月2日—9月4日）は、人の生活史における「心」の領域の広さ、奥深さを垣間見せて、非常に興味深かった。このような分野の史・資料の収集と整理研究、展示という活動は、今後さらに重要になってくるだろう。

(2) これらの資料（モノ・データ・映像等）の活用、あるいは、何のための資料収集かという問題について、例えば、映像資料「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」について、特に考えさせられることがあった。この映像資料は、近代の筆記用具の1つである万年筆を作る職人たちの技術を丹念に記録したもので、それ自体が非常に興味深いものだった。近代になって欧米から導入され、やがて、日本的な洗練や趣味を加えられて、独自の味わいを持つ万年筆へと進化してきた過程がよく理解できた。評者などが学生の頃はまだ、欧米の万年筆が高級品で、日本製のものは社会的にそれより低い位置に置かれていたように記憶しているが、その一方で、このような独自の展開をしていたことを知って、非常に興味深かった。

それと同時に評価者が思い浮かべたのは、日本製の時計に関するエピソードだった。近代において機械式の時計で世界のトップは、周知のように、スイスだったが、戦後日本の時計業界は切磋琢磨して、技術的にもスイスを凌駕して世界のトップに立った。しかしその頃には時計のデジタル化が進み、機械式の時計の売れ行きが落ち、日本の時計業界は、それまで蓄積してきたノウハウを作業機械ごと中国等に売り払い、一斉にデジタルに転換した。一方、スイスの時計業界は、同じようにデジタル化の波にのまれな

がら、伝統的な機械も技術も手放すことなく保存しており、デジタル化の波が去った後の機械式時計の復活（復権）の風潮のなかで、スイスの時計業界は息を吹き返した、それに対して日本は大きく後れを取るようになった。

以上は伝聞によるもので、評価者が自ら調べたことではないが、もしその伝聞が信じられるとすると、日本の機械式時計とその技術と同様の運命は、万年筆や、それと同様の立場に置かれている様々な技術にも当てはまるように思える。多くの絶滅危惧種のように、近世・近代において生まれ、大きな歴史的役割を果たしてきた様々な技術が、消え去ろうとしている。今回の展示や映像資料作成のプロジェクトには、そのような事態に対する危機感があることが、当然のことながら想定されるが、その成果を社会に対して発信するに当たっては、より広い視野からの仕掛けやターゲットを考えてもいいのではなかろうか。

Ⅱ. 各論—各プロジェクトの内容・有用性における評価—

（１）企画展示

評価対象は①「侯爵家のアルバム—孝允から幸一にいたる木戸家写真資料—」、②「紅板締め—江戸から明治のランジェリー—」、③「妖怪変化の時空」、である。①②については、自己評価で、資料目録と図録が完売した（自己点検評価２（１）３．①（P206））ことにその反響の大きさを見ているように、評価者も、門外漢ながら興味深く見学した。③については、既述の通りで、自己評価では「特に学界を意識してはいない」（自己点検評価２（１）３．①（P206））とされているが、むしろ、この分野はいわゆる「学界」も真摯に取り組むべき分野と評価者は考えており、そのためにも、基礎的な資料の収集には努めてもらいたい。

（２）データベース

評価対象は①「江戸商人・職人データベース」、②「古代中世都市生活史データベース」、③「民俗・俗信データベース」、である。以上のうち、②③については、筆者は門外漢なので、評価は難しい。ただ、実際に利用してみた限りでは、問題点は感じられなかった。ここでは、①についてのべる。

当該データベースについては、自己評価でも、「近世史のみならず、近世文学、近世考古学など関連する諸分野にも貢献できる」（自己点検評価２（２）３．①（P208））と述べているように、非常に有用であることは言うを俟たない。ただ、自己評価でも強調しているように、「今後とも入力データを増やし続けていく必要」（自己点検評価２（２）４．（P209））がある。現在のところ、入力されているデータの原史料は、『江戸買物独案内』のみであり、まだ、このプロジェクトの意図を十分体現したものになっていない。

ただし、データが充実していくにつれて、加速度的にその有用性が高まることは言うまでもないので、このプロジェクトの進展を強く望みたい。

（３）映像資料

評価対象は、①「薬師寺花会式一行法と支える人々」、②「筆記の近代誌一万年筆をめぐる人々」、③「平成の酒造り」の3点である。なお、自己評価は、内容評価・有用性・問題点と改善の方向性についてまとめられている。しかし、内容評価については、制作手順や使用機材（DVD等）のテクニカルな面に力点が置かれ、有用性については、これらの作品をもとにした国内外でのシンポジウムの開催、DVDの寄贈・貸し出し等を通じての普及の努力などが紹介されている。本評価では、それらの努力を肯定的にとらえるものだが、その上で、以下に評価者の考える問題点をあげておきたい。

①「薬師寺花会式一行法と支える人々」；映像自体はよくできており、まるでNHKなどの質の良いドキュメンタリーを見ているように、映像自体も美しく、テンポもよいので、見ていて楽しくもある。これを見れば、花会式の初めから終わりまでと、それに関わる人々の概略は知ることができる。ただ、花会式という行事自体をはじめ、そこで行われている儀式等の意味の説明もほとんどないので、この行事についての予備知識がかなりないと、理解が難しい。さらに、その場で行われている行法なども、単なる映像として外在的に、あるいは、傍観者的に撮影されている（分析的でない）ものが多く、この映像によって何が明らかにできるのかを感じとることが難しいということもあった。製作に当たって制約が多かったと推測されるので、ここまで踏み込んだ映像が撮れただけでも、多としなければならないのかもしれないが。

②「筆記の近代誌一万年筆をめぐる人々」；この資料も、いくつかの日本的な万年筆がつけられる工程を、丹念に撮影し、かつ、それぞれの職人によって語られる、自らの人生や生活、それぞれの技術の社会的・歴史的背景などが、とても興味深かった。ただ、制作者の関心が万年筆・職人・技術に集中しすぎていて、万年筆が入ってきて日本社会に根づいていった歴史的経緯とその後の展開、欧米有名ブランドとの関係性、さらに万年筆が現在置かれている状況や今後の見通しなどについての説明がほとんどないよう感じられた（評価者が気付かなかったのかもしれないが）。この映像資料が「筆記の近代誌」となるためには、そのようなテーマで、もう1つか2つ、映像資料が作成される必要があるのではなかろうか。

③「平成の酒造り」；この映像資料は、かならずしも酒造りの本場ではない、関東（栃木県）の酒造業の現状と、酒造の現在を、米作りから販売までの全過程を丹念に映像化していること、酒造の工程を丹念に映像化し、かつ、説明も丁寧で解りやすかった。近世日本において酒造は大きなテーマの1つだが、現在の大学生は日本酒をほとんど飲まないこともあって、日本酒そのものをよく知らない。そのような現状において、この映像資料は大学の歴史教育（とくに、近世日本史）の現場でも、参考資料として活用できるだろう。

＜各委員の評価＞

小 川 義 和

【総論的评价】

1 事業自体の意味について

資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や、「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるか。

国立歴史民俗博物館（以下、歴博と表記）は、博物館という形態の大学共同利用機関として、歴史資料・情報の収集・保管（資源）、調査研究（研究）と提供（展示）という三つの機能を有機的に連携していく「博物館型研究統合」を目指している。さらに、この三つの機能が社会との連携を持ちながら展開すること、展示機能から研究機能や資源機能へのフィードバックなどの双方向性のある有機的な連関を研究活動として位置づけている点に歴博の研究活動の独創性を示すものと考えられる。

企画展示「侯爵家のアルバム－孝充から幸一にいたる木戸家写真資料－」（以下、「侯爵家のアルバム」と表記）「紅板締め－江戸から明治のランジェリー－」（以下、「紅板締め」と表記）及び特集展示「妖怪変化の時空」とも、資料の収集、目録の作成、さらには学術的な研究を行い、その成果を展示を通じて社会に還元していると認められ、博物館型研究統合の理念を具体化していると評価できる。

データベースは、「博物館型研究統合」が目指す研究資源の一つと位置づけられ、資源・研究・展示の各機能が館内外の資料・情報と有機的に連携した成果を示す重要な機能を担っている。データベースの系統的な構築と活用こそが歴博が目指す「博物館型研究統合」につながると考えられる。「古代中世都市生活史データベース」「江戸商人・職人データベース」「民俗俗信データベース」は、資料の収集・整理と系統化及び共同研究の成果を反映し、さらに企画展示の公開へと結びつけており、資源化、つまり資源と研究成果を結びつけ、公開し、活用できる状態にするという「博物館型研究統合」の理念に沿った特徴的な形成過程を有していると評価できる。

近年、博物館が扱う資料の定義が広がり、従来の有形の資料に加え、無形の文化遺産なども含むようになってきている（国際博物館会議による博物館の定義：2007年採択）。このような国際的な流れの中で、無形文化財などを記録した映像資料は博物館が扱う新たな資源として位置づけられる。しかし博物館が扱ってきた有形資料に比較し、無形文化財などを記録した映像資料の学術的価値については、一般の人々に十分に認識されてこなかった。民俗研究映像資料「薬師寺花会式－行法と支える人々－」「筆記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－」「平成の酒造り」は、歴博の有する独自の資源であり、学術的研究の基礎となるべき研究資源である。その資源化の過程において、共同研究の成果をもとにした学術的な背景を踏まえ、また制作・編集においても学術的な検討を加えており、博物館における映像資料の

学術的価値を主張するものと評価できる。

以上のように、研究資源化とその活用に関して非常に努力しているにもかかわらず交通的な不便さがあって、利用機会の増加は少ないようである。自己評価の総括に記述されているように、資源活用に関する広報の検討を行う必要（自己点検評価1（1）（P202））があるだろう。博物館における情報は、データベースという資料に関する情報のみならず、研究に関する情報、展示に関する情報、教育活動に関する情報など、学術的な情報やイベント情報などがある。データベースや展示は効果的な情報発信の方法であるが、データベースや映像資料の存在、活用に関する情報、展示の内容・開催時期などに関する情報を積極的に発信していくことが資源活用につながると思われる。

企画展示・特集展示の自己評価の総括に「展示することで新たな研究課題が生じ、新たな収集につながる、という「博物館型研究統合」の意図が具体化されている」（自己点検評価2（1）1.（P206））と記載されている。これに相当する事例として、「侯爵家のアルバム」では展示期間中における関係者からの情報提供、「紅板締め」を見学した来館者からの関係資料について情報提供などがあったようである。また映像資料「筆記の近代史」の出演者からは万年筆などの寄贈が、映像資料「平成の酒造り」に出演した蔵元から、リニューアル予定の民俗展示への資料協力などの事例があったようである。このような、資源、研究と展示という三つの機能が社会との連携を持ちながら展開し、資源の活用による研究や資料の収集へのフィードバック・貢献などの双方向性のある有機的な連関については、今後も充実していきたい課題である。

データベースや映像資料の扱うテーマや領域は、内外の研究者による共同研究の過程を通じて決定しているようである。歴博がナショナルセンターとして、系統性のある、体系的な研究資源を構築するためには、対象とするテーマや領域についても共同研究による学術的検討とともに、資料収集の基本方針を踏まえた検討も必要がある。

以上の課題は、「博物館型研究統合」が目指す研究資源の位置づけと活用の基本的な考え方に関わるものである。各機能の成果の有機的な連携を強調することで、歴博の研究活動の独創性を際立たせることができるものと期待される。

なお、企画展示・特集展示の自己評価の総括に、外部との協力体制においても個人の力量を組織的に統合していくことが重要（自己点検評価2（1）3.②（P207））であるとの記述がある。これは、「博物館型研究統合」の理念の実現のために、資料の収集・調査研究・展示公開において組織的統制を高めていくことの重要性を示しており、上記の課題を解決していく上で不可欠である。一方で自由な発想に基づく研究活動に対しても統制を強めていくことになるので、留意が必要である。研究者個人の自由な発想に基づく研究活動は、新しい研究の芽を育てる多様性の苗床であり、新たな研究領域の創生にもつながる。歴博が目指す「博物館型研究統合」の実現には、自由な研究活動と組織的なガバナンスの両立、さらには両者による相乗効果が可能となる研究環境が望まれる。

【個別評価】

「企画展示・特集展示」

2 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか

「侯爵家のアルバム」では膨大な写真資料を整理し、系統化した点、「紅板締め」についても歴博が収集した資料を整理し、その全容を明らかにした点で、いずれも今後の研究基盤を形成する上で重要な研究資源となっており、研究水準は高いと評価できる。

② 歴博ならではの独創性が認められるか

「紅板締め」では単なる美術的アプローチにとどまらず、製作過程や技法を明らかにしているなど、歴史的な文脈を踏まえて資料の調査研究、図録の公刊、展示の公開を行っている。これらは学際的な観点からのアプローチであり、大学共同利用機関としての歴博ならではの独自性がある。

ただ、独自性については、コレクションの対象や研究領域の独自性のみならず、その製作過程や資源・研究・展示の有機的な連関に基づく機能面での独自性が考えられる。この点については今後の取り組みとして期待したい。例えば、展示を公開することでコレクションが充実し、研究が進むようなことやコレクションの構築や研究プロセス、展示企画内容などを研究資源として共有化できるような仕組みを展示製作で想定しておくことなどが考えられる。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か

「侯爵家のアルバム」では、タッチパネルを活用し、写真の配列などを見ることができ、展示した写真の歴史的な背景の理解を支援することが可能になっている。また現物の小ささを補うために、複写パネルを提示したり、キャプションの字を大きくするなどの工夫が認められる。

3 有用性はどう評価できるか

① 学界に対して貢献するものとなっているか

「侯爵家のアルバム」は、膨大な木戸家資料を整理し、その成果を目録として完成・公刊したこととあわせ、関連する企画展示を公開したものであり、また「紅板締め」は、当該分野における総合的な展示であり、その学術的意義は高い。特に「侯爵家のアルバム」では、初公開の資料が多く、関連する研究者からの注目があがり、学界への影響があったと考えられる。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか

「侯爵家のアルバム」では、資料収集や展示企画の段階において館外の専門家に参画してもらっており、外部研究者との協力は十分に認められる。

③ 国際的に役立つものとなっているか

国際的取り組みは個々の事例において潜在力が認められるが、自己評価書に記述されて

いるように、組織的、全体的な取り組みには至っておらず（自己点検評価2（1）3. ③（P207）：2（1）4.（P207））、今後の展開を期待したい。

データベースや映像資料を含め、やや総論的な見解を述べると、歴博は日本を代表するナショナルセンターとして国際的な研究協力を行い、アジアを代表し、研究拠点となるなど、国内外の同種の研究機関や博物館をリードするとともに、国際シンポジウムや国際的な雑誌への投稿など積極的に情報発信に取り組むべきである。今後は、単に展示や資料公開における国際的な表記などの配慮にとどまらず、調査研究・プロジェクトの国際的な視点（例「日本的」とは同時代の国際的な視点から見てどのような意義があったのか、など）や国際的な研究の進展に寄与する成果を目指してもらいたい。その際、開発した展示手法や評価方法、データベースの構築と活用方法などが研究成果として発信できるという視点も重要である。

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か。

各展示とも、一般の人に対し、広く話題を提供することができたと評価できる。特筆すべき事項として「侯爵家のアルバム」では、展示期間中に公開資料に関する専門家から反響や関係者や子孫から情報提供があり、影響の深まりが認められる。また「妖怪変化の時空」は、過去においても展示を公開しており、各地の博物館からの資料の借用の依頼があるようで、人気があり、適切な情報発信を行っているという評価できる。

⑤ 教育や人材養成に役立っているか

自己評価の通り、教育・人材養成に関しては、全体として意識されていない（自己点検評価2（1）3. ⑤（P207））と思われる。資料の収集、調査研究の過程にとどまらず、展示や教育活動の企画を教育研究の資源として活用することを意識して取り組むことが重要である。

「データベース」

2 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか

提示された各データベースは、主に共同研究の成果をもとに構築されたデータベースであり、研究資源としての活用を前提に基本的な項目を整備しており、研究水準に達している。

② 歴博ならではの独創性が認められるか

「古代中世都市生活史データベース」「江戸商人・職人データベース」は、共同研究の成果を踏まえて作成しており、研究過程において複数の大学からの研究者・院生などが参画している。このように、資源化の過程において学際的な取り組みがあり、大学共同利用機関としての独自性がある。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か

「江戸商人・職人データベース」は、複数の検索項目を整備しており、データベースの

利便性は高いようである。特に「古代中世都市生活史データベース」では、データベースの構築自体を研究として位置付け、その成果を発信している。これは、歴博がナショナルセンターとして、他の博物館のデータベース構築における先導的モデルを提示することにつながる。このように、研究資源としての活用を前提としたデータベースの構築研究及び情報発信を行っている点は高く評価できる。

3 有用性はどう評価できるか

① 学界に対して貢献するものとなっているか

各データベースとも学術的な検討を加え、研究領域における系統的な幅広い構成となっており、また研究資料としての活用を前提に構築されており、学界に対する貢献については十分な潜在力があると期待される。しかし実際の活用や、活用された成果はこれからという印象であり、今後の課題である。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか

「古代中世都市生活史データベース」「江戸商人・職人データベース」は、共同研究の成果を踏まえて作成しており、研究過程において複数の大学からの研究者・院生などが参画している。今後も同様な方法でデータベースを構築していくことが、他の研究機関などの参画と公開性を高めることにつながる。

③ 国際的に役立つものとなっているか

データベースはインターネット上に公開されており、英語対応も可能であるようである。今後海外からの利用を通じて、研究資源の国際的な活用を期待できる。

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か

各データベースは学校での利用が可能ではないかと思う。教員の資質向上のための研修の教材として有用性が十分に認められるので、教員がデータベースの存在を知ることが重要である。そのためにはデータベースの所在情報や活用事例なども積極的に発信する必要がある。

⑤ 教育や人材養成に役立っているか

上記の初等中等教育への普及の他に、大学レベルでは、データベース構築の過程において共同研究を行い、複数の大学から院生などが参画するなど、結果として大学生の人材養成に貢献している。今後は意図的に人材養成の機会としてとらえ、その可能性を検討してもらいたい。

「映像資料」

2 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか

映像資料の制作に当たり、担当研究者が企画段階から撮影・編集まで関わり、さらに共同研究に関連する専門家を招へいし、企画段階から鑑賞に至るまで検討をしているな

ど、研究水準を維持する努力をしている。制作した映像資料は米国の研究者から高い評価を受けるなど、研究資源としての有用性は高いと考えられる。

② 歴博ならではの独創性が認められるか

「現在の民俗の記録」「民俗誌的な記録」「研究資料としての映像記録」の3点を原則に制作している資料映像である。この制作にあたっては、自ずと歴史学、考古学、民俗学、人類学など学際的なアプローチが必要であり、博物館としての総合力が結実した独自性が認められる。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か

DVDに収録して、一般に見られるようになっている。収録時間が長いので、各チャプターに分けて選択できるようになっていることは評価できる。

3 有用性はどう評価できるか

① 学界に対して貢献するものとなっているか

各映像資料は、体系的に調査した結果である論文を基盤として制作しており、映像資料とともに資料の収集を体系的に行っている。一部は米国において上映され、日本研究の関係者から高い評価を受けている。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか

定期的に映像フォーラムを開催し、内外の研究者による議論が行われており、共同利用機関としての特徴がある。

③ 国際的に役立つものとなっているか

「薬師寺花会式～行法と支える人々～」は、英語版を制作し、欧米のシンポジウムで高い評価を受けている。中国語版の制作を計画しており、今後アジア諸国への普及が望まれる。

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か

⑤ 教育や人材養成に役立っているか

DVDの貸し出しの制限の中で、研究機関としての取り組みは行っており、一定の評価ができる。教育面では、社会科や理科の教材として十分に有用性があるので、学校での利用を促す必要がある。より多くの教員などにその存在を知ってもらうことが重要である。今後肖像権や著作権の配慮の上、WEB上（YouTubeなど）にダイジェスト版を掲載するなど、教育面での普及を図ることを検討してはどうか。

＜各委員の評価＞

坂 井 秀 弥

ここでは評価の対象として提示された、それぞれ三つの企画展示・特集展示、データベース、映像資料について、各プロジェクトの自己点検票とそれを集約した館内評価委員会による「自己点検評価」を参考にして、おもに総合的评价について気付いた点を列挙することにする。

① このたび、各プロジェクトについて担当者による自己点検を踏まえた館内評価が統一になされたことにより、館外の評価者としては、各事業の目的や意義について理解することができた点が多く、外部評価をより客観的に行うために有効だったと考える。また、評価ポイントを決めた横断的な自己評価がはじめて実施されたことは、担当者自身が事業の目的と意義、成果についてあらためて確認し、重要な自己評価と改善意見が得られたことにつながったと思う。それとともに、博物館内で総括する過程において、それを相対化・客観化することができ、この取り組みの意義が大きいことを示すといえよう。

② 展示・データベース・映像資料とも、歴博が標榜する「博物館型研究統合」に不可欠のものであり、しかもテーマは生活史・都市史など歴博が重視した視点に立ったものである。重要でありながら従来かならずしも注目されてないものもあり、歴博ならではの取り組みと感じさせる。そして、それぞれの事業が資源・研究・展示の要素ごとの強弱はあるものの、相互に連鎖して共有・公開を図るという歴博のコンセプトにおおむね合致していると考ええる。

たとえば、企画展示で取り上げられた「侯爵家のアルバム－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－」「紅板締め－江戸から明治のランジェリー－」は極めて希有でかつ重要なコレクションであり、それに着目して収集し、その資料群を着実な学術研究により詳細に分類・整理し、資料目録を作成した成果は、地味であるが重要である。それを展示図録・データベースを展示とともに作成・公開したことは、資源・研究・展示の基本的な循環が達成されているといえよう。

③ それぞれの事業の研究水準はおおむね高く、学界に対する貢献はおおきいものと考ええる。またその研究体制については、館内研究者のほかに館外の研究者が参画しており、事業の適切かつ効果的な実施が心がけられていることがうかがえる。その結果が事業の成果が広く共有されることにつながっていると思う。また、資料整理や目録の作成、データベースの構築において大学院生などが参加して、人材の育成に

役立っていることも評価される。

- ④ 資源・研究・展示の各要素のうち展示については、展示の意図・意味のわかりにくさが、館内評価でも課題（自己点検評価2（1）2. ③（P206））とされている。この問題は以前から指摘されているようだが、博物館としては重要な課題だと考える。展示は歴博の機能の一部であり、資源・研究がないと成り立たないことも事実である。また、展示をわかりやすくするにしても展示の説明などをどの程度の者に合わせるかもむずかしいところがあるが、少なくとも展示はその分野の専門家だけを対象にしたものではないであろう。展示は歴博の意義と多様な事業の成果をもっとも広く国民・市民に共有・公開する機会であり、国民の幅広い理解と協力を得る重要な場面である。それが将来の歴博そのものの継続と拡充につながるものであろう。

展示内容に関連する専門用語などの解説やわかりやすく簡潔な説明文などによって、専門的な内容についての理解が進むものである。見ていてフラストレーションを感じることもないであろう。展示の内容や手法などは、担当者によるところが多いようであるが、館内の異分野の専門家からの視点や相互批判を積極的に採り入れ、さらに学校教育関係者などとの連携などについて、抜本的に検討する必要があると考える。

- ⑤ おもに展示に関係する課題として英文表記がある。たしかに成田空港に近いという立地条件もあるが、それだけではなく日本を代表した歴史研究機関であり、国際的にさまざまな情報を提供・発信する博物館として、展示におけるキャプションや図録の英文表記は不可欠の要素であろう。これがない状態では、日本人だけに目を向けた姿勢と問われても、反論できないのではないかと思う。海外の博物館を訪れたときの個人的な体験では、資料の英文と西暦年の表記はその理解にとって大変大きな意味がある。

この点は館としての指針・方針を早急に検討して、実行に移す必要がある。展示において標準化することにより、図録の表記も一体的に図られることになろう。展示はその時点だけの問題であるが、印刷物として歴史に残る資料は、将来のさらなる国際化した状況にも対応することになる。さらには資源の国際的な共有・公開のためにも、資料目録やデータベースについても検討が必要である。決して問題は軽くはないと思う。

- ⑥ 博物館には、今回評価の対象になったもののほかに館蔵のコレクションや資料が膨大な資源がある。多様な時代・分野にわたる膨大な量の資料についての適切な利活用はどのようなものかは、にわかには決めがたいところがある。専門的な内容にもかかわらず一定の利活用が図られているといえるかもしれないし、数だけ見れば少な

い、あるいは増減がなく明確な向上がないともいえるかもしれない。それは館内評価が指摘（自己点検評価2（5）1.（P215））するように都心から離れているという立地条件によるところが確かに多いだろう。広報の問題のほかに、あらたな利活用の形態を検討する必要も考えられる。

- ⑦ 利活用の点に関連して、取り上げられた資源・資料の所在する地域との連携がもっと試みられてもよいのではないかと思う。たとえば、紅板締めは京都における一種の地場産業であり、その流れは形をかえて地域に継承されているのではなかろうか。アンケートの意見にもあったように京都における展示などにより、そうした伝統産業の意義も再認識する契機にならないだろうか。また、民俗の映像資料で取り上げられた薬師寺、万年筆、酒造りなども、映像資料を制作する過程で生み出された成果を、地域に還元することにより、その伝統的な技術・慣習などのさらなる継承につながることを期待したい。
- ⑧ 今回の評価はかならずしも的確な指摘だけではないと思われるが、これを発展的に活用するためには、この内容を館としてあらためて精査し、それを改善・発展につなげるための有効な仕組みについても、合わせて検討していく必要がある。その場合、多様な課題のなかで、できることから着実に着手・実行していくことが大切である。

＜各委員の評価＞

白 川 琢 磨

1. 総論的評価

「企画展示・特集展示」「データベース」「映像資料」の総論的評価に入る前に、本評価の前提について述べておきたい。今回、計 10 点にわたるその現物及び関連資料を通覧させていただいたが、その各々について、現在の研究水準を十分に満たすものであり、高度な学問的価値を有するものであったことをまず述べておきたい。その上で、歴博の有する資源活用が十分かどうかについて、特に「博物館型研究統合」という観点から、更なる改善・改良の余地を探ることを主眼とする。

「博物館型研究統合」には二つの側面がある。その第一は、専門研究の蓄積だけに留まらず、その研究成果を博物館を通じて、展示・データベース・映像資料という形で外部社会に向けて発信し、また外部社会からの情報を受信しつつ、専門研究に統合していくという側面である。しかしながらより見落とされがちなのが第二の側面である。それは、特に大学等の研究機関でよく見られるように、現代の学問が陥りがちな専門化という縦割りの弊害を少なくとも博物館に関わる考古・歴史・民俗・保存科学においては、学問の垣根を廃し、研究を統合していこうという志向性の側面である。どうも全体としてこの後者の側面が弱いのではないかと感じさせられる。これは第一の側面にも影響を与える。例えば、「企画展示」について、足りないものは何か。①「侯爵家のアルバム－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－」、②「紅板締め－江戸から明治のランジェリー－」と人々を惹きつける素晴らしいタイトルが付けられながら、見学後に感じる物足りなさは、一言で言えば「拡がり」である。①では、見学者は改めて「写真」、そして「記憶」という方向へと関心が導かれる。②では、「ランジェリー」という言葉に惹かれて来た人も多かったであろうが、「下着」、あるいは「着る」「飾る」という人間の営みへの想像力をかき立てられるが、その方面への啓発は与えられず、木戸家の史料的価値や技術史的に価値のある精巧な技術のみに答えが限定されてしまうのである。両者とも図録の売れ行きが良かったということは専門家（研究者）への需要は満たしたものの、一般見学者の関心を導き高め、啓発したとまでは言い切れないのではなかろうか。だがここに「民俗」など他分野との有機的な協力があつたとすれば、もう少し「拡がり」を持たせることができ啓発効果も高まることを期待できるのである。

企画展示を例に挙げたが、この「拡がり」の欠如という特徴は、データベースや映像資料という他の資源にも当てはまる。博物館という「場」は、縦割りの専門化の弊害を突破できる有効な場であるはずだが、その意味で歴博が有する研究資源の有効な活用が不足していると言わざるを得ないのである。この研究統合の第二の側面の弱体化に起因する影響は、映像資料にその影を落としている。担当者が、プロデューサー兼ディレク

ターとなって、一般の人々や学生を惹きつけて啓発へと導く真に「面白い」映像を作り出そうとする企図は存在するが、一方で学問的専門的に価値のある無形の文化資源を客観的に「記録・保存」しなければならないという、言わば逆のベクトルの課題を同時に担っている。その上にさらに「民俗」という重い課題が押し掛かってくる。担当者は、「①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であり、研究成果を発表する手段としての映像による論文であること」の3点の原則を設けているが、上記の2課題を何とか解決しようとし、しかも何とか「民俗」を切り分けようとする苦肉の結果に思えてくる。だが、もしここに「民俗」とは何かという問いを導入したら、「現在」に関わるものといったおぼろげな答えしか見出せず、過去との関係はどうか、民俗誌の時間的な範囲とはどう限るのかなど疑問が続出する。結果として出来上がった作品は、いずれも学問的資料的価値が優先されており、当初企図されたであろう魅力を半減させている。そして「書く」ことの民俗への注目は、万年筆の製作過程として、「平成の酒造り」には我々に最も身近な「飲む」あるいは「酔う」という視点が省かれ、専ら技術史的な客観的な記録の側面が優越した。「薬師寺花会式一行法と支える人々」は、聖俗境界に中心視点を移した興味深い構成にはなっているが、筆者のような専門研究者にはその背景は了解できるが、中世の顕密寺社体制の概説抜きには一般の人々や学生にはとても難しいものになってしまった。つまり、ここに見られるものは総じて、他分野との協業が産み出した博物館としての独創性ではなく、独自の学術的な専門領域を確保しようとする「民俗」の悲痛な叫びである。しかし、「切り分け」によって民俗は出て来ない。では、歴史や考古など他分野には「本質的な」領域があるかと言うとそれまた存在しないのではないかというのが近年の学問傾向である。ここで再度「博物館型研究統合」の原点に立ち戻って欲しい。歴博は、歴史民俗博物館であって、歴史・民俗・考古博物館ではないはずである。ところが、展示等で見ると、後者と誤解されてもやむを得ない面がある。各分野の専門研究の壁を乗り越える協業・協力関係の構築が必要である。それこそが、第一の側面の研究統合を確立する道であると考えている。

2. 個別評価—分類の問題—

前節では、総論的評価として、「展示」についても「映像」についても何か「拮がり」を感じさせない点を問題として挙げた。この「拮がり」という点は重要である。資料館と博物館を区別するなら、資料館なら資料を客観的に展示することで十分であり、そこから何かを発見することは見学者の務めとなる。しかし、博物館の何らかのテーマに基づく企画展示ともなると、今まで思いもよらなかったモノとモノの関係とか展示資料の内部における発見とか、ある程度「導き手」によって導かれながら教えられる、啓発されるという経験を期待してしまうのである。高い要求水準かもしれないが、導き手の力量を高めるために分野を超えた研究統合が必要と考えたのである。

さて、その点とも関係するが、個別評価では「データベース」を民俗分野を中心に述べてみたい。今回点検対象となっているのは「民俗俗信」であるが、歴博が今後、民俗分野のデータベースを充実させていくであろうことを前提に考えてみた。また、点検の際、幾つかの辞典（事典）も手元において、「民俗語彙」と「俗信」のデータベースと比較してみた。まず、データ量においては辞典のほうが圧倒的である。がこの点は、データベースが一昨年から開始したことを考えるとやむを得ない。「更新」可能というデータベースの特性を考えると、今後の蓄積という面でも瞬時の検索という点でも、データベースの圧倒的優位を予感できるものであった。

しかし、将来を考えると問題がないわけでない。と言うより根本的な問題が横たわっているように思える。それは、拠って立つ「分類の原理」である。「民俗語彙」では、大・中・小の系統分類が、「俗信（動植物編）」では動物／植物の範疇の下に鳥、魚貝、虫などの下位範疇が設けられているが、基本原理は同じである。所謂、樹状階層秩序に基く科学的分類原理である。これによって成立するクラスは、同一範疇に属する各個体を貫く共通特性を基準としたクラスであり、人類学者 R・ニーダムは、「単配列 monothetic クラス」と呼んでいる。一方、古くは哲学者、R・ヴィトゲンシュタインが「家族的類似」と名づけた、似ているから一まとめにされる別のクラスがある。個体 A が $a + b$ という特性を、B が $b + c$ 、C が $c + d$ という特性を持つ場合、A - C を貫く共通特性は一つもないが、「多配列 polythetic クラス」として成立するのである。我々の日常的リアリティを構成しているのはむしろ後者ではないかというのがニーダムの示唆であるが、筆者は日本の歴史民俗的リアリティの解明に応用してみたことがある（拙稿「神仏習合と多配列クラス」『宗教研究』353、2007）。「宮司大法師」とか「法師陰陽師」、「法者」「神人」「衆徒」などの語が渦巻く神仏習合世界にアプローチするのはそれしかないと思ったからである。考察を通じて得られた確信の一つは、民族語彙や俗信など民俗を構成するのは基本的に多配列クラスであり、中心はあっても周縁はぼやけて滲んでしまうそうしたクラスをいかにうまく捉えるかが今後の課題になるであろうということである。データベース上でそれに対応する検索の技術的な側面についてコメントすることは筆者の能力を超えている。だが、基本的には単配列に基いた Yahoo 型検索よりも、少なくとも多配列が意識されている Google 型の方が適していると言えるかもしれない。

ここで再び前節の問題意識である「拡がり」に戻ろう。民俗データベースにおいて、もしそれが多配列的で豊穡な民俗世界の「拡がり」を、単配列に「分断」し、階層的に配列し、抽象化する試みであるならば、我々は一冊の大容量の辞典を手に入れるだけでその意義の大半を喪失する。極論すれば、「科学的に」分析し、抽象化すればその意味を失ってしまうのが、民俗の特徴でもある。民俗映像にしても、多配列的な「拡がり」を大事にしつつも、その一方でテーマや領域を限定し、映像自体を論文として構成した途端に心髄となるエトスを失うことがあるので注意が必要である。この点で、今回の点

検対象には入っていないが筆者が高く評価する民俗映像を最後に挙げておきたい。それは、松尾恒一氏と常光徹氏が 2002 年度に制作した映像資料「物部の民俗といざなぎ流御祈祷」である。おそらく原則もガイドラインもまだ無かったか、在ったとしても制作者がそれを持ち出す余裕が無いほど現地の多配列的な民俗の拡がりや圧倒的であったのであろう。狩猟シーンから始まる映像は次々と展開し、頭に五色の幣を垂らし、数珠や錫杖を手に、真言や祝詞を唱える太夫と祭文の描写、人々の生活の中に自然に溶け込んだ祈祷や行事など正に多配列的な民俗世界が繰り出される。84 分の映像なので、授業の中でも使用可能である。学生の感想を要約すれば、見ている時は時を忘れるほどじっくり沁みる映像なのに後で「あれは一体何なのだ」という強烈な印象を残している。

この多配列分類の意義を、個別領域だけではなく、歴博全体としても見直すべきではあるまいか。歴博には、その設立の趣旨から見ても研究対象から捉えても特に自然科学的単配列クラスに依拠すべき根拠はない。だとすれば、その研究（者）資源を最大限に活用するために、考古・歴史・民俗・保存科学という研究分野（クラス）を多配列クラスとして捉え直す余地は十分にあると考えられる。そして本節では触れなかった「展示」についても多配列の概念を取り入れることによって、「博物館型研究統合」の強みを十分に発揮できるのではないかと考えるのである。

＜各委員の評価＞

三 浦 定 俊

1. 総論的評価

全体に企画展示、データベース、映像資料とも、歴博のねらいとしている「博物館型研究統合」の活動に沿った形で、資源活用の成果を上げている。例えば展示については、企画展示「侯爵家のアルバム－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－」、企画展示「紅板締め－江戸から明治のランジェリー－」、特集展示「妖怪変化の時空」のいずれの展示も、歴博の目的に沿って資料を収集し、整理・研究して、その成果を展示するというかたちで行われたもので「博物館型研究統合」の活動として評価できる。またデータベースについても企画展示が「博物館型研究統合」の中で研究成果を来館者に見せるものであるとするなら、データベースは研究成果を専門家を含む外部の人々の使用に供するもので、「江戸商人・職人データベース」「古代中世都市生活史データベース」「民俗俗信データベース」のいずれも共同研究等に基づき、数多くの資料やデータを網羅して作成された利用価値の高いデータベースである。さらに映像資料「薬師寺花会式－行法と支える人々－」、「筆記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－」、「平成の酒造り」は共同研究の議論を元にして作成され、いずれも映像として鑑賞するだけでも評価に堪える資料である。

以上、今回評価対象としてあげられたいずれの事業も、歴博の理念に合致した成果を上げていると考えられる。

2. 個別評価

2. 1 企画展示

企画展示「侯爵家のアルバム－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－」、企画展示「紅板締め－江戸から明治のランジェリー－」、特集展示「妖怪変化の時空」はいずれの展示も、歴博の目的に沿って資料を収集し、整理・研究して、その成果を展示するというかたちで行われたもので「博物館型研究統合」の活動として評価できる。特に企画展示「侯爵家のアルバム」は『旧侯爵木戸家資料目録』の刊行とほぼ同時期に写真資料を中心に開催されたもので、目録の刊行と併せて、膨大な木戸家資料の全体像を明らかにしたと言える。貴重な写真原板が多く展示されたために会場の照明を暗くせざるを得ず、一部の観覧者からは見えにくいとの指摘もあったようであるが、そのような配慮があって初めて、数少ない明治初期のガラス乾板などが安全に展示でき、古写真研究の専門家からもこの企画展示について高い評価を得ることができたといえる。一方で展示は人物写真が大半だったので、写真に写っている人物が木戸家とどのような関係にあるか確かめながら観覧しようとする、観覧に大変時間と手間のかかる展示であったことは

確かで、数は少なくとも風景写真などが間に「目休め」としてあったら良かったという意見があったことは理解できる。ただし、それだけ密度の濃い展示であったからともいえよう。

企画展示「紅板締めー江戸から明治のランジェリーー」は紅宇という染色業者に伝来した染色道具類を中心にした展示であるが、製作された染織品だけでなく、それらの道具類の使用方法など制作工程や技法などに関する研究成果を元にした企画展示で、他の博物館における展示とは違う歴博の特色が感じられた。一連の歴史資料に関する製作の技術、道具および製作された品とその流通を、生業という観点から見て構成する企画展示は、単なる美術品の展示とは異なって歴博らしい特色と魅力を持つもので、今後とも積極的に行って欲しい。

特集展示「妖怪変化の時空」もまた、歴博が行ってきた歴史・民俗・文学と広い分野にわたる怪異・妖怪研究に基づくもので、子どもたちなど一般の興味を引くだけでなく、見るものにいろいろな角度から怪異・妖怪を考えさせる歴博らしい展示であったと考えられる。今回に限らず、歴博で時折企画される怪異・妖怪の展示は、単なる物珍しさに対する興味だけで終わりがねない事柄を、歴史・民俗・文学と広い分野から体型的にとらえて、その背景にあるものまで明らかにしようとする意欲が感じられて興味深い。展示スペースが狭くて人が多い時には見づらいという意見はあったが、今後の第4展示室の新構築においてその点は検討すれば良いのではないだろうか。

2. 2 データベース

始めに述べたように「江戸商人・職人データベース」「古代中世都市生活史データベース」「民俗俗信データベース」のいずれも共同研究等に基づき、根拠のしっかりした数多くの資料やデータを網羅して作成された利用価値の高いデータベースであり、内容や有用性について特に問題はない。使いやすさの点については、いずれのデータベースもフリーワードでの自由な検索が可能で、専門家ではない一般の人の利用にとっても便利である。特に「江戸商人・職人データベース」は現在の東京 23 区名が項目化されていて、現在の地図と比較できる点が身近に感じられる。「古代中世都市生活史データベース」は物価の視点から都市生活をまとめたデータベースで、ものと物価を軸に様々な利用の可能性が考えられる。「民俗俗信データベース」については、特集展示「妖怪変化の時空」と同様、単なる迷信として片付けられそうなものを、俗信内容、伝承地、報告者、発行年、収録文書等、基礎的な事項をしっかりと押さえた上で整理している点が、今後のデータベースとしての活用を期待させる。国際的な比較研究の可能性についても自己評価で触れられているが（自己点検評価 2（2）3. ③（P209））、将来の展開として期待したい。

今後検討すべき点があるとなれば、様々な利用の可能性を持つこれらのデータベースをいかに広報して広く使ってもらおうかという点と、もう一点は館内評価でも指摘されて

いるように（自己点検評価1（3）③（P203））、歴博の英文ホームページにデータベースへの入り口がないことである。データベースそのものが日本語なので英文ページからの入り口をつくと、かえって日本語を読めない人を混乱させるということがその理由かもしれないが、人間文化研究機構の研究資源共有化・統合検索システムの英文ページから入っても同じことが生じるので、人間文化研究機構の研究資源共有化・統合検索システムの英文ページにリンクさせて、歴博のホームページからの入り口をつくるといった工夫などは考えられないだろうか。

2. 3 映像資料

最初に述べたように、映像資料「薬師寺花会式一行法と支える人々」、「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」、「平成の酒造り」はいずれも共同研究の議論を元にして作成された、映像としてだけでも鑑賞に堪える資料である。映像中のナレーションは少ないが、その点がかえって映像に集中できるので良い。反面、詳しいナレーション無しで作業工程等の細部の映像だけを見るのは、酒造りや万年筆造りの全体の流れを把握していない者にとっては、その工程が全体の流れの中のどの部分にあたる作業なのか、あるいは映像で見える装置や道具類がどんな役割を果たすものなのかなどわからないことがある。ナレーションを必要以上に詳しくすることはいらぬが、何らかの形の導入部を付けることも考えられる。

DVD の中に導入部を含めていない理由はおそらく、歴博の作成する映像資料は単なるドキュメントではなく、研究のための記録映像なので、限られた記録時間の中に解説的な導入部を付けるより、研究記録としての内容を充実したいためと思われる。自己評価に述べられているように、現在は DVD のジャケットに短い解説文をつけることができる（自己点検評価2（3）2. ③（P210））ので、ビデオテープに比べて状況は改善されているとは言えるが、映像が作業工程を丹念に追っているだけにその背景や映像で見ているものなどについて知りたくなることも多い。この点については日本を知らない人が見ることの多い英語版では、より配慮が必要ではないだろうか。英語版を使用する時には、その場に映像について解説できる人がいることを想定しているとのことであるが、今後の広い利用を考えると、何らかの形で解説的な導入部を加えることも今後の検討課題であろう。

(2) 外部評価のための参考資料

＜資料の特別利用実績一覧＞（各年度末実績）

		H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	合計
熟覧	申請数	71	89	101	79	86	82	102	610
	資料数	2,897	2,599	1,895	1,995	2,299	2,588	1,990	16,263
	利用状況	①博物館の展示準備や研究者の資料実見が多い。22年度、は大学院ゼミでの利用、大学院生による調査が増加した。 ②外国人利用者 7件を含む。							
	事例	高松宮家伝来禁裏本／田中穰氏旧蔵典籍古文書／廣橋家旧蔵記録文書典籍類／野村正治郎衣装コレクションは例年調査例が多い。 22年度に多かったものは上記に加えて 日吉大社文書(生源寺家文書)／石井實フォトライブラリー関係資料／正倉院古文書複製品 など							
即日閲覧	申請数	20	50	52	55	80	56	50	363
	資料数	183	575	697	336	732	410	291	3,224
	利用状況	①4室撤収に伴う臨時燻蒸作業と震災の影響で閉室日が増加。来館者が伸びなかった。							
	事例	例年、実物資料では平田篤胤関係資料、マイクロ利用では廣橋家旧蔵記録文書典籍類・田中穰氏旧蔵典籍古文書・本多家資料・伊能家資料の利用が多い。 22年度は、宋版後漢書・石見国亀井家文書のマイクロ利用も目立つ。							
撮影	申請数	14	20	16	13	27	5	31	126
	資料数	203	151	319	1,052	1,145	442	567	3,879
	利用状況	22年度は貸出資料の図録用撮影や、テレビ番組向け撮影が多く、件数が増加した。							
	事例	未撮影部分が多いコレクション(特に出土物・近世文書などの一括品)について撮影要望がある。 22年度では、東京国立近代美術館遺跡出土品・直良コレクション・浅川伯教収集朝鮮半島窯跡出土陶磁器コレクション・岡山藩兵学者松田家資料など 22年度は、醍醐花見図屏風の撮影が多い。							
模造	申請数	2	2	1	1	0	3	-	9
	資料数	2	2	1	1	0	3	-	9
	利用状況	H22年度は実績無し							
	事例	H16石見亀井家文書、長崎諏訪神社祭礼図屏風／H17古津路出土銅剣、大久保家資料／H18江戸景観図／H19太平記絵詞 /H21民首田次麻呂解、江戸図屏風、洛中洛外図屏風歴博甲本							
貸付	申請数	73	62	57	49	61	50	59	411
	資料数	558	908	488	254	463	427	630	3,728
	利用状況	①22年度は、考古展で出土物などを相当数まとめて借用申請する例が続き、貸出数が増加した。 ②交流協定に基づき、カナダ文明博物館「伝統と革新の国 日本」展への資料貸出を実施した。							
	事例	例年、高松宮家本・田中本・野村コレクションの利用は多いが、22年度は、まとまった量を借用される例が多かった。 浅川伯収集朝鮮半島窯跡出土陶磁器コレクション／国立近代美術館遺跡出土品／マロ塚古墳出土品／石見亀井家文書／明治末期華族所用髪飾具							

		H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	合計
映像資料貸出	申請数				7	7	4	3	21
	資料数				9	9	5	9	32
	利用状況	①映像資料の大学授業への貸出を試行(村山絵美 武蔵大講師) 7作品 ②漆サミットへの企画展示映像(「水辺と森の縄文人」展制作CG)提供 ③新潟県立歴史博物館「布のいのちと美」展へ民俗文化財映像「越後のしな布」提供							
	事例	貸出可能な映像資料は本館製作の映像(民俗文化財映像資料・民俗研究映像・企画展示制作映像)のみ。 購入品は上映権付きのもののみ、研究目的に限り貸出を試行。古い購入品は上映権の有無が確認困難なものも多く、貸出が出来ない状況。							
写真原板貸出	申請数	520	607	569	643	550	625	736	4,250
	資料数	10,941	12,605	316,486	10,049	8,817	14,859	3,240	376,997
	利用状況	①画像貸出を本格実施:人気の写真の画像データを準備し、要望により貸出 H22年度は107件、149カット ②H22年度は年度末に需要が伸びるマイクロフィルムの利用が特に低調で、申請数の割にはカット数が減少。※震災影響か							
	事例	①特に需要が多い写真は貸出用画像を準備し画像貸付で対応している。(江戸図屏風・洛中洛外図屏風歴博甲本・醍醐花見図屏風・東三条殿模型・中世武士の館模型・鎌倉地形模型) ②マイクロフィルムでは、高松宮家本・田中本・広橋本の利用が多い ③20~21年度、教科書改訂に伴う申請増加が見られ、22年度は需要が一段落した様子。 ④美術出版やテレビ番組制作向けには、錦絵コレクション・野村コレクション・秋岡コレクション・屏風(江戸図・洛中洛外・醍醐花見)が多い。							
民俗研究映像DVD貸出	申請数				6	7	4	6	23
	映像数				8	17	5	6	36
	利用状況	①22年度に新たに7作品の貸出を開始 :「平成の酒造り」「景観の民俗誌」「風の盆ふーりんぐ」「金物の町・三条民俗誌」「大柳生民俗誌」「物部の民俗といざなぎ流御祈祷」「風流のまつり長崎くんち」 ②公民館での上映などの他、個人の研究目的借用が増加。 ③歴博映画の会での上映実績 :第9回('10.5.1)「金物の町・三条民俗誌」、第10回('10.8.7)「遠野民俗誌」							
	事例	貸出数が一番多いのは「マンローのフィルムからみえてくるもの」(日本語・英語) 22年度は、「筆記の民俗誌」「物部の民俗といざなぎ流御祈祷」の問い合わせが多かった。							

(凡例)

平成18年度の写真原板の使用については、高松宮資料調査プロジェクトチームに高松宮本マイクロ全点のコピーを許可したため許可数が突出した。

即日閲覧は、平成16年7月開始。

民俗研究映像DVD貸出は、平成19年11月開始。

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
S56	H-308	早雲寺蔵織物張文台及硯箱(伝北条氏政所用)模造	1組		
S56	H-574	正倉院蔵 四脚付白木櫃模造	1合	常設(旧1室)	
S56	H-114	嘉永七年再刻改正品川屋版江戸絵図	1幅	常設(旧3室)	
S56	H-39	星野平次郎袋物コレクション	225点	常設(旧3室・新3室) H14「装身具」 H22③「朝顔」	H7小山市博 H16千葉県巡回 H18最上徳内記 H11サン美・京文博・広島県美(巡) H21大多喜
S56	A-14	青森県五戸町大窪遺跡出土縄文時代資料	4848点	常設(旧1室・新1室) H11新収「縄文の記憶」 H13「縄文文化」 H15新収展	H22大田区郷土博
S56	H-60	本多家資料(文書、典籍、武器、武具他)	3700点	常設(旧2・3室/新2・3室) H6「武家社会」 H8「動物」 H10「陶磁器」 H14「装身具」 H15「災害」 H17「夏の風景」 H22「武士」「本多家」展 ★即日閲覧	H15総南博 H23山梨県博
S56	H-96	四国遍路往来手形(掛軸装)	1点	常設(旧3室)	
S57	A-110	埴輪女子像頭部(群馬県佐波郡赤堀村今井出土)	1軀		
S57	A-107~109	縄文式土器(注口、壺形、鉢形)	3点		
S57	H-99	高倉家旧蔵装束記録類 他	13冊	常設(旧2室・新2室)	
S57	H-96	四国遍路往来手形	1点		
S57	F-17	水車	1基	常設(旧3室・新3室)	
S57	F-18	二挺がけ人力犁	1挺		
S57	H-552	定飛脚問屋掟書制札	1面		
S57	H-368	講看板(天明講)複製品	5枚	常設(旧3室・新3室)	
S57	H-559	浜札	23枚		
S57	H-930-9	蚕種原紙	1枚	常設(旧3室)	
S58	F-20	印旛沼漁撈用具	113点		H7松戸市博
S58	F-19	藤井真 神札コレクション	255葉	常設(旧3室・新3室) H15「災害」 H18「神々」	H6川崎市民M H13川崎市民M
S58	F-21	沼津市内浦小海地区網漁具	23点		
S58	F-35	富士講関係資料	38点	常設(旧4室) H16「華花」	
S58	H-569	二号半樹	1点	常設(旧3室)	
S58	H-570	鎌	4点	常設(旧3室)	
S58	H-909	三島神社守り札	4点	常設(旧3室)	
S58	H-249	法隆寺建造物古材	一括	日本の建築(S60 S63 H元 H2 H4 H6 H7 H8) H8「番匠」 H19「弥生いつから」 H21「建築特異」	H1名古屋営林 H4土浦市博 H7房総風土記 H11 M氏家
S58	H-54	中国製火縄銃	1挺	常設(旧2室) H18「鉄砲」 H22「武士」	S61安房博 H5黎明館 H10名古屋市 H11高知県博 H15板橋区博 H19板橋区博
S58	A-183	草戸千軒町遺跡出土木葉型鋸復元模型	1点	H21「建築特異」	
S58	A-52	立石遺跡10号蓋棺内出土遺跡(前漢鏡、胴矛、鉄剣、鉄鉈、砥石)	11点	常設(旧1室・新1室) H19「弥生いつから」	
S58	H-561	鎌倉諏訪東遺跡出土包丁複製	1点		
S58	A-183	草戸千軒町遺跡出土鼻輪複製	1点	H21「建築特異」	
S58	A-159	石槍	1点		
S58	A-160	鉄三角板革綴短甲(復元模型)	1領		H10なす風土記
S58	H-45	阿波人形頭(娘)	1躰		S63上総博
S59	F-40	オコナイ関係資料のうちエビ	1点	常設(旧4室)	
S59	F-22	榎恵 燈火コレクションのうち火打器	1点	H元年「灯火」	

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
S59	F-43	糸車	1台		
S59	F-41	北関東地方小正月関係祭具	36点	H17新収展	S60名古屋市博
S59	H-160	医書	21冊	常設(旧3室)	
S59	H-926	養蚕教弘録(上・下)	2冊	常設(旧3室・新3室)	
S59	H-927	養蚕教弘録下巻版木	2枚	常設(旧3室・新3室)	
S59	H-928	養蚕乾湿計用方	1冊	常設(旧3室・新3室)	
S59	H-929	母袋式榨盤	1点		
S59	H-930	蚕卵紙	9枚	常設(旧3室・新3室)	
S59	H-930	蚕卵紙	5枚	常設(旧3室・新3室)	
S59	H-930	蚕卵紙	3枚	常設(旧3室・新3室)	
S59	F-42	能登半島漁撈用具	6件	常設(旧4室)	
S59	F-42	能登半島漁撈用具	25件	常設(旧4室)	
S59	F-42	能登半島漁撈用具	5件	常設(旧4室)	
S59	F-42	能登半島漁撈用具	19件	常設(旧4室)	
S59	F-42	能登半島漁撈用具	21件	常設(旧4室)	
S59	F-42	能登半島漁撈用具	10件	常設(旧4室)	
S59	F-42	能登半島漁撈用具	17件	常設(旧4室)	
S59	A-86	墨画のある人形(複製品)	1点	常設(旧1室)	
S59	H-243	輸出用醤油瓶	1点	常設(旧3室・新3室)	H21千葉中央博大多喜
S59	H-585	百姓一揆のお守り札	100組 200枚	常設(旧3室・新3室)	
S59	H-62	木戸家史料	1284 件	常設(6室) H22「侯爵木戸家」展	H15憲政記 H16大利根 H18房総のむら H19憲政記 H20館山市博
S59	H-931	糸印(唐獅子型紐)	1点		
S59	F-52	昆布漁関係資料	4点	常設(旧4室)	
S59	F-52	昆布漁関係資料	3点	常設(旧4室)	
S59	F-52	昆布漁関係資料(ネジリボウ)	1点	常設(旧4室)	
S59	F-52	ニシン刺網	1点		
S59	F-52	昆布漁関係資料	2点		
S59	F-52	昆布漁関係資料(ネジリボウ)	1点	常設(旧4室)	
S59	F-52	昆布漁関係資料	3点		
S59	F-52	昆布漁関係資料(ネジリボウ)	1点		
S59	F-52	昆布漁関係資料	17点	常設(旧4室)	
S59	F-52	昆布漁関係資料(ネジリボウ)	1点	常設(旧4室)	
S59	F-52	昆布漁関係資料(ギンナンソウのタモ)	1点		
S59	F-51	フサマラー面	3点	常設(旧4室) H2「変身」	S63上総博
S59	F-126	種子俵	1俵	常設(旧4室)	
S59	F-126	種子俵	1俵	常設(旧4室)	
S59	F-126	種子俵	1俵	常設(旧4室)	
S59	F-126	種子俵	1俵	常設(旧4室)	
S59	F-126	種子俵	2俵	常設(旧4室)	
S59	F-126	種子俵	3俵	常設(旧4室)	

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
S59	F-99	羽黒山の御輿屋	1基	常設(旧4室)	
S59	F-48	行屋道具	4件	常設(旧4室)	
S59	F-48	湯殿山登拝菅笠	1蓋	常設(旧4室)	
S59	F-48	出羽三山御札	3枚	常設(旧4室)	
S59	F-100	五月幟	2流		
S59	F-49	サンスケ(タロー、ジロー)	10軀	常設(旧4室)	
S59	F-35	富士浅間大神絵像	1幅		
S59	F-63	ツノショイコ	1点	常設(旧4室)	
S59	F-114	安井金毘羅宮諸願成就祈願絵馬	一括	常設(旧4室)	
S59	F-107	市原の出羽三山行人中梵天	1基	常設(旧4室)	
S59	F-115	加太淡島神社絵馬	一括	常設(旧4室)	
S59	F-116	加太淡島神社流し雛	一括	常設(旧4室)	
S59	F-50	フロクワ(鍬)	1点		
S59	F-183	ドカイ舟模型	一式	常設(旧4室)	
S59	F-183	昆布採り帆掛け舟用従帆(ツライスル型)	2枚	常設(旧4室)	
S59	F-127	阿波文楽人形(エビスマワシ)の鯛	1点	常設(旧4室)	
S59	F-24	エビス神像	1軀	常設(旧4室)	
S60	H-58	菱刈隆旧蔵資料	157件		H1上総博
S60	H-64	明石家所蔵資料	26件	常設(旧3室)	
S60	H-248	海軍志願兵徵募ポスター	1枚		
S60	H-594	海外交渉史関係人物墓碑拓本	5点	常設(旧3室)	
S60	F-167	ウスブタ	1点		
S60	F-41	北関東地方小正月関係祭具	19件	H17新収展	
S60	F-84	カドニュードウ	1対		
S60	F-86	手挽ロクロ	1点	常設(旧4室)	
S60	F-87	ロクロカンナ	3点	常設(旧4室)	
S60	H-601	神魂神社本殿模型	1基	H11・H12日本の建築	
S60	H-602	光明寺二王門発見鑿(複製品)	1丁	常設(新2室)	H12M氏家
S60	H-457	圓蔵寺三重塔板図	17枚1組	S62「古図」 H8「番匠」	
S60	H-603	八坂神社旧本殿	1棟	H21「建築特異」	
S60	H-61	伊能家資料	一括	常設(旧3室・6室) H8「お金」 H10新収展 H14「装身具」 H19 「長岡京」 H20「順天堂」 H22「武士」 ★即日閲覧	H14「装身具」巡回 S62長崎県博 S63長野市博 H1上総博 H1大根根博 H10千葉県 H17/18/19寄贈 者(伊能忠敬記)
S61	H-214	百万塔(附陀羅尼経1巻)	1基	常設(旧2室)	
S61	H-836	尾崎行雄米寿記念軸	1巻		
S61	H-837	囚人労働絵巻	1巻	常設(5室)	H1北海道開拓記
S61	A-219	青磁大香炉、青磁器台	各1点		
S61	H-627	小袖	2領		
S61	F-136	切子燈籠	1張		
S61	F-137	麻撚糸製刺網	1統		
S61	F-138	山野浅間神社富士講関係資料	14件		

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
S61	F-166	山神像	2軀		
S61	F-166	山神像	2軀		
S61	F-139	流し雛	5鉢		
S61	F-139	流し雛	2鉢		
S61	F-140	霊柩車	1台		
S61	H-646	戸締り金具	60組		
S61	H-646	鉄筋	13本		
S62	A-217	近世近代陶磁器	43点	常設(旧3室・新3室) H10「陶磁器」 H10新収・「江戸モード」 H16 「華花」 H17「中世海道」	H10陶磁器巡回 H11「江戸モード」巡回 H17「中世海道」巡回 H23カナダ
S62	F-141	手提げランプ	1点	H元「灯火」	
S62	F-142	袴	1領		
S62	H-653	鋭武隊認識証	3点		
S62	H-654	種痘証	4点		
S62	F-143	松本子工子氏旧蔵理容道具	139点	H12新収展	
S62	H-655	星野平次郎装身具コレクション(櫛・笄)	143点	H14「装身具」 H16「華花」	H14「装身具」巡回 S63安房博 H18鳥取県博
S62	F-145	ハリアミ(定置網)模型	一式		
S62	H-62	木戸家資料	49件	常設(6室) H22「侯爵木戸家」展	H15憲政記 H16大和根 H18房総のむら H19憲政記 H20館山市博
S62	H-660	防火頭巾	1頭		
S62	H-661	旧片岡家・中根家文書	79件	H8「番匠」 H12日本の建築	
S62	H-662	継手・仕口模型	2組		
S62	H-679	吉岡新一鉄砲コレクション	5件15点	常設(旧2室・新2室) H10新収展 H12「城」 H13新収展 H14新 収展 H18「佐倉連隊」「鉄砲」 H22「武士」	H12「城」巡回 H19「鉄砲」巡回 H1総南博 千葉県文書館 H2堺市博 福島 県博 土浦市博 埼玉県博 H3千葉市博 佐賀県教委 H4大阪人権博 H5和歌山市 博 黎明館 H6行田市博 H7総南博 H8大 阪市博・サン美・名古屋市博 大阪人権博 H9広島県博 名古屋市 H10仙台市博 H12 高知県博 H13徳島市博 H14石川県博 名古屋城 香 川県博 H15文化庁 長浜市博 H16板橋区 H16文化庁 栃木県博 H17文化庁 H18文 化庁 板橋区 H19鉢形城 H20南丹市博 千葉中央博大多喜 板橋区 横浜美 H20 サン美・新潟県博 埼玉県博
S62	H-685	花車図屏風	一双	H17新収展	
S63	F-157	醤油醸造用具	一式		
S63	F-158	ナゲキ 雛劇仮面	5面		
S63	F-158	トンゾク 侗族男性用上着	1点		
S63	F-159	浅間神社振鈴	一式	H7「銅鐸」	H7「銅鐸」巡回
S63	F-160	水戸大神楽関係資料	一式		
S63	H-592	銃砲・刀剣類	21件	常設(6室) H18「佐倉連隊」 H22「武士」	
S63	H-583	銃剣	1口		
S63	H-548	北海道渡辺農場関係資料	15点		
S63	F-162	着物仕立て用具	3件		
S63	F-163	すぎ鉄砲他	2件		
S63	A-255	人体文深鉢土器片(複製品)	1点		

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
S63	H-726	らんびき	一式	常設(旧3室)	
S63	H-727	戸籍原本用紙版木	8枚		
S63	H-729	火縄銃(東南アジア マラッカタイプ)	1挺		H5和歌山市博 H7総南博
平1	H-800	明月記(自筆本)断簡	1幅	H3新収展 H17「うた」	H17「うた」巡回
平2	F-186	ヤマンカンノハシ(山の神の箸)	1膳		
平2	F-187	ケズイカケ(削り掛け)	2点		
平2	F-188	鹿児島県の人生儀礼用具	5点		
平2	F-189	ブトコシ	1点		
平2	F-190	凱旋の図	1軸		
平2	H-938	九九式小銃	1挺	常設(6室)	
平2	H-935	文官大礼服	一式		
平2	H-984	電話機	5台		
平2	H-985	軍服	4件		
平2	H-1000~1002	エンジョウダイショウヒ 延城大捷碑等	3件4点		
平2	H-1021	釣燈籠	1点		
平2	A-369	トウチュウマカヨウ イ シ カゾク ハカハツケン セツカケンロクガ 唐中宗皇后 韋氏家族墓発見 石椁線刻画 タクエイ 拓影	1枚		
平2	A-218-232~236	近世陶磁器	6件		
平2	A-373	越前焼土管状陶製品	2点		
平2	H-1028	旧日本陸軍指揮刀	1口	H18「佐倉連隊」	
平2	H-1029	黄繭糸	1総	常設(5室)	H10黎明館
平2	H-1030	弘前長勝寺雑器	1枚		
平3	F-205	ソラヨイの扮装用具	14点		
平3	H-1078	牧野義一コレクション(印籠・筆筒・箱物・銭 枺・看板)	107点	常設(旧3室・新3室) H6「漆文化」 H10「お金」 H14「装身具」 H16「華花」 H17「中世海道」	H14「装身具」巡回 H17「華花」巡回 H3一宮市博 H5神奈川県埋文 H9関宿城 博 H16千葉県博巡回
平3	H-1079	山葉オルガン(明治23年製)	1台	常設(5室)	
平3	H-1081	籠手・脛巾(こて・はばき)	1組		
平3	H-1082	フィリピン <small>の</small> 刀	1口		
平3	H-1083	西田長寿収集娼妓関係史料	134点	常設(5室)	
平3	H-1084	戦後引揚げ者関係資料	8件90 点		
平3	F-213	高勝稲荷小祠	1基		
平3	F-145	ハリアミ模型	1点		
平4	F-160	水戸大神楽関係資料(桶胴太鼓)	一式		
平4	H-1152	本田音吉氏旧蔵柔術・柔道関係資料	16件		
平4	H-1153	バスガイドの帽子	2点		
平4	H-1165	旧中国天津松島高等女学校関係資料	一括		
平4	H-1166	通信簿	1点		
平4	F-227	天吹	2管		
平4	H-1167	拳銃(スミス&ウエッソン 1855年製)	1挺	H18「鉄砲」	H19「鉄砲」巡回 H16栃木県博
平5	H-1181	宮田家資料	55件	常設(6室)	

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
平5	H-1182	海軍礼服	1式		
平5	H-1183	樋口家資料	5件		
平5	H-1184	本田家資料	4件		
平5	H-1185	中国古銭貨	40点		
平5	H-1186	西南戦争時の軍帽・三角巾他	4点		
平5	H-1187	明治期の足踏み式輸入ミシン	1台		
平5	H-1188	徴兵保険・養老生命保険証券	12点		
平5	H-1192	四條家伝来梨本宮婚儀什器関係資料	一括		
平5	H-1193	加藤家資料	一括		
平6	H-1246	明治期北海道開拓関係写真資料	24枚	常設(5室)	
平6	H-1247	南満洲鉄道株式会社株券・戦時郵便貯金切手ほか	3件		
平6	H-1254	茶地木綿反物	1反		
平6	H-1255	黒地鶴若松模様錦打掛	1領	H10新収展	
平6	H-1256	雛人形	一式		
平6	H-1257	八乙女舞装束	一式		
平6	H-1258	婚礼用櫃	1点		
平6	H-1259	貨幣関係資料	22点		
平6	H-1283	出羽国鶴岡より酒井家江戸上屋敷迄道中記	1冊		
平6	F-41	北関東地方小正月関係祭具	14件	H17新収展	
平6	H-1282-1	上海派遣軍記念写真帖	1冊		
平6	F-257	長火鉢	1点		
平6	F-258	手炉(手あぶり)	2点		
平7	H-1288	水谷梯二郎旧蔵高句麗広開土王碑拓本	1組	H9「古代碑」 H22「アジア」	H22「アジア」巡回 H7東博
平7	H-1290	新潟県中頸城郡梶村大瀧家宛書翰	80点		
平7	H-1291	新暦	35点		
平7	H-1300	中尾家旧蔵書籍類	133冊	H19「長岡京」	
平7	H-1301	石川春子学校関係証書辞令類	41点		
平7	A-471	宇野信四郎旧蔵古瓦類コレクション及び関係記録資料類	1887点 10件	H9「古代碑」 H14「文字」	H14「文字」巡回 H19たつの市埋文 H21房総むら風土記 H23韓国中央博
平7	F-274	犬張子関係資料	1点	H7「動物」 H12新収展	
平7	F-275	大元神楽の託綱	1点	H7「動物」	
平7	H-1314	柳沢家伝来服飾資料	6件		
平8	H-1358	蜻蛉蒔絵料紙箱	1点		
平8	A-216	装飾古墳壁画模写 福岡県玉塚古墳壁画模写	33点	H5「装飾古墳」 H15「はにわ」 H22「アジア」	H5「装飾古墳」(巡) H15「はにわ」(巡)H22「アジア」(巡) S61大分県教委 S63福岡市博・東博 H2桂川町教委 H7八雲風土記 H8神戸海洋博 H9近つ飛鳥 H10福岡市 H10徳島県博 H12徳島県美 H13双葉町歴史 H14安房博 H17～九博(常設)
平8	A-216	装飾古墳壁画模写 装飾古墳図文拓影	18点	H5「装飾古墳」 H15「はにわ」 H22「アジア」	H5「装飾古墳」(巡) H15「はにわ」(巡)H22「アジア」(巡) S61大分県教委 S63福岡市博・東博 H2桂川町教委 H7八雲風土記 H8神戸海洋博 H9近つ飛鳥 H10福岡市 H10徳島県博 H12徳島県美 H13双葉町歴史 H14安房博 H17～九博(常設)
平8	F-301	粕山貞美収集鎌類	23点		

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
平8	F-235-293,294	大塚集古資料館旧蔵墨壺コレクションの墨壺	2点		
平8	H-1364	湯川家華道文庫資料	2333点		
平8	F-302	福俵	1点		
平8	H-113	江戸切絵図 他	18件		
平8	H-1110-11~17	被差別関係資料	7件	常設(5室)	
平8	H-1394	東京二六新報・二六新聞等	1件		
平8	H-1395	大正末～昭和初期着物類	1件		
平8	H-1395	大正末～昭和初期着物類(同上)	1件		
平9	A-216-22	装飾古墳壁画模写 原古墳壁画模写	1点	H5「装飾古墳」 H15「はにわ」 H22「アジア」	H5「装飾古墳」(巡) H15「はにわ」(巡) H22「アジア」(巡) S61大分県教委 S63福岡市博・東博 H2柱川町教委 H7八雲風土記 H8神戸海洋博 H9近つ飛鳥 H10福岡市 H10徳島県博 H12徳島県美 H13双葉町歴史 H14安房博 H17～九博(常設)
平9	H-1420-	林栄太郎旧蔵地図コレクション	1610点	常設(新3室・6室) H13「境内図」	
平9	H-1434~1440	地図・道中記・証文等	7件		
平9	H-1443	間宮うら助産院資料	490件	常設(6室) H10新収展 H12新収展	
平9	H-1444	明治大正期絵葉書	154枚		
平9	F-304	フイゴ 鞆	1点		
平9	A-557	熨斗参考品	2点		
平10	F-314	夾笱 他	8点	H11新収展	
平10	F-315	田遊びの笠	1点		
平10	F-316	花祭りの御幣	2点		
平10	F-317	サンダワラガメ	4点	H12新収展	
平10	H-62	木戸家史料	8点	常設(6室) H22「侯爵木戸家」展	H15憲政記 H16大和根 H18房総のむら H19憲政記 H20館山市博
平10	H-1470	火縄銃(東南アジア)	1挺	H18「鉄砲」	H16板橋区 H21大多喜
平10	H-1471	刀装具	3点		
平10	H-1472	近世浮世絵版画資料	104点	H11「朝顔」 H16「華花」 H20③朝顔 H22③朝顔	
平10	H-1473	近世読本資料	3件		
平10	H-35-1202	紫縮緬地雪持柴垣菊模様縫小袖(小袖屏風)	1隻		
平10	H-1474	檜扇	1本		
平10	H-1475	万歳図掛幅	1幅		
平10	H-1476	王室宗珀墨蹟	1幅	H12新収展	
平10	H-1477	伝青蓮院尊道筆往来	1巻	H12新収展	
平10	H-1478	伝契沖筆 歌加留多	1点	H12新収展	
平10	F-320	車軸形羽釜	1点		
平10	F-41	関東地方小正月関係祭具	26件		
平10	F-41	関東地方小正月関係祭具(同上)	26件		
平11	H-1537	正徳元年放火禁止定高札(火付札)	1点		
平11	H-1546-1	シンガーマシン(手回し式)	1台		
平11	H-1545	着物(大正12.9着装)	1領		
平11	H-1212-42	仁丹入れ	1点		

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
平11	H-1538	故三輪清三家資料	一括	常設(6室) H12新収展	
平11	H-1539	化粧箱入石鹼 他	3点		
平11	H-1540	天津日本中学校関係資料	一括		
平11	H-1541	入江よし助産婦関係資料	一括	H12新収展	
平11	H-1542	昭和20・30年代映画パンフレット	40点		
平11	F-336	位牌	1点		
平11	F-143	松本チエ子氏旧蔵理容道具	9件		
平11	F-337	東京近郊農家の衣生活資料	一括		
平11	F-338	加藤家衣生活資料	一括		
平11	F-339	阿波人形	1体		
平11	A-14	青森県五戸町大窪遺跡出土縄文土器	27点		
平11	A-593	旧東大人類学教室収集 石製品	一括	H14「中世寺院」	
平12	H-1553	刀剣類	33点	H15「サイエンス」 H18「鉄砲」 H22「武士」	H19「鉄砲」巡回
平12	F-345	婚礼衣裳	一式		
平12	H-1554	鉄砲(ウインチェスター銃)	1挺		
平12	H-1443	間宮うら助産婦関係資料	21件	H12新収展	
平12	H-1215	観光絵葉書集	348通	H13新収展	
平12	H-1282-793	小川濱次郎「征露日誌」	1冊		
平12	H-1282-794-1	陸軍認識票	1点		
平12	F-322-3	葬送儀礼コレクションのうち 壇他	葬儀祭 17件	H10新収展	
平12	F-322-41,48	葬送儀礼コレクションのうち	輿・天蓋 2点		
平12	F-322-39,40	葬送儀礼コレクションのうち	輿 2基		
平12	F-369	肴台	3点		
平12	H-1540	中国天津日本人学校関係資料	82件		
平12	H-1339-11	魔法瓶	1点		
平12	H-1389-15	変化朝顔図	21点	H16「華花」 H20③朝顔 H22③朝顔	
平12	H-1389-16	朝顔押花	5点		
平12	H-1389-17	舟形植木鉢	1点	H16「華花」 H20③朝顔 H22③朝顔	
平12	H-1389-18	朝顔用植木鉢	9点	H16「華花」 H20③朝顔 H22③朝顔	
平12	H-1559-11	さくら草用植木鉢	3点		
平12	H-1561	近世医学関係資料のうち医門法律他	20冊	H13新収展	
平12	H-1561	近世医学関係資料のうち薬種売買指引勘 定帳 他	31冊	H13新収展	
平12	H-1282	東京日日新聞(1941. 12. 9付)	1点		
平13	H-1573	所荘吉氏旧蔵銃砲コレクション	27件	H15「サイエンス」「ヒーロー」 H18「鉄砲」 H22「武士」	H16板橋区
平13	F-389	修験道の祭壇と剣	一式		
平13	F-322-60,61	灯籠	2点		
平13	F-322-63,64	切り子灯籠	2点		
平13	F-322-59,62	切り子灯籠・ガス灯	2件		
平13	F-322-65,66,67	盆真菰棚・お盆用品セット・おがら	3件		
平13	F-322-86,87	精霊船	2点		

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
平13	H-1110-30	奈良県水平社関係資料	7点		
平13	H-1282-794-8	復員証明書他	一式		
平13	H-965-782	戦時期郵便貯金切手他	65点		
平13	H-965-784	千人針	1点		
平13	H-965-783	軍事郵便他	一式		
平13	H-1399-12,13	警察予備隊パンフレット・警察官募集ポスター	各1点	常設(6室)	
平13	H-1540	唐山日本尋常高等小学校卒業證書他	5件		
平13	H-1540	褒状他	3件		
平13	H-1540	天津尋常高等小学校卒業證書他	7件		
平13	H-1540	天津大和国民学校卒業記念写真	1件		
平13	H-1540	天津日本中学校徳田昇関係資料	9件		
平13	H-1540	天津吉野国民学校卒業記念写真パネル	1件		
平14	H-1573	所荘吉氏旧蔵銃砲コレクション	55点		
平14	H-1596	大久保利通関係資料	142点	H18「鉄砲」	H16黎明館 H19「鉄砲」巡回
平14	H-1242-13	水木要太郎日記類	15件		
平14	H-1282-804	日用南方語叢書(2)効ログ後(フィリピン語) 他	4件		
平14	H-979-77	朝鮮釜山における日本人演劇活動関係新聞切り抜き	11点		
平14	H-1616	李垠関係写真	104点		
平14	H-1339-14	大阪万国博覧会パンフレット類	43点		
平14	H-1282-806	陸軍軍服ほか	一式		
平14	H-1282-807	佐倉連隊記念盃	1個	常設(6室)	
平14	H-1617-1	伊達叢秘録 他	10冊		
平14	A-14-8	亀ヶ岡式注口土器	1点		
平14	F-390	宮参り着	3着		
平14	F-322-88	榛原町下井足岩井出垣内の葬送用具	一式		
平15	H-1621	稲葉盛・博之家資料	186件	常設(6室)	
平15	H-1622	紅板縮関係資料	一括	H17「夏の風景」 H23「紅板縮」	H20出雲博
平15	H-937-137	紅縮緬地鶴菊梅模様縫幅	1旒		
平15	H-1624	国定忠治弟友蔵借用証文 複製	1通		
平15	F-391-1.2	いざなぎ流祭壇(山の神祭壇・水神祭壇・村公神祭壇)、いざなぎ流えびす様祭壇	4点	H19「いざなぎ流」	
平15	A-624	柳田國男旧蔵考古資料	75点	★H23～共研「柳田國男考古資料」	
平15	H-1537-2～4	寛永十六年高札、明和七年高札、寅八月高札	各1点	常設(新3室) H17新収展	
平15	H-1561	医学関係資料	19冊	H13新収展	
平15	H-1561-10～14	曆関係資料	55冊		
平15	H-1561-15	薬箱	1点	H17新収展	
平16	H-1683	大正震災志附図、即位大礼記念帖	各1冊		
平16	H-1685	七脚落ちの図、同賀讃(2幅対)	2幅		
平16	H-1282-820	復員名簿(原簿 府県別) 湯岡子病院	1冊		
平16	H-1688	飛田昭規著「顕幽分界靈魂帰宿図説」	1幅		
平16	H-1694	昭和10年代女性洋装衣装	20件		

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
平17	A-219-86	貿易陶磁器コレクション（褐釉壺片）	1点	常設(新2室)	
平17	A-219-87	貿易陶磁器コレクション（青白磁花瓶口部片）	1点	常設(新2室)	
平17	A-634	太田天神山古墳周囲採集の石製品片・埴輪片・土器片	17点		
平17	F-322-142	葬送儀礼資料（白木彫刻祭壇道具）	1式		
平17	F-399	波多野旧蔵和竿コレクション	83件	H19新収展	
平17	F-400	波多野元武釣日誌	1冊		
平17	F-401	挟箱	1点		
平17	H-1338-9	軍事郵便（谷口恒次関係軍事郵便）	186通		
平17	H-1739	照臨院旧蔵堂内荘厳具	119点	H20「染織」	
平17	H-1740	林利三郎日記	63冊		
平17	H-1741	俵采擇録	1冊		
平17	H-1742	国史纂論 一・二・三・四・五	5冊		
平17	H-1743	山口安彦氏旧蔵絵葉書	23件		
平17	H-1744	大砲(コルベリン砲)	1門		
平17	H-1745	刀(日本刀)	1口		
平18	A-636	直良コレクション	2914件	H21「縄文いつから」	
平18	A-637	江戸大名屋敷跡出土木製資料	4件		
平18	F-423	棺車	1台	H19新収展	
平18	F-424	金鳥香(棒状蚊取り線香)	1箱		
平18	F-429	めくら経	1冊		
平18	F-430	秋田方言見立番付	1枚		
平18	H-974-53	関東大震災関係資料（大正大震災大火災）	1冊		
平18	H-974-54	関東大震災関係資料（関東大震災写真アルバム）	1冊		
平18	H-1282-856	近代戦争関係資料（騎兵軍服）	2点		
平18	H-1282-857	近代戦争関係資料（郷土皇軍将士慰問北京在留千葉県人野遊会写真）	1点		
平18	H-1282-858	近代戦争関係資料（三市連合防空演習史）	1冊		
平18	H-1282-859~862	近代戦争関係資料（レコード「沼田部隊の歌」「黄河一番乗り」ほか）	4件		
平18	H-1573-1-101~110-16	所荘吉旧蔵砲術秘伝書コレクション（田付流鉄砲ほか）	25件	H15「サイエンス」「ヒーロー」 H18「鉄砲」 H22「武士」	H16板橋区
平18	H-1573-2-81~89	所荘吉旧蔵砲術秘伝書コレクション（不易流秘伝ほか）	9件	H15「サイエンス」「ヒーロー」 H18「鉄砲」 H22「武士」	H16板橋区
平18	H-1573-2-463~594	所荘吉旧蔵砲術秘伝書コレクション（鉄砲筆筒奉行関係ほか）	132件	H15「サイエンス」「ヒーロー」 H18「鉄砲」 H22「武士」	H16板橋区
平18	H-1573-3-41~186	所荘吉旧蔵砲術秘伝書コレクション（異国落葉籠 全ほか）	146件	H15「サイエンス」「ヒーロー」 H18「鉄砲」 H22「武士」	H16板橋区
平18	H-1748-1-1~2	佐倉連隊関係資料（明治三十七八年従軍記念木盃ほか）	2点		
平18	H-1748-2-1~7	佐倉連隊関係資料（歩兵第五十七連隊将校団(写真)(ほか)	7点		
平18	H-1748-3-1~4	佐倉連隊関係資料（満洲派遣記念(アルバム)	4点		
平18	H-1748-4-1~36	佐倉連隊関係資料（日本古戦史ほか）	36点	常設(6室)	
平18	H-1748-5	佐倉連隊関係資料（大東亜戦争東部六四部隊二攻撃セル敵機経路）	1点		
平18	H-1748-6	佐倉連隊関係資料（佐倉歩兵第五十七連隊第十中隊記念写真帖）	1冊		

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
平18	H-1748-7	佐倉連隊関係資料（佐倉兵舎前兵士集合写真）	1点		
平18	H-1749	佐倉連隊建築関係資料	13点		
平18	H-1750	江尻亮三中尉関係資料（大日本帝国政府支那事変行賞賜金国庫債券50円ほか）	138件	常設(6室)	
平18	H-1759	就学牌	1点	常設(5室)	
平18	H-1760	刀	1振		
平18	H-1761	六十六部縁起	1冊		
平18	H-1768	漆工制作関係資料	1括	H19新収展	
平18	H-1769	倉田家服飾資料	285件	H19新収展	
平18	H-1771	狩猟図・戦闘図(アラビア細密画)	2枚		
平18	H-1772	棒火矢	1本		
平18	H-1773	村田経芳書状	1通		
平18	H-1774	村田銃弾薬箱(五百発入れ)	1合	常設(6室)	
平18	H-1775	こすくい(鑄鍋)	1本		
平18	H-1776	玉鑄型	1挺		
平18	H-1777	御伝授玉(井上流)	1組		H20板橋区
平19	F-432	めくら吉祥だらに(絵吉祥だらに)	1枚		
平19	F-433	英国人宣教師ジョン・バチラーの妻レイザの写真	1枚		
平19	G-58	佐原盆灯籠	1組		
平19	G-59	「南氷洋に於ける我捕鯨業」(記録映画)	5巻	★歴博映画の会(第五回 H20)	
平19	G-60	出羽三山行人 梵天	1基	常設(旧4室)	
平19	H-1242-22-3	水木家資料（黒板勝美書）	1幅		
平19	H-1420-28~31	林栄太郎旧蔵地図コレクション（地図類ほか）	359件		
平20	F-436	内田邦彦旧蔵錦絵コレクション	242件		H21青森県博 H23城陽市博
平20	F-468-1	水田狩猟・水田漁撈関係資料（サカアミ(坂網)）	1点		
平20	F-469	図南丸南氷洋捕鯨写真帖	1冊		
平20	H-22-65~68	錦絵コレクション（春のあした生花稽古ほか）	4組		
平20	H-22-75-1~21	錦絵コレクション（玩具絵）	21点		
平20	H-965-788~801	戦時期生活関係資料（厚生年金保険被保険者証ほか）	14点		
平20	H-965-802-1~13	戦時期生活関係資料（戦時期・占領期の女子学生日記）	13件		
平20	H-965-803	戦時期生活関係資料（戦時下南洋在住日本人への私信）	1冊		
平20	H-1282-886~909	近代戦争関係資料（作戦要務令ほか）	24点		
平20	H-1339-15	戦時期生活関係資料（東芝製ターンオーバー型トースター）	1台		
平20	H-1389-17-2	朝顔関係資料（舟形植木鉢）	1点		
平20	H-1748-8-1~219	佐倉連隊関係資料（佐倉連隊一等兵檜谷政吉氏関係資料）	219点	常設(6室)	
平20	H-1784	古銭・紙幣・国債（大東亜戦争割引国庫債券 拾円ほか）	27件		
平20	H-1785	五・一五事件と二・二六事件関係資料、戦前絵葉書類	11点		
平20	H-1786	大正・昭和期の双六	28点		
平20	H-1788	好古雑誌	1点		
平20	H-1789	樺太在住日本人関係資料（五万分一山岳図 富士山近傍ほか）	592件		
平20	H-1790-1-1~8	水俣病関係資料（水俣病「一株運動」資料）	8件	常設(6室)	

寄贈資料とその活用状況 H23年8月現在

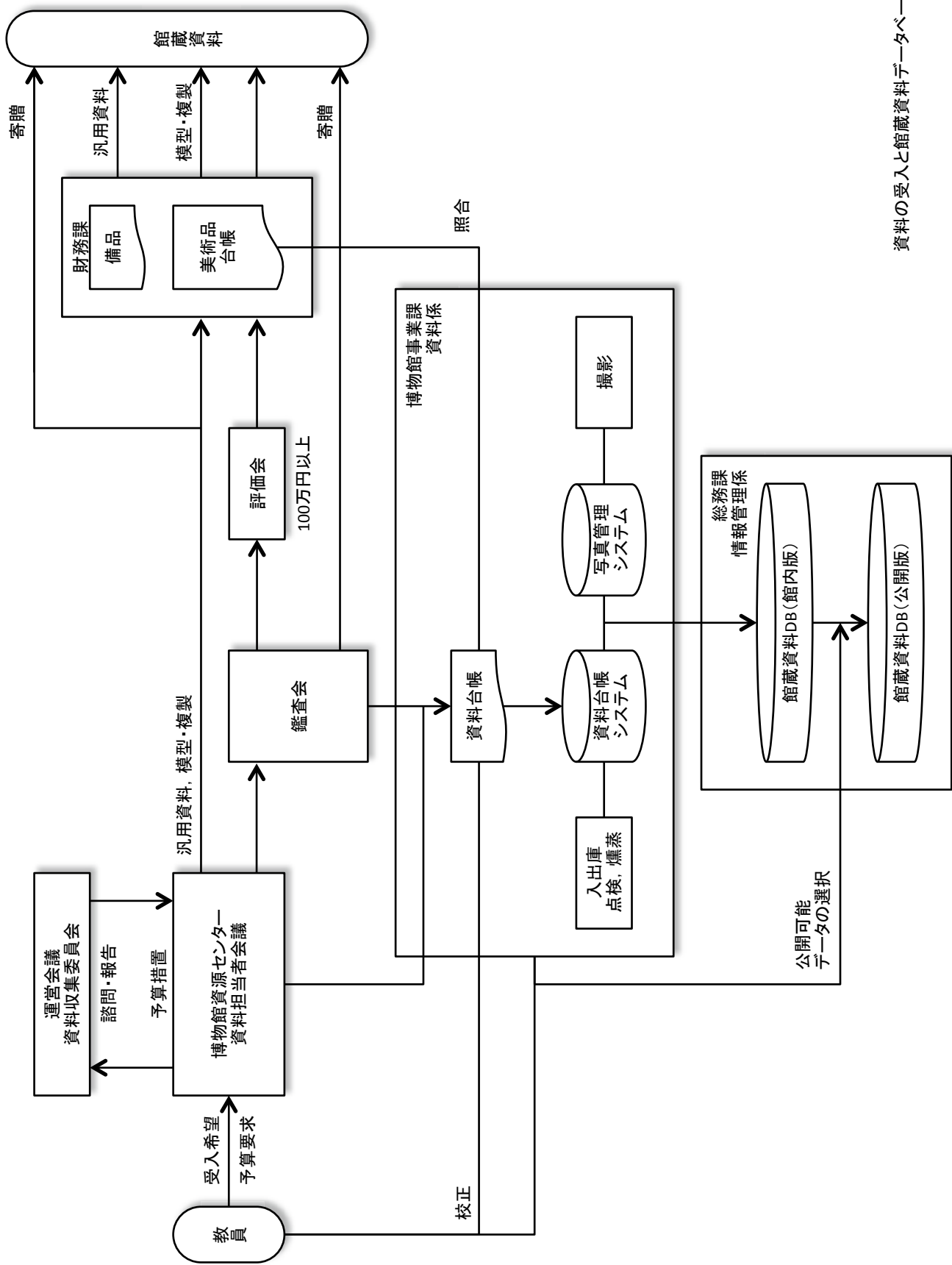
年度	資料番号	資料名	点数	本館での使用歴	館外貸出歴
平20	H-1790-1-9~13	水俣病関係資料（水俣病「一株運動」資料）	5件	常設(6室)	
平20	H-1792	大高ヒデ辞令類	11点	常設(5室)	
平20	H-1794	石井實フォトライブラリー関係資料	1括	H23「風景」(予定)	
平21	H-974-55-1~50	関東大震災関係資料（関東大震災写真）	50点		
平21	H-1778-13	歌川国芳作錦絵版木	2枚		
平21	H-1805	今治藩士柴田家資料	5巻		
平21	H-1806	近世紙幣・近代割手形	15点		
平21	H-1807	別役成義関係資料	28件		
平22	A-641	駄ノ塚古墳出土品	418件	常設(旧1室・新1室)	※受入前に貸出歴有
平22	F-133-417~426	丹後地方の漁撈用具（竿釣り仕掛けほか）	10件		
平22	F-322-156	葬送儀礼資料（カサブク）	1本		
平22	F-322-157	葬送儀礼資料（又塔婆・板塔婆）	2基		
平22	F-322-158	葬送儀礼資料（巾着）	7具		
平22	F-474-15-24	抱瓶の型	2組		
平22	F-479	万年筆販売関係用具	20件		
平22	H-937-195	寒菊模様振袖	1領		
平22	H-937-196	山水風景模様振袖	1領		
平22	H-1282-910	近代戦争関係資料（防空用鉄帽）	1点		
平22	H-1282-911-1~3	近代戦争関係資料（日中戦争期の写真）	3点		
平22	H-1282-912-1~8	近代戦争関係資料（日露戦争通訳官資料）	8点		
平22	H-1282-915	近代戦争関係資料（海軍軍医教育訓練所感）	9件		
平22	H-1339-17・18	戦後社会生活関係資料（ブラザー製ミシン・ナショナル製スチームアイロン）	2台		
平22	H-1389-29	朝顔関係資料（大輪朝顔栽培秘法）	1冊		
平22	H-1540-24	中国天津の日本人学校関連資料（若葉(会報)・名簿）	14冊		
平22	H-1559-22	近世・近代園芸関係資料（菊花栽培秘訣）	1冊		
平22	H-1809	犀北館お品書き	66件		
平22	H-1810	家計簿	56冊		
平22	H-1812	近代教科書コレクション	431点		
平22	H-1813	恵藤第四郎関係資料	16点		
平22	H-1823-1~37	南都楽人辻家資料	628件		
平22	H-1832	「昌王」銘舍利龕 拓本	1舗	※受入前 H13「文字」	
平22	H-1833	慶州南山新城碑 第一碑 拓本	1舗	※受入前 H13「文字」	

寄贈資料を出品した企画展示等一覧

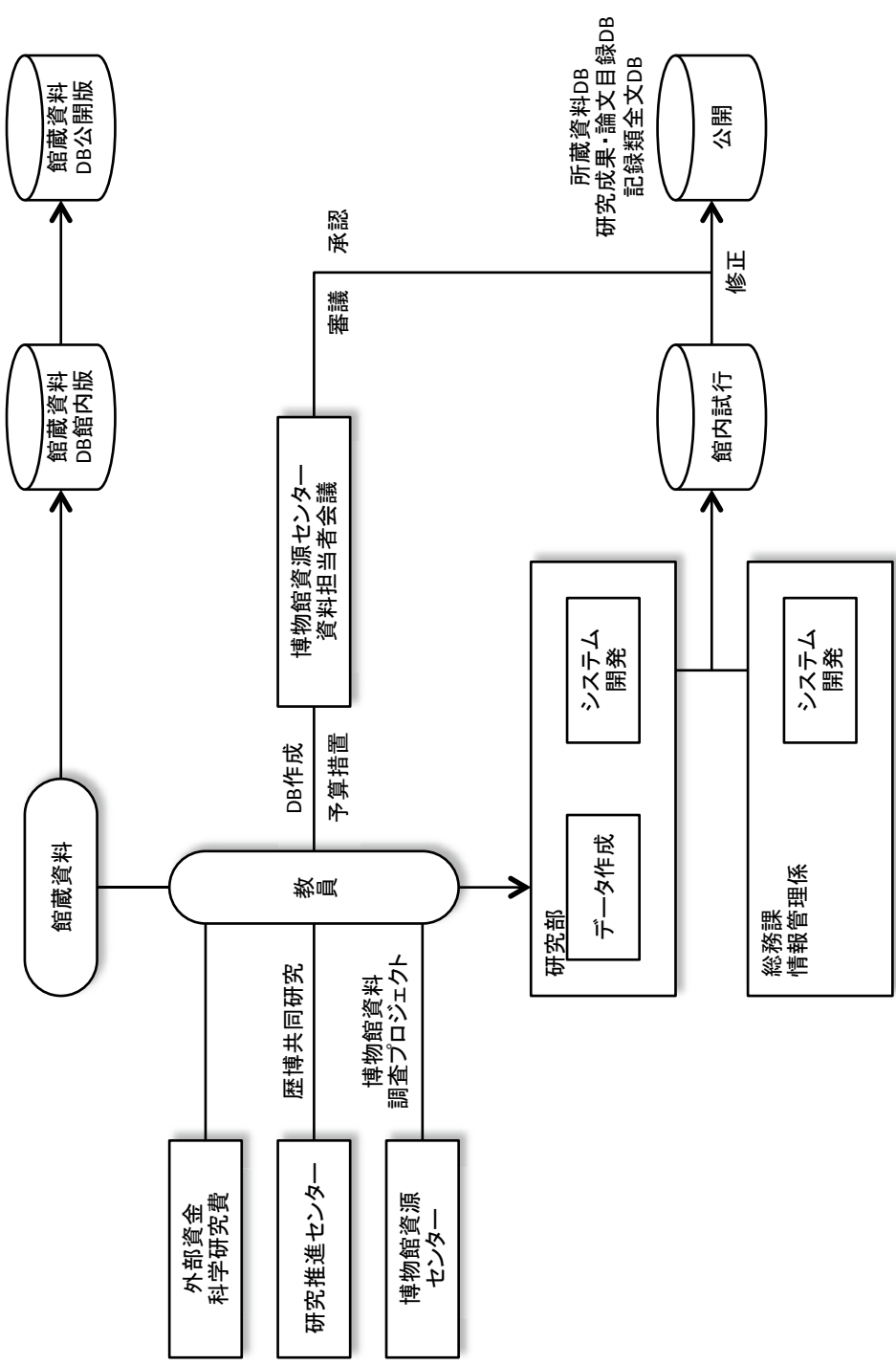
	開催年度	企画展示名称	略 称	寄贈資料リスト番号	共催・巡回会場等
1	S60	日本の建築		25,	
2	S62	古図に見る日本の建築	古図	104,	
3	S63	日本の建築		25,	
4	H元	暮らしの中の灯火	灯火	35, 123,	
5	H元	日本の建築		25,	
6	H2	変身する一仮面と異装の精神史一	変身	69,	
7	H2	日本の建築		25,	
8	H3	新収蔵品展	新収展	150,	
9	H4	日本の建築		25,	
10	H5	装飾古墳の世界	装飾古墳	217, 218, 228,	(巡回)四日市市立博物館・福岡市博物館・ 神戸市立博物館・宮崎県総合博物館
11	H6	漆文化一縄文・弥生時代一	漆文化	169,	
12	H6	近世の武家社会	武家社会	6,	
13	H6	日本の建築		25,	
14	H7	銅鐸の美	銅鐸	139,	(巡回)神奈川県立博物館・徳島県立博物館・ 福岡市博物館・大阪市立博物館
15	H7	日本の建築		25,	
16	H8	動物とのつきあい	動物	6, 213, 275,	
17	H8	失われゆく番匠の道具と儀式	番匠	25, 104, 132,	
18	H8	日本の建築		25,	
19	H8	お金の玉手箱	お金	106, 169,	
20	H9	古代の碑一石に刻まれたメッセージ一	古代碑	207, 212,	
21	H10	陶磁器の文化史	陶磁器	6, 122,	(巡回)名古屋市博物館
22	H10	江戸モード大図鑑	江戸モード	122,	(巡回)サントリー美術館・広島県立歴史 博物館・福島県立美術館
23	H10	新収資料の公開	新収	106, 122, 134, 197, 231, 276,	
24	H11	デジタルミュージアム共同実験一縄文の記憶一	縄文の記憶	5,	(共催)東京大学総合研究博物館
25	H11	伝統の朝顔	朝顔	242,	
26	H11	日本の建築		102,	
27	H11	新収蔵資料の公開	新収	5, 235,	
28	H12	天下統一と城	城	134,	(巡回)福岡市博物館・兵庫県立歴史博物館
29	H12	日本の建築		102, 132,	
30	H12	新収蔵資料の公開	新収	127, 134, 213, 231, 238, 247, 248, 249, 257, 260, 272,	
31	H13	縄文文化の扉を開く一三内丸山遺跡から縄文列島へ一	縄文文化	5,	
32	H13	なにがわかるか、社寺境内図	境内図	229,	
33	H13	新収蔵資料の公開	新収	273, 287, 288, 329,	
34	H14	古代日本文字のある風景一金印から正倉院文書まで一	文字	212, 444, 445,	(巡回)京都府京都文化博物館・石川県 立歴史博物館・宮崎県総合博物館・香川 県歴史博物館・横浜市歴史博物館
35	H14	男も女も装身具一江戸から明治の技とデザイン一	装身具	4, 6, 106, 128, 169,	(巡回)岡崎市美術館・京都府京都文化 博物館・福島県立美術館
36	H14	中世寺院の姿とくらし一密教・禅僧・湯屋一	中世寺院	268,	
37	H14	新収資料の公開	新収	134,	
38	H15	はにわ一形と心一	はにわ	217, 218, 228,	(巡回)四日市市立博物館
39	H15	ドキュメント災害史1703-2003一地震・文化・津波、そして復	災害	6, 19,	
40	H15	歴史を探るサイエンス	サイエンス	269, 290, 364, 365, 366, 367,	
41	H15	新収資料の公開	新収	5,	
42	H16	民衆文化とつづられたヒーローたち一アウトローの幕末維新	ヒーロー	290, 364, 365, 366, 367,	
43	H16	海を渡った華花一ヒョウタンからアサガオまで	華花	21, 122, 128, 169, 242, 282, 284, 285,	
44	H16	夏の風景一浴衣・浮世絵・怪談一	夏の風景	6, 323,	
45	H17	新収資料の公開	新収	37, 98, 135, 203, 329, 331,	
46	H17	東アジア中世海道一通商・湊・沈没船一	中世海道	122, 169,	(巡回)大阪歴史博物館・山口県立萩美 術館・浦上記念館
47	H17	うたのちから一和歌の時代史一	うた	150,	(連携展示)国文学研究資料館
48	H18	日本の神々と祭り一神社とは何か?一	神々	19,	
49	H18	佐倉連隊にみる戦争の時代	佐倉連隊	134, 141, 165,	
50	H18	歴史の中の鉄砲伝来一種子島から戊辰戦争まで一	鉄砲	26, 134, 183, 240, 269, 290, 310, 364, 365, 366, 367,	(巡回)香川県歴史博物館・和歌山市立博物 館・長浜市立長浜城歴史博物館
51	H19	新収資料の公開	新収	341, 354, 380, 381,	
52	H19	弥生はいつから!?一年代研究の最前線一	弥生いつから	25, 28,	
53	H19	歴博プロムナード いざなぎ流一御幣に見る祈禱の造形一	いざなぎ流	326,	
54	H19	長岡京遷都一桓武と激動の時代一	長岡京	106, 210,	
55	H20	近代医学の発祥地・佐倉順天堂	順天堂	106,	
56	H20	紀州徳川家伝来の楽器一笙	楽器(笙)	443,	
57	H20	ミニ企画(3室) 伝統の朝顔	③朝顔	242, 282, 284, 285,	
58	H20	「染」と「織」の肖像一日本と韓国・守り伝えられた染織品一	染織	345,	
59	H21	日本建築は特異なのか一東アジアの宮殿・寺院・住宅一	建築特異	25, 27, 30, 105,	
60	H21	縄文はいつから!?一1万5千年前になにがおこったのか	縄文いつから	352,	花巻市博物館
61	H22	ミニ企画(3室) 伝統の朝顔一館蔵資料にみる朝顔文化一	③朝顔	4, 242, 282, 284, 285,	
62	H22	武士とはなにか	武士	6, 26, 106, 134, 141, 269, 364, 365, 366, 367,	
63	H22	ミニ企画(3室) 旗本 本多家資料の世界	本多家	6,	
64	H22	アジアの境界を越えて	アジア	207, 217, 218, 228,	
65	H22	侯爵家のアルバム一孝允から幸一にいたる木戸家写真資	侯爵木戸家	56, 130, 239,	
66	H23	紅板締め一江戸から明治のランジェリー一	紅板締	323,	
67	H23	風景の記録一写真資料を考える一(予定)	風景	416,	

民俗研究映像DVD貸出実績（平成17年度～23年度8月現在）

No.	申請者属性	映像資料名	数	目的
平成19年度 実績:貸出件数 6件、貸出媒体数 8点				
1	大学教員	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	1	京都造形芸術大学舞台芸術研究センター、映画学科主催「<映像と身体>の人類学ードキュメンタリー映画の世界2007」
2	大学教員	AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	1	アラスカ大学北方博物館開催特別展「Ainu Ramati - Soul of the Ainu」
3	大学教員	AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	1	授業The Other in Japanese Literature and Culture(日本文学・文化における他者)での視聴
4	大学教員	芸北神楽民俗誌 第1～3部	3	神楽の研究のため
5	法人(国際交流)職員	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	1	日本スコットランド交流史研究の一環としてマンロー博士の事績調査
6	大学教員	AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	1	アイヌのイメージの研究
平成20年度 実績:貸出件数 7件、貸出媒体数 17点				
7	NPO	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	1	講座「世界のドキュメンタリー」での上映
8	大学教員	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	2	スポーツ史、スポーツ人類学研究における映像史資料の有効性について検証するための参考資料としての視聴
9	研究所職員	芋くらべ祭の村ー近江中山民俗誌ー 中山の芋くらべ祭ー滋賀県蒲生郡日野町中山ー	2	調査研究のため
10	大学教員	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	2	授業(伝統文化論)の教材として
11	大学教員	芸北神楽民俗誌1～3	3	早稲田大学文化推進部との共催フォーラム企画案の検討用資料として
12	大学教員	遠野の語りべたち	3	遠野の民俗文化と観光化の研究に資するため
13	個人(作家)	芋くらべ祭の村ー近江中山民俗誌ー 中山の芋くらべ祭ー滋賀県蒲生郡日野町中山ー 上三十坪の野上祭 徳谷の野上祭	4	中日文化センターの日本の祭りを紹介する講座にて上映するため
平成21年度 実績:貸出件数 4件、貸出媒体数 5点				
14	個人	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	1	個人研究(アイヌ民族の衣服関連)のため
15	大学教員	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	2	慶應義塾大学アートセンター研究会用(2009年12月14日・15日)として参加者に無料上映(16日)事後検討会で一部検討のために一部上映確認および事前の試験的上映と当該映像資料の検討討議
16	個人	筆記の近代誌(本篇・列伝篇)	1	個人研究(1900年代前半の筆記具の研究)のため
17	学生	物部の信仰といざなぎ流御祈禱	1	専攻に関する予備調査のため
平成22年 実績:貸出件数 6件、貸出媒体数 6点				
18	大学教員	AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	1	授業で学生たちに視聴させるため
19	個人	沖縄の焼物 伝統の現在	1	紀行文のエッセイ執筆の参考のため
20	個人(映像業界)	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの AINU Past and Present The Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	1	環太平洋圏の民族の習俗に関する研究記録映画の企画参考とするため
21	個人	筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人々(本篇)(列伝篇)	1	万年筆の伝承、修理、歴史等の研究ため
22	地方公共団体	興福寺春日大社ー神仏習合の祭儀と支える人々ー/薬師寺花会式ー行法と支える人々ー	1	足立区郷土博物館の映画会(平成23年2月12日実施)に放映するため
23	大学教員	物部の民俗といざなぎ流御祈禱	1	立教大学の授業で上映するため
平成23年度 8月9日現在実績:貸出数 3件、貸出媒体 3点				
24	個人	黒島民俗誌	1	オリジナルミュージカル制作の背景や民俗芸能等を調べる参考資料として使用するため
25	大学教員	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	1	弘前大学大学院人文社会科学部研究科の授業(民俗学特論)に使用するため
26	地方公共団体	鹿嶋さまの村ー秋田県湯沢市岩崎民俗誌ー	1	足立区立郷土博物館の映画会(7月9日)に放映するため



資料の受入と館蔵資料データベース



データベースリリースはくの作成・公開

収蔵資料の調査・研究等の実施状況

「木戸家資料」 1, 333件

1984・1987・1998年度受贈

担当：樋口雄彦 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12			
資料収集			●														●																	
資料調査研究																																		
展示																																		
要	受贈 「木戸孝允・孝正・孝一関係資料」資料調査研究プロジェクト 資料目録『旧侯爵木戸家資料目録』(2011.2刊行) 「侯爵家のアルバム-孝允から孝一にいたる木戸家写真資料-」展示プロジェクト 企画展示「侯爵家のアルバム-孝允から孝一にいたる木戸家写真資料-」 (2011.3.1~5.29) 展示図録『侯爵家のアルバム-孝允から孝一にいたる木戸家写真資料-』(2011.3刊行)																																	

「紅板縮関係資料」 6件

2003年度受贈、2004・2010年度購入

担当：澤田和人 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12			
資料収集																																		
展示																																		
要	受贈(2003年度)、購入(2004年度) 「紅板縮め-江戸から明治のランジェリー-」展示プロジェクト 企画展示「紅板縮め-江戸から明治のランジェリー-」(2011.7.26~9.4開催) 展示図録『紅板縮め-江戸から明治のランジェリー-』(2011.7刊行)																																	

「石井實フォトライブラリー関係資料」 一括

2008年度受贈

担当：青山宏夫 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12			
資料収集																																		
共同研究																																		
展示																																		
要	受贈 基礎研究「『地理写真』の資料化と活用」 研究報告(2012年度刊行予定) 「風景の記録-写真資料を考える-」展示プロジェクト 企画展示「風景の記録-写真資料を考える-」(2011.11.8~2012.1.15開催予定) 展示図録『風景の記録-写真資料を考える-』(2011年度刊行予定)																																	

民俗研究映像に関連する研究及び映像制作等

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	摘 要		
共同研究																																基礎研究「民俗研究映像の資料論的研究」 基礎研究「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」 基礎研究「民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究」		
民俗研究映像																								■								『現代の葬送儀式』 『AINU: Past and Present - マンローのフィルムから見えてくるもの-』 『AINU: Past and Present - The Legacy of Neil Gordon Munro's Film -』 興福寺 春日大社 - 神仏習合の祭儀と支える人々 - 栗師寺 花会式 - 行法と支える人々 - (H19.制作)		
																																	・Kohukuji and Kasuga Taisha Rites of Kami-Buddha Amalgamation and the People Who Support Them ・The Flower Assembly Rite (Hana' e-shiki) of Yakushiji The Ceremony and the People Who Support It (上段の英語版)	
																																	『伝統鴨網漉のと人々の関わり-加賀市片野鴨池の坂網漉』 『加賀市片野鴨池の坂網漉』(H19.制作)	
																																	『筆記の近代誌 - 万年筆をめぐる人びと -』(本編、列伝編)	
																																	『平成の酒造り』(製造編、継承・革新編)	
映像フォーラム																																	『現代の葬送儀式』(2007.2.3) 『AINU Past and Present 映像をめぐる虚と実』(2007.9.15) 『海を渡った仏教 儀式と芸能』(2008.11.29) 『筆記の近代誌 - 万年筆をめぐる人びと -』(2009.12.5) 『平成の酒造り』(2010.9.4)	
																																		『アイヌ文化の伝承』(2012.2.4)
修復																																	保存用マスターおよび貸出用DVDの作成	
民俗研究映像DVD貸出																																		民俗研究映像をDVDで貸出

平成22年度企画展示
「侯爵家のアルバム—孝允から幸一にいたる木戸家写真資料—」
開催要項

1. 主催 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
2. 会期 平成23年3月1日（火）～5月5日（木）〔開催日数：58日間〕
3. 会場 国立歴史民俗博物館 企画展示室A
4. 料金 特別展料金
(人間文化研究機構国立歴史民俗博物館及び国立民族学博物館観覧規程による)

5. 展示趣旨

本館所蔵の旧侯爵木戸家資料（孝允～正二郎～孝正～幸一4代にわたる資料群）は、1984年から1998年にかけて寄贈を受けたものであるが、簡単な仮目録があるだけで、長らく本格的な整理がされないままになっていた。平成13年度から客員教授や資料調査プロジェクトのメンバーによって整理・目録作成作業を進め、今回ようやくそれが終了し目録刊行の見通しがついた。そこで、目録による資料の全面公開に合わせ展示を行う。今回は、1万5千件にのぼる膨大な資料の中から最も視覚に訴える資料として、写真資料に絞って紹介する。幕末・明治初年から昭和戦後期まで長期にわたり撮影されたものであり、主として木戸家の人々が被写体となったものである。総数は5,241件に達するが、その中から特色ある写真をピックアップする。

柱となるのは、ガラス板写真や欧米で写された岩倉使節団関係のアルバムなど、木戸孝允に関わる幕末・明治初年の写真。海外留学の後、夭逝した木戸正二郎の写真。明治・大正期の華族の暮らしぶりを伝える孝正夫妻や少年時代の幸一らの家族写真。昭和戦前期は天皇の重臣として、また戦後は東京裁判の被告としての木戸幸一が写された写真などである。木戸家という、日本の近現代史の中で大きな位置を占めた一家族の公私にわたる足跡を画像でたどることで、歴史資料としての写真の有効性を提示できると考える。

画質保存のため実物の展示数は限定せざるをえないかもしれないが、その代わり複写拡大パネルを壁面に並べることにより展示を構成する。また、会場に設置するモニターの画面から画像を検索、拡大して見られるようにする。

6. 展示構成案

- 第1コーナー 木戸孝允と明治維新
第2コーナー 長州閥の人々
第3コーナー 明治の群像
第4コーナー 岩倉使節団の面々
第5コーナー 木戸彦太郎・正二郎兄弟の海外留学

- 第6コーナー 木戸孝正とその時代
- 第7コーナー 木戸家とその親類
- 第8コーナー 学習院と華族の仲間たち
- 第9コーナー 木戸幸一と昭和の激動
- 第10コーナー 著名な写真師たちの作品

7. 主な展示資料

- 第1コーナー：帯刀・下駄履き・和服姿の桂小五郎、明治3年の木戸松子など
- 第2コーナー：伊藤博文、毛利敬親・元徳父子、広沢真臣、山尾庸三、桂太郎など
- 第3コーナー：三条実美、大山巖、榎本武揚、明治天皇、昭憲皇太后、大正天皇など
- 第4コーナー：岩倉具視、大久保利通、伊藤博文、山田顕義、田中光顕、新島襄など
- 第5コーナー：明治6年アメリカの木戸彦太郎、ロンドンの木戸正二郎など
- 第6コーナー：明治4年の木戸孝允と来原彦太郎、宮内省官吏らとの集合写真など
- 第7コーナー：鹿鳴館風の寿栄子、山尾庸三一家、児玉源太郎と少女時代の鶴子など
- 第8コーナー：初等科制服姿の幸一・小六兄弟、学習院の運動会、遠足など
- 第9コーナー：川奈ゴルフ場にて、近衛文麿首相と閣僚たち、昭和27年巣鴨出所など
- 第10コーナー：上野彦馬、内田九一、鈴木真一、小川一真、丸木利陽らの作品

8. 関連イベント

- (1) 歴博講演会
平成23年4月9日（土） 田中正弘「（演題未定）」
- (2) ギャラリートーク
開催期間中の土曜日を中心に数回実施

9. 印刷物

- (1) ポスター
- (2) チラシ
- (3) 展示図録
- (4) 解説シート

10. 展示プロジェクト委員

<館内委員>

- 岩淵 令治（国立歴史民俗博物館 歴史研究系 准教授）
- 久留島 浩（国立歴史民俗博物館 歴史研究系 教授）
- 鈴木 卓治（国立歴史民俗博物館 情報資料研究系 准教授）
- ◎樋口 雄彦（国立歴史民俗博物館 歴史研究系 准教授）

<館外委員>

- 田中 正弘（國學院大學栃木短期大学 教授）
- （◎：展示プロジェクト代表 ○：副代表）

企画展示 終了報告書

提出日：平成23年6月7日（火）

区 分	企画展示	代表者	樋口雄彦
展示名称	侯爵家のアルバム－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－		
期 間	平成23年3月1日（火）～5月29日（日） ※臨時休館 3月12日（金）～4月3日（日）		
会 場	企画展示室A		
図 録	有	作成部数	2,100部
会期中入館者数	28,778人	企画展示入場者数	19,639人
展示プロジェクト（◎：代表 ○：副代表）			
<館外>	田中 正弘（國學院大學栃木短期大学 教授）		
<館内>	○岩淵 令治（歴史研究系 准教授） 久留島 浩（歴史研究系 教授） 鈴木 卓治（情報資料研究系 准教授） ◎樋口 雄彦（歴史研究系 教授）		
展示概要			
<p>本館が所蔵する「旧侯爵木戸家資料」の整理が完了し、『国立歴史民俗博物館資料目録10 旧侯爵木戸家資料目録』を刊行することで、その全容を公開するに至った資料の中から、量的にも多く内容も豊富で、かつ見栄えのする写真資料に焦点をあて紹介した。</p> <p>約300点を選び、それを4つの大テーマ「木戸孝允と彼をめぐる人々」「正二郎から孝正へ」「孝一のあしあと」「著名な写真師たちの作品」、8つの小テーマ「木戸孝允と明治維新」「長州閥の人々」「明治の群像」「岩倉使節団の面々」「彦太郎・正二郎兄弟の海外留学」「木戸孝正とその時代」「木戸家とその親類」「学習院と華族の仲間たち」「木戸孝一と昭和の激動」で構成し、近代日本と木戸家4代との足跡を関連させながら、展示を行った。</p>			
全体的な反省・感想			
<p>3月11日の東日本大震災の影響で途中臨時休館し、その分会期を延長したが、従来の企画展示と比較して観覧者数に顕著な変動は見られなかった。</p> <p>展示したもののほとんどが初公開の資料であり、古写真の研究をする専門家からは注目を浴び、早速出版物への掲載申請が出されるなど、学界への反響があった。また、木戸孝允や木戸幸一のネームバリューから、一般の歴史ファンにも広く話題を提供することができた。木戸家の関係者や岩倉使節団関係人物の子孫などが観覧のため来館し、資料や史実に関する新たな情報を提供していただくなどの副産物もあり、まとまった数の古写真の寄贈申し出も受けた。</p> <p>タッチパネルの活用によって、各コーナーにバラバラに展示した写真についても、アルバムに収められていた本来の配列や状態を見てもらうことができたほか、多数の人物の人名・出身地などによる検索も可能となり、一方的に「見せる」、静的な現物展示とは違う、動的な要素も付け加えることができた。現物の小ささを補うため、複写・拡大したパネルも展示したが、作品保護のため展示室の照明を暗くせざるをえず、ガラスへの反射などもあり、観覧者からは見えにくいとの指摘があった。</p> <p>展示の開始と同時に『旧侯爵木戸家資料目録』を刊行したこともあって、今回展示した写真以外の資料、すなわち文書・書幅・物品などについても展示・公開する機会をつくってほしいとの希望も少なからず出された。今後の課題として、それらの資料も活用して、より広く深く木戸家資料の世界を紹介することが必要である。</p>			

平成22年度企画展示
「侯爵家のアルバム－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－」
実績報告

1 開催の概要

(1) 開催期間・入場者数・図録配布及び販売

①開催期間 平成23年3月1日(火)～5月29日(日) 【開催日数58日】
※臨時休館 3月12日(土)～4月3日(日)

②入場者数

総入場者数	28,778人(本館)
企画展示入場者数	19,639人
うち有料	8,266人
無料	11,373人
一日平均入場者数	338人(企画展示観覧率 68%)

③-1 展示図録〔無償分〕配布(平成23年5月29日現在)

作成部数	2,100部
配布済み部数	1,610部
残部数	490部

③-2 展示図録〔有償分〕販売(平成23年5月29日現在)

作成部数	800部
販売済み部数	647部
残部数	153部

2 主要経費

(1) 経費(企画展示経費)

役務契約費(会場取設、図録等)	9,483,844円
旅費(ナレーション収録等)	10,020円
備品消耗品費(消耗品等)	547,674円
謝金(執筆謝礼)	7,640円
	<hr/>
	10,049,178円

(企画展示等広報普及費・広報資料作成費を除く)

(2) 展示会場

別記1 展示会場レイアウト略図

3 関連事業の結果

(1) 歴博講演会

○第328回「木戸侯爵家の成立と木戸家資料」

ア 期 日 平成23年4月9日(土)
イ 会 場 当館講堂
ウ 講 師 田中正弘(國學院大學栃木短期大学教授)
エ 参加者 219人

(2) ギャラリートーク

ア 実施回数 4回
イ 講 師 樋口雄彦(研究部歴史研究系教授)
ウ 参加者 267人(延べ人数)

4 広報活動

(1) 広報資料作成及び配布

・ポスター B2判 2,600枚
・ポスター B3判(車内広告) 1,700枚
・チラシ A4判 200,000枚

ポスター(B2版)は博物館、各県の教育委員会等に配布し、ポスター(B2・B3版)は京成線各駅、京成線車内及びちばグリーンバス車内に掲出した。
チラシ(A4版)は前述の博物館、教育委員会のほか、近隣市町村の広報課、図書館、公民館等に配布した。JR佐倉駅・京成佐倉駅及び佐倉市観光協会ほかにポスター(B2版)の掲出、チラシの配布を実施した。

このほか、従来送付しているマスコミ及び近隣の公共機関等のほか、カメラメーカー、フォロギャラリーに対してポスター・チラシの送付、佐倉市・成田市・酒々井町への自治会回覧向けのチラシの配布を行った。さらに、写真関係専門誌、情報誌に対し記事掲載依頼を行った。

(2) 記者発表及び記事掲載

①記者発表

企画展示開催前に本展示に対する周知と開催意義を高めることを目的として、平成23年2月16日(水)に東京ガーデンパレス(東京都文京区)において、展示概要に関する記者発表を行った。

②記事掲載(主なもの)

・雑誌 ぐるっと千葉3~6月号、集-shu-47号
・専門誌 アサヒカメラ3月号、日本カメラ3~5月号、カメラマン3~5月号、フォトコンテスト3月号、歴史読本5月号、歴史群像No.106、歴史研究590号
・新聞 毎日新聞(3月3日・10日、4月7日・14日・19日・28日、5月19日・26日)、東京新聞(2月24日・3月3日・26日)、朝日新聞(3月1日・3月9日、4月6日・13日・20日・27日、5月18日)、読売

新聞（2月9日、4月12日、5月17日・23日）、千葉日報（3月10日）、日本経済新聞（5月12日）、赤旗（3月9日）

・放送

チバテレビ（2月28日）、NHKFM（4月22日）、佐倉市広報番組「チャンネルさくら」（4月22～28日）、ケーブルネット296（3月14～20日）

(3) ホームページ

①展示紹介

②プレスリリース

5 広聴活動

(1) アンケート 別記3

6 主な展示資料

I 孝允と彼をめぐる人々ー幕末～明治維新ー

I-1 木戸孝允と明治維新

帯刀・下駄履き・和服姿の桂小五郎、明治3年の木戸松子など

I-2 長州閥の人々

伊藤博文、毛利敬親・元徳父子、広沢真臣、山尾庸三、桂太郎など

I-3 明治の群像

三条実美、大山巖、榎本武揚、明治天皇、昭憲皇太后、大正天皇など

I-4 岩倉使節団の面々

岩倉具視、大久保利通、伊藤博文、山田顕義、田中光顕、新島襄など

II 正二郎から孝正へー明治初期～大正中期ー

II-1 彦太郎・正二郎兄弟の海外留学

明治6年アメリカの木戸彦太郎、ロンドンの木戸正二郎など

II-2 木戸孝正とその時代

明治4年の木戸孝允と来原彦太郎、宮内省官吏らとの集合写真など

II-3 木戸家とその親類

鹿鳴館風の寿栄子、山尾庸三一家、児玉源太郎と少女時代の鶴子など

III 幸一のあしあとー明治中期～昭和ー

III-1 学習院と華族の仲間たち

初等科制服姿の幸一・小六兄弟、学習院の運動会、遠足など

III-2 木戸幸一と昭和の激動

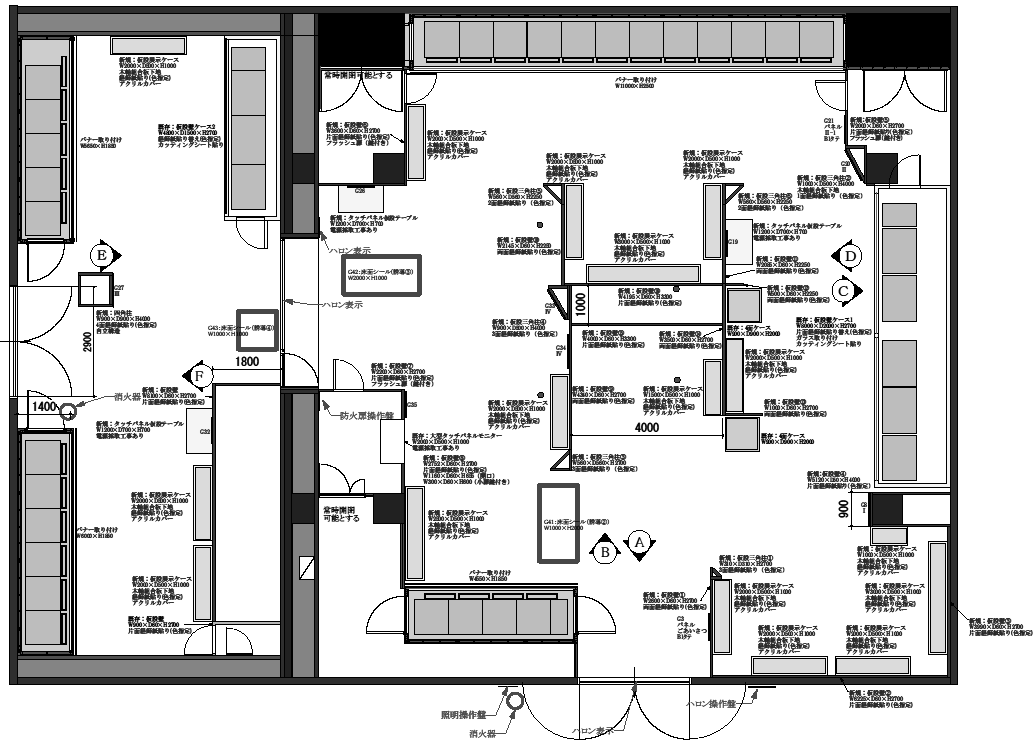
川奈ゴルフ場にて、近衛文麿首相と閣僚たち、昭和27年巢鴨出所など

IV 著名な写真師たちの作品

上野彦馬、内田九一、鈴木真一、小川一真、丸木利陽らの作品

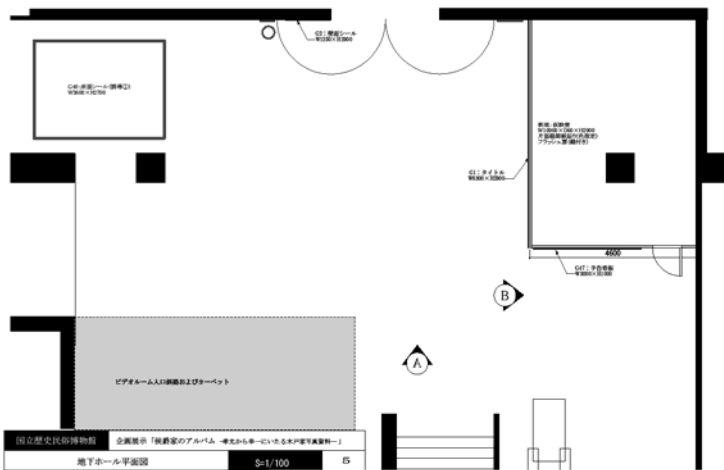
別記1 展示会場レイアウト略図

(企画展示A室)



国立歴史民俗博物館	企画展示「侯爵家のアルバム-考允から幸-にいたる木戸家写真資料-」	企画展示室A 平面図	1/75	1
-----------	-----------------------------------	------------	------	---

(地下ゾーン)



国立歴史民俗博物館	企画展示「侯爵家のアルバム-考允から幸-にいたる木戸家写真資料-」	地下ホール平面図	S-1/100	5
-----------	-----------------------------------	----------	---------	---

企画展示「侯爵家のアルバム」アンケート集計結果

開催期間 平成23年 3月 1日～
平成23年 5月29日

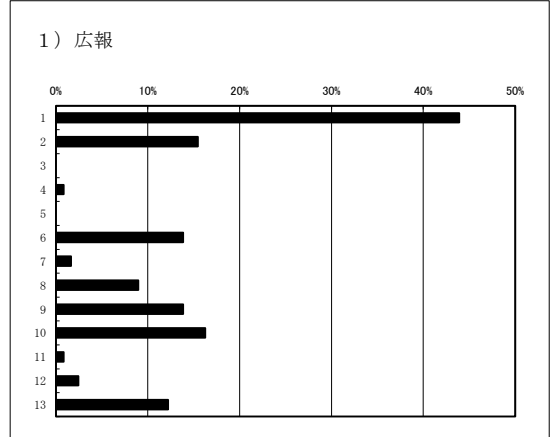
途中閉館期間:平成23年3月12日
～4月4日

n=19,639
一部未回答・複数回答あり

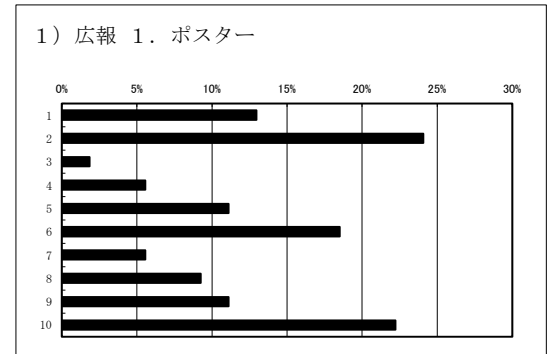
回収数	132
企画展示入場者数	19,639
回収率	0.7%

1) この「侯爵家のアルバム」展を何でお知りになりましたか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

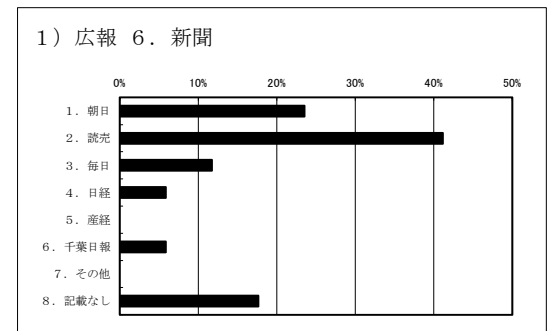
	回答数	123
1. ポスター	1	54 44%
2. チラシ	2	19 15%
3. ケーブルテレビ	3	0 0%
4. テレビ	4	1 1%
5. ラジオ	5	0 0%
6. 新聞	6	17 14%
7. 雑誌	7	2 2%
8. 歴博に来てから	8	11 9%
9. ホームページ	9	17 14%
10. 人に聞いて	10	20 16%
11. メールマガジン	11	1 1%
12. 広報誌「歴博」	12	3 2%
12. その他	13	15 12%
合計	160	130%



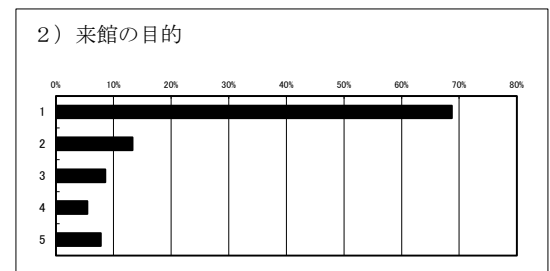
	回答数	54
1. 駅 (JR)	1	7 13%
2. 駅 (京成)	2	13 24%
3. 電車内 (JR)	3	1 2%
4. 電車内 (京成)	4	3 6%
5. 図書館	5	6 11%
6. 博物館	6	10 19%
7. 美術館	7	3 6%
8. 公民館	8	5 9%
9. 学校	9	6 11%
10. その他	10	12 22%
合計	66	122%



	回答数	17
1. 朝日	4	24%
2. 読売	7	41%
3. 毎日	2	12%
4. 日経	1	6%
5. 産経	0	0%
6. 千葉日報	1	6%
7. その他	0	0%
8. 記載なし	3	18%
合計	18	106%



	回答数	17
1. 歴博	6	35%
2. その他	5	29%
3. 記載なし	6	35%
合計	17	100%



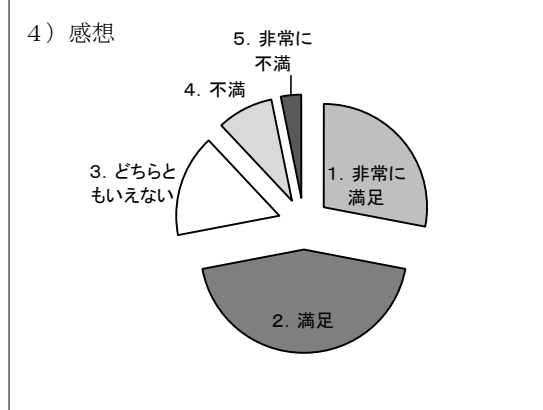
2) 今日、来館された目的は何ですか。

	回答数	128
1. 「侯爵家のアルバム」展をみるため	1	88 69%
2. 総合展示をみるため	2	17 13%
3. 総合展示と「侯爵家のアルバム」展をみるため	3	11 9%
4. 遠足	4	7 5%
5. その他	5	10 8%
合計	133	104%

企画展示「侯爵家のアルバム」アンケート集計結果

4) 「侯爵家のアルバム」展の全体的な感想はいかがでしたか。

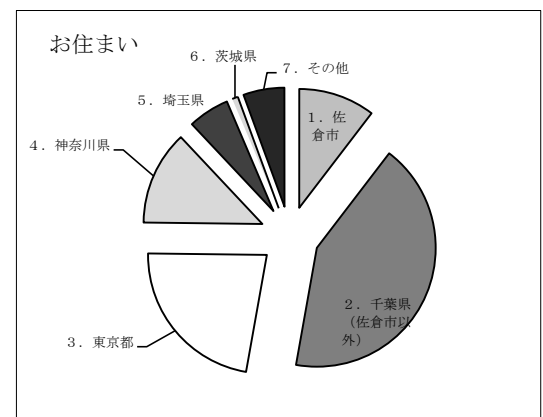
	回答数	
1. 非常に満足	35	28%
2. 満足	55	44%
3. どちらともいえない	20	16%
4. 不満	11	9%
5. 非常に不満	4	3%
合計	125	100%



6) ご自身のことを教えてください。

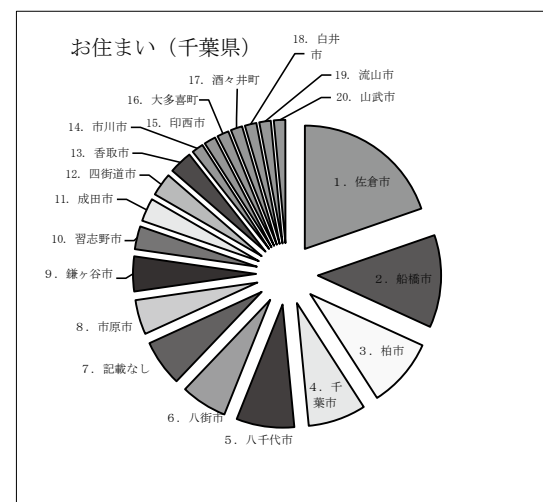
性別	回答数	
1. 男性	52	42%
2. 女性	72	58%
合計	124	100%

歴博来館回数	回答数	
1. 初めて	48	42%
2. 2回目以上	67	58%
合計	115	100%



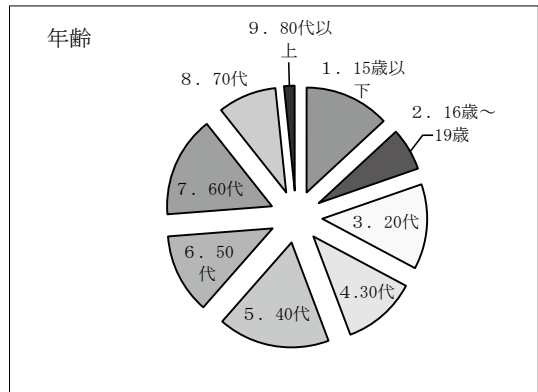
お住まい	回答数	
1. 佐倉市	13	10%
2. 千葉県(佐倉市以外)	53	42%
3. 東京都	28	22%
4. 神奈川県	16	13%
5. 埼玉県	7	6%
6. 茨城県	1	1%
7. その他	7	6%
合計	125	100%

お住まい(千葉県)	回答数	
1. 佐倉市	13	20%
2. 船橋市	8	12%
3. 柏市	6	9%
4. 千葉市	5	8%
5. 八千代市	5	8%
6. 八街市	4	6%
7. 記載なし	4	6%
8. 市原市	3	5%
9. 鎌ヶ谷市	3	5%
10. 習志野市	2	3%
11. 成田市	2	3%
12. 四街道市	2	3%
13. 香取市	2	3%
14. 市川市	1	2%
15. 印西市	1	2%
16. 大多喜町	1	2%
17. 酒々井町	1	2%
18. 白井市	1	2%
19. 流山市	1	2%
20. 山武市	1	2%
合計	66	100%

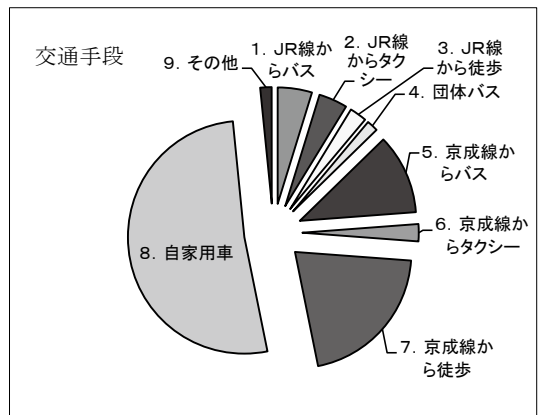


企画展示「侯爵家のアルバム」アンケート集計結果

年齢	回答数	122
1. 15歳以下	16	13%
2. 16歳～19歳	8	7%
3. 20代	16	13%
4. 30代	14	11%
5. 40代	21	17%
6. 50代	15	12%
7. 60代	19	16%
8. 70代	11	9%
9. 80代以上	2	2%
合計	122	100%



交通手段	回答数	126
1. JR線からバス	6	5%
2. JR線からタクシー	5	4%
3. JR線から徒歩	3	2%
4. 団体バス	2	2%
5. 京成線からバス	14	11%
6. 京成線からタクシー	3	2%
7. 京成線から徒歩	26	21%
8. 自家用車	65	52%
9. その他	2	2%
合計	126	100%



平成23年度企画展示

「紅板締め—江戸から明治のランジェリー—」

開催要項

1. 主催 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
2. 会期 平成23年7月26日（火）～9月4日（日） [開催日数：41日間]
3. 会場 国立歴史民俗博物館 企画展示室A・B
4. 料金 特別展料金
(人間文化研究機構国立歴史民俗博物館及び国立民族学博物館観覧規程による)

5. 展示趣旨

江戸時代後期から明治時代にかけて隆盛した「紅板締め」についての展示である。

紅板締めは型板（模様を彫刻した版木）に生地を挟んで染めあげる染色技法であり、京都が主たる生産地であった。その製品は、襦袢・裾除け・胴着・下着といった女性の内に着る服飾に多用された。技法には不明な点が多く、そのため幻の染色とも言われている。

紅板締めが隆盛した時期は、西洋からの技術の導入あるいは製品の輸入によって、染織の技術やデザインが飛躍的に変化していった時期にあたる。紅板締めはその変化に対処しきれず、ついには大正期に生産を終えた。

国立歴史民俗博物館は、2005年度に京都の高野染工場（現在廃業、かつての屋号は紅宇）より、2万枚を超える型板をはじめ、型紙・模様見本帳・締具など、膨大な数の紅板締めの道具類の寄贈を受けた。紅宇は、京都で大正期まで紅板締め業を続けていた最後の2軒のうちの1軒である。

紅宇伝来の道具類の整理および研究を通じて、技法について新たに解明できたことがある。展示ではその成果を盛り込みつつ、制作の工程を示し、技法の謎を考察していく。また、近代化していく中で、紅板締めで試みられた工夫についても併せて示す。

6. 展示構成案

- (1) 「紅宇」高野家
- (2) 染色技術
原理／生地の種類／型板の形式／量産技術としての性格／各種の染色法
- (3) 型板制作
型紙と型板の制作手順／彫刻師
- (4) 模様の工夫
側面彫刻／摺技法の併用／彩色の併用／紅以外の色
- (5) 時代と模様
記年銘／面白柄
- (6) 歴史と美

7. 主な展示資料

<館蔵資料>

紅字伝来の紅板締め関係資料、紅板絞めの製品、錦絵

<借用資料>

締枠一式（京都市産業技術研究所蔵）、彫刻刀（個人蔵）、制作途中の型板（個人蔵）、紅板絞めの製品（個人蔵）

8. 関連イベント

(1) 歴博講演会

平成23年8月13日（土） 澤田和人「「紅字」伝来の紅板締め資料」

(2) ギャラリー・トーク

開催期間中の毎週土曜日 計6日（予定）

9. 印刷物

(1) ポスター

(2) チラシ

(3) 展示図録

(4) 展示解説シート

10. 展示プロジェクト

<館内委員>

◎澤田 和人（国立歴史民俗博物館 情報資料研究系 准教授）

○大久保純一（国立歴史民俗博物館 情報資料研究系 教授）

<館外部委員>

新井 正直（群馬県繊維工業試験場 主任研究員）

藤井 健三（財団法人西陣織物館 顧問）

（◎：代表 ○：副代表）

企画展示 終了報告書

提出日：平成23年10月4日（火）

区 分	企画展示	代表者	澤田 和人
展示名称	紅板締め－江戸から明治のランジェリー－		
期 間	平成23年7月26日(火)～9月4日(日)		
会 場	企画展示室A・B		
図 録	有	作成部数	2,100部
会期中入館者数	23,949人	企画展示入場者数	14,332人
展示プロジェクト（◎：代表 ○：副代表）			
＜館外＞	新井 正直（群馬県繊維工業試験場 主任研究員）		
	藤井 健三（財団法人西陣織物館 顧問）		
＜館内＞	◎澤田 和人（情報資料研究系 准教授）		
	○大久保純一（情報資料研究系 教授）		
展示概要			
<p>当館は、2005年度に京都の高野染工場（現在廃業、かつての屋号は紅宇）より、2万枚を超える型板をはじめ、型紙・下絵・模様見本・縮具など、膨大な数の紅板締めの道具類の寄贈を受けた。その道具類は、第一級資料として、かねてから研究者の間で高く評価されてきたが、あまりにも数が多く、全貌については明らかではなかった。当館では、寄贈された資料の整理を続けてきたが、ようやく作業が完了し、全容を把握するに至った。このたびの展示は、それを機に、一般への初お披露目として企画したものである。</p> <p>展示は、第1章：「紅宇」高野家、第2章：染色技術、第3章：型板制作、第4章：模様の工夫、第5章：時代と模様、第6章：美の諸相、6つのコーナーで構成し、未だ謎の多い制作工程について考察しつつ、従来展示というかたちでスポットがあてられることがなかった女性の下着文化の一端についても紹介することを試みた。</p>			
全体的な反省・感想			
<p>制作工程や技術についての紹介が主たる展示となり、歴史的な流れや位置づけ、下着に関する文化史側面については、不足していたことは否めない。しかし、展示プロジェクトで目指した、資料に密着し、資料のもつ特性や価値についてを来館者に知ってもらおうとする目的は、達せられたかと考える。</p> <p>アンケートを見る限り、来館者の満足度は高かった。通常よりも短い会期であったにもかかわらず、図録が完売したことにも、それがあらわれているものと思う。</p> <p>キャプション等の文字が読めないという苦情もなく、また、会場のデザインが良かったという意見も寄せられた。企画展示係に十分なノウハウが蓄積されているおかげである。</p> <p>体験コーナーでは、佐藤助教と太田専門職員の発案と尽力により、紙での襦袢づくりを行った。参加者には子どもだけでなく、大人も非常に多かった。大変好評で、体験コーナーを目的に来館された人もいたほどである。充実した体験コーナーを設けることの重要性を実感したが、現状では人員的・予算的に厳しく、その点の改善が望まれる。</p> <p>また、千葉工業大学のコミュニケーションデザインの演習の一環として、素材を提供し、学生によるデジタルコンテンツを設置したが、おおむね好評を得た。授業の進捗とタイミングを合わせることは難しいところもあるが、連携・協業の一つの形として、一層の展開をしていく余地が大いにあると感じた。</p> <p>チラシについては、『1枚で伝えるデザイナー－情報満載の街中チラシ特集』（ピエブックス、10月刊行）に収録される予定であり、人目を引いた。</p>			

平成23年度企画展示
「紅板締め－江戸から明治のランジェリー－」
実績報告

管理部博物館事業課

1 開催の概要

(1) 開催期間・入場者数・図録配布及び販売

①開催期間 平成23年7月26日(火)～9月4日(日) 【開催日数37日】

②入場者数

総入場者数	23,949人(本館)
企画展示入場者数	14,332人
うち有料	5,767人
無料	8,587人
一日平均入場者数	388人(企画展示観覧率 60%)

③-1 展示図録〔無償分〕配布(平成23年9月5日現在)

作成部数	2,100部
配布済み部数	1,728部
残部数	372部

③-2 展示図録〔有償分〕販売(平成23年9月4日現在)

作成部数	500部
販売済み部数	500部
残部数	0部

2 主要経費

(1) 経費(企画展示経費)

役務契約費(会場取設、図録等)	15,246,876円
旅費(撮影、集荷返却等)	152,070円
備品消耗品費(消耗品等)	410,140円
謝金(執筆謝礼)	37,950円
	<hr/>
	15,847,036円

(企画展示等広報普及費・広報資料作成費を除く)

(2) 展示会場

別記 展示会場レイアウト略図

3 関連事業の結果

(1) 歴博講演会

ア 期 日	平成23年8月13日(土)
イ 演 題	第332回「『紅宇』伝来の紅板締め資料」
ウ 会 場	当館講堂
エ 講 師	澤田和人(研究部情報資料研究系准教授)
オ 参加者	181人

(2) ギャラリートーク

ア 実施回数	3回
イ 講 師	澤田和人(研究部情報資料研究系准教授)
ウ 参加者	92人(延べ人数)

(3) 体験コーナー(じゅばん作り)

ア 期 日	平成23年8月6日(土)、7日(日)、12日(金)、13日(土)、14日(日)
イ 参加者数	515人(延べ人数)

4 広報活動

(1) 広報資料作成及び配布

・ポスター B2判	2,600枚
・ポスター B3判(車内広告)	1,700枚
・チラシ A4判	200,000枚

ポスター(B2版)は博物館、各県の教育委員会等に配布し、ポスター(B2・B3版)は京成線各駅、京成線車内及びちばグリーンバス車内に掲出した。

チラシ(A4版)は前述の博物館、教育委員会のほか、近隣市町村の広報課、図書館、公民館等に配布した。JR佐倉駅・京成佐倉駅及び佐倉市観光協会ほかにポスター(B2版)の掲出、チラシの配布を実施した。

このほか、従来送付しているマスコミ及び近隣の公共機関等のほか、佐倉市・成田市・酒々井町への自治会回覧向けのチラシの配布を行った。さらに、染織・服飾関係専門誌、情報誌、資料寄贈者の地元マスコミ(京都市)に対し記事掲載依頼を行った。

(2) 記者発表及び記事掲載

①記者発表

企画展示開催前に本展示に対する周知と開催意義を高めることを目的として、平成23年7月13日(水)に東京ガーデンパレス(東京都文京区)において、展示概要に関する記者発表を行った。

②記事掲載(主なもの)

・雑誌	ぐるっと千葉7~9月号、週刊芸術新聞(7月28日・8月11日)
・専門誌	染織文庫423号、染織新報(7月26日)、レディブティック9月号、婦人公論9月7日号

・新聞 毎日新聞（８月１０日）、朝日新聞（７月２１日・８月２４日）、読売新聞（８月３１日）、千葉日報（７月２８日・８月４日）、日本経済新聞（８月２５日）

・放送 NHKFM（８月５日）

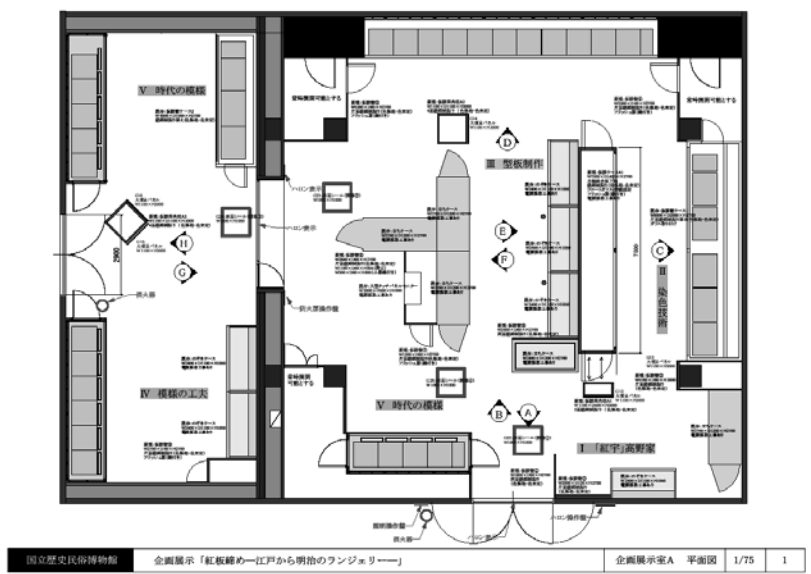
(3) ホームページ

①展示紹介

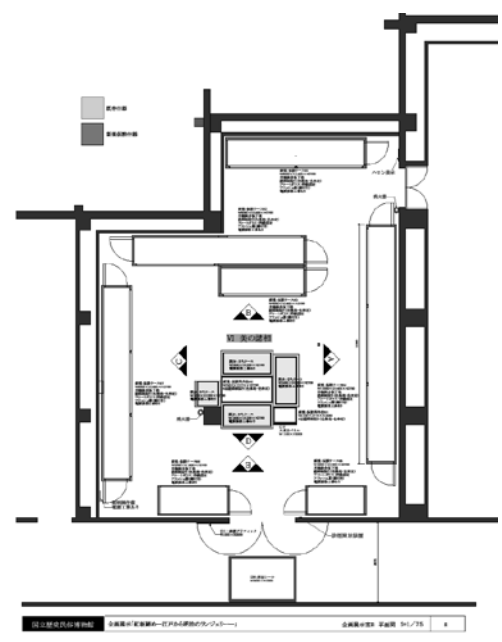
②プレスリリース

別記 展示会場レイアウト略図

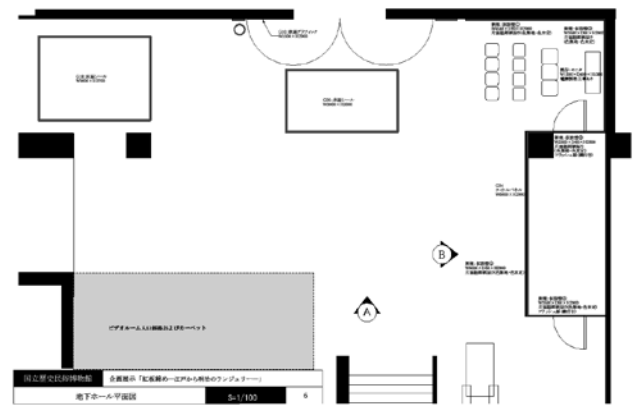
(企画展示A室)



(企画展示B室)



(地下ゾーン)



企画展示「紅板締め」アンケート集計結果

開催期間 平成23年 7月26日～
平成23年 9月 4日

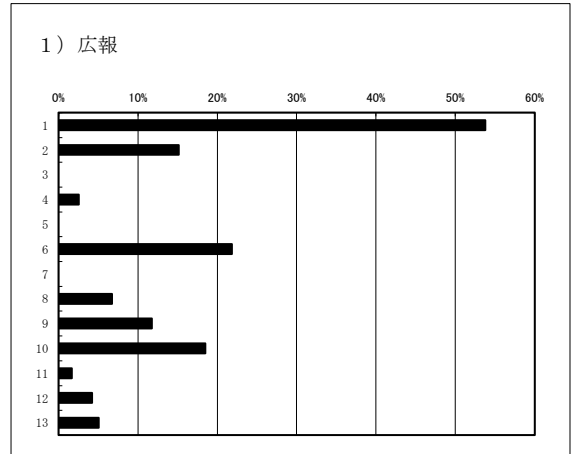
n= 120

一部未回答・複数回答あり

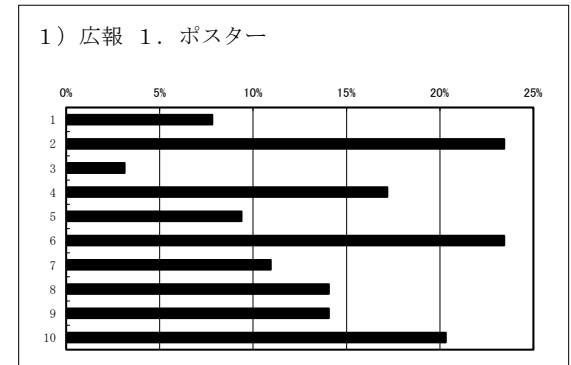
回収数	120
企画展示入場者数	14,354
回収率	0.8%

1) この「紅板締め」展を何でお知りになりましたか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

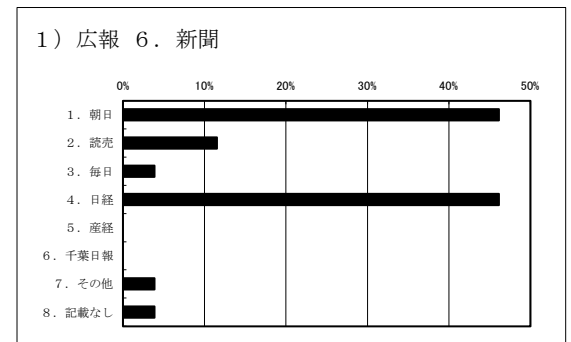
	回答数	119	
1. ポスター	1	64	54%
2. チラシ	2	18	15%
3. ケーブルテレビ	3	0	0%
4. テレビ	4	3	3%
5. ラジオ	5	0	0%
6. 新聞	6	26	22%
7. 雑誌	7	0	0%
8. 歴博に来てから	8	8	7%
9. ホームページ	9	14	12%
10. 人に聞いて	10	22	18%
11. メールマガジン	11	2	2%
12. 広報誌「歴博」	12	5	4%
12. その他	13	6	5%
合計	168	141%	



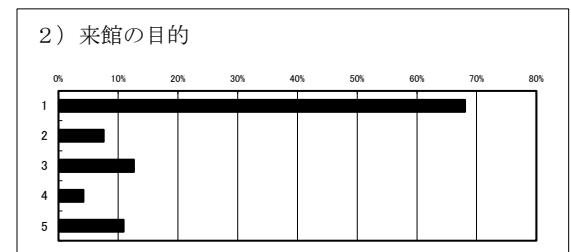
	回答数	64	
1. ポスター	1	5	8%
1. 駅 (JR)	2	15	23%
3. 電車内 (JR)	3	2	3%
4. 電車内 (京成)	4	11	17%
5. 図書館	5	6	9%
6. 博物館	6	15	23%
7. 美術館	7	7	11%
8. 公民館	8	9	14%
9. 学校	9	9	14%
10. その他	10	13	20%
合計	92	144%	



	回答数	26	
1. 朝日	12	46%	
2. 読売	3	12%	
3. 毎日	1	4%	
4. 日経	12	46%	
5. 産経	0	0%	
6. 千葉日報	0	0%	
7. その他	1	4%	
8. 記載なし	1	4%	
合計	30	115%	



	回答数	14	
1. 歴博	7	50%	
2. その他	1	7%	
3. 記載なし	6	43%	
合計	14	100%	



2) 今日、来館された目的は何ですか。

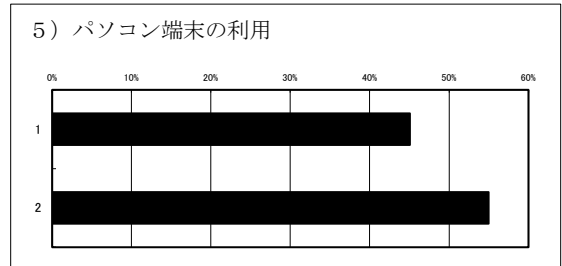
	回答数	119	
1. 「紅板締め」展をみるため	1	81	68%
2. 総合展示をみるため	2	9	8%
3. 総合展示と「紅板締め」展をみるため	3	15	13%
4. 遠足	4	5	4%
5. その他	5	13	11%
合計	123	103%	

企画展示「紅板締め」アンケート集計結果

5) 展示室内にあるパソコン端末「紅板締め説明のための映像（千葉工業大学工学部デザイン科学科制作）」についておたずねします。

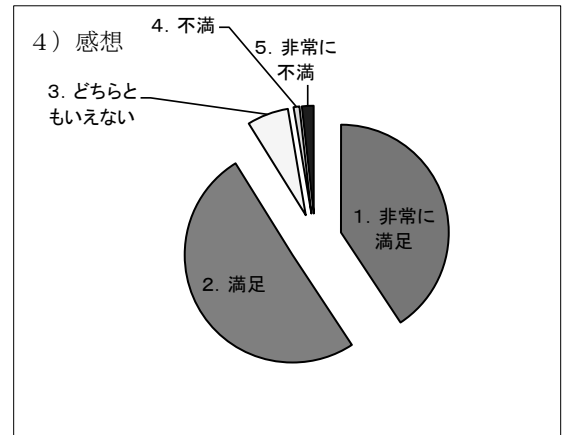
①パソコン端末を利用しましたか。

	回答数	
1. はい	50	45%
2. いいえ	61	55%
合計	111	100%



4) 「紅板締め」展の全体的な感想はいかがでしたか。

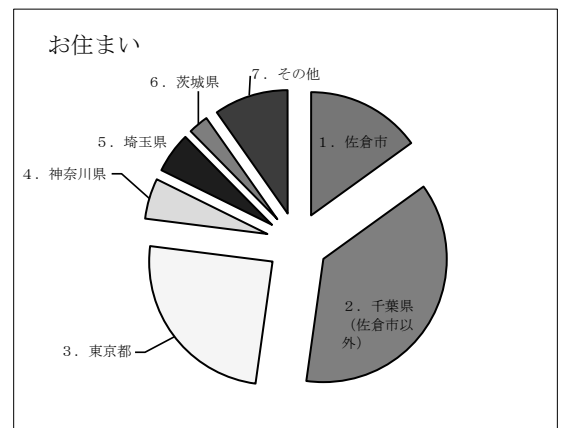
	回答数	
1. 非常に満足	46	41%
2. 満足	57	50%
3. どちらともいえない	7	6%
4. 不満	1	1%
5. 非常に不満	2	2%
合計	113	100%



6) ご自身のことを教えてください。

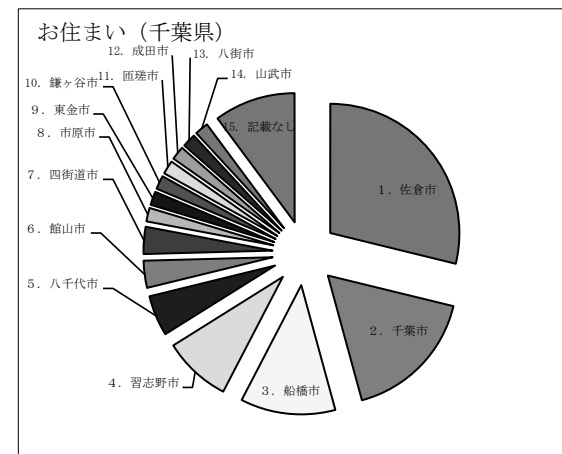
性別	回答数	
1. 男性	37	32%
2. 女性	77	68%
合計	114	100%

歴博来館回数	回答数	
1. 初めて	42	39%
2. 2回目以上	65	61%
合計	107	100%



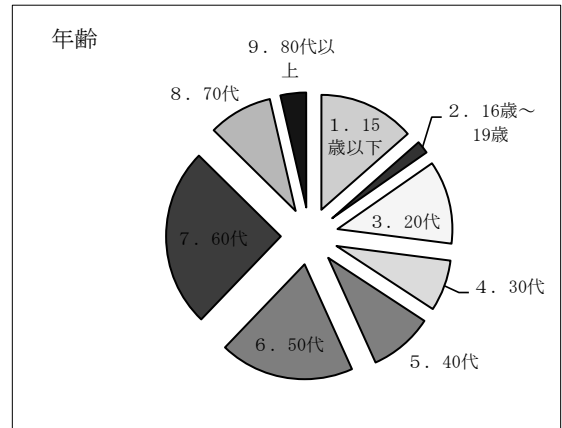
お住まい	回答数	
1. 佐倉市	17	15%
2. 千葉県(佐倉市以外)	42	37%
3. 東京都	28	25%
4. 神奈川県	6	5%
5. 埼玉県	6	5%
6. 茨城県	3	3%
7. その他	11	10%
合計	113	100%

お住まい(千葉県)	回答数	
1. 佐倉市	17	29%
2. 千葉市	10	17%
3. 船橋市	7	12%
4. 習志野市	5	8%
5. 八千代市	3	5%
6. 館山市	2	3%
7. 四街道市	2	3%
8. 市原市	1	2%
9. 東金市	1	2%
10. 鎌ヶ谷市	1	2%
11. 匝瑳市	1	2%
12. 成田市	1	2%
13. 八街市	1	2%
14. 山武市	1	2%
15. 記載なし	6	10%
合計	59	100%

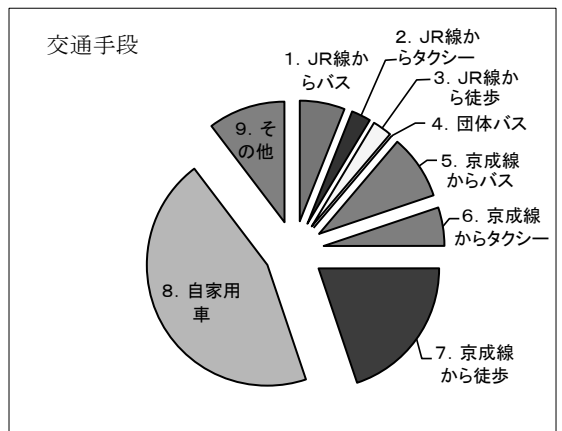


企画展示「紅板締め」アンケート集計結果

年齢	回答数	111
1. 15歳以下	15	14%
2. 16歳～19歳	2	2%
3. 20代	13	12%
4. 30代	8	7%
5. 40代	10	9%
6. 50代	21	19%
7. 60代	28	25%
8. 70代	10	9%
9. 80代以上	4	4%
合計	111	100%



交通手段	回答数	116
1. JR線からバス	7	6%
2. JR線からタクシー	3	3%
3. JR線から徒歩	3	3%
4. 団体バス	0	0%
5. 京成線からバス	10	9%
6. 京成線からタクシー	6	5%
7. 京成線から徒歩	23	20%
8. 自家用車	52	45%
9. その他	12	10%
合計	116	100%



データベース作成・公開状況（平成16～22年度）

〔概要〕

歴博では、所蔵資料の情報を広く公開し研究利用に資することを目的とした館蔵資料データベース、共同研究等による調査研究の成果や諸研究分野の文献目録をまとめたデータベース、並びに記録類を中心とした全文データベースを公開している。

【16年度】

資料群毎に詳細な情報を収録した館蔵資料詳細データベースである館蔵近世・近代古文書、館蔵武器武具、館蔵紀州徳川家伝来楽器の各データベースと、文献資料に記された様々な物の価格を収録した古代・中世都市生活史（物価）データベースを新規に公開した。また、館蔵資料、自由民権運動研究文献目録、日本民俗学文献目録のデータベースの更新を行った。

〔新規データベース〕

(1) 古代・中世都市生活史（物価）データベース

（担当者 小島道裕・仁藤敦史）

1. 目的

日本の古代・中世における都市生活、具体的にはどのような消費が行われたかを検討するために、おおむね8世紀から16世紀の価格関係の史料を抽出した。

2. 経過

基幹研究「日本における都市生活史の研究」A班（古代・中世）第2期「古代・中世における流通・消費とその場（1999～2001年度）」（代表者 桜井英治）による研究の一環として作成した。同研究の報告書『国立歴史民俗博物館研究報告』113集（2004年3月）、特に作成にあたっての詳細を記した中村太一「古代・中世都市生活史データベースの構築」を参照されたい。

3. 成果

中世の物価表としては、京都大学近世物価史研究会『15～17世紀における物価変動の研究』（1962年）が有名だが、これを補う意味で、14世紀以前の史料と東国の史料を比較的多く取り上げた。また、都市生活史という観点から、物の値段だけではなく、労賃などの提供されたサービスの値段も対象とした。品名については、史料に現れる品名だけでは不便なため、「大分類」「小分類」の項目を設けて、キーワードで検索できるようにした。

これによって、消費品目や物価など、生活史研究における基礎的なデータを豊富に提供し、多様な目的での検索が行えるようになった（データ数37,253件）。

(2) 館蔵近世・近代古文書データベース

（担当者 岩淵令治・久留島 浩・山本光正）

1. 目的

当館は大学の共同利用機関として、また博物館として、歴史資・史料の収集につとめるとともに、これらを公開していく義務を有している。館蔵の近世・近代古文書については、漸次整理をした後、台帳に登録を行い、館蔵資料データベースによって情報を公開している。本データベースでは、対象を近世・近代古文書に絞り、新たな項目を設け、より情報を増やすことによって、詳細な検索を可能にすることを目的とする。

2. 経過

館蔵の近世・近代古文書の点数は厩大にのぼるため、文書群ごとに作業を区切って公開していくこととした。平成10年より制作に着手し、本年度は水木家資料(約2,700件)について入力を完了し、公開した。今後、整理が終了した大規模な資料群について、データを作成し、更新していく予定である。

3. 成果

文書の作成者・受取者等の記載をもりこみ、年代順のソートや、表題・作成者・受取者のキーワード検索がより簡便に行えるようになった。

(3) 館蔵武器武具データベース

(担当者 宇田川武久)

1. 目的

本館が所蔵する武器武具資料(実物資料および文献史料)に、分類などの諸情報を加え既存の館蔵資料データベースとの別の視点に立った詳細な情報を提供する。関連する実物と文献を相互連携して表示可能なものとしている。資料明細画像は同一画面で一覧できるようにして、資料の全体を示すことを目的としている。

2. 経過

平成14年以来、館蔵資料の調査を行い、それに並行して資料撮影、明細の入力を行い、集積した諸データの整理と画像処理・編集の作業を行ってきた。

3. 成果

平成16年度に「館蔵武器武具資料データベース」として公開(資料点数494点)今後、順次、データを追加して完成を目指す。

(4) 館蔵紀州徳川家伝来楽器データベース

(担当者 日高 薫)

1. 目的

歴博が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクションは、主として紀州藩の第十代藩主徳川治宝(とくがわはるとみ・1770-1852)によって蒐集されたものと伝えられ、日本を代表する古楽器コレクションとして貴重である。

総数157件を数えるコレクションは、雅楽器を中心に、吹きもの(管楽器)・弾きもの(絃楽器)・打ちもの(打楽器)など各種の楽器や、楽譜その他の付属品、付属文書から構成されており、なかには在銘のものや、珍しい楽器、中国の楽器も含まれる。本データベースは、これらの楽器と付属品・付属文書にかかわ

る詳細な情報を提供し、各部位の図版の閲覧を可能とすることにより、楽器史・音楽史の研究者のみならず、美術工芸史・文化史の研究者、また一般の閲覧者の利用に供するものである。

2. 経 過

データベースの記述は、平成15年度に刊行された『国立歴史民俗博物館資料図録3 紀州徳川家伝来楽器コレクション』に基づき、資料番号、資料名、楽器種、時代、作者、銘文、銘文著者、下絵等筆者、数量、法量、品質・形状および加飾、伝来、修復歴、付属品、付属文書などの項目によって、各々の資料の概要をつかめるようにした。また、図録に掲載した付属文書の翻刻も、文書の項目から参照できるようにしている。データベースとして、さまざまな項目を検索するというより、利用者が画面上で容易にコレクションを一覧したいという場合を想定して作成した。

3. 成 果

すでに刊行している図録は非売品であり、手軽に入手することが困難であるが、本データベースの内容は、図録の内容をほとんど含んでいるため、利用価値は高いであろう。当該資料の文化史的価値を幅広く活用できるように、楽器本体のみならず、付属資料の情報も参照可能としたところに特徴がある。

【17年度】

資料群毎に詳細な情報を収録した館蔵資料詳細データベースである館蔵錦絵データベースと、著書・論文や文献資料より書誌や人物の情報を収集した宮座研究論文、地域蘭学者門人帳人名、江戸商人・職人の各データベースを新規に公開した。また、館蔵資料、自由民権運動研究文献目録のデータベースの更新を行った。

[新規データベース]

(1) 館蔵錦絵データベース

(担当者 大久保純一・安達文夫・松尾恒一・宮地正人)

1. 目 的

錦絵を中心とする浮世絵版画は、江戸時代後期から明治にかけての都市の風俗・景観・庶民意識などが豊富に盛り込まれており、美術史のみならず、風俗史、社会史、文化史などの諸分野において研究資料として注目されている。本館には中核となる「錦絵コレクション」をはじめとして約4,000件の錦絵が所蔵されており、このデータを画像とともに公開することは関連諸分野の研究者に貴重な研究素材を提供することになる。「館蔵錦絵データベース」では、館蔵錦絵の画像に、できるだけ詳しい書誌情報と詳細な分類を付与することにより、広く研究資料として活用を供することを目的としている。

2. 経 過

前年度に「詳細書誌目録付き錦絵画像データベース」として日本学術振興会の研究費補助金の研究成果公開促進費（研究成果データベース）の交付を受けて事業に着手した。17年度もこのデータベース名で引き続き研究成果公開促進費の交付を受け、館蔵錦絵のデータ採取、写真撮影とそのデジタル化を進めてきた。なお、17年度までに公開した錦絵件数は館蔵錦絵の約30パーセントであるため、今後さらに数年にわたる事業が必要となる。

3. 成 果

「錦絵コレクション」(H-22)を、資料番号の若い順にデータ採取をおこなっており、本年度は前年度終了分の703件に続けて、H-22-1-6-1からH-22-1-22-43までの584件のデータを公開した。本データベースの存在は、30項目(内4項目は欧文)という国内最多級の採録データ項目数とその精度によって研究者を中心に徐々に知られるようになってきている。ウェブ上でも錦絵に関する国内の主要なデータベースとして、国会図書館、東京大学史料編纂所などとともに紹介されるようになってきている。

(2) 地域蘭学者門人帳人名データベース

(担当者 岩淵令治・久留島 浩・山本光正)

1. 目 的

本データベースは、近世蘭学者が記載されている門人帳から、人名・出身地・師匠等の記載すべてをデータ化し、公開するものである。すでに公刊された同種の活字本としては武内博編著『日本洋学人名事典』(柏書房)があるが、1,050人を記載するにとどまっている。本データベースによって、地域蘭学の全体像が見えてくるとともに、近世地域文化の一端を描き出すことができ、蘭学研究者のみならず、市史編纂や近世史研究・文化史研究に寄与することが可能である。

2. 経 過

本データベースは、本館共同研究「地域蘭学の総合的研究」(代表青木歳幸1999～2001年度)の研究成果であり、門人帳の選択や校正作業は、同共同研究の共同研究員が担当し、平成12年度より入力を開始した。なお、出典とした各門人帳の概要については、共同研究の報告書『国立歴史民俗博物館研究報告』第116集 地域蘭学の総合的研究(2004年)掲載の「地域蘭学者門人帳データベースについて」を参照されたい(ただし、資料の性格を検討した結果、掲載をとりやめたものもある)。

3. 成 果

のべ9,351人の門人を収録することができ、蘭学関係者のデータベースとしては最大規模のものとなった。そして、典拠を門人帳という一次史料に限定することで精度を高め、さらに記載方法の異なる門人帳のデータのすべてを統一的な書式で入力することによって、横断的な検索が可能となった。また、作成にあたっては、現在の都道府県名の項目を設定するなど、検索の便も図った。

(3) 宮座研究論文データベース

(研究代表者 上野和夫)

1. 目 的

このデータベースは、昭和初期から開始された「宮座」に関する論文・報告を網羅した初めての本格的なデータベースである。「宮座」は当屋制を原理とする神社祭祀組織であるが、宮座についてはこれまで、歴史学、人類学、民俗学、宗教学、社会学をはじめとして広範な分野で研究が進み、調査報告・論文の数は膨大である。しかしながら、これまで宮座関係論文を網羅し、多角的に検索しうるデータベースは構築されることがなく、せいぜい各専門分野ごとの文献目録にとどまっていた。この「宮座研究論文データベース」は、各分野の宮座研究を網羅し、著者、刊行年、対象地域、論文タイトル、雑誌名などから多角的検索できるよ

うに作られたデータベースである。

2. 経 過

このデータベースは共同研究「宮座と社会：その歴史と構造」（2003 - 2005 年度）および科学研究費補助金による基盤研究（A）「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」（2003 - 2005 年度）の成果の一部である。このデータベースははじめ、共同研究員・森本一彦氏によって作成され、共同研究のメンバーによるデータの追加をへて、2004 年度に完成した。その後、国立歴史民俗博物館の公開データベースとして公開する準備を進め、2006 年4 月に公開したものである。

なお、このデータベースの構築に先立って、2004 年3 月に、森本一彦編『宮座文献目録2003 年度版』（科学研究費補助金・基盤研究A「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」調査報告書1）として刊行した。

3. 成 果

最近の宮座研究の停滞の一因は、膨大な研究を効率的に検索できるデータベースの欠如にあったが、このデータベースによってこの問題は解消したといえる。また、このデータベースは、宮座研究史の追跡と考察にも有力な材料を提供し得る。各分野のわたる総合的な宮座研究史の検討は、これまで試みられていないが、このデータベースによって、その可能性が与えられたと考えられる。これらの意味において、このデータベースは、宮座研究の今後の新たな展開に寄与すると確信する。

(4) 江戸商人・職人データベース

(担当者 岩淵令治・久留島 浩・山本光正)

1. 目 的

江戸の商人・職人の人名索引については、活字の索引「江戸商人名前一覧」（『三井文庫論叢』第6 号、1972 年）が存在する。しかし、同書の機能は、商人名から、記載のある史料を確認することに限られている。本データベースでは、近世都市江戸の商人・職人の名鑑や株帳等から、居所、職業、所持株等のすべての情報を抽出し、横断的な検索を可能にすることを目的とした。

2. 経 過

平成10 年度より入力を始め、本年度に文政7（1824）年に刊行された「江戸買物独案内」（当館蔵約 3000 件）を公開した。以後、「諸問屋名前帳」（国立国会図書館所蔵 約3 万件）、「両替地名録」（当館蔵）等を順次公開していくことを計画している。

3. 成 果

本データベースでは、それぞれの商人についてすべての情報を盛り込み、さらに町名、職種等からの検索も行えるようにした。また、地名については現在の東京23 区の項目を、商人名については屋号・名を分割して項目を設けた。こうした項目を設定することによって、より検索の便を図ることができた。近世の経済史、都市史のみならず、国文学、考古学の研究者、さらに研究者以外の方からの利用も想定される。なお、職種については記載されたものをそのまま小分類としているが、今後大分類を設けて、より検索の便を図ってきたい。

【18年度】

新規に中世制札データベース，館蔵懷溜諸屑データベース，日本民謡データベースを公開した。また，館蔵資料，自由民権運動研究文献目録，日本民俗学文献目録のデータベースの更新を行った。

[新規データベース]

(1) 日本民謡データベース

(担当者 内田順子)

1. 目的

本データベースは，昭和54（1979）年度から平成元（1989）年度まで，文化庁による国庫補助事業として全国の都道府県で行われた「民謡緊急調査」の成果の一つである『民謡緊急調査報告書』を基本としている。各都道府県の報告書の様式は極めて多様で，調査項目の数量，内容の選択なども自由な形をとっている。このような報告書の性格を考慮し，本データベースは各報告書に盛られた情報を最大限収めることができるように項目を選定し，およそ10年間にわたる全国的な民謡調査のデータを横断的に検索できることを目指したものである。

2. 経過

本データベースは，「民謡の分類法とそのデータベース化に関する総合的研究」（科学研究費補助金（総合研究A）昭和62～63年度 研究代表者・小島美子）によって行われた基礎的研究の成果と，「科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）」（平成3～5年度 日本民謡データベース作成委員会 委員長・小島美子）の成果を活用し，作成，整理，公開されるものである。本年度は，東日本について公開を行い，西日本のデータについては，順次，追加していく。

3. 成果

各都道府県がまとめた『民謡緊急調査報告書』を横断的に閲覧できる図書館等はなく，本データベースによって，昭和の終わりのおよそ10年間の民謡調査のデータが地域横断的に閲覧できるようになり，民謡の比較研究などに役立てられることが見込まれる。

(2) 館蔵錦絵データベース

(担当者 大久保純一・安達文夫・松尾恒一)

1. 目的

本館が所蔵する約4000点（現在も収集継続中）の錦絵コレクションを，画像とともに詳細な書誌情報，内容の分類と特記すべきモチーフの抽出などのテキストデータを付与（一部データは欧文化）し，館内外の研究や展示などに多角的かつ中核的に利用される資源として，その活用度を飛躍的に高めることを目的とする。

2. 経過

平成16，17年度に日本学術振興会の研究成果公開促進費（データベース）の補助金も得て約1200点の錦絵のデータを公開。本年度は館の経費によって約400点のデータの追加を見込んだ。

3. 成 果

約400 点の画像およびテキストデータを作成し、本館ホームページ上にアップすることを待つ状態。テキストデータの検索情報はすでに館内の一部教員に提供され、企画展示の展示計画作成や、個人研究、あるいは館の広報活動に活用されている。

(3) 落合計策縄文時代遺物コレクション

(担当者 小林謙一・西本豊弘)

1. 目 的

縄文土器、石器のデータベースとして、写真画像・実測図を付け、かつ時期や種類から検索できるものをつくる。

2. 経 過

情報については、遺跡・所在は2235 点については既に入力済みなので、残りのデータを完成させた。あわせて、法量・時代・器種などのデータを入力し、画像・写真データを整理した。次年度に環境が整えば公開可能と見こまれる。

3. 成 果

テキストデータは2734 点（縄文・続縄文の土器・土製品1000、石器・石製品1734 点）を入力した。写真427 件、実測図87 枚についてはスキャニングしてデータベースにリンクさせ、デジタル化することができた。文字情報による情報データベースにリンクさせ、文字だけでは情報に制限がある土器・石器・土偶・土製品などの画像をみることができるようになり、縄文時代研究者に有意義なデータベースとすることが可能と考える。

【19年度】

資料群毎に詳細な情報を収録した館蔵資料詳細データベースである館蔵野村正治郎衣裳コレクション、館蔵染色用型紙、館蔵装身具、館蔵縄文時代遺物のデータベースと、調査・研究の成果を集成した中世地方都市、東国板碑のデータベースを新規に公開した。また、館蔵資料、館蔵近世・近代古文書、館蔵武器武具、日本民俗学文献目録、自由民権運動研究文献目録のデータベースの更新を行った。

[新規データベース]

(1) 館蔵縄文時代遺物データベース

(担当者 小林謙一・西本豊弘・阿部義平)

1. 目 的

当館では、落合計策縄文コレクション・亀ヶ岡遺跡出土品など、著名な縄文資料コレクションを収集・保有しており、さらにその数を増しつつある。中には、愛媛県上黒岩遺跡草創期隆線紋土器から、晩期亀ヶ岡遺跡大洞土器まで縄文時代全般にわたる資料が含まれている。また、縄文中期柳田遺跡勝坂式土器や宮田遺跡子抱き土偶など、著名な資料も多い。すでに当館にて整理し、報告やデータベースを提供しているものも

あるが、その数は全体の1割程度である。将来的には、すべて学界共有の財産とすべく図録や詳細なデータベースを作成し、共同研究資料として提供など役立てていくべきであるが、数が膨大であるためすぐには着手できない。遺跡名・所在・資料種類・時代の簡単なデータのみでもあれば、その後に改めて様々な研究に供することができる。まずは概覧できる基礎データベースとして整理し公開していく必要がある。

2. 経 過

落合計策縄文コレクションについては既に図録が刊行されていたが、今年度にデータベースとして完成し、公開することができた。さらにその他のコレクションについて、遺跡名・資料名・時期など基礎的なデータを整理しつつある。

3. 成 果

今年度は、落合計策縄文コレクションのデータベースを完成させ、館内試行を行い、問題点を解決して、公開した。その他のコレクションについては、資料受け入れ時のデータを整理し、語句の統一や資料との照合など、基礎的な情報について精査している。また、資料共有化にも対応するため、時期の暦年代への対比や、遺跡の所在地の国土座標化を進めた。

(2) 館蔵染色用型紙データベース

(担当者 澤田和人)

1. 目 的

本データベースは、本館が所蔵する4000点を超す染色用型紙の詳細な書誌的情報を提供するものである。通常の画像に加えて赤外線画像も添付し、肉眼では見えない情報を引き出すことを可能にした。様々な分野の研究に広く資することを目指し、なおかつ利便性を図った検索項目を設定してある。

2. 経 過

人間文化研究機構資源共有化事業の一端として、2005年度以来作成してきたものでもある。本年度は、伝来の経緯から4群に分かれる染色用型紙のうち、第1群(大黒屋型)を全て公開した。第2群以降は順次追加していく。

3. 成 果

型紙の中でも大黒屋型は最も高く評価されているものであり、本館が所蔵する大黒屋型の全体像の公開は、研究者の間で待たれていた。赤外線画像も添付しているため、研究の進展に貢献できるものとする。

(3) 館蔵装身具データベース

(担当者 日高 薫)

1. 目 的

江戸時代から明治時代を中心とする髪飾具(櫛・かんざし・笄)・袋物(たばこ入れ・紙入れ・箱迫・守袋)・印籠など、館蔵装身具のデータを画像付で公開するもので、装身具の種別のほか、素材・技法、装飾モチーフからの検索を可能とした。

なお、本計画は、総合展示リニューアル第3室「「もの」からみる近世」（ミニ企画展示）のための研究を兼ねている。

2. 経 過

本データベースは、2006年度の間文化研究機構研究資源共有化事業により作成に着手し、続いて国立歴史民俗博物館のデータベース作成経費により一部のデータの作成を完了し、公開するものである

3. 成 果

館蔵装身具、総件数約1200件のうちとりあえず撮影画像があるもの約500件から公開し、その後順次公開・更新する予定である。

(4) 東国板碑データベース

(担当者 小野正敏)

1. 目 的

板碑は、考古学のモノ資料としてだけではなく、紀年銘をはじめ法名などの銘文が付され文字史料としての性格も併せ持つ。そのため文字に記された情報と遺跡＝土地がもつ情報とを具体的につなぐ重要な歴史資料となる。しかし、各地に多数残された板碑は、中世史の学際的な研究に不可欠な資料でありながら、その量の多さのために全体を悉皆的に利用することを難しくしてきた。

本データベースは、各地の考古学、板碑研究者の協力を得て、関東・東北・北海道に分布する約7万件の板碑に関して、個々の板碑情報、所在地（遺跡）情報、文献情報からなる情報を同一のフォーマットに集成することで研究の利便を図った。また、緯度経度による位置情報を併せ持たせたことで、将来は、既存の位置情報をもつデータベースとのリンクも可能となり、新たな歴史像を描くための基礎資料とする。

2. 経 過

本データベースの基礎となった資料は、本館が実施した考古学資料の情報集成的研究「東国・東北・北海道の板碑集成」によるものである。

1995、1996年度 埼玉、東京、茨城、神奈川、千葉、長野、山梨、群馬、栃木、新潟、福島の各県の板碑調査カード作成 1997年度 宮城、山形、秋田、岩手、青森、北海道の板碑調査カード作成。

3. 成 果

これまでの、主として地方自治体誌などが実施してきた自治体単位の板碑集成から進めて、関東から東北、北海道の広範囲に及ぶ地域の大量の板碑について、同じフォーマットで資料集成をすることで、全体をとおした利用が可能になった。また、所在地に緯度経度の位置情報を与えたことで、地図情報とリンクさせた利用や、さらに、既存の城館城下データベースや陶磁器出土遺跡データベースなどの位置情報をもつデータベースと統合させた利用を可能とした。より豊かな中世史像を再構成するための基礎資料となるものである。

(5) 館蔵野村正治郎衣裳コレクションデータベース

(担当者 澤田和人)

1. 目的

野村正治郎の衣裳コレクションのうち、本館が所蔵する資料について、画像とともに基礎情報を提供するものである。伝来に関する情報も付与しており、服飾史や染織史の研究のみならず、文化財学・博物館学的研究などにも幅広く寄与することを目指している。

2. 経過

人間文化研究機構資源共有化事業の一端として、2005年度以来作成してきたものでもある。本年度は、いくつかの種別に分かれる資料のうち、屏風貼装裂（小袖屏風）を公開した。その他の資料については順次追加していく。

3. 成果

資料相互の比較対照が可能となるよう検索項目を選定してある。また、目的とする資料の絞り込みが的確となることを追求したため、専門研究者をはじめ使用者の要求に応えられる利便性を備えており、有効に活用されることが見込まれる。

(6) 中世地方都市データベース

（担当者 小島道裕・高橋一樹・小野正敏）

1. 目的

日本中世に所在した地方都市について、その基礎的な所在データと、関係文献のデータを集成し、学界共有の情報とする。中世地方都市は、現代の都市とは所在状況が大きく異なっており、その網羅的な情報は、社会を歴史的に研究する上での重要な基礎データとなる。将来的には、緯度経度による位置情報によって、他のさまざまなデータとリンクさせることも可能である。

2. 経過

都市は、開館以来当館の基幹研究の一テーマとして位置づけられ、共同研究も重ねられてきた。特に、共同研究「中世都市の調査・分析方法に関する研究」（1994～95年度）においては、中世都市データベースの必要性や、そのフォーマットも検討されていた（『研究報告』第127集参照）。

実際の作業は、2006年度から、人間文化研究機構の資源共有化推進事業の一環として着手され、中世都市および関係文献の抽出・入力作業が開始された。2007年度は国立歴史民俗博物館のデータベース開発作成として進められ、公開を予定している。利用者からの情報提供も期待され、公開後も継続してデータの補充を図る予定である。

3. 成果

中世都市研究は、考古学的な情報の増加もあって、近年飛躍的に研究が発達した分野だが、情報や研究は個別都市に偏りがちで、全体を概観するための素材が無く、またどのような都市が存在したのかについての情報も共有されていない。今回の作業では、約千件弱の都市データが集積されており、今後、各分野から所在情報の基礎データとして利用され、また新たな情報が寄せられることで充足されていくと期待される。

【20年度】

本館所蔵のコレクション高松宮家伝来禁裏本の詳細なデータを収録した館蔵高松宮家伝来禁裏本データベースを新規に公開した。また、館蔵資料、館蔵錦絵、日本民俗学文献目録、自由民権運動研究文献目録、日本民謡のデータベースの更新を行った。

[新規データベース]

(1) 館蔵高松宮家伝来禁裏本データベース

(担当者 吉岡眞之)

1. 目的

本データベースは、本館が所蔵する旧有栖川宮家・高松宮家に伝来した禁裏本 1,680 点に関する書誌データを提供することを目的とする。同時に個々の資料について画像を添付し、データベース上で原本の様態を把握することを可能にした。データベースの構築に当たっては適切な資料名称を新たに付与した場合が少なくないが、新旧いずれかの名称からも検索できるように設定している。

2. 経過

本データベースは、本館共同研究「高松宮家伝来禁裏本」の基礎研究(2003～2006年度)、同「高松宮家伝来禁裏本」の総合的研究(2007・2008年度)、および人間文化研究機構連携研究「中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究—高松宮家伝来禁裏本を中心として—」(2005～2008年度。2005年は予備研究)による調査研究の成果にもとづき、2005・2006・2008年度の人間文化研究機構資源共有化事業の一環として構築したものである。

3. 成果

従来、「高松宮家伝来禁裏本」の検索には、かつてこのコレクションが高松宮家に所蔵されていた時期に作成された目録および館蔵資料データベースが主として利用されていたが、いずれも情報量が限られている上、正確さにおいても問題があった。本データベースの構築により情報量が飛躍的に増加し、また資料名称など、不正確であった情報の内容を大幅に是正することができた。

【21年度】

予兆・卜占・禁忌・呪術などの「言い伝え」を収録した俗信データベースと総合日本民俗語彙他に収録されている民俗語彙をデータベース化した民俗語彙データベースを新規に公開した。また、館蔵資料、館蔵縄文時代遺物、歴博図書目録、中世地方都市、日本民俗学文献目録、自由民権運動研究文献目録、日本民謡のデータベースの更新を行った。

[新規データベース]

(1) 俗信データベース

(担当者 常光 徹)

1. 目的

予兆・ト占・禁忌・呪術に関する俗信については、早くから学術面での重要性を指摘されながらも調査・研究面での立ち遅れが目立つ。その大きな原因の一つは、資料が散在しているため基礎的な整理と収集がなされていないところにある。本データベースの目的は、俗信資料を収集・整理し、系統的な分類を行ったうえで公開することである。

2. 経過

2004 年度以降、館蔵する市町村史、民俗調査報告書等に記録されている動植物に関する俗信約 30,000 点について、報告者、伝承地、収録文献などを記入したカードを作成し、分類を行ってきた。

3. 成果

動植物に関する俗信約 30,000 点のうち動物に関する俗信約 14,000 点を、陸上動物、鳥類、魚介類、虫類に分類し、俗信内容、伝承地、出典を加えたデータベースを構築し、本年度より公開した。俗信の研究の進展に貢献できるものとする。

(2) 民俗語彙データベース

(担当者 新谷 尚紀 関澤 まゆみ)

1. 目的

柳田國男の指導のもとに収集された総合日本民俗語彙に収録されている民俗語彙を中心として、その他の民俗語彙も加えつつそれらのデータを収録して検索を可能にして柳田國男の民俗学研究の方向性の継承とその発展的展開へ資することを目的として作成したデータベースです。

2. 経過

1981 年（昭和 56 年）に歴史学・考古学・民俗学の三学協業を軸に分析科学等関連諸学との学際協業による新たな歴史学の開拓と創造を目指して国立大学共同利用機関として設立されたのが国立歴史民俗博物館でした。民俗学にとっては日本で唯一の先端的研究機関です。そこで柳田國男を中心として構想されていた民俗語彙の収集整理による民俗研究の発展的継承もその一つの役割であると考えて、数々の共同研究とともに試みたのがこのデータベースの作成でした。平成 14 年度に作成作業を開始してこのたび公開に至りました。

3. 成果

昭和 30 年代までに収集されたこれらの民俗語彙には、その後にはじまる高度経済成長によって日本の社会が大きく変貌していく前までの日本各地に伝えられていた地域的な民俗文化の実態を知るための貴重な情報が含まれています。今後可能な限り各種の民俗学関係の文献から同じ時代に収録された民俗語彙を追加入力してさらなる充実をはかることが必要ですが、まずは一区切りとしてこのたび公開いたします。このデータベースの活用によって民俗伝承を歴史資料として活用する民俗学という基本的な研究構想をふまえた新たな広義の歴史研究の発展へと寄与することができれば幸いです。

【22年度】

文化財ごとに色味や色材の推定構造などの文献調査を行いデータベース化した文化財材料（色材）知識データベースと、国立歴史民俗博物館基盤研究「縄文・弥生集落遺跡の集成的研究」において収集した報告書抄録データ約 2.5 万件を収録した縄文・弥生集落遺跡データベースを新規に公開した。また、館蔵資料，中世地方都市，日本民謡のデータベースの更新を行った。

〔新規データベース〕

(1) 縄文・弥生集落遺跡データベース

(担当者 藤尾 慎一郎)

1. 目的

このデータベースは、国立歴史民俗博物館の基盤研究「縄文・弥生集落遺跡の集成的研究」（研究代表 藤尾慎一郎：2005年～2007年）において収集した報告書抄録データ約 2.5 万件を収録し、較正年代で検索した結果を、地図上に表示することを可能とした日本で初めてのデータベースである。

2. 経過

集成作業は全国の抄録委員にデータの収集を委嘱し、2006年9月より2007年12月までに提出されたデータを取りまとめ、表現の統一・整理作業を歴博で行い、2011年3月に終了した。

3. 成果

縄文後期から古墳前期までの全遺跡と同時期の北海道・沖縄の遺跡について「報告書抄録」に記された 29 項目と、独自に集めた 7 項目の全 36 項目のテキストデータを使って、検索の上、地図に表示することができる。とくに時期データが較正年代であることを最大の特徴としているので、紀元前 3 世紀の水田遺跡といった検索を初めて可能とした。利用者は結果を自分のパソコンにダウンロードして、グーグルマップなどの地図に表示することができる。座標は世界座標系に、遺構名は平成 22 年度版文化庁版発掘調査の手引きに準じて統一した。このデータベースによって、縄文・弥生遺跡研究の基礎データが集積され、これをもとに研究が大きく進展することを願ってやまない。今後もデータの充実に努めるので、活用いただくとともに新しい情報の提供も歓迎したい。

(2) 文化財材料（色材）知識データベース

(担当者 小瀬戸恵美)

1. 目的

文化財測定に際し、その文化財（あるいは類する文化財）がどのような材料で作成されているか、どのような修復がなされているかなどの基盤データを持つことは、その文化財を正しく理解し考察するうえで重要な要素です。この観点から文化財ごとに色味や色材の推定構造などの文献調査を行いデータベース化しました。本データベースは文化財の種類、時代、それに使用されている支持体・色材のデータの蓄積（以下、論文 DB）と、色材の構造、特性、使用法などの基礎データ蓄積（以下、染料顔料 DB）をもち、これらが相互リンクすることによって、より総合的系統的な検索を可能としています。

2. 経過

本データベースは、1に述べた目的のもとに「文化財構成物質知識データベース」として、科学技術振興機構（JST）革新技术開発研究事業（「文化財測定用携帯型ラマンイメージング・顕微赤外分光装置の開発研究」、平成17-19年度）、科学技術振興機構（JST）先端計測分析技術・機器開発（プロトタイプ実証・実用化プログラム）（「文化財等複合材料評価用ラマンイメージング装置の開発」平成21-23年度）の交付を受けて作成されたものです。このデータの蓄積は現在もまだ続いています。まずは日本の文化財に関するデータを公開します。

3. 成果

文化財の材料に関するデータベースは自然科学的な測定を行う際、あるいは美学的見地からの考察を行う際に、その補助資料として簡便に使用できるようになっています。現在は日本の文化財に関するデータが主であり、今後、諸外国のデータ並びに材料の特性を示すスペクトラム等を追加していく必要があります。まずは一区切りとして公開します。

<データベースの整備・公開・利用の状況> (各年度末実績)

記録類全文データベース

データベース名	公開年月 公開方法	蓄積情報の概要	収録データ 件数	H16 利用数	H17 利用数	H18 利用数	H19 利用数	H20 利用数	H21 利用数	H22 利用数
玉葉データベース	H6年12月 施設内限定	鎌倉時代初期の貴族九条(藤原)兼実の日記を収録	7,463件	92	24	4	32	131	548	44
吾妻鏡データベース	H6年12月 施設内限定	鎌倉幕府で編修された鎌倉時代の編年体の歴史書を収録	6,684件	36	15	4	24	20	31	25
左経記データベース	H6年12月 利用者申請	平安時代中期の貴族源経頼の日記で、撰閣期の政治や儀式の詳細をまとめたデータベース	1,989件	646	2,748	411	651	2,832	4,550	480
天文日記データベース	H6年12月 利用者申請	戦国時代の本願寺十代の法主である証如の日記を収録	4,171件	120	3,193	361	75	232	329	104
兼頭脚記データベース	H6年12月 利用者申請	本館で所蔵している室町時代中期の貴族広橋兼頭の日記を収録	686件	421	710	531	299	1,314	3,508	224
大乘院寺社雑事記データベース	H10年12月 施設内限定	室町時代中期の奈良・興福寺大乘院門跡27代尋尊大僧正の日記を収録	59,609件	34	551	25	234	62	73	254
兵範記データベース	H16年3月 利用者申請	平信範の日記。増補史料大成『兵範記』一～五をもとに京都大学電子図書館 貴重資料画像 重要文化財 兵範記等の関係資料の写真・画像を用いて校合・補訂し、データベース化した。	2,631件	4	8	3,122	3,000	3,798	0	3,192
山槐記データベース	H16年3月 利用者申請	藤原(中山)志親の日記を収録。本文と除目部類の2部構成。	2,193件	9	31	2,376	2,897	1,266	8	1,968

データベース(れきはく)

データベース名	公開年月 公開方法	蓄積情報の概要	収録データ 件数	H16 利用数	H17 利用数	H18 利用数	H19 利用数	H20 利用数	H21 利用数	H22 利用数
民俗誌データベース	H2年4月 一般公開	日本各地の村落について地域別に配列した「調査報告書」などの文献データ	5,203件	20,741	33,852	675	506	204	160	1,020
旧高旧領取調帳データベース	H2年4月 一般公開	江戸時代の国・郡ごとに村名、旧領名、旧高、旧県名を収録した文献データ	97,359件	36,307	3,414	21,985	36,819	157,955	5,551	46,558
歴博図書目録データベース	H3年4月 一般公開	国立歴史民俗博物館の研究用図書室に所蔵された図書資料	205,522件	26,197	9,211	9,251	7,312	7,324	10,979	8,248
東大寺文書目録データベース	H4年10月 利用者申請	奈良・東大寺に伝わる文書を奈良文化財研究所が調査・編纂し、昭和54年から59年にかけて発行した目録を収録	12,099件	3,204	3,221	738	1,285	1,205	624	183
日本荘園データベース	H5年12月 一般公開	中世の荘園ごとの所在、荘園領主・資料出典などの主要な情報を収録	8,975件	6,704	34,195	5,256	6,443	18,947	20,999	4,519
荘園関係文献目録データベース(H5年)	H5年12月 一般公開	荘園に関する主要な論文・文献類を「日本荘園DB」と関連して収録	4,611件	434	470	534	434	319	189	868

陶磁器出土遺跡データベース	H6年12月 一般公開	日本国内の貿易陶磁器を出土した遺跡の文献目録と遺跡地名表を収録	7,992件	201	335	159	235	157	8,709	194
土偶データベース	H7年3月 一般公開	縄文時代の土偶の製作時期や地域ごとの特徴、形態の変遷などを収録	10,641件	11,835	2,778	1,494	652	2,647	1,517	1,258
館蔵資料データベース	H8年10月 一般公開	当館が所蔵する資料の基礎データを収録	226,085件	20,550	54,879	15,445	14,222	37,503	34,717	31,744
館蔵中世古文書データベース	H10年8月 一般公開	当館が所蔵する「田中本」「越前島津家文書」等の中世文書全体を収録	1,925件	2,453	1,872	1,660	1,314	2,223	2,088	1,258
近世窯業遺跡データベース	H11年1月 一般公開	近世窯業に関する基礎データを収録	1,317件	130	109	147	41	31	30	49
近世窯業関係主要文献目録データベース	H11年1月 一般公開	近世窯業の基本文献を基に窯跡地名表・文献目録を収録	1,904件	55	58	133	74	54	17	38
日本民俗学文献目録データベース	H11年4月 一般公開	民俗学および関連する諸分野の論文、報告、資料等を収録	42,148件	1,185	2,230	3,154	2,490	1,185	1,269	4,644
城館城下発掘データベース	H11年4月 一般公開	西日本は1990年まで、東日本は1991年までに発掘調査された城館と城下遺跡の情報を収録	3,348件	699	366	310	240	108	154	160
弥生石器遺跡データベース	H12年7月 一般公開	縄文時代後期から古墳時代初期までの石器の基礎データと関連情報を収録	3,966件	198	499	145	133	100	178	230
自由民権運動研究文献目録データベース	H14年3月 一般公開	1870年代から80年代にかけて展開された自由民権運動の研究成果と文献目録	4,805件	436	733	535	360	543	436	1,413
棟札データベース	H15年7月 一般公開	国宝・重文に指定されている社寺建造物の棟札における未収録の棟札及び報告書に収録された棟札の基礎データ	1,060件	214	3,620	211	136	188	228	146
古代・中世都市生活史(物価)データベース	H16年7月 一般公開	日本の古代・中世における都市生活、消費の動向を検討するためおおむね8世紀から16世紀の価格関係の史料を収録	37,253件	1,496	3,150	1,156	1,814	1,013	8,833	1,209
館蔵近世・近代古文書データベース	H7年3月 一般公開	当館が所蔵する「水木家資料」「伊能家資料」などの近世・近代の古文書を収録	8,002件	0	332	314	253	297	471	782
館蔵紀州徳川家伝来楽器データベース	H17年3月 一般公開	当館資料図録3「紀州徳川家伝来楽器コレクション」に基づく館蔵資料を収録	213件	0	4,460	547	216	121	14	484
館蔵武器武具データベース	H17年3月 一般公開	甲冑類・古式銃砲類、鉄砲の実物資料と砲術秘伝書類と西洋軍事技術に関する文献を各コレクションより収録	4,024件	2	1,951	552	375	794	1,191	567
館蔵錦絵データベース	H17年7月 一般公開	館蔵の錦絵に画像、および詳細な書誌データを付して作成	1,672件		3,489	1,076	2,281	5,173	5,916	2,850
宮座研究論文データベース	H18年3月 一般公開	歴史学、民俗学、社会学、人類学、宗教学などにわたる宮座関係者書・論文をほぼ収録	1,447件		1	206	170	60	83	329

地域蘭学者門人帳データベース	H18年3月 一般公開	近世蘭学者が記載されている門人帳から、人名・出身地・師匠等の記載をデータ化	9,262件		5	3,957	526	272	212	556
江戸商人・職人データベース	H18年3月 一般公開	近世都市江戸の商人・職人の名鑑や株帳等から、居所、職業、所持株等の情報を収録	2,617件		1	1,612	1,472	676	420	3,233
中世制札データベース	H18年12月 一般公開	文治元年から、慶長6年までの制札の基礎的な情報、状態をできる限り掲載し収録	203件			194	290	279	132	287
懐溜諸屑データベース	H19年3月 一般公開	全28冊になる貼交帳『懐溜諸屑』について、そこに添付された資料一点ずつの画像に詳細な書誌データを付したものを収録	3,515件				416	1,384	947	157
日本民謡データベース	H19年3月 施設内限定	全国の都道府県で行われた「民謡緊急調査」の成果の一つである『民謡緊急調査報告書』を基本としたデータベース	48,447件				118	172	133	141
染色用型紙データベース	H19年4月 一般公開	当館に所蔵されている4,000枚を超す染色用の型紙一点ごとを基礎的データとし、画像を加えて収録	100件				257	120	8	219
野村正治郎衣裳コレクションデータベース	H19年4月 一般公開	当館が所蔵する野村正治郎の服飾・装身具・染織物品の資料一点ごとの基礎的データを、画像とともに収録	111件				374	133	36	301
館蔵縄文時代遺物データベース	H20年1月 一般公開	当館が所蔵する32のコレクションにおける縄文時代遺物について基礎的なデータに写真・実測図・拓本図を付して収録	7,263件				27	58	116	164
館蔵装身具データベース	H20年3月 一般公開	本館が所蔵する髪飾具(櫛・かんざし・笄)・袋物(たばこ入れ・紙入れ・笥・守袋)・印籠など装身具関係資料の基礎的データを収録	360件				1	165	860	523
中世地方都市データベース	H20年3月 一般公開	どこにどのような都市があったのかを検討するために、都市の所在情報を集めたデータベース	1,580件				1	192	1,440	957
東国板碑遺跡等の情報データベース	H20年3月 一般公開	関東・東北・北海道に分布する約7万件の板碑に関して、個々の板碑情報、所在地(遺跡)情報、文献情報を関連づけたデータを収録	65,757件				13	44,041	16,847	3,950
館蔵高松家伝来禁裏本データベース	H21年3月 一般公開	旧有栖川宮家・高松宮家に伝来し、文化庁を経て本館に移管された蔵書群1671点および同じ経路で移管された資料8点に関する書誌情報を収録	1,981件						9,455	1,066
俗信データベース	H22年3月 一般公開	予兆・卜占・禁忌・呪術に関する言い伝え(俗信)を収録したデータベース。動物と植物に関する俗信約30,000件の内、21年度は動物のみを収録	14,216件						0	687
民俗語彙データベース	H22年3月 一般公開	口頭で伝承されてきた方言的な語彙を収録したデータベース。柳田國男の指導のもとに収集された総合日本民俗語彙に収録されている民俗語彙他を収録	35,239件						0	1,358

縄文・弥生集落遺跡 (H23年)	H23年3月 一般公開	基盤研究「縄文・弥生集落遺跡 の集成的研究」において収集し た報告書抄録データを収録し たデータベース	25,463件							
文化財材料知識(H 23年)	H23年3月 一般公開	文化財ごとに色味や色材の推 定構造などの文献調査を行い 収録したデータベース	1,546件							

民俗研究映像リスト

	題名	制作担当者	規格	貸出DVD のシリーズ
1	芋くらべ祭の村ー近江中山民俗誌ー	上野和男・橋本裕之・ 岩本道弥 1988-1989	カラー日本語100分	1
	中山の芋くらべ祭ー滋賀県蒲生郡日野町中山ー		カラー日本語160分	
	上三十坪の野神祭		カラー日本語20分	
	徳谷の野神祭		カラー日本語30分	
2	鹿島さまの村ー秋田県湯沢市岩崎民俗誌ー	岩井宏實・福原敏男 1989-1990	カラー日本語59分	2
3	「椎葉民俗音楽誌1990」	小島美子1991	カラー・日本語・59分	13
4	金沢七連区民俗誌 第1部 都市に生きる人々／第2部 技術を語る	小林忠雄・菅豊1992	カラー・日本語・120分	7
5	(1)「黒島民俗誌ー島譜のなかの神々」 (2)「黒島民俗誌ー牛と海の賦」	篠原 徹・菅 豊1993	(1)カラー・日本語・59分 (2)カラー・日本語・60分	14
6	観光と民俗文化ー遠野民俗誌94/95ー	川森博司 1994-1995	カラー日本語45分	3
	民俗文化の自己表現ー遠野民俗誌94/95ー		カラー日本語45分	
	遠野の語りべたち		カラー日本語29分	
7	景観の民俗誌 東のムラ・西のムラ	福田アジオ・篠原徹・菅 豊1994	カラー・日本語・各58分	16
8	沖縄・糸満の年中行事ー門開きと神年頭ー	比嘉政夫1996	カラー・日本語・104分	8
9	芸北神楽民俗誌第1部 伝承	新谷尚紀 1996-1997	カラー・日本語・45分	4
	芸北神楽民俗誌第2部 創造		カラー・日本語・48分	
	芸北神楽民俗誌第3部 花		カラー・日本語・29分	
10	風の盆ふーりんぐー越中八尾マチ場民俗誌ー	小林忠雄1998	カラー・日本語・90分	17
11	大柳生民俗誌	関沢まゆみ1998	日本語	
12	沖縄の焼物 伝統の現在	松井健・篠原徹2000	カラー・日本語・83分	9
13	風流のまつり 長崎くんち	福原敏夫・久留島浩2001	日本語・94分	
14	金物の町・三条民俗誌	朝岡康二・内田順子2002	カラー・日本語・90分	18
15	物部の民俗といざなぎ流御祈禱	松尾恒一2002	日本語・90分	
16	現代の葬送儀礼	山田慎也2004	日本語	
17	出雲の神々とまつり	新谷尚紀・関沢まゆみ2005		
18	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	内田順子2005-2006	カラー・日本語・102分	5
18'	AINU Past and PresentThe Legacy of Neil Gordon MUNRO's Film	Junko Uchida2005-2006	Color, English, 102 minutes	6
19	(1)「興福寺 春日大社ー神仏習合の祭儀と支える人々ー」 (2)「薬師寺 花会式ー行法と支える人々ー」	松尾恒一 2007	(1)カラー・日本語・71分 (2)カラー・日本語・71分	10
	(1) Kohukuji and Kasuga Taisha Rites of Kami-Buddha Amalgamation and the People Who Support Them (2) The Flower Assembly Rite (Hana'e-shiki) of Yakushiji The Ceremony and the People Who Support It		MATSUO Koichi2008 (1)Color English, 71 minutes (2)Color English, 71 minutes	
20	(1)「筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー(本編)」	小池淳一2009	(1)カラー・日本語・54分 (2)カラー・日本語・52分	12
21	平成の酒造り 製造編／継承・革新編	青木隆浩2010	カラー・日本語・各88分	15

(平成22年12月現在)

(課題名) 民俗研究映像の制作と資料化に関する研究

研究目的	<p>歴博では1988年より、映像を用いた民俗学の研究手法として民俗研究映像の制作を進めてきたが、制作された映像を学術的に評価することや、映像を資料として蓄積し、それらを再分析・再活用できる状態にするための方法についてはこれまで十分な議論がおこなわれてこなかったとの反省があり、2004～06年度の「民俗研究映像の資料論的研究」を立ち上げた。その成果として、2004年度に山田慎也「現代の葬送儀礼」、2005年度に内田順子「AINU Past and Present」が得られ、それぞれの作品について議論をおこなった。2006年度については、松尾恒一が映像を制作中である。また、資料論的な問題として、制作後の作品を保存・活用するにあたり、とても困難な問題であった制作会社との契約についてどのようなものが適切であるか見通しをもつことができた。</p> <p>しかし、その一方で法的な権利関係の処理や過去の作品の劣化、映像素材の保存など、大きな問題を抱えている。そこで、本研究会では民俗研究映像の制作を継続してそれに対する議論をおこなうとともに、共同研究員間で法的な権利関係について処理方法を共有し、かつ既存作品のデジタル化による保存・活用と映像素材の整理を進めていく。</p>
研究計画(各年次別)	<p>第1年度 映像制作：安室知「水田とカモと人ー日本の伝統カモ猟ー」 内容：日本列島には多くの渡り鳥がやってくる。特に冬鳥としてシベリア方面からやってくるガン・カモ科の鳥類は人びとの生活に多大の影響を与えていた。都市文化においては田園憧憬の対象として絵画や詩歌に取り上げられてきたガンやカモは、農村においてはイネを食い荒らす害鳥でありまた重要な狩猟対象であった。そのため、村部には銃を用いない多様な伝統猟法が現在でも伝承されている。そうした猟法のひとつに小網猟がある。それは手に持って操作できるほどの小さな網で飛来するカモを捕らえるというもので、猟具としては至極単純なものである反面、カモの生態やその地域の自然環境に関する豊富な民俗知識がその猟の背景にはある。そうした民俗知識の詰まったカモの小網猟を石川県加賀市大聖寺の片野鴨池に注目して映像として記録する。</p> <p>その他、2006年松尾恒一制作映像の録音、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p> <p>第2年度 映像制作：小池淳一「筆記の近代誌一万年筆をめぐる人びとー」(仮題) 内容：人間にとって文字を用いて記録を残すことができるようになったことは、文化の歴史のなかで大きな転換であったに違いない。民俗学はそうした文字記録と一線を画することで独自の文化史を構築してきたが、近代において庶民生活は文字とそれに連なるさまざまな事象と実は無縁ではない。積極的に文字とそれに依拠する文化とを民俗学的な視点から取り上げ、筆記行為とその物質的環境の形成について映像による記録作成を行う必要があると考えられよう。具体的には日本近代において長く公的な筆記具として遇されてきた万年筆とその製作・販売をめぐる民俗誌的な映像を作成する予定である。</p> <p>その他、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p> <p>第3年度 映像制作：青木隆浩：「平成の酒造りー酒造家と組合の新たな取り組みー」(仮題) 映像制作は青木が担当する。予定している撮影の対象は、埼玉県と栃木県の清酒製造業である。清酒製造業では近年、出稼ぎ労働者の減少により、従来の親方制度による酒造技術の伝承が困難になってきている。さらに、兵庫県と岡山県を中心に栽培されてきた最高級の酒造好適米・山田錦が、農業技術と経営上の困難から生産量を縮小させている。そこで、酒造家は酒造りの担い手を出稼ぎ労働者から通年雇用の地元労働力に切り替え、彼らの技術向上に尽力している。具体的には、酒造組合が酒造技術の講習を行うことで、酒造労働力の再生産を目指している。酒造好適米についても、兵庫・岡山からの購入が困難になってきているため、県独自の品種を開発して地元農家へ栽培を委託するようになっている。本年の映像制作では、以上のような近年における酒造りの大きな変化を捉えていく。</p> <p>その他、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p>

研究成果公開方法（中間報告・研究報告・出版物刊行・フォーラム・展示・シンポジウムなど）	
<p>中間報告は毎年、提出していただきます。</p> <p>1. 本報告刊行予定年度 平成 年度末（研究報告・単行本等 ）</p> <p>2. フォーラム・企画展示・映像、音声、その他</p> <p>4. その他（ ）</p> <p>※計画のものに○をつけ、具体的にご記入ください。</p>	
国立歴史民俗博物館のこれまでの研究プロジェクトとの関連	
<p>本館では民俗研究系が主体となって、1988年度より毎年1作品ずつ、①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であり、研究成果の発表の手段としての映像による論文であることといった理念に基づいて民俗研究映像を制作してきた。完成作品だけでなく、制作時に撮影された映像はすべて、民俗研究の資料に供することが可能なように本館におさめられている。しかし、これらの映像資料を今後の民俗研究にどのように活用していくのか、また、活用をすすめるためには、資料としてどのように蓄積していくことが望ましいのか、ということについてはさらなる議論が必要である。本共同研究は、本館が民俗研究映像として収集してきた映像資料の活用を促進する上で不可欠である。</p>	
国内外の研究状況	<p>ドキュメンタリー映像とも記録映像とも異なる、民俗の研究のための映像としてスタートした本館の「民俗研究映像」は、第二次世界大戦後急速に発達した欧米の映像人類学・映像民族学の考え方の影響を受けている。もともとは「やがて消えゆく文化」を記録する目的ではじまったと考えられるが、研究の進展により、映像の意味を読み解く方法、撮影する側と被写体の関係、さらには映像と観る側の関係などに関心が広がっていった。</p> <p>その先駆的な国のひとつであるフランスでは、「民族学映画委員会」が人類博物館を中心に組織され、すでに50年が経過しており、この委員会の枠組みで、人類博物館や映画博物館で民族学映画の上映がしばしば行われ、新しい作品も先駆的な作品も広く一般に公開され、作品は新しい観点から繰り返し批評にさらされている。こうした場は、民族学の研究者育成の場ともなっている。同様に、アメリカの主要な人類学雑誌『American Anthropology』誌には、「Visual Anthropology」というコーナーが設けられており、毎号作品に対する批評が掲載されている。</p> <p>日本では、国立民族学博物館の大森康宏氏による映像研究が有名であるが、長期的な視野から組織的に映像を制作・保存・活用を行っている機関はほとんどない。</p>
研究の特色	<p>本共同研究は、映像批評、映像資料論についての共同研究と、その議論をふまえた新規の映像作品の制作とからなる。新規の映像制作は、各年度の担当教員が、本共同研究における議論をふまえて、それぞれが研究主体性を発揮してすすめてゆく。既存の映像資料については、民俗研究の観点から再分析・再編集などをおこなう。これは、映像をどのように民俗研究に活用できるかという本研究の中心的研究課題のひとつである。なお、著作権や映像批評・制作のスタイルについての議論は、立場によってその意見が異なる部分が多いので、適宜ゲストスピーカーとして専門家を招くこととする。</p>

【平成19年度】

「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」 2007～2009年度
(研究代表者 青木隆浩)

1. 目的

歴博では1988年より、映像を用いた民俗学の研究手法として民俗研究映像の制作を進めてきたが、制作された映像を学術的に評価することや、映像を資料として蓄積し、それらを再分析・再活用できる状態にするための方法についてはこれまで十分な議論がおこなわれてこなかったとの反省があった。そこで、2004～2006年度に「民俗研究映像の資料論的研究」を立ち上げ、過去または新規制作の作品について議論を行うとともに、制作後の作品を保存・活用するにあたって、制作会社との契約についてどのようなものが適切であるか検討を進めてきた。その結果、契約のあり方についてはおおよその見通しがついてきた。

だが、一方で法的な権利関係の処理や過去の作品の劣化、映像素材の保存といった大きな問題が残っている。そこで、本研究会では民俗研究映像の制作を継続してそれに対する議論をおこなうとともに、共同研究員間で法的な権利関係について処理方法を共有し、かつ既存作品のデジタル化による保存・活用と映像素材の整理を進めていく。

2. 今年度の研究目的

映像制作：安室知「伝統カモ猟と人の暮らしー加賀市片野鴨池の坂網猟ー」（仮題）

内容：日本列島には多くの渡り鳥がやってくる。特に冬鳥としてシベリア方面からやってくるガン・カモ科の鳥類は人びとの生活に多大の影響を与えていた。都市文化においては田園憧憬の対象として絵画や詩歌に取り上げられてきたガンやカモは、農村においてはイネを食い荒らす害鳥でありまた重要な狩猟対象であった。そのため、村部には銃を用いない多様な伝統猟法が現在でも伝承されている。そうした猟法のひとつに小網猟がある。それは手に持って操作できるほどの小さな網で飛来するカモを捕らえるというもので、猟具としては至極単純なものである反面、カモの生態やその地域の自然環境に関する豊富な民俗知識がその猟の背景にはある。そうした民俗知識の詰まったカモの小網猟を石川県加賀市大聖寺の片野鴨池に注目して映像として記録する。

その他、2006年松尾恒一制作映像の仕上げ、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。

3. 今年度の研究経過

第1回研究会 日時：6月23日（土）13:30～ 場所：国立歴史民俗博物館第2会議室・講堂

報告：安室知「今年度民俗研究映像『伝統カモ猟と人の暮らしー加賀市片野鴨池の坂網猟ー』（仮題）の制作計画について」

民俗研究映像「金沢七連区民俗誌」の上映

「金沢七連区民俗誌」の制作者・小林忠雄氏による解説と討論

今年度の打ち合わせ

第2回研究会 日時：11月18日（日）13:30～ 場所：国立歴史民俗博物館第2会議室・講堂

映画上映：昭和初期に制作された宮本馨太郎作品と渋沢敬三作品の比較鑑賞

報告：山田尚彦（松戸市立戸定歴史館・学芸員）「宮本馨太郎と渋沢敬三の撮影した映画の比較

について」

第3回研究会 日時：3月20日（木）13：30～ 場所：国立歴史民俗博物館第2会議室・講堂

田口洋美氏（東北芸術工科大学・教授）が制作したマタギ関係の記録映像を上映

報告：田口洋美「映像民俗学（民族学）の可能性と課題－東北芸術工科大学東北文化研究センターの試み－」

これらの研究会の他、4月4日（水）には埼玉県川口市のNHKアーカイブスを見学し、フィルム
の保存と整理について学んだ。

4. 今年度の研究成果

[映像制作]

共同研究員の安室知氏が「伝統鴨猟と人々の関わり－加賀市片野鴨池の坂網猟－」というタイトルで民俗研究映像を、「加賀市片野鴨池の坂網猟」というタイトルで展示映像をそれぞれ制作している。また、同じく共同研究員の松尾恒一氏が昨年度制作分であった「興福寺・春日大社－神仏習合の祭儀と支える人々－」と「薬師寺 花会式－行法と支える人々－」のうち、雨天中止になった場面を今年度撮影し、編集している。

[歴博映像フォーラム]

日時：9月15日（土）11:00～18:00 場所：新宿明治安田生命ホール

内容：第2回目の歴博映像フォーラムは、「映像をめぐる虚と実 AINU Past and Present」と題し、内田順子・鈴木由紀監督による2006年度民俗研究映像「AINU：Past and Present－マシンのフィルムから見えてくるもの－」を上映した他、参考として萱野茂・二風谷アイヌ資料館の萱野志朗監督による「トノトカムイ 酒の神様」とリュミエール映画「日本の光景」を上映、また佐々木利和氏（国立民族学博物館）の特別講演「絵画にみるアイヌの世界」、今福龍太氏（東京外国語大学）と貝沢耕一氏（平取アイヌ文化保存会）、内田順子氏による座談会「映像をめぐる虚と実」をおこなった。

[過去の作品のデジタル化]

民俗研究映像の保存性と研究活用への便を高めるため、1988年制作の「芋くらべ近江中山民俗誌」と1989年制作の「秋田岩崎民俗誌」、1990年制作の「椎葉民俗音楽誌」の素材テープをDVDにコピーし、整理する作業をおこなった。

5. 共同研究員（◎は研究代表者、○は研究副代表）

川村清志	札幌大学文化学部	敷田麻実	北海道大学大学院国際広報メディア研究科
湯澤規子	明治大学経営学部	◎青木隆浩	本館・研究部・助教
上野和男	本館・研究部・教授	○内田順子	本館・研究部・准教授
小池淳一	本館・研究部・准教授	佐藤優香	本館・研究部・助教
篠原 徹	本館・研究部・教授	新谷尚紀	本館・研究部・教授
関沢まゆみ	本館・研究部・准教授	常光 徹	本館・研究部・教授
原山浩介	本館・研究部・助教	松尾恒一	本館・研究部・准教授
安室 知	本館・研究部・准教授	山田慎也	本館・研究部・准教授

(課題名) 民俗研究映像の制作と資料化に関する研究

20 年 度 研 究 計 画	<p>映像制作：小池淳一「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」（仮題）</p> <p>内容：人間にとって文字を用いて記録を残すことができるようになったことは、文化の歴史のなかで大きな転換であったに違いない。民俗学はそうした文字記録と一線を画することで独自の文化史を構築してきたが、近代において庶民生活は文字とそれに連なるさまざまな事象と実は無縁ではない。積極的に文字とそれに依拠する文化とを民俗学的な視点から取り上げ、筆記行為とその物質的環境の形成について映像による記録作成を行う必要があると考えられよう。具体的には日本近代において長く公的な筆記具として遇されてきた万年筆とその製作・販売をめぐる民俗誌的な映像を作成する予定である。</p> <p>その他、民俗研究映像の完成品上映とそれに対する検討、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p>
当 初 計 画 と の 変 更 点	<p>とくに大きな変更はない。</p>
19 年 度 の 研 究 実 施 状 況	<p><u>映像制作</u></p> <p>共同研究員の安室知氏が「伝統カモ猟と人の暮らし—加賀市片野鴨池の坂網猟—」というタイトルで民俗研究映像を制作中である。また、同じく共同研究員の松尾恒一氏が昨年度制作分であった「大和古寺を支える人々—童子と堂童子—」（仮題）のうち、雨天中止になった場面を今年度撮影し、編集する予定である。</p> <p><u>第1回研究会</u></p> <p>日時：6月23日（土）13:30～</p> <p>場所：於：国立歴史民俗博物館第2会議室・講堂</p> <p>報告：安室知氏「今年度民俗研究映像『伝統カモ猟と人の暮らし—加賀市片野鴨池の坂網猟—』の制作計画について」</p> <p>民俗研究映像「金沢七連区民俗誌」の上映</p> <p>「金沢七連区民俗誌」の制作者・小林忠雄氏による解説と討論</p> <p>今年度の打ち合わせ</p> <p><u>第2回研究会</u></p> <p>日時：11月18日（日）1:30～</p> <p>場所：国立歴史民俗博物館第2会議室・講堂</p> <p>映画上映：昭和初期に制作された宮本馨太郎作品と渋沢敬三作品の比較鑑賞</p> <p>報告：山田尚彦氏（松戸市立戸定歴史館・学芸員）「宮本馨太郎と渋沢敬三の撮影した映画の比較について（仮題）」</p> <p><u>第3回研究会</u></p> <p>日時：2月中旬～3月上旬を予定</p> <p>場所：国立歴史民俗博物館</p> <p>内容：映像論に関する研究会を予定</p> <p><u>過去の作品のデジタル化</u></p> <p>民俗研究映像の保存性と研究活用への便を高めるため、1988年制作の「芋くらべ近江中山民俗誌」と1989年制作の「秋田岩崎民俗誌」、1990年制作の「椎葉民俗音楽誌」の素材テープをDVDにコピーし、整理する作業を進めている。</p>

19年度研究成果	<p>安室知氏の民俗研究映像「伝統カモ猟と人の暮らしー加賀市片野鴨池の坂網猟ー」は10月中旬現在、地元への取材と撮影協力の依頼をほぼ済ませ、12月に本格的な撮影に入る予定である。撮影後は直ちに編集作業に入り、年度末までには作品が予定通り完成する見込みとなっている。また、松尾恒一氏の民俗研究映像「大和古寺を支える人々ー童子と堂童子ー」(仮題)も12月に撮影し、年度末までに完成する見込みである。</p> <p>第1回研究会においては、まず安室氏から今年度民俗研究映像の構成や仕様、制作計画について説明があり、それについて共同研究員による討議がなされた。また、「金沢七連区民俗誌」は職人の伝統的技術に着目した作品であり、それに対する討論は、今後の映像制作を進めていくうえで参考になった。さらに、民俗研究映像の資料化計画の一環として、「金沢七連区民俗誌」の本編をDVD化する許諾を小林氏から得られたので、今後その計画を進める予定である。</p> <p>第2回研究会で上映する宮本馨太郎と渋沢敬三の民俗映像は、当時から現代に至るまでの民俗学において大きな影響を与えた作品である。とくに彼らは、同じ対象を別の角度から撮影するという、映像論の観点から興味深いことをおこなっている。そこで、第2回研究会では、宮本馨太郎と渋沢敬三の作品に詳しい山田尚彦氏をゲストスピーカーとして招き、彼らの作品の比較観賞と討論をおこなう。</p>
19年度研究の自己評価	<p>今年度は、カモ猟という撮影中に必ずしも成功するとは限らない技術を確実に作品へ取り込むため、撮影に失敗した場合に映画会社が持っている既存の撮影素材を利用できるように交渉したところ、その映画会社を共同著作権者とする契約を結ぶことになった。このように既存の撮影素材を利用することが著作権の制約につながることを経験したことにより、本研究会は映像制作をめぐる権利関係の処理方法について新たな課題を抱えることになった。</p> <p>また、民俗的な技術やイベントは、必ずしも撮影者の期待するように成功しないという現実に対し、民俗研究映像の制作者がどのように向き合っていくかという課題にも直面することになった。成功しなかったという現実もまた民俗学の研究対象であると捉えるのか、反対に記録保存としての意義を重視して成功例にこだわるのか、撮影の対象や目的との関わりからあらためて議論をする必要がある。</p> <p>一方、過去の民俗研究映像のデジタル化は着実に進んでいる。デジタル化をすることにより、撮影素材の整理や再編集が容易となる。したがって、研究資料としてのそれらの利便性は、飛躍的に高まることが期待される。</p>
19年度以降の研究計画	<p><u>20年度</u> 映像制作：小池淳一「筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー」(仮題) その他、安室知氏の「伝統カモ猟と人の暮らしー加賀市片野鴨池の坂網猟ー」と松尾恒一氏の「大和古寺を支える人々ー童子と堂童子ー」(仮題)の上映とそれらに対する討論、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p> <p><u>21年度</u> 映像制作：青木隆浩：「平成の酒造りー酒造家と組合の新たな取り組みー」(仮題) その他、小池淳一「筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー」(仮題)の上映とそれに対する討論、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p>
研究成果公開方法 (中間報告・研究報告・出版物刊行・フォーラム・展示・シンポジウムなど)	
<p>中間報告は毎年、提出していただきます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本報告刊行予定年度 平成 年度末 (研究報告・単行本等) 2. フォーラム・企画展示・総合展示・国際研究集会・国際シンポジウム・研究セミナー・その他) 3. 収集資料報告 (史料、資料、映像、音声、その他) ④ その他 (民俗研究映像) <p>※計画のものに○をつけ、具体的にご記入ください。</p>	

【平成20年度】

「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」2007～2009年度
(研究代表者 青木隆浩)

1. 目的

歴博では1988年より、映像を用いた民俗学の研究手法として民俗研究映像の制作を進めてきたが、制作された映像を学術的に評価することや、映像を資料として蓄積し、それらを再分析・再活用できる状態にするための方法についてはこれまで十分な議論がおこなわれてこなかったとの反省があった。そこで、2004～2006年度に「民俗研究映像の資料論的研究」を立ち上げ、過去または新規制作の作品について議論を行うとともに、制作後の作品を保存・活用するにあたって、制作会社との契約についてどのようなものが適切であるか検討を進めてきた。その結果、契約のあり方についてはおおよその見通しがついてきた。

だが、一方で法的な権利関係の処理や過去の作品の劣化、映像素材の保存といった大きな問題が残っている。そこで、本研究会では民俗研究映像の制作を継続してそれに対する討論をおこなうとともに、共同研究員間で法的な権利関係について処理方法を共有し、かつ既存作品のデジタル化による保存・活用と映像素材の整理を進めていく。

2. 今年度の研究目的

映像制作：小池淳一「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」

内容：人間にとって文字を用いて記録を残すことができるようになったことは、文化の歴史のなかで大きな転換であったに違いない。民俗学はそうした文字記録と一線を画することで独自の文化史を構築してきたが、近代において庶民生活は文字とそれに連なるさまざまな事象と実は無縁ではない。積極的に文字とそれに依拠する文化とを民俗学的な視点から取り上げ、筆記行為とその物質的環境の形成について映像による記録作成を行う必要があると考えられよう。具体的には日本近代において長く公的な筆記具として遇されてきた万年筆とその製作・販売をめぐる民俗誌的な映像を作成する予定である。

その他、民俗研究映像の完成品上映とそれに対する検討、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。

3. 今年度の研究経過

第4回研究会

日時：2008年7月13日（日）13時30分～

場所：国立歴史民俗博物館 講堂・第2研修室

上映会：松尾恒一制作の民俗研究映像

「興福寺・春日大社—神仏習合の祭儀と支える人々—」（約70分）

「薬師寺 花会式—行法と支える人々—」（約70分）

松尾恒一による解説と質疑応答

第5回研究会

日時：2008年9月23日（火・祝）13時30分～

場所：国立歴史民俗博物館 講堂・第2会議室

上映：「安東地方の河回村における別神グッドの仮面劇」（2005年）

朴奉男監督，Fortune Media 製作，30分

「安東権氏沖齋権 宗家の祭礼と供物」（2004年）

金光植監督，民族映像製作，29分47秒

映像解説：崔淑慶（チェ・スクン，韓国国立文化財研究所，本館外国人研究員）

報告：崔淑慶「日本の無形遺産記録の方法論の現況と課題」

質疑応答

第6回研究会

日時：2009年2月28日（土）13時30分～

場所：国立歴史民俗博物館 講堂・第2会議室

上映：川瀬慈監督の人類学映像

「ラリベロッチー終わりなき祝福に生きるー」（2007年，30分，日本語字幕）

「Room 11, Ethiopia Hotel」（2007年，23分，日本語字幕）

報告：川瀬慈「デジタル時代の人類学映画の課題と展望」

2009年度民俗研究映像制作企画：青木隆浩「平成の酒造り」（仮題）

質疑応答

4. 今年度の研究成果

[映像制作]

共同研究員の小池淳一が「筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー」というタイトルで民俗研究映像を制作した。とくに，ここ数年間の大きな課題であった制作要領や仕様書の作成，映画会社や出演者との権利関係においては，だいぶ整備された。

研究会においては，第4回でまず松尾恒一制作の民俗研究映像「興福寺・春日大社ー神仏習合の祭儀と支える人々ー」と「薬師寺 花会式ー行法と支える人々ー」を上映し，歴博映像フォーラム3に向けた討論をおこない，第5回で民俗映像の制作が盛んな韓国の作品を上映し，その方法論を比較検討した。第6回では映像人類学の分野で高い評価を受けている川瀬慈監督を招き，代表的な作品2本を上映するとともに，撮影・編集の手法や制作の意図などについて議論をおこなった。

また，研究代表者の青木隆浩が来年度制作予定の「平成の酒造り」（仮題）に向けて，出演者への協力依頼や撮影準備をおこなった。

[歴博映像フォーラム]

日時：2008年11月29日（土）13時00分～17時00分

場所：新宿明治安田生命ホール

内容：第3回目の歴博映像フォーラムは，「海を渡った仏教 儀礼と芸能」と題し，松尾恒一制作の民俗研究映像「薬師寺花会式～行法と支える人々～」と「興福寺・春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～」を上映した。その後，松尾恒一の司会により阿部泰郎（名古屋大学大学院）と尹光鳳（広島大学大学院）で討論会をおこなった。

5. 共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

川村 清志 札幌大学文化学部

敷田 麻実 北海道大学大学院国際広報メディア研究科

篠原 徹	人間文化研究機構	湯澤 規子	明治大学経営学部
◎青木 隆浩	本館・研究部・准教授	上野 和男	本館・研究部・教授
○内田 順子	本館・研究部・准教授	小池 淳一	本館・研究部・准教授
佐藤 優香	本館・研究部・助教	常光 徹	本館・研究部・教授
新谷 尚紀	本館・研究部・教授	関沢まゆみ	本館・研究部・准教授
原山 浩介	本館・研究部・助教	松尾 恒一	本館・研究部・准教授
安室 知	本館・研究部・教授	山田 慎也	本館・研究部・准教授
[リサーチアシスタント]			
太田 岳人	千葉大学・大学院生		

平成21年度 国立歴史民俗博物館 共同研究計画書 (継続)

研究区分	<input type="checkbox"/> 基幹研究	<input type="checkbox"/> 基層信仰 <input type="checkbox"/> 都市 <input type="checkbox"/> 戦争 <input type="checkbox"/> 環境 <input type="checkbox"/> 総合的研究 ()		
	<input checked="" type="checkbox"/> 基盤研究	<input type="checkbox"/> 科学的資料分析研究 <input type="checkbox"/> 総合的年代研究 <input checked="" type="checkbox"/> 高度歴史情報化研究 <input type="checkbox"/> 博物館学的研究		
	<input type="checkbox"/> 個別共同研究			
研究課題名	民俗研究映像の制作と資料化に関する研究			
	所属・職・専門分野	氏名	エフオー (%)	
研究代表者	本館研究部・准教授・民俗学/地理学	青木 隆浩	30	
研究副代表	本館研究部・准教授・民俗学/音楽学	内田 順子	10	
研究組織	氏名	所属機関・職・専門分野	分担課題	エフオー (%)
	川村 清志 敷田 麻美	札幌大学文化学部・准教授・日本研究 北海道大学大学院 国際広報メディア研究科・教授・情報学	民俗映像論 映像資料論	
	湯澤 規子 安室 知 篠原 徹	明治大学経営学部・専任講師・地理学 神奈川大学経済学部・教授・民俗学 人間文化研究機構・理事・民俗学	民俗映像論 映像制作 民俗映像論	
	常光 徹	本館研究部・教授・民俗学	民俗映像論	10
	新谷 尚紀	本館研究部・教授・民俗学	民俗映像論	10
	○内田 順子	本館研究部・准教授・民俗学/音楽学	映像資料論	10
	上野 和男	本館研究部・教授・社会人類学	民俗映像論	10
	松尾 恒一	本館研究部・准教授・芸能史	民俗映像論	10
	小池 淳一	本館研究部・准教授・民俗学	映像制作	10
	関沢まゆみ	本館研究部・准教授・民俗学	民俗映像論	10
	◎青木 隆浩	本館研究部・准教授・民俗学/地理学	映像制作	30
	山田 慎也	本館研究部・准教授・民俗学	民俗映像論	10
	佐藤 優香	本館研究部・助教・博物館学	博物館映像論	10
	原山 浩介	本館研究部・助教・現代史学	博物館映像論	10
	※印は新規を示す 外部 5名 内部 11名 計 16名			
R A の 希 望 : 有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/>				
研究期間	平成 19年度 ~ 平成 21年度 (3年計画の 3年目)			

(課題名) 民俗研究映像の制作と資料化に関する研究

21年度研究計画	<p>映像制作：青木隆浩：「平成の酒造り―酒造家と組合の新たな取り組み―」（仮題）</p> <p>映像制作は青木が担当する。予定している撮影の対象は、おもに栃木県の清酒製造業である。清酒製造業では近年、出稼ぎ労働者の減少により、従来の親方制度による酒造技術の伝承が困難になってきている。さらに、兵庫県と岡山県を中心に栽培されてきた最高級の酒造好適米・山田錦が、農業技術と経営上の困難から生産量を縮小させている。そこで、酒造家は酒造りの担い手を出稼ぎ労働者から通年雇用の地元労働力に切り替え、彼らの技術向上に尽力している。具体的には、酒造組合が酒造技術の講習を行うことで、酒造労働力の再生産を目指している。酒造好適米についても、兵庫・岡山からの購入が困難になってきているため、県独自の品種を開発して地元農家へ栽培を委託するようになっている。本年の映像制作では、以上のような近年における酒造りの大きな変化を捉えていく。</p> <p>その他、映像論に関する研究会の開催、22年度民俗研究映像制作の準備、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p>
当初計画との変更点	<p>当初は、埼玉県と栃木県の清酒製造業を比較する予定であったが、内容をわかりやすく整理するため、栃木県の清酒製造業におもな焦点を当てて映像を制作する。</p> <p>また、民俗研究映像を海外に向けて広く公開し、比較研究の可能性を広げるため、英語版の制作を計画している。</p>
20年度の研究実施状況	<p>第4回研究会：7月13日（日）13時30分～、本館講堂・第2研修室</p> <p>松尾恒一氏制作の民俗研究映像上映</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「興福寺・春日大社―神仏習合の祭儀と支える人々― ・「薬師寺 花会式―行法と支える人々― <p>松尾恒一氏による映像の解説</p> <p>小池淳一氏「平成20年度民俗研究映像制作要領について」</p> <p>第5回研究会：9月23日（火）13時30分～、本館講堂・第2会議室</p> <p>韓国国立文化財研究所で撮影、制作した映像の上映</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「安東地方の河回村における別神グッドの仮面劇」 (2005年、林奉男監督、Fortune Media 製作) ・「安東権氏沖斎権機 宗家の祭礼と供物」 (2004年、金光植監督、民族映像製作) <p>崔淑慶氏（韓国国立文化財研究所、本館外国人研究員）による映像の解説</p> <p>崔淑慶氏「日本の無形遺産記録の方法論の現況と課題」</p> <p>第6回研究会：1月上旬～2月下旬、本館講堂ほか</p> <p>映像論をテーマにした研究会を計画中</p>

20 年 度 研 究 成 果	<p>今年度はまず、行事の雨天中止等によって作業の遅れていた松尾恒一氏制作の「興福寺・春日大社―神仏習合の祭儀と支える人々―」と「薬師寺 花会式―行法と支える人々―」が完成した。前者は、興福寺と春日大社が一体となって形成し、現在に伝承される神仏習合の祭儀と、それを補佐し、ときに演じ手とも、伝承者ともなった堂舎の造営に携わる職人に注目した作品である。後者は、毎年3月末～4月初めに行われる薬師寺最大の年中行事“花会式”の全貌を明らかにし、かつそれを補佐し、支える堂童子の役割に迫った作品である。これらはともに、11月29日(土)の映像フォーラム3「海を渡った仏教 儀礼と芸能」で一般に初公開される。</p> <p>映像制作では、小池淳一氏が「筆記の近代誌―万年筆をめぐる人びと」を制作中であり、青木隆浩が来年度制作予定の「平成の酒造り」(仮題)に関して準備を進めている。</p> <p>研究会では、昨年度と同様に新作の民俗研究映像の上映と今年度民俗研究映像の制作要領についての検討、映像論に関する議論(予定)をするとともに、新たな試みとして韓国国立文化財研究所の学芸研究士で本館外国人研究員(4月1日～9月26日)の崔淑慶氏を迎え、無形文化を題材にして映像記録の日韓比較をおこなった。</p>
20 年 度 研 究 の 自 己 評 価	<p>行事の雨天中止等によって作業の遅れていた松尾恒一氏制作の2作品が無事完成したことは、まず大きな成果といってよいだろう。それらは、現在進行中の本館基盤共同研究「中世における儀礼テキストの総合的研究」の中間成果と併せて、映像フォーラム3「海を渡った仏教 儀礼と芸能」(11月29日、新宿明治安田生命ホール)で一般に初公開される。このように民俗研究映像の新作を共同研究の中間成果報告と併せて一般公開することは、学問上だけでなく、社会一般に向けた貢献としても自己評価できる。</p> <p>また、小池淳一氏制作の「筆記の近代誌―万年筆をめぐる人びと」では、管理部財務課契約係の協力を得て、一般入札にかかる仕様書や契約書の整備を進めることができた。これは、「民俗研究映像の資料論的研究」(代表:内田順子、2004～2006年度)から引き継いだ大きな課題であったため、本共同研究会としては、大きな成果であった。</p> <p>最後に、今年度は映像を用いた無形文化の国家間比較をおこなった点が特筆に値する。松尾氏の映像フォーラム3「海を渡った仏教 儀礼と芸能」では、大陸の影響を受けた日本の仏教儀礼を韓国や中国と比較しており、第5回研究会では、韓国と日本における映像記録の制作と保存について比較検討をおこなった。近年ますます東アジアの比較研究が盛んになっている中で、これらの試みは時宜を得たものと考えている。</p>
21 年 度 以 降 の 研 究 計 画	<p>まず、22年度から次期3年間の「民俗研究映像」に関する基盤共同研究を立ち上げる計画を立てている。制作担当もほぼ固まっており、21年度から22年度制作担当の内田順子が事前の調査と準備を開始する。</p> <p>また、これまでと同様、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。</p>
研究成果公開方法(中間報告・研究報告・出版物刊行・フォーラム・展示・シンポジウムなど)	
<p>中間報告は毎年、提出していただきます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本報告刊行予定年度 平成 年度末(研究報告・単行本等) 2. <u>フォーラム</u> 企画展示・総合展示・国際研究集会・国際シンポジウム・研究セミナー・その他 3. 収集資料報告(史料、資料、映像、音声、その他) 4. その他(<u>民俗研究映像</u>) <p>※計画のものに○をつけ、具体的にご記入ください。</p>	

【平成21年度】

「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」2007～2009年度
(研究代表者 青木隆浩)

1. 目的

歴博では1988年より、映像を用いた民俗学の研究手法として民俗研究映像の制作を進めてきたが、制作された映像を学術的に評価することや、映像を資料として蓄積し、それらを再分析・再活用できる状態にするための方法についてはこれまで十分な議論がおこなわれてこなかったとの反省があった。そこで、2004～2006年度に「民俗研究映像の資料論的研究」を立ち上げ、過去または新規制作の作品について議論を行うとともに、制作後の作品を保存・活用するにあたって、制作会社との契約についてどのようなものが適切であるか検討を進めてきた。その結果、契約のあり方についてはおおよその見通しがついできた。

だが、一方で法的な権利関係の処理や過去の作品の劣化、映像素材の保存といった大きな問題が残っている。そこで、本研究会では民俗研究映像の制作を継続してそれに対する議論をおこなうとともに、共同研究員間で法的な権利関係について処理方法を共有し、かつ既存作品のデジタル化による保存・活用と映像素材の整理を進めていく。

2. 今年度の研究目的

映像制作：小池淳一「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」

内容：人間にとって文字を用いて記録を残すことができるようになったことは、文化の歴史のなかで大きな転換であったに違いない。民俗学はそうした文字記録と一線を画することで独自の文化史を構築してきたが、近代において庶民生活は文字とそれに連なるさまざまな事象と実は無縁ではない。積極的に文字とそれに依拠する文化とを民俗学的な視点から取り上げ、筆記行為とその物質的環境の形成について映像による記録作成を行う必要があると考えられよう。具体的には日本近代において長く公的な筆記具として遇されてきた万年筆とその製作・販売をめぐる民俗誌的な映像を作成する予定である。

その他、民俗研究映像の完成品上映とそれに対する検討、映像論に関する研究会の開催、過去の作品のデジタル化、映像素材の整理・保存、法的な権利関係の処理をおこなう。

3. 今年度の研究経過

第4回研究会

日時：2008年7月13日（日）13時30分～

場所：国立歴史民俗博物館 講堂・第2研修室

上映会：松尾恒一制作の民俗研究映像

「興福寺・春日大社—神仏習合の祭儀と支える人々—」（約70分）

「薬師寺 花会式—行法と支える人々—」（約70分）

松尾恒一による解説と質疑応答

第5回研究会

日時：2008年9月23日（火・祝）13時30分～

場所：国立歴史民俗博物館 講堂・第2会議室

上映：「安東地方の河回村における別神グッドの仮面劇」（2005年）

朴奉男監督，Fortune Media 製作，30分

「安東権氏沖齋権 宗家の祭礼と供物」（2004年）

金光植監督，民族映像製作，29分47秒

映像解説：崔淑慶（チェ・スクン，韓国国立文化財研究所，本館外国人研究員）

報告：崔淑慶「日本の無形遺産記録の方法論の現況と課題」

質疑応答

第6回研究会

日時：2009年2月28日（土）13時30分～

場所：国立歴史民俗博物館 講堂・第2会議室

上映：川瀬慈監督の人類学映像

「ラリベロッチー終わりなき祝福に生きるー」（2007年，30分，日本語字幕）

「Room 11, Ethiopia Hotel」（2007年，23分，日本語字幕）

報告：川瀬慈「デジタル時代の人類学映画の課題と展望」

2009年度民俗研究映像制作企画：青木隆浩「平成の酒造り」（仮題）

質疑応答

4. 今年度の研究成果

[映像制作]

共同研究員の小池淳一が「筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー」というタイトルで民俗研究映像を制作した。とくに，ここ数年間の大きな課題であった制作要領や仕様書の作成，映画会社や出演者との権利関係においては，だいぶ整備された。

研究会においては，第4回でまず松尾恒一制作の民俗研究映像「興福寺・春日大社ー神仏習合の祭儀と支える人々ー」と「薬師寺 花会式ー行法と支える人々ー」を上映し，歴博映像フォーラム3に向けた討論をおこない，第5回で民俗映像の制作が盛んな韓国の作品を上映し，その方法論を比較検討した。第6回では映像人類学の分野で高い評価を受けている川瀬慈監督を招き，代表的な作品2本を上映するとともに，撮影・編集の手法や制作の意図などについて議論をおこなった。

また，研究代表者の青木隆浩が来年度制作予定の「平成の酒造り」（仮題）に向けて，出演者への協力依頼や撮影準備をおこなった。

[歴博映像フォーラム]

日時：2008年11月29日（土）13時00分～17時00分

場所：新宿明治安田生命ホール

内容：第3回目の歴博映像フォーラムは，「海を渡った仏教 儀礼と芸能」と題し，松尾恒一制作の民俗研究映像「薬師寺花会式～行法と支える人々～」と「興福寺・春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～」を上映した。その後，松尾恒一の司会により阿部泰郎（名古屋大学大学院）と尹光鳳（広島大学大学院）で討論会をおこなった。

5. 共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

川村 清志 札幌大学文化学部

敷田 麻実 北海道大学大学院国際広報メディア研究科

篠原 徹	人間文化研究機構	湯澤 規子	明治大学経営学部
◎青木 隆浩	本館・研究部・准教授	上野 和男	本館・研究部・教授
○内田 順子	本館・研究部・准教授	小池 淳一	本館・研究部・准教授
佐藤 優香	本館・研究部・助教	常光 徹	本館・研究部・教授
新谷 尚紀	本館・研究部・教授	関沢まゆみ	本館・研究部・准教授
原山 浩介	本館・研究部・助教	松尾 恒一	本館・研究部・准教授
安室 知	本館・研究部・教授	山田 慎也	本館・研究部・准教授
[リサーチアシスタント]			
太田 岳人	千葉大学・大学院生		

平成22年度 国立歴史民俗博物館 共同研究計画書（新規）

研究区分	<input type="checkbox"/> 基幹研究	<input type="checkbox"/> 広領域歴史創成研究 <input type="checkbox"/> 多元的フィールド解析研究 <input type="checkbox"/> その他			
	<input checked="" type="checkbox"/> 基盤研究	<input type="checkbox"/> 歴史資源開発研究（ <input type="checkbox"/> 科学的資料分析研究 <input type="checkbox"/> 総合的年代研究 ） <input checked="" type="checkbox"/> 先端博物館構築研究（ <input checked="" type="checkbox"/> 高度歴史情報化研究 <input type="checkbox"/> 博物館学的研究 ）			
	<input type="checkbox"/> 「開発型」				
研究課題名	民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究				
	所属・職名・専門分野		氏名	エフォート (%)	
研究代表者	本館研究部・准教授・音楽学／民俗学		内田順子	30	
研究副代表者	本館研究部・助教・民俗学		松田 睦彦	20	
研究組織	氏名	所属機関・職名・専門分野	分担課題	エフォート (%)	
	梅野 光興 分藤 大翼 村尾 静二 新谷 尚紀	高知県立歴史民俗資料館・学芸専門員・民俗学 信州大学全学教育機構・准教授・民族学 総合研究大学院大学葉山高等研究センター・助教・民族学 國學院大學・教授・民俗学	民俗映像論 映像資源化論 映像制作論 民俗映像論	10	
	青木 隆浩	本館研究部・准教授・民俗学	民俗映像論		
	小池 淳一	本館研究部・准教授・民俗学	民俗映像論	10	
	関沢 まゆみ	本館研究部・准教授・民俗学	民俗映像論	10	
	常光 徹	本館研究部・教授・民俗学	民俗映像論	10	
	松尾 恒一	本館研究部・准教授・民俗学	映像制作	10	
	山田 慎也	本館研究部・准教授・民俗学	民俗映像論	20	
	上野 祥史	本館研究部・准教授・東アジア考古学	博物館映像論	10	
	鈴木 卓治	本館研究部・准教授・博物館情報システム学	動画ネットワーク論	10	
	柴崎 茂光	本館研究部・助教・民俗学(H23.7月から)	地域資源管理論の映像化	10	
	○松田 睦彦	本館研究部・助教・民俗学	映像制作		
	◎内田 順子	本館研究部・准教授・音楽学／民俗学	総括／映像制作	20 30	
	外部 4名 内部 11名 計 15名				
	R A の 希 望 : 有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/>				
共同研究メンバーの公募への希望 : 有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/>					
研究期間	平成 22 年度 ～ 平成 24 年度 (3年間)				

(課題名) 民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究

<p>研究目的</p>	<p>第1期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(2004～2006年、代表：内田順子)では、制作から活用にいたるプロセスを検討し、権利処理等、活用に支障のないかたちで映像を資料として残すためのワークフローを構築し、第2期「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」(2007～2009年、代表：青木隆浩)ではそれを実践的に行うことで映像制作を行ってきた。その結果、2006年度以降、歴博映像フォーラムを開催して作品をひろく一般公開しているほか、2007年度からは、権利関係の処理が済んだ作品、コピーガード対応が済んだ作品から順に、研究資料としてDVDで館外への貸し出しを実施するなど、成果の公開を促進してきた。また第2期では、過去の作品の素材のコピーを作成するなど、映像の保存対策も講じてきた。</p> <p>しかしながら、多量に存在する撮影素材の保存と活用については、適切なメディア、フォーマット、データベースなど、技術的な問題を解決するという課題が残された。そこで第3期では、大学における民族学や科学分野での映像の制作と資源化のとりくみや理論構築を参考にしつつ、新規で制作する3作品と、過去に制作された3作品を対象に、撮影素材の保存と活用のためのデータベース化まで含んだワークフローを構築することを目的とした共同研究を実施する。また、新規で制作する作品では、それぞれの作品のテーマに適したかたちで撮影地の人びとや研究者などと共同で制作してゆく。成果を共有しつつ発信することによって、日常生活や儀礼、信仰、生業の伝承という問題への関心を高めるとともに、立場の異なる人びとを結びつけ、あらたなネットワーク構築に貢献できる映像メディアのありかたの開発へとつなげてゆくためである。</p>
<p>研究計画 各年次別</p>	<p>【第1年度】 内田順子・青木隆浩「生活技術伝承における映像活用」 生活形態の変化や自然素材の入手の難しさから、かつてはその地域では誰でも知っていた生活技術の伝承が困難な状況になっている。それぞれの地域では、さまざまなネットワークをつくり、その活動を通して生活技術の伝承を図ろうと取り組んでいる。地域の有志で長年取り組んでいる平取アイヌ文化保存会による植物利用技術の伝承活動、国・道・白老町によっておこなわれているアイヌの伝統的生活空間(イオル)再生事業、沖縄県西表島の地域博物館の創設の取り組みを撮影対象とし、これらの地域的取り組みに、記録としての映像をどのように活用することが可能であるのか、映像による記録、データベース化、地域への映像のフィードバックを行いつつ、地域ネットワークに参加する形で映像を制作してゆく。その他、2009年度作品に関する研究会、映像の研究資源化およびデータベース化に関する研究会、2009年度作品の英語版の制作、過去の作品のデジタル化を行う。</p> <p>【第2年度】 松尾恒一・関沢まゆみ「芸能・儀礼の伝承における映像活用」 祖霊信仰と結びついた荒神を神へと転じ、鎮める作法に特色のある比婆荒神神楽では、33年に一度、式年神楽が行われる。4日に及ぶ大規模な神楽の映像記録は、今後の民俗学研究にとって貴重な資料となると同時に、神楽を行っている地域の人々の伝承活動にも有意義なかたちで記録・保存・活用できる映像を制作する。その他、2010年度作品に関する研究会、映像の研究資源化およびデータベース化に関する研究会、2010年度作品の英語版の制作、過去の作品のデジタル化を行う。</p> <p>【第3年度】 松田睦彦・小池淳一「石屋の技術・生活の記録と映像活用」 瀬戸内島嶼部で古くから採石を行ってきた石屋の歴史、技術、良材を求めての移動、丁場での生活等を、戦後を中心に、愛媛県今治市の伯方島・大島、岡山県笠岡市白石島・北木島等の事例から取り上げる。生業技術は日々革新を続けている。したがって、戦後の技術変遷の記録は貴重な資料となる。また、現地の教育委員会や博物館等と協力し、地域文化としての日常への関心を高める活動のあり方について検討する。その他、2011年度作品に関する研究会、映像の研究資源化およびデータベース化に関する研究会、2011年度作品の英語版の制作、過去の作品のデジタル化を行う。</p>

研究成果公開方法（中間報告・研究報告・出版物刊行・フォーラム・展示・シンポジウムなど）	
<p>中間報告は毎年、提出していただきます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本報告刊行予定年度 平成 年度（研究報告・単行本等） 2. <input checked="" type="checkbox"/>フォーラム・企画展示・総合展示・国際研究集会・国際シンポジウム・研究セミナー・その他 3. 収集資料報告（史料、資料、映像、音声、その他） 4. その他（ DVD ） <p>※計画のものに○をつけ、具体的にご記入ください。</p>	
国立歴史民俗博物館のこれまでの研究プロジェクトとの関連	
<p>歴博では1988年より、映像を用いた民俗学の研究手法として民俗研究映像の制作をおこなってきたが、評価法や活用法についての課題が存在した。そこで第1期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」（2004～2006年、代表：内田順子）では、制作された映像の評価法や、映像の再活用をめぐる諸問題について検討した。ここでは、映像の再活用に必要な権利関係の理論的整理をおこなったほか、歴博映像フォーラムの実施によって成果を広く公開し、映像に関連する専門家を交えて映像について討論する場を設けた。また、「AINU Past and Present」では英語版を制作し、第4回モスクワ国際映像人類学フェスティバル（2008年）に応募し、審査を経て上映されるなど、積極的に第3者の評価を受ける場を設けた。続く第2期の「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」（2007～2009年、代表：青木隆浩）では、第1期で議論した権利関係の処理方法に基づき、各作品の個別事業を考慮しながら映像制作者や出演者との間で契約等を結び、再活用に支障のないかたちで映像を残す方法を実践したほか、積極的に英語版も制作し、歴博ホームページから情報発信も行っている。また、過去の作品の撮影素材のDVD化による保存措置を講じた。しかしながら、映像の保存法と活用法に関しては技術的な問題もあり、検討すべき課題が残されている。</p>	
国内外の研究状況	<p>映像アーカイブは急速に発展し続けている分野であり、リソースや技術的な問題で、世界の地域によって差があるのが実状である。2008年11月に東京国立近代美術館フィルムセンターにて「映像アーカイブの未来」と題するシンポジウムが行われ、海外で進むインフラ整備の現状と映画関連機関の将来的戦略が紹介された。映像制作から保存、活用へと繋がる新たなワークフローの構築は、法的な整備の必要性とともに、国内外を問わず、緊急の課題となっている。映画関連機関のみならず、大学などの研究機関においても地域映像アーカイブや、教員が収集した研究資料のアーカイブ構築が進められており、映像アーカイブ構築のノウハウや人材育成の必要性は年々増大する傾向にある。</p>
研究の特色	<p>映像アーカイブが成り立つためには、原資料の収集・保存・管理・利用のための施設と組織を有していることが不可欠で、さらに、多様な映像に関する専門家を組織として有していることや、人材育成の場としての高等教育機関を有していることによって、映像アーカイブは発展が可能となる。そうした機能を有する機関は他にもあるが、歴博では、1988年から映像による民俗研究を行っており、それらの映像は、二度と撮影することの出来ない、1回限りの記録の蓄積である。また、現在の映像記録は、未来の研究にとって、やはり二度と撮影することの出来ない、唯一の記録となってゆくものである。外部から映像を購入したり提供を受けたりして構築される映像アーカイブとは根本的に異なるものである。本研究によって、過去の映像作品のアーカイブ化を図りながら、未来の研究資源として現在を記録し続け、それらの保存・活用を図るためのワークフローを構築することによって、日本の歴史と民俗を研究する機関としての機能の一層の充実化につなげることができる。</p>

「民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究」2010～2013年
(研究代表者 内田 順子)

1. 目的

歴博が民俗研究の一環として1988年より行ってきた民俗研究映像に関して、完成作品と素材映像の保存・活用を推進するとともに、新規で制作する映像の方法論について、館内外の研究者とともに検討するため、2004年以降、共同研究の枠組みで取り組んできた。

第1期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(2004～2006年、代表：内田順子)では、制作から活用にいたるプロセスを検討し、権利処理等、活用に支障のないかたちで映像を資料として残すためのワークフローを構築し、第2期「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」(2007～2009年、代表：青木隆浩)ではそれを実践的に行うことで映像制作を行ってきた。その結果、2006年度以降、歴博映像フォーラムを開催して作品をひろく一般公開しているほか、2007年度からは、権利関係の処理が済んだ作品、コピーガード対応が済んだ作品から順に、研究資料としてDVDで館外への貸し出しを実施するなど、成果の公開を促進してきた。また第2期では、過去の作品の素材のコピーを作成するなど、映像の保存対策も講じてきた。

しかしながら、多量に存在する撮影素材の保存と活用については、適切なメディア、フォーマット、データベースなど、技術的な問題を解決するという課題が残された。そこで第3期では、大学における民族学や科学分野での映像の制作と資源化のとりくみや理論構築を参考にしつつ、新規で制作する3作品と、過去に制作された3作品を対象に、撮影素材の保存と活用のためのデータベース化まで含んだワークフローを構築することを目的とした共同研究を実施する。また、新規で制作する作品では、それぞれの作品のテーマに適したかたちで撮影地の人びとや研究者などと共同で制作してゆく。成果を共有しつつ発信することによって、日常生活や儀礼、信仰、生業の伝承という問題への関心を高めるとともに、立場の異なる人びとを結びつけ、あらたなネットワーク構築に貢献できる映像メディアのありかたの開発へとつなげてゆくためである。

2. 今年度の研究目的

今年度のテーマ：生活技術伝承における映像活用

生活形態の変化や自然素材の入手の難しさから、かつてはその地域では誰でも知っていた生活技術の伝承が困難な状況になっている。それぞれの地域では、さまざまなネットワークをつくり、その活動を通して生活技術の伝承を図ろうと取り組んでいる。地域の有志で長年取り組んでいる平取アイヌ文化保存会による植物利用技術の伝承活動、国・道・白老町によっておこなわれているアイヌの伝統的生活空間(イオル)再生事業、博物館を基盤とした伝承活動を行っている白老のアイヌ民族博物館の取り組みを撮影対象とし、これらの地域的取り組みに、記録としての映像をどのように活用することが可能であるのか、映像による記録、データベース化、地域への映像のフィードバックを行いつつ、地域ネットワークに参加する形で映像を制作してゆく。その他、2009年度作品に関する研究会、映像の研究資源化およびデータベース化に関する研究会、2009年度作品の英語版の制作、過去の作品のデジタル化を行う。

3. 今年度の研究経過

第1回研究会

日時：5月30日（日）14:00～18:30

場所：国立歴史民俗博物館 応接室・講堂

内容：共同研究会の目的と共同研究員の紹介

「平成の酒造り 製造編」（88分）

「平成の酒造り 継承・革新編」（88分）

制作者による解説（青木隆浩）

質疑・討論

第2回研究会

日時：1月23日（日）13:30～17:00

場所：国立歴史民俗博物館 第二会議室

内容：「アイヌの伝統と現在」の制作の中間報告（上映と解説：内田順子）

討論

第3回研究会

日時：2月17日（木）15:00～18:00

場所：株式会社東京光音（渋谷区初台）

内容：古いフィルムの保存・複製を行っている業者において、施設の見学をおこなったほか、基本的な事柄から専門的な事項にいたるまで、技術者の解説を受け、質疑をおこなった。

4. 今年度の研究成果

〔映像制作〕

内田順子「アイヌの伝統と現在」

今年度は、アイヌ文化の継承活動を対象として、民俗研究映像の制作をおこなった。

地域の有志による伝承活動として、平取アイヌ文化保存会の活動を記録したほか、博物館という場を基盤として行われている伝承活動として、白老のアイヌ民族博物館の取り組みを撮影した。平取では、山の資源に関する生活文化の伝承活動を中心に撮影した。一方白老では、シリカプ（カジキ）の送りの儀礼など、海の資源に関わる儀礼を中心に撮影した。編集では、アイヌ文化の地域的多様性、保存会/博物館という伝承基盤のほか、。現在進行形で進んでいるアイヌ文化振興事業との関わりなど、映像に映り込んでいる2010年度だからこそ起こりえた様々な事象に留意しつつ編集をおこなった。受け継ぐべき「伝統」について、それを伝承しようとする人々自身が、生活の中で、伝承活動の中で、さまざまに模索している姿が記録できたのではないか。

〔民俗研究映像の英語版制作〕

「平成の酒造り 製造編」（2009年度、青木隆浩制作）

「平成の酒造り 継承・革新編」（2009年度、青木隆浩制作）

〔研究会〕

第1回研究会では、2009年度に青木隆浩が制作した「平成の酒造り 製造編」（2009年度、青木隆浩制作）および「平成の酒造り 継承・革新編」を上映し、それらの内容について議論をおこなった。その際、映像

を編集して完成させる前に、撮影素材を共同研究員で見て、どのように仕上げていくのがよいのか、制作者と討論を行ったほうがよいとの提案があった。そこで第2回研究会では、2010年度制作の「アイヌの伝統と現在」の素材の一部を上映し、編集の方向性について研究員で議論をおこなった。制作者自身は、制作期間中、撮影対象を近視眼的に見てしまう傾向があるため、作品完成前に第3者と意見を交わすプロセスの重要性が実感された。第3回研究会は、古いフィルムの保存と複製についての専門的な知識と技術を有する業者を巡検し、技術者の解説と質疑を経て、映像の保存や活用について留意すべき事柄の整理をおこなった。

〔歴博映像フォーラム〕

「平成の酒造り」

日時：2010年2010年9月4日（土）11時00分～17時30分

場所：新宿明治安田生命ホール

上映：「平成の酒造り 製造編」（2009年度 青木隆浩制作）

「平成の酒造り 継承・革新編」（2009年度 青木隆浩制作）

講演：岡本竹己（栃木県産業技術センター食品技術部・特別研究員）「栃木の酒造りと次世代酒造技術者育成への取り組み」

報告：宮地英敏（九州大学附属図書館付設記録資料館・准教授）「杜氏労働の歴史的特性」

湯澤規子（筑波大学大学院生命環境科学研究科・助教）「甲州勝沼におけるぶどう生産とワイン醸造の展開」

〔撮影素材のデジタル化〕

昭和30年代に屋久島で撮影されたホームムービーの8mmフィルム44本の提供が現地調査により受けられることになり、内容的に、歴博の民俗研究の資料として重要であると認められたため、HDテレシネをおこなった。

5. 共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

乾 尚彦	学習院女子大学	梅野 光興	高知県立歴史民俗資料館
新谷 尚紀	國學院大學	分藤 大翼	信州大学全学教育機構
村尾 静二	総合研究大学院大学葉山高等研究センター	青木 隆浩	本館研究部・准教授
小池 淳一	本館研究部・准教授	関沢まゆみ	本館研究部・准教授
常光 徹	本館研究部・教授	松尾 恒一	本館研究部・教授
山田 慎也	本館研究部・准教授	上野 祥史	本館研究部・准教授
鈴木 卓治	本館研究部・准教授	○松田 睦彦	本館研究部・助教
◎内田 順子	本館研究部・准教授		

平成20年度歴博フォーラム実施計画書

2月 5日

テーマ名称	歴博映像フォーラム3「宗教儀礼と表象」	
開催日時	平成20年11月29日(土) 13時00分～17時00分	
開催場所	歴博講堂 <input type="checkbox"/> 館外 (新宿明治安田生命ホール)	
実施概要等	平成19年度制作の民俗研究映像「薬師寺花会式、行法と支える人々」(仮)、「興福寺・春日大社、神仏習合の祭儀と芸能」(仮)、各一時間、の一般公開を目的とする上映を行う。 あわせて、仏教儀礼と、これを上演の基盤とした芸能について、韓国・中国との比較を視点とする討議を、専門の研究者とともに行う。	
実行責任者	研究部 松尾恒一	
構成人員	講演：康保成(中国・中山大學・教授) または、ブライアン・ルパート(米国・イリノイ大学・教授)	旅費：歴博基幹研究「中世における儀礼テキストの総合的研究」(阿部泰郎・名古屋大学教授)より支出
	討論：尹光鳳(広島大学・教授)	同上
	討論：阿部泰郎(名古屋大学・教授)	同上
	司会・討論：松尾恒一・本館准教授	同上
映像(○を付す)	映画・ <input type="checkbox"/> ビデオ・スライド・OHP・その他(DVD)	
その他	レジュメ作成(<input checked="" type="checkbox"/> ・ 無) フォーラム本の刊行(有 ・ <input checked="" type="checkbox"/>) 刊行予定時期 年 月頃 ・外部3名の謝金についてはフォーラム経費より支出 ・康保成教授は、翻訳・通訳が必要。経費は、歴博基幹研究「中世における儀礼テキストの総合的研究」(阿部泰郎・名古屋大学教授)より支出	

映像フォーラム3「海を渡った仏教 儀礼と芸能」開催要項

1. 主催：人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
2. 会期：平成20年11月29日（土） 13時～17時15分
3. 日程
13:00～13:05 開会のあいさつ 館長
13:05～13:25 フォーラムの趣旨と映像の解説 松尾 恒一（国立歴史民俗博物館）
13:25～14:35 映像上映1「薬師寺花会式～行法と支える人々～」
14:35～14:45 休憩
14:45～15:55 映像上映2「興福寺・春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～」
15:55～16:05 休憩
16:05～17:10 報告・討論 阿部 泰郎(名古屋大学)・尹 光鳳(広島大学)・松尾 恒一
17:10～17:15 閉会のあいさつ
4. 会場：新宿明治安田生命ホール（東京都新宿区西新宿1-9-1 明治安田生命新宿ビルB1F）
5. フォーラムの趣旨と内容

平成19年度制作の民俗研究映像「薬師寺花会式、堂童子と仏教儀礼」、「興福寺・春日大社、神仏習合の祭儀と芸能」、各70分、の一般公開を目的とする上映を行う。

あわせて、現在進行中の本館基盤共同研究「中世における儀礼テキストの総合的研究」(H20～23)の成果の中間公開の一環として、研究代表者(阿部泰郎・名古屋大学)、研究分担者(尹光鳳・広島大学)とともに、仏教儀礼と、これを上演の基盤とした芸能について、韓国・中国との比較を視点に入れつつ、東アジアにおいて果たした仏教の文化的、精神的意義と、その現代への伝承の特質を考える。

*映像の内容は、下記の通り。

「薬師寺花会式～行法と支える人々～」

薬師寺の一年で最大の年中行事“花会式”。3月末～4月の初めに7日間、練行衆により懺悔を中心として昼夜に繰り返行われる、平安時代より続く行法。ほかに授戒、咒師による結界、牛玉加持、香水授与、神供、鬼追い式、等々、数々の密教的、民俗的な作法の数々が行われる。その行事の全貌を明らかにするとともに、これらを補佐し、支える堂童子の役割に迫る。

「興福寺・春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～」

興福寺と春日大社が一体となって形成され、現在に伝承される神仏習合の祭儀。大陸より伝来した舞楽や、「咒師走り」といった独特の名で呼ばれる翁舞、巫女の神楽、追儺等、古代・中世に展開した豊かな芸能世界が繰り広げられる世界でもある。これらをときに補佐し、ときに演じ手とも、伝承者ともなった、堂舎の造営に携わる職人にも注目する。

6. 印刷物：冊子（A4版）

当日の討論者、阿部泰郎、尹光鳳のレジュメのほかに、ブライアン・ルパート(アメリカ・イリノイ大学・教授)、康保成(中国・中山大学・教授)の寄稿を依頼する。

7. 担当者：松尾 恒一(本館研究部 准教授 民俗研究系)
阿部 泰郎(名古屋大学・教授)
尹 光鳳(広島大学・教授)

歴博映像フォーラム3 実施報告

名 称	歴博映像フォーラム3 「海を渡った仏教 儀礼と芸能」
期 日	2008年11月29日(土) 13:00～17:15
会 場	新宿明治安田生命ホール (東京都新宿区西新宿1-9-1 明治安田生命新宿ビルB1F)
参 加 者	フォーラムの趣旨と映像の解説 松尾 恒一 (国立歴史民俗博物館民俗研究系) 報告と討論 阿部 泰郎 (名古屋大学大学院文学研究科) 尹 光 鳳 (広島大学大学院総合科学研究科) 司会：松尾 恒一
聴 講 者	定 員 320名 申込人数 357名 入場者数 293名 (欠席89名、当日参加者25名) 出席率 82.1% (当日参加者除く=75.1%) *総入場者数 306名 (一般293名、関係者13名、マスコミ0名)
総 括	<p>平成19年度制作の民俗研究映像「薬師寺花会式～行法と支える人々～」 「興福寺・春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々～」(各70分)、の一般公開を目的とする上映と、映像内容に関して、専門研究者による討議を行った。</p> <p>両作品は、いずれも大和において、古代に起源を有する仏教儀礼で、現代まで伝承されてきている事例について、その民俗宗教としての特質を追及したものである。</p> <p>討議は、こうした特質が形成された歴史的な経緯や、その東アジアの仏教における位相を追求しようとしたもので、本年度開始された本館の基盤共同研究「中世における儀礼テキストの総合的研究」(H20～23)の公開討論として行った。松尾の司会進行により、研究代表者である阿部泰郎氏と、研究分担者の一人である尹光鳳氏が、基調報告を行った。</p> <p>阿部氏は「堂童子」と題して、本映像でも「支える人々」といった主題の一つとしてとりあげられている、寺院に所属して僧侶に奉仕する職掌の歴史を中心として、その特質について報告を行った。尹氏は「韓日仏教儀礼と芸能」と題して、古代における韓半島の仏教儀礼と、そこでの芸能の実態・様相と、同時代の日本の事例の比較、及び現代に伝承される日本の事例とその特質について報告を行った。</p> <p>なお、共同研究「中世における儀礼テキスト…」の研究分担者でもある Brian Ruppert 氏(イリノイ大学)より、本映像の英語版による欧米の研究者への紹介、研究資料としての、また大学を主とする教育の場での活用が望まれるとの提言があり、今後、東アジアのみならず、欧米の研究者との共同研究と、その一般への成果の発信を考えてゆきたい。</p>
特記事項	
報道関係	なし

平成 21 年度歴博映像フォーラム実施計画書

10 月 21 日提出

テーマ名称	(和文) 筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと— (英文)
開催日時	平成 21 年 12 月 5 日 (土) 10 時 00 分 ~ 16 時 00 分
開催場所	歴博講堂 ○館外 (東京都内を希望)
実施概要等	平成 20 年度製作の民俗研究映像「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」を軸に、映像記録で職人技を撮影、保存していくことの可能性と意義について、作品上映と講演およびパネルディスカッションにより検討する。 上映予定作品「筆記の近代誌」 「筆記の近代誌—資料編—」
実行責任者	小池 淳一 (民俗研究系)
構成人員	(内部 1 名・外部 3 名) 外部者については、所属等を記載 基調講演：古山浩一 (予定、画家) 報告：重信幸彦 (北九州市立大学教授) 報告：川村清志 (札幌大学准教授) 趣旨説明・司会：小池淳一 (歴博准教授)
映像 (○を付す)	○映画・ビデオ・スライド・OHP・その他 ()
その他	○レジュメ作成 (有・無) フォーラム本の刊行 (有・無) 刊行予定時期 年 月 頃

歴博映像フォーラム4「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」開催要項

日時 平成21年12月5日(土) 10:30~17:15

場所 新宿明治安田生命ホール 東京都新宿区西新宿1-9-1

概要 近代日本においてさまざまなかたちで用いられてきた万年筆の製造技術を現代においてとらえ、その技の系譜と心意を映像によって記録することを試みた民俗研究映像「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」(平成20年度製作)の上映を軸とするフォーラムである。ここでは映像の上映およびそれに関わる講演、報告、討論をおこない、民俗研究における映像利用の可能性や職人技術の保存、顕彰にまつわるさまざまな問題について考える。

日程

※総合司会 松尾恒一(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)

10:30~10:40 開会の挨拶 常光 徹(国立歴史民俗博物館副館長)

趣旨説明 小池淳一(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)

10:40~11:35 上映Ⅰ「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—(本篇)」

11:35~12:35 基調講演 「万年筆に魅せられて—職人技を追う—」

古山浩一(画家)

12:35~13:35 休憩(昼食)

13:35~14:05 報告1「ハイブリッドとしての万年筆」

川村清志(札幌大学文化学部教授)

14:05~14:35 報告2「万年筆をめぐる技と身体」

重信幸彦(北九州市立大学基盤教育センター教授)

14:35~14:50 休憩

14:50~15:30 討論(古山、川村、重信)、司会 小池淳一

15:30~17:10 上映Ⅱ「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—(列伝篇)」

17:10~17:15 閉会の挨拶

実行責任者 小池淳一(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)

実行委員 青木隆浩(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)

内田順子(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)

歴博映像フォーラム4 実施報告

名 称	歴博映像フォーラム4 「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—」
期 日	2009年12月5(土) 10:30～17:15
会 場	新宿明治安田生命ホール(東京都新宿区西新宿1-9-1 明治安田生命新宿ビルB1F)
参 加 者	趣旨説明 小池 淳一(国立歴史民俗博物館) 上 映 I 「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—(本篇)」 基調講演 「万年筆に魅せられて—職人技を追う—」古山 浩一(画家) 報 告 1 「ハイブリッドとしての万年筆」川村 清志(札幌大学) 報 告 2 「万年筆をめぐる技と身体」重信 幸彦(北九州市立大学) 討 論 (古山、川村、重信)、司会 小池淳一 上 映 II 「筆記の近代誌—万年筆をめぐる人びと—(列伝篇)」
聴 講 者	定 員 320名 申込人数 210名 入場者数 171名(欠席56名、当日参加者12名、関係者5名) 出席率 79%(当日参加者除く73%)
総 括	<p>映像フォーラムは民俗研究映像を軸とした学術フォーラムである。4回目を迎えた今回は万年筆の製造、流通、修理にまつわる職人の技とその記録、顕彰にまつわる問題を取り上げた。近代の代表的な筆記具のひとつである万年筆は、単なる筆記具としての利用以外にも長期の愛用、細密な装飾、多様な書き味などの特色があり、手書きの文化を象徴する道具としての意味合いも持っている。本フォーラムでは、自己の画業に万年筆を積極的に活用するばかりではなく、多くの職人との対話記録を残してきた古山浩一氏に基調講演を依頼し、万年筆と職人技の魅力について存分に語っていただいた。報告1は多様な技術や鑑賞点の複合としての視点から川村清志氏に提言いただき、報告2では工業製品の完成度と個々人の使用法との間にある「余白」の重要性について重信幸彦氏に論じていただいた。討論では職人と日本の多様な文字表記の視点を中心に講演、報告の補足が行われた。2本の映像は併せて151分に及ぶ長編であったが、最後まで熱心に視聴する観客が大部分を占めた。</p> <p>今回のフォーラムを通して、万年筆という今日では趣味的にとらえられがちなモノを通して技や作業を記録することの重要性とそれに関する映像の有効性を提示することには成功したと思われる。ただし、映像フォーラムとしてはなお、留意・改善すべき問題点も存在することが明らかになった。特に製作、上映した映像の頒布、インターネットでの常時公開に関する希望が多く寄せられた。研究レベルでの記録にとどまらない映像の利用と一般への提供については、肖像権、編集権等の問題を含んでいる。その点での困難さがあることの啓蒙も必要であり、一方で、より有効な公開、活用方法について検討していく必要があることが判明したといえよう。また職人の技術保存については文字記録だけでは不十分極まりないことが確認されたが、記録製作には多くの制約があり、この点を意識した調査を多角的に継続していく必要があることが浮き彫りとなった。また広報についてはテーマごとの工夫が必要であるとの声が来場者からも寄せられた。この点についても模索を継続していきたい。</p>
特記事項	特になし。
報道関係	柘出版社

平成22年度歴博フォーラム実施計画書

11月 6日提出

テーマ名称	(和文) 映像フォーラム「平成の酒造り」(仮) (英文) The <i>sake</i> brewing industry in Heisei era
開催日時	平成 22年 9月 4日 or 18日 (土) 11時 00分 ~ 17時 30分
開催場所	歴博講堂 <u>館外</u> (東京23区内)
実施概要等	平成21年度制作の民俗研究映像「平成の酒造り」を上映するとともに、その舞台となった栃木県酒造業の最近10年間における技術的な取り組みを栃木県産業技術センターの岡本竹己氏に講演していただく。 また、上映された映像を主な題材として、近現代の職人技術について3人の研究者で討論をおこなう。
実行責任者	青木隆浩
構成人員	(内部 1名・外部 3名) 青木隆浩 (当館研究部) 岡本竹己 (栃木県産業技術センター食品技術部, 特別研究員) 宮地英敏 (九州大学附属図書館敷設記録資料館, 准教授) 湯浅規子 (筑波大学大学院生命環境科学研究科 助教)
映像 (○を付す)	<u>映画</u> ・ビデオ・スライド・OHP・その他 ()
その他	レジュメ作成 (<u>有</u> ・ 無) フォーラム本の刊行 (有 ・ <u>無</u>) 刊行予定時期 年 月頃

歴博映像フォーラム5「平成の酒造り」開催要項

日時：平成22年9月4日（土）11時～17時30分

場所：新宿明治安田生命ホール 東京都新宿区西新宿1-9-1

概要：関東地方の清酒製造業では、酒造りの一切を従来越後杜氏や南部杜氏といった出稼ぎの蔵人集団に任せていたが、1990年代中頃から彼らの数が急激に減ってきたため、自社で通年雇用の労働者を養成するか、あるいは経営者家族の一部が自ら酒を造るなどの対応を迫られるに至った。そして、現在では越後杜氏が関東地方にほとんどいなくなり、南部と地元の混成か、あるいは地元の労働力だけで酒造りを行うようになっている。今回のフォーラムでは、「下野杜氏」という新たな認証制度を設け、地元労働力の育成に取り組んでいる栃木県酒造業の現在を記録した民俗研究映像「平成の酒造り」を中心として、酒造技術と労働力編成の変遷について考える。

プログラム

- 11:00～11:10 開会の挨拶 館長
趣旨説明 青木隆浩（本館研究部民俗研究系）
- 11:10～12:40 上映Ⅰ「平成の酒造り 製造編」
- 12:40～13:30 休憩（昼食）
- 13:30～14:00 報告①「杜氏労働の歴史的特性」
宮地英敏（九州大学附属図書館付設記録資料館・准教授）
- 14:00～14:30 報告②「甲州勝沼におけるぶどう生産とワイン醸造の展開」
湯澤規子（筑波大学大学院生命環境科学研究科・助教）
- 14:30～15:30 講演「栃木の酒造りと次世代酒造技術者育成への取り組み」
岡本竹己（栃木県産業技術センター食品技術部・特別研究員）
- 15:30～15:40 休憩
- 15:40～17:10 上映Ⅱ「平成の酒造り 継承・革新編」
- 17:10～17:30 討論 司会：青木隆浩
閉会の挨拶

実行責任者 青木隆浩（本館研究部民俗研究系）

実行委員 内田順子（本館研究部民俗研究系）

歴博映像フォーラム5 実施報告

名 称	歴博映像フォーラム5 「平成の酒造り」
期 日	2010年9月4(土) 11:00~17:30
会 場	新宿明治安田生命ホール(東京都新宿区西新宿1-9-1 明治安田生命新宿ビルB1F)
参 加 者	趣旨説明 青木 隆浩(国立歴史民俗博物館) 上 映 I 「平成の酒造り 製造編」 報 告 1 「杜氏労働の歴史的特性」宮地 英敏(九州大学) 報 告 2 「甲州勝沼におけるぶどう生産とワイン醸造の展開」 湯澤 規子(筑波大学) 講 演 「栃木の酒造りと次世代酒造技術者育成への取り組み」 岡本 竹己(栃木県産業技術センター) 上 映 II 「平成の酒造り 継承・革新編」 討 論 (岡本、宮地、湯澤)、司会 青木 隆浩
聴 講 者	定 員 320名 申込人数 254名 入場者数 185名(欠席76名、当日参加者12名、関係者13名) 出席率 73%(当日参加者除く68%)
総 括	<p>映像フォーラムは民俗研究映像を軸とした学術フォーラムである。5回目を迎えた今回は、「下野杜氏」という独自の認証制度で地元労働力の養成に努力している栃木県を対象にして、現代の酒造りをとりまく環境を取り上げた。上映した映像のうち「製造編」では、栃木県内の酒造会社4社の酒造りの様子をまとめ、酒造好適米の栽培や刈り入れの様子、酒造りを経て、顧客サービスで終わる内容が上映された。「継承・革新編」では、酒造組合の行事と栃木県産業技術センターの技術指導に、酒造家の大吟醸造りと生酏造りの様子を挟み込む方法で構成している。</p> <p>「継承・革新編」の中に登場する栃木県産業技術センターの岡本竹己氏には「栃木の酒造りと次世代酒造技術者育成への取り組み」と題する講演を依頼し、栃木県における酒造の技術者養成の具体的な方法が紹介され、杜氏コース受講生の目標として栃木県酒造組合独自の「下野杜氏」認証制度による新たな杜氏誕生について語られた。</p> <p>酒造りに関連して、宮地英敏氏は「杜氏労働の歴史的特性」と題し、労働史研究における杜氏労働の分類や位置づけが報告され、湯澤規子氏は「甲州勝沼におけるぶどう生産とワイン醸造の展開」について、近年のワイン造りについて報告が行われた。</p> <p>今回のフォーラムは「酒」といういわゆる嗜好品がテーマであったためか、初めてフォーラムに参加された方々が多く、新たな聴講者を獲得できた。この点はポスター・チラシを含め、広報の成果の1つと考えられる。アンケートに記載された意見によれば、映像についての評価が2分されている状況が認められる。わかりやすい、あるいは焦点が絞れていないという意見に分かれた点は注目される。</p> <p>全体的には「よかった」・「どちらかというよかった」との感想が8割を占めており、「平成の酒造り」の現状の一端を伝えることができたといえよう。</p>
特記事項	特になし。
報道関係	榎出版社

2. 歴博が所蔵する資料群の活用について

(1) 外部評価

平田篤胤関係資料

荒野泰典

1. 平田篤胤関係資料の整理・購入と資料の概要

平田篤胤関係資料は、篤胤の子孫が宮司をつとめる平田神社（東京都渋谷区代々木）に伝来したもので、篤胤・鋏胤・延胤3代を中心とする資料群である。国立歴史民俗博物館では、2001年10月に館長宮地正人氏（当時）と助教授樋口雄彦氏（当時）が予備調査に着手し、翌年からは本格的に資料整理を実施した。それに基づいて、2003年から2005年にかけて同資料を購入し、社宝として同神社が保存する書画などの一部資料を除く大部分は同館に所蔵されることとなった。

同館に所蔵されることになった平田篤胤関係資料は、目録番号にもとづく件数で、8,098件、点数にすれば1万点を超える。この資料群は、それまでではないとされていた、天保期の『気吹舎日記』をはじめとする幕末・維新时期にいたる諸日記や会計帳簿類などからなる冊子類833件、門人帳17件、書簡類2,338件、草稿867件、和装(本)573件、版本1,496件などを中心に、従来ほとんど存在も知られず利用もされてこなかったものが多い。

2. 同資料の整理・目録作成、および研究とその成果の公開

この資料群は、平田家が大切に保存してきたものだ。その一部は、研究者が閲覧・利用したことがあり、なかでも、篤胤の著作の草稿・版本の類は『平田篤胤全集』の編纂のためなど、折に触れて調査・研究がなされたようだが、それ以外の膨大な文書・書籍・遺品などについては、かなり古い時期に平田家で整理された痕跡があるものの、ほとんど手つかずの状態だったと言ってよいようだ。

したがって、同資料群の調査は、資料1点ごとに文書整理用封筒に入れ、目録を取ることから始められている。この作業には、それ以前から平田家資料の調査研究を行ってきた吉田麻子氏（当初早稲田大学大学院生、後相模女子大学非常勤講師）の他、熊澤恵理子氏（東京農業大学助教授）・遠藤潤氏（国学院大学助手）の3人の若手研究者が参加した。

科学研究においては、飯田市・秋田市などで、関連資料の調査も行っている。

そして、2003年度からは「平田国学の再検討―篤胤・鋏胤・延胤文書の史料学的研究―」というテーマで科学研究費補助金（基盤研究（B））を受け（2006年まで4年間）、また、同年から本研究は歴博内部の「個別共同研究」に位置づけられた。

簡略な1点目録の作成は2004年2月にはほぼ終了しているが、それに伴って、成果の公開も進められている。それらは、i.資料目録の編纂・刊行、ii.重要資料の翻刻・

刊行、iii. 成果の一般公開①歴博特別企画「明治維新と平田国学」（2004年10月13日～12月5日）、②資料の公開、の3点において行われている。それぞれについて、概観する。

i. 資料目録の編纂・刊行

資料目録は、まず、上記科研の報告書として、まとめられた。

- ・平成15年度～平成18年度科学研究費補助金〔基盤研究（B）〕研究成果報告書『平田国学の再検討―篤胤・鍊胤・盛胤文書の史料学的研究―（1）（2）』（研究代表者 樋口雄彦）2007年3月

この報告書に収録された目録は、同時に「平田篤胤関係資料目録」『国立歴史民俗博物館資料目録〔6〕』（2007年3月）として刊行された（ただし、非売品）。

ii. 重要資料の翻刻・刊行

先に少し触れたように、今回の調査で新たに発見された重要資料も少なくない。そのため、それらのうち最重要と判断されたものから、翻刻され、解題を付して、『国立歴史民俗博物館研究報告』122集（2005年）・128集（2006年）・146集（2009年）・159集（2010年）として刊行された。以下に、それぞれの資料名を摘記しよう。

○122集：宮地正人編「平田国学の再検討（一）―平田家資料 翻刻 解題（一）―」

- ・「気吹舎日記」1～8（文政13～弘化元年）
- ・両親宛平田延胤書簡（一）1～39（明治元年～3年）
- ・三河関係平田宛書簡1～16（文政10年～明治4年）
- ・特別展示「明治維新と平田国学」出陳資料解題並翻刻

○128集：宮地正人編「平田国学の再検討（二）―平田家資料 翻刻 解題（二）―」

- ・「気吹舎日記」1～13（文政6・天保元年～明治4年）
- ・両親宛平田延胤書簡（二）1～61（明治3年～同4年）
- ・天保3年平田鍊胤『三州行日記』及び人物注釈

○146集：宮地正人編「平田国学の再検討（三）―平田家資料 翻刻 解題（三）―」

- ・「金銭入覚帳」1～8（天保12年～明治4年）
- ・「文政六年平田篤胤上京日記（続）」（この前の部分は、128集に収録）

○159集：宮地正人編「平田国学の再検討（四）―気吹舎資料総合索引―」

- ・人名索引
- ・書名索引

iii. 成果の一般への公開―展示と資料公開―

○歴博特別企画「明治維新と平田国学」（2004年10月13日～12月5日）

この展示は、単に成果を社会に還元するというだけでなく、当該資料の特徴に鑑みて、その内容をできるだけ早く公開して、「関係諸学界と研究者、さらには関心を寄せる人々に知ってもらおう」というより積極的な狙いもあった（上記科研報告書「調査過程」による）。その特徴とは、4000人を超える気吹舎門人が全国に展開しており、彼らと平田塾（気吹舎）の間では、篤胤の生前・没後を問わず、非常に頻繁に手紙がやり取りされ、しかも、その多くが伝来していること、また気吹舎の出版物は、そのすべての出版部数が判明していることなどから、全国の各地での門人研究がこの資料群と結合することでより発展させることが可能である、ということだった。この企画をより充実したものにするために、三河国の平田学研究の第一人者田崎哲郎氏（愛知大学名誉教授）と千葉県内の平田学研究の第一人者川名登氏（千葉経済大学教授）、歴博の民俗学教授新谷尚紀氏（当時）の協力を得ているのは、そのテストケースでもあっただろう。

こうして、調査・研究の最新情報が盛りこまれた展示図録『明治維新と平田国学』（2004年）は、展示そのものと同様、魅力的な情報にあふれている。ちなみに、その目次を摘記しよう。

ごあいさつ／口絵／はじめに／平田家系図

第一部 平田篤胤の生涯と学問

1. 平田篤胤の遺品（樋口雄彦）／2. 平田篤胤と対外危機—文化度の蝦夷地問題—
- ／3. 平田篤胤の生涯／4. 平田篤胤の学問とそれへの批判（2・3・4は宮地正人）
- ／5. 平田篤胤と神道界—吉田・白川家との関係を中心に—（遠藤潤）／6. 平田篤胤と「顕世・幽世」—日本民俗学の先駆者—（新谷尚紀）／7. 気吹舎と出版活動（吉田麻子）

第二部 平田門人層の広がり

8. 気吹舎の全国4000の門弟たち（宮地正人）／9. 篤胤の下総・上総遊歴—地方門人集団の形成—（川名登）／10. 三河の平田門人（田崎哲郎）／11. 平田国学と教育活動（熊澤恵里子）

第三部 明治維新と平田国学

12. 幕末の変革運動と気吹舎—全国の情報センター—／13. 『夜明け前』の世界と平田国学／明治初年の政治と平田国学（以上3項目は宮地正人）

平田国学関係年譜／平田塾刊本目録／展示資料一覧／展示協力者一覧／展示プロジェクト委員

煩を厭わず、図録の目次を掲げたのは、それにこのプロジェクトの意図とその歴史的意義・研究史的意義が体現されていると評価者（荒野）が感じたためだ。上記の成果報告書で、この図録を「今後平田国学を学び研究する人々にとっての必読文献になるものとメンバー一同は自負している」と自己評価しているが、評価者も同様の感想を持った。以下、その点について簡単に述べたい。

3. 本プロジェクトについての評価

本プロジェクトについて評価者は、その目的と成果の両面について高く評価できると考えるが、それについて、このプロジェクトそのものの意義、すなわち、平田篤胤関係資料の包括的な整理・調査・購入という事業そのものについてと、その事業を進めるにあたっての問題意識とそれによる学問的な意義とに分けて述べることにしたい。

i. 資料群の調査・収集・研究という事業の観点から—「平田篤胤関係資料」という方法について—

この点では、以下の3点について高く評価することができる。

第1に、平田家および平田神社で伝来した資料群を、「平田篤胤関係資料」という名称ではあるが、実際は、篤胤・鍊胤・延胤3代の関係資料群を「平田国学」関係資料としてとらえ、総体として、調査・整理・保存の対象としたこと。それによって、この資料群が無事歴博に収蔵され、消滅や散逸の恐れが解消されたことの意義は大きい。この点については、「平田神社のご好意」とプロジェクトの発案者の熱意と誠意によるところが大きいだろう。

第2に、このプロジェクトによって、この資料群が、復古神道は勿論のこと、幕末維新期の「草莽の国学」の実態を知る上でも、また、「日本の古代研究の創成期を解明するためにも、きわめて重要な学術資料である」（『図録』「ごあいさつ」）ことが、初めて明らかにされた。このプロジェクトによって、この資料群の全貌と学術的価値が学界をはじめとして広く知られることになったと言ってよいだろう。

第3に、歴博の教員を中心にした、プロジェクト型の調査・研究のスタイル・手法を取りながら、確実に成果を上げている点も評価できる。

ii. 本プロジェクトの学問的意義、あるいは、影響

この点では、評価者の感想を一言でいえば、いわゆる平田篤胤や「平田国学」についての従来のイメージを一新する可能性を痛感させられたということに尽きるが、それは、とりあえずは、以下の4点にまとめることができるだろう。

第1に、篤胤の学問を、近代以後に作られたイメージからではなく、彼の「生涯」**Life History**においてとらえようとしていること。その視点が、このプロジェクトそのものの出発点の1つでもあったと推定されるが、研究上の具体的な成果としては、18世紀末から19世紀初めにかけての対外的危機（主として、ロシア問題）こそが篤胤の「日本の姿と形を考えるための国学研究の契機となった」ことを明確に示したこと（『図録』第1部二）、があげられる。このことは、「国学」も、いわゆる「鎖国」状態の中で純粹培養的に生まれ、成長したという従来のイメージは、根本的に見直される必要があることを、端的に示している。

第2に、全国4000人と称される門人との関係性が、このプロジェクトで見いだされた「気吹舎日記」・「平田塾刊本目録」などの資料によって、その概容が明らかにされたこと。評価者もこの展示と『図録』のこの部分（第2部）を見て、ショックに近い驚きと感銘を受けた。『図録』でも示されているような、地域の平田学研究者との共同研究によって、「草莽の国学」の全貌が、より具体的に明らかにされることが期待される。

第3に、篤胤後の平田学の展開に果たした鍊胤・延胤の役割の検討の必要性。これも、この資料群の全貌が明らかにされたことによる成果だが、幕末維新期の平田学の展開については、この2人の存在を抜きには語れないことが明らかになった。

第4に、神道にとどまらない、総合の学としての「平田国学」の可能性を示していること。それは、やや時代はずれるが、オーストリアの哲学者・神秘思想家で「人智学」の創始者ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner 1861－1925）のような存在を彷彿とさせるところがある。篤胤の学については、より広い視野で検討される必要があるだろう。

iii. 今後の課題

本プロジェクトとその成果については、以上のように評価でき、今後は外部の者にとってより利用しやすい形の公開体制がとられることを望みたい。

従って、今後の最大の課題は、この種の資料群の調査と保存という焦眉の問題に対する政府の姿勢であることを、最後に指摘しておきたい。この課題に正面から取り組む力量を持つ、国内では数少ない機関の1つである歴博の年間の史・資料購入予算が、ここ数年のうちに減少しているという事実（2010年9月14日第11回歴博外部評価委員会での報告）に接すると、ますますその感を強くせざるをえない。「平田篤胤関係資料」のケースは、高く評価できるものだが、その一方で、日本の現状の下では、様々な条件が組み合わさって実現した僥倖に近いものでもあるのではないかとの危惧を痛感しているところである。

砲術関係資料

荒野泰典

1. 歴博所蔵の鉄砲関係史料群の形成

歴博では、設立準備室（1978年～）の段階から鉄砲の伝来と普及を具体的に物語る、実物資料および文献資料の収集に努めてきた。現在では、江戸時代から幕末維新时期にかけての鉄砲関係の文献類、秘伝書の類、および鉄砲などの実物資料は1860点にのぼり、国内随一のコレクションを構成している。それは、準備室当時から鉄砲史・資料の収集家として著名だった、吉岡新一氏（1919～1987）・安齋實氏（1911～97）・所壮吉氏（1929～2000）のコレクションを、引き継ぐことができたことによる。

吉岡、および所コレクションは、歴史的価値のある日本の鉄砲（火縄銃）と幕末期に輸入された洋式銃を中心とする鉄砲類、安齋コレクションは、砲術秘伝書類と西洋軍事技術に関する文献を特徴としている。なお、歴博では、日本画家前田青邨氏の甲冑類・馬具・刀装具のコレクション、当世具足や陣道具・変わり冑の上田綱治郎コレクション、さらに、中国の明・清代の刀剣類のコレクションなどもある。それは（おそらく初代館長井上光貞氏の方針により）準備室段階から銭貨・古文書・古記録・地図等々の著名なコレクションの収集を目標としていたからだ、準備室段階から鉄砲関係史・資料の調査・収集・研究に携わった宇田川武久氏（在職1979～2008）は述べている。

2. 同コレクションの整理・目録作成、および研究とその成果の公開

これらのコレクションについては、館蔵武器武具データベース（2005年3月公開）で見ることができる他、安齋、および所コレクションについては、『安齋實砲術関係資料及び所庄吉「青圃文庫」コレクション目録』（国立歴史民俗博物館資料目録[5]、2007年）が作成・刊行されている（ただし、非売品）。

研究成果は、歴史系総合誌『歴博』における担当者宇田川氏の紹介記事（No. 126・138・144）、同氏の一連の著作の他、企画展示「歴史のなかの鉄砲伝来—種子島から戊辰戦争まで—」（2006年10月3日～11月26日）によって、包括的に示された。この展示は、以下にその概要を、図録『歴史のなかの鉄砲伝来—種子島から戊辰戦争まで—』（2006年）によって示そう。

ごあいさつ／企画展示の主旨

第1部 鉄砲の受容と定着

◆鉄砲の伝来

- 鉄炮伝来の諸説／南蛮筒と異風筒は語る／伝来した諸銃の系譜
- ◆鉄炮の伝播と軍用化
 炮術師の活動と炮術の諸流／炮術秘伝書の成立／鉄炮衆の創設／当世具足の出現
 - ◆大型炮の出現
 鉄炮の大型化／大筒の出現／石火矢の構造と系譜
 - ◆コラム
 南蛮という意識（坂本満）／美術史から見た炮術書（澤田和人）／戦国医術の特質（宮本義己）／堺鉄炮鍛冶と紀州（太田宏一）

第2部 鉄炮技術の発達と鉄炮鍛冶

- ◆鉄炮の基礎知識
 鉄炮の歴史用語／構造と部分名称／カラクリの種類／鉄炮の付属品
- ◆鉄炮製作の技術
 鉄炮鍛冶と炮術師／鉄炮の製作工程／鍛冶の道具／台師と金具師
- ◆鉄炮鍛冶の組織
 御用鍛冶の由緒／同業者組合の成立／国友鉄炮鍛冶の全国展開
- ◆独自技術の開発
 近江 国友藤兵衛一貫斎／讃岐 久米栄左衛門／尾張 吉雄常三
- ◆科学の目で見た鉄炮
 鉄炮と刀剣の材質／鉄炮鍛冶と刀鍛冶の素材の違い／鉄炮の威力の検証
- ◆コラム
 炮術隆盛の陰に（山本光正）／狩猟と鉄砲の呪法（松尾恒一）／国友村の鉄炮鍛冶と村の風景（太田浩司）／久米通賢の科学精神（御厨義道）

第3部 幕末の動乱と軍事技術の革新

- ◆海防の強化と西洋炮術の導入
 高島秋帆の登場と西洋流炮術の普及／継承される銃砲技術—片井京助の功績—／変容する和流炮術／御台場の構築と大砲の铸造
- ◆ペリー来航の衝撃と軍制改革
 前装滑腔式雷管銃の普及／和銃の改造と銃砲技術の模索／三兵戦術と調練の組織化／反射炉と大砲铸造
- ◆高まる外圧と改革の進展
 前装ライフル銃の登場／ライフル銃砲の国産化／調練の組織化
- ◆氾濫する欧米の諸銃と戊辰戦争
 多様な後装式ライフル銃／ピストルの飛躍的発達／四斤山砲と戊辰戦争
- ◆コラム

武器商人の明暗(田中正弘)／19世紀のヨーロッパにおける弾丸の発達(磯村照明)
／幕末・維新时期における日独の邂逅—カール・レーマンと撃針銃を通じて—(荒木康彦)
／高松藩の海防と軍備(胡光)
展示資料・参考図版の积文と解説／銃砲関連年表／参考文献／展示資料・参考図版一
覧／展示協力一覧・展示プロジェクト委員

前近代の日本の鉄炮の歴史は、1543年(天文12)の、いわゆる鉄炮伝来に始まり、1868年(明治元)の戊辰戦争をもって終わる。本展示は、この3世紀間の、「外来文化の鉄炮が、日本の政治・社会・軍事・技術など多方面に影響を与えながら定着する過程、すなわち、歴史的役割を明らかにすること」を目的として企画された。このような趣旨で、包括的、かつ体系的に行われた展示はかつてなく、新発見を含む豊富な実物資料と文献史料とを一堂に会した例も新機軸だった(企画展示の主旨)。この展示は、「連日、マスコミでも大きく報じられ、南は鹿児島、北は北海道と観客は全国におよんで、企画展示は成功裡に終え、展示図録も完売した」(宇田川氏「海賊と鉄炮」の研究)歴史系総合誌『歴博』No. 144)。このニュースについては、評価者(荒野)も興味深く見た記憶がある。そしてこの図録も、今見返してみても、前近代日本の鉄炮に関する「百科事典」の趣すらあって、このテーマについて俯瞰する際にも、非常に有益である。

しかし、当時のマスコミの取り上げ方自体は、鉄炮伝来を「倭寇」によるものとする本企画と、従来の「種子島」説を支持する論者との対立をことさらに強調してセンセーショナルに報じすぎたきらいがあり、この展示とその背景にある長い地道な努力とその成果を、上記の争点に矮小化してしまっただけのきらいもないではない。マスコミ報道は、ほとんどいつもそうなのだ、と言えそれまでののだが、これなども日本のマスコミの質の低さを痛感させられる代表的な事例だろう。

それはともかく、とりあえず、以下に、本コレクションに関わるプロジェクトの成果についてまとめておきたい。

3. 同コレクションの収集と調査研究の成果の評価

成果については、以下の4点にまとめることができる。

第1に、鉄炮関係について、国内随一のコレクションを構築し得たこと。そのことが、以下に述べる、諸成果の前提となっている。これだけのコレクションを構築し得たのは、歴博創設当初から、著名なコレクションを収集する方針(戦略)で臨んだことが寄与していると考えられる。例えば、神戸市立博物館の古地図のコレクションもほぼ同様な経緯をたどって構築されている。

第2に、これらのコレクションによって、おそらく初めて、鉄炮伝来から戊辰戦争までの約300年間の鉄炮の歴史を俯瞰できるようになった。

第3に、それとともに、これらの史料群によって、従来の鉄炮伝来と定着、およびそ

の歴史的役割についての「言説」が見直され、あるいは新たな知見を付け加えた。

その言説の代表的なものは鉄炮伝来に関するもので、それに関する唯一の記録とされる、南浦文之（1555～1620）の『鉄炮記』（1606年）の記述にもとづいている。それらは以下の3点にまとめることができる。①鉄炮隆盛の功績はひとえに、種子島家の時堯の功績である、②鉄炮は伝来後、種子島を起点に、まず畿内・関西、さらに関東へと広まった（伝播者＝媒介者としての泉州界の橋屋又三郎＝「鉄炮又」伝承）。③鉄炮伝来後、ただちに戦いに投入され、旧来の戦闘技術を一変させ、城郭の様式にも大きな影響を及ぼした。

それらの言説は、①に対しては、鉄炮は倭寇によって複数の経路で伝えられたとする倭寇伝播説、②の流布・普及については、それを媒介する砲術家たちによる、鉄炮の「日本化」という過程が必要だったということを明らかにし、③に対しては、鉄炮はまず、狩猟の技術として導入され、それがやがて軍用に転用されることになったのであり、その経緯にも、砲術家たちが深く関わっている、とする。

以上の知見は、史料・文献と実物による手堅い実証を伴って説得的であり、これらによって鉄炮伝来の歴史は、大きな書き直しが求められることになった。ただし、先に、マスコミの取り上げ方について苦言を呈したように、鉄炮伝来を「ポルトガル人・種子島」経路か「倭寇」という二項対立に矮小化するのは正しくない。評価者（荒野）は、ほぼ30年前から戦国期の東シナ海海域について「倭寇的状况」という仮説を提示しており、その観点に立てば、ポルトガル人も「倭寇」的勢力にほかならず、また、種子島も、それ以前から遣明船などの日・中間をつなぐ公的なルートの重要な中継点であったと同時に、倭寇の活動拠点の1つでもあったことは、著名な倭寇の頭領王直の活動を見れば明らかである。鉄炮を種子島に伝えたポルトガル人の乗船が王直のものであり、彼が、ポルトガル人と種子島の人たちとの間の仲立ちをつとめた、というのは偶然ではない。その点では、『鉄炮記』の記述も、全く否定すべきものでもない。種子島への鉄炮伝来も「ポルトガル人」という顔をした「倭寇」によって伝えられた、と考えるのが最も実態に近いからだ。宇田川氏が指摘する（あるいは、この展示でも明らかにされているように）日本に伝来した鉄炮がすでに東南アジア化したものだったように、当時この海域で活動していたヨーロッパ人を19世紀以降の彼らと同じと考えるのも、また、私たちに根深く刷り込まれた言説の一つにすぎない。

当時アジアに流布した鉄炮の中国渡来のルートに関して附言しておきたい。元禄期（17世紀末）の平戸の記録『壺陽録』には、鉄炮伝来は種子島が最も古く有名でもあるが、平戸への伝播も同じくらい古い、という旨の記述があり、鉄炮伝来のルートが複数であることと同時に、種子島のそれも否定していない。このような記述も、上記の「倭寇的状况」論と、本プロジェクトの成果を有機的に組み合わせることによって生かすことができると、評価者は考える。

第4に、鉄炮に関する技術等が、実物によって具体的に検証され、鉄炮の「日本化」

の過程が明らかにされたこと。これは文献史・資料とともに、収集された実物資料の系統的な研究によって可能になった。

以上のように、評価者は、本コレクションの構築と研究に関わる成果は非常に大きいものがあると、高く評価したい。最後に、その上で、外部の利用者として、注文を一つ。

これらの成果を外部者が利用できる手段の一つが、公開されているデータベースだが、これが意外に使いにくい。この点の改良は切に望みたい。

見世物関係資料コレクション

大 門 正 克

歴博の掲げる「博物館型研究統合」にもとづいて、「見世物関係資料コレクション」の外部評価を行う。

① 資源

1) 収蔵資料の概要

東京・大阪・京都をはじめとして、都市部で流行した大衆娯楽の「見世物」に関する資料コレクションである。資料の刊行時期は、1810年代から1920・30年代までである。歴博では、1988年から絵画を中心にした資料の収集を続け、現在637点の資料が「見世物関係資料コレクション」として一括され蔵されている。

2) 収蔵資料の特徴

収蔵資料は、曲技、細工物、動物、その他に分類されている。

「曲技」に分類される資料は223点である。特筆すべきは、江戸後期から明治初期にかけて活躍した軽業師関連の資料があり、貴重である。早竹虎吉、竹沢藤次などは、当時、絶大な人気を誇っており、両国と浅草で盛んに行われた興業の様子が錦絵やビラなどから確認できる。明治以降になると、新たに曲馬とサーカスが見世物に加わったことがわかる。欧米文化にふれはじめた庶民は軽業とともにサーカスを歓迎したが、サーカスが人気を博すにしたがって、日本古来の軽業はしだいに衰退した。

「細工物」の資料は241点である。細工物とは、自然物の奇形・美観を見せる作り物のほか、人の手で作られた人形、からくりなどである。細工物のなかでも生人形の資料が多く、人気があったことがうかがえる。

「動物」の資料は101点である。幕末から明治期にかけて人気があった動物が象であり、紙面いっぱい象が描かれている。曲馬の人気も高く、ヒョウやトラは、珍獣・猛獣として人気を得ていた。明治以降になると、「教育参考最新輸入動物会」のように、理科系教育の一環として海外の動物を見せた。動物が見世物から教育目的になることで、やがて動物園が誕生する。

「その他」は136点である。

3) 資料調査研究

資料収集にもとづく調査研究が、2004年から2006年にかけて行われた。

4) 資料成果の公開

全点の目録は、館蔵データベースとして歴博ホームページに公開されている。それに加えて、『見世物関係資料コレクション目録』（2010年1月）が国立歴史民俗博物館資料目録[9]として刊行された。

② 研究

1) 研究の目的

当時の庶民娯楽には、歌舞伎、人形浄瑠璃、見世物などがあり、そのなかで見世物は、歌舞伎とくらべて入場料が安く、より庶民的な文化であった。見世物といっても内容は多様であり、アクロバット・曲技・雑技などの軽業、物語のヒーローを題材にした巨大な人形や技巧を凝らした繊細な細工、からくり仕掛けの人形芝居、ラクダ・ゾウ・ヒョウなど、当時の日本では珍しかった動物、手品などがあつた。見世物の世界は近代に入ると変容し、サーカスや動物園、遊園地、水族館、テーマパークなどによって変わっていく。

本資料は、近世半ばから昭和戦前期にかけての見世物について研究する貴重なものであり、さらに、見世物が近代の娯楽に移行する過程を研究することも十分に可能である。

2) 研究成果の公開

本資料を活用した研究として、松尾恒一「サーカスの夜明け―軽業芸人の海外交流―」（歴史系総合誌『歴博』118号、2003年5月）がある。幕末にアメリカからリズリー一座が来日し、早竹虎吉ら、日本の見世物師らと交流があつたこと、早竹らはリズリーと一緒に欧米に渡り、興業をはたしたこと、かれらは幕府に申請して認められた最初の海外渡航者であり、庶民レベルの異文化交流の草分けであることなどが論じられている。

③ 展示

1) 新収資料の公開

2003年1月15日から2月16日にかけて、新収資料の公開が行われた。

2) 総合展示第3展示室（近世）

2008年3月18日から、近世展示室の「都市の時代」に見世物コーナーが設けられている。

3) 他館の企画展示等

本コレクションのうちの錦絵、冊子、写真などが、他館の企画展示などで展示されており、積極的に活用されている。

④ 博物館型研究統合の観点から

本コレクションは、「資源」「研究」「展示」を有機的に結びつける「博物館型研究統合」の観点がふまえられており、「資源」の観点からは、貴重な資料収集から資料調査研究、資料成果の公開に至る一連の過程が実行されている。「研究」では、「研究の目的」をふまえた「研究の成果」がだされており、「展示」の観点でも資料の有効な活用が図られている。本コレクションは、「資源」「研究」「展示」の有機的な結合がはたされているとあってよい。

以上をふまえたうえで、今後の新展開を求めるならば、貴重な資料を「研究」としていっそう取り組み、成果をあげて、それをさらに展示に結びつけることであろう。

直良信夫コレクション

小 川 義 和

国立歴史民俗博物館（以下、歴博と表記）は、博物館という形態の大学共同利用機関として、歴史資料・情報の収集・保管（資源）、調査研究（研究）と提供（展示）という三つの機能を有機的に連携していく「博物館型研究統合」を目指している。この理念は、博物館としての基本的機能が相互連関を持って有機的な展開していくことを示しており、従来博物館では自ずと行っているものの、必ずしも社会に対しその価値と意義を明確に強調されてこなかった。さらに、この三つの機能が社会との連携を持ちながら展開すること、展示機能から研究機能や資源機能へのフィードバックなどの双方向性のある有機的な連関を研究活動として位置づけている点に歴博の研究活動の独創性を示すものと考えられる。ここでは、「博物館型研究統合」の理念に照らし合わせ、本調査研究・プロジェクトの意義を、以下の観点から印象を述べる。

評価の対象にした資料は、『直良信夫コレクション目録』と企画展図録『縄文はいつから！？－1万5千年前になにがおこったのか－』の2点及び参考資料としての『歴博のめざすもの』『歴博のめざすもの 事例集1 博物館型研究統合の実践』である。

なお『直良信夫コレクション目録』と企画展示「縄文はいつから！？－1万5千年前になにがおこったのか－」との関係性が十分に読み取れないところもあり、本コメントでは両者を関係づけた評価と個別の評価が混在している。

1. この調査研究・プロジェクトは、歴博の研究理念（博物館型研究統合）にそったものであるかどうか。

○直良信夫コレクションは2006年に寄贈され、その前の1986年から長期間にわたり資料の整理が行われている。その後、本コレクションの目録が2007年に刊行され、関連する展示プロジェクト「縄文はいつから！？」が2007年に開始されている。その結果、企画展示「縄文はいつから！？－1万5千年前になにがおこったのか－」（以下、『縄文はいつから！？』と表記）が公開されたのが2009年10月であり、2010年1月まで開催された。展示に関連する図録も同時に刊行された。

調査研究・寄贈・コレクション目録の作成、供覧、資料活用による展示公開という博物館型研究統合の一連の機能が、順次に展開されており、博物館としての機能を発揮している点が評価できる。

○資源化、つまり資源と研究成果を結びつけ、公開し、活用できる状態にするという観点から見ると、本コレクションが企画展示「縄文はいつから！？」にどのように結びついているのか、必ずしも明確でない。

○「博物館型研究統合」の重要な視点である、三つの機能が社会との連携を持ちながら展開すること、さらに展示機能から研究機能や資源機能へのフィードバックなどの双方向性のある有機的な連関については、本プロジェクトが、十分にその機能を発揮したかどうかは、この資料から判断できなかった。

2. この調査研究・プロジェクトは、歴博でしかできない独自性を有するものであるかどうか。

○直良信夫コレクション構築のための調査研究や展示企画の基になった研究活動等の資料を評価対象としていないので、ここでは印象にとどめる。

○コレクションの調査研究及び目録作成に関して、一部絶滅動物などの同定が行われていない部分もあるようであるが、資料調査委員会を設置して、専門家を招聘し、自然史標本の同定などを行っており、信頼性の高い独自のコレクションとなっている。

約30,000点、2,914件に及ぶ標本の整理に当たっては、古い時代の未整理の標本を洗浄し、文書と照合し明らかにしていく作業など、基本的な作業を丹念に行っており、コレクション構築に対する研究者の熱意に感服する次第である。またこの目録作成に当たっては、歴博に寄贈されたコレクションを中心に早稲田大学に保管されている標本や、他の機関に貸与されている標本についても目録として記載しており、直良コレクションとして網羅性のあるコレクション目録となっている。

○「縄文はいつから!？」の展示企画に当たり、年代歴史学研究として、資料調査による較正年代の探究、その成果を活用した新しい年代軸の構築と古代史像の再構築、及び新しい古代史像の出版物や展示としての社会や市民への公開、という研究統合の成果を踏まえており、歴博の研究活動の独自性を示すものとして高く評価できる。(『歴博のめざすもの 事例集1』p.18～)

○1. で述べたことと関連するが、「博物館型研究統合」の重要な視点である、資源機能、研究機能、展示機能、それぞれの有機的な連携に基づく、機能充実が歴博の研究活動の独自性を際立たせるものと期待できる。これは「研究資源」の定義・理念そのものに関わる考え方なので、明確に強調しておくことが重要である。例えば展示を公開することでコレクションが充実し、研究が進むようなことやそのコレクションの構築や研究プロセス、展示企画内容等を研究資源として共有化できることを期待したい。

3. この調査研究・プロジェクトは、他の歴史系研究機関・博物館の研究・資料収集管理活動の進展に寄与しているかどうか。他の研究機関の研究者等の参画状況はどうか。

○企画展示「縄文はいつから!？」は総合的な展示であり、展示企画・開催の過程を通じて外部の研究者の関与は多い。また外部機関との連携や外部研究者との共同研究の成果が発信されており、参画状況は良いと判断できる。

○他の博物館や歴史系研究機関への波及の効果については、本展示の企画・制作・公開を通じて、多くの研究者が関わっており、また縄文時代の始まりに関する議論を深める展示の構成となっており、その効果は大きいと推測される。

○「弥生はいつから！？一年代研究の最前線」の展示については、研究成果の社会への発信として、展示の中で研究会を実施するなど（『歴博のめざすもの 事例集1』p. 21）、展示と研究成果やプロセスの有機的な連携が取れているが、「縄文はいつから！？」の展示では同様な取り組みがあったのか、疑問が残る。

4. この調査研究・プロジェクトは、国際的な研究の進展に寄与するものであるかどうか。

○国際的な観点から歴博の活動を評価する必要がある。この調査研究・プロジェクトは、国際的な研究の進展に寄与するものであるかどうか。という点や、展示の手法やその評価方法並びに展示内容が国際的なインパクトを与えているのかという点である。この点については十分な判断材料がなく、ここでは期待を述べさせてもらう。

歴博は日本を代表するナショナルセンターとして国内の同種の研究機関や博物館をリードするとともに、国際的なシンポジウムや国際的な雑誌への投稿など積極的に情報発信に取り組むべきである。

5. この調査研究・プロジェクトの成果は、歴博の展示や教育活動さらには他の博物館の展示や教育活動に活用されているかどうか（または活用可能かどうか）。

○この調査研究の成果は、歴博の他の展示にも活用可能であり、可能性を考える必要がある。また「縄文はいつから！？」の展示は、他の博物館の展示や教育活動に活用できると期待される。

6. この調査研究・プロジェクトの成果は、社会に対する意義の主張は可能であるかどうか。また社会に対し、適切に発信を行っているかどうか。

○標本を集める意義やコレクションを構築し、継承することの意義を社会に発信することが今後ますます重要になってくるであろう。本コレクションの重要性や有用性について適切に発信を行っているかどうかは本資料からでは判断できなかった。今後本コレクションの意義をより明確にして社会に主張することが望まれる。

○博物館型研究統合の考え方に従えば、研究資源という中に研究成果や研究プロセスも包含されていると考えられる。研究資源としての研究成果・プロセスをどのように共有できるのか、特に目録の作成だけでは、研究プロセスの共有化が不十分ではないか。

○年代歴史学研究成果が「・・大小八つの企画展示や特別展示、6冊の一般向け単行本、NHKによる特別番組の放映、74件の新聞報道を通して、速やかに、広く社会や市民に還元され、その成果は今や中学校の教科書に取り上げられるまでに至っている。」（『歴博のめ

ざすもの『事例集1』p.18)ことから推測すると、「縄文はいつから!？」の企画展示とともに、多くのメディアへの露出など、おおむね適切に社会へ発信をしていると考えられるが、本企画展示公開後の社会的反響についてはデータがなく、確認できていない。

○展示も資源と考えれば、「縄文はいつから!？」の展示内容もデータベース化するのはどうか。展示資料によっては著作権処理が必要であるが、過去の展示内容を提示することにより、展示終了後も、縄文時代に関する社会的な議論や研究を促すことができるのではないか。これらを通じて共同利用性の保証と一般の人々のアクセシビリティを高めることが重要である。

7. この調査研究・プロジェクトの組織は適切か。

○本コレクションの調査研究及び目録作成に関して、資料調査委員会を設置して、組織的に取り組んでいる。支援する事務組織については、本資料からは判断できないが、「縄文はいつから!？」の展示の企画については、館内外の研究者で組織した展示プロジェクト委員会を設置して、取り組んでいる。調査研究・プロジェクトの組織はおおむね良好と考えられる。

瓦コレクション

坂井秀弥

1. コレクションの概要

ここでとりあげる瓦コレクションは、「日本各地出土屋瓦コレクション」（館の資料番号A-196、以下「本コレクション」という。）と呼ばれるもので、歴博に3件所蔵されている瓦のコレクションの一つである。あと二つは宇野信四郎コレクションに含まる瓦コレクション、水木コレクションに含まる瓦コレクションで、これらはすでに図書や目録として紹介されている。本コレクションは、『国立歴史民俗博物館資料図録4』（2006年2月、以下『図録』という。）により、その全貌がはじめて公開されたことになる。

本コレクションの概要は『図録』の序文に記されている。1984年、85年に歴博の所蔵となり、全部で842件、総点数1181点ある。日本の各地から出土したものが多いが、朝鮮半島・中国出土のものも含まれている。時代も古代から近世に及ぶことに加えて、瓦の出土地がほとんど知ることができる点において貴重であり、各時代・各地域の瓦から、日本における瓦の流れを通観できるものである点が特筆できる。

日本における瓦は、6世紀末創建の飛鳥寺で使用がはじまる。以後、近世において住宅にとり入れられるまでは、使用が寺院・官衙・城郭などに限られ、軒を飾ったその文様の型式や変遷から、時代や系譜を知ることができる歴史資料として貴重である。また、考古資料のコレクションは、収集された時代の歴史・文化の認識を反映しており、文化財としての意義も有している。このような資料が一括して歴博に収蔵された意義は大きい。

本コレクションにはいくつかのまとまった資料がある。まず、三重県の考古学者である故鈴木俊雄氏が採集した旧楽山文庫所蔵資料は、三重県の古代寺院研究の基本とされるもので著名な資料である。そのほかに奈良県内の飛鳥・白鳳寺院、大阪府海会寺、東京都武蔵国分寺などの古代のもの、京都府伏見城、神奈川県小田原城などの近世のものがあり、海外では朝鮮半島の楽浪時代、三国時代の新羅・百濟、統一新羅などのものもある。

2. 資料に関する調査・研究の現状

これまで、本コレクションを公開したのものとしては、上記の『図録』がある。資料収蔵の10年後に、資料調査プロジェクトとして調査研究がなされて、図録の編集と公開がなされたのである。この図録は、全国の大学附属図書館、県立図書館、埋蔵文化財センター等の発掘調査組織、博物館に配布されたという。

このほかに広く資料を紹介するものとして、歴史系総合誌『歴博』153号(2009)の「瓦コレクション―がれきに秘められた歴史―」(村木二郎氏執筆)がある。これはきれいなカラー写真を数多く掲載して、コレクションの資料を用いてその概要と瓦の歴史を解説したものであり、わかりやすく読みやすい。専門家以外に情報発信したのもとして重要であるが、発掘調査では見つかっていない貴重な資料があることや、後に瓦を加工して硯としたものなどが含まれていることなど、『図録』を見ただけでは見落とすことも紹介されている。

本コレクションの資料は、国内の博物館等にわずかであるが貸与されて展示にされているが、本館での展示はまったくなされておらず、この図録が調査・研究のすべてである。今回の評価の対象となった15の資料のうちで、もっとも展示・研究の実績が乏しい状況である。

考古資料としての瓦は、これまでの各地の発掘調査により、豊富な蓄積がなされており、それをもとに緻密な研究がおこなわれてきている。それに対して、こうしたコレクションは、出土に関する具体的な場所や状況が不明なものが多いという性質上、研究に大きな制約が伴うものである。また、歴博の研究スタッフなどの体制の問題なども、調査・研究の推進において課題となる点であろう。したがって、この現状から、歴博が提唱している「資源」「研究」「展示」の3要素を有機的に連鎖させて、積極的な「共有」「公開」を行うということがなされていないと強調するつもりはない。ただ、この理念に一步でも近づけるために考えられる評価を若干おこないたい。

3. 図録の内容と課題

現状からすると、本コレクションの研究・公開は、『図録』に限られ、外部の者が利用しようとする場合、これに大きく制約されることから、この内容とこれに関した問題点をまずみておきたい。『図録』は瓦を写真と拓本・実測図を用いて、考古資料として紹介している。A4判270頁のハードカバーの冊子で、「写真図版編」(約130頁)、「拓本・実測図編」(約100頁)、「資料リスト」(約20頁)からなっている。

「資料リスト」には、すべての資料について、資料番号・名称・数量・採集地・所在地・時代・法量のほかに、資料に記されていた注記や添付されたメモ書きを備考欄に掲載されている。写真図版と拓本・実測図は、小破片を除きそれぞれ666点、759点がおさめられている。拓本・実測図の縮尺は3分の1である。

写真図版は、精細なカラー写真で、その陰影も適度に表現されていることから、軒瓦の文様や凹凸、焼成・色調などを把握することができ、重要な情報である範キズもわかる。したがって、各資料に関する基本的な考古学的情報はまず整っていると見える。

さて、外部の者が本コレクションの各資料を利用しようとする場合、直接館で観察する以外においては、この『図録』によることになる。その際、この『図録』がそれぞれの利用に際して、適切な内容となっているかが問われる。その点、いくつかの課題があ

と思われる。

まず、『図録』において、本コレクションについての説明は序文にあるのみである。コレクションという性格上むずかしいのかもしれないが、その来歴や各資料の履歴などが紹介されていてもよいと思う。

そして、1000点以上の瓦についての学術的な解説も必須であろう。とくに時代別・地域別に分類して、それぞれの概要が付されていれば、もっと活用しやすくなったであろう。資料全体を俯瞰できるような、時代と地域に分けたマトリックがあれば、索引としての機能も果たすと思われる。さらには三重県内や飛鳥地区などまとまった資料は、さらに詳細な学術的意義などがほしいところである。

また、写真図版と拓本・実測図の資料が本コレクションの資料番号を基準に配列されていて、写真と実測図の番号が一致していない点は、利用しようとするとき不便を感じる。資料の管理者側からすると、こうしたレイアウトになると思うが、利用者側の立場に立てば、資料の内容に即したものが便利である。

4. おわりに

『図録』の課題をいくつかあげたが、本コレクションを広く周知するためには、紙媒体の『図録』だけでは大きな限界がある。デジタルデータにして、ネット検索などに対応できるような方策は必要であろう。

また、発掘調査で出土していない資料も含まれていることもあり、各地で進展している瓦研究において、本コレクションの各資料が学術的にどのように位置づけられるかについて、それぞれの地域のなかであらためて検討する必要がある。その際は各地域の研究者の協力を得ることが不可欠である。あらたな知見が加わることが期待される。

それとともに、小規模な企画展示などを企画して、日本における瓦をめぐる歴史・文化を幅広い視点から紹介することをのぞみたい。

死絵

白 川 琢 磨

1. 図録の形態

この『死絵』は、2009年度の歴博の資料図録7号として刊行された。資料図録は美術資料や歴史史料、考古資料など多様であるが、今回は民俗学的な視点から、錦絵のなかでも死絵という特殊なジャンルで編集した点に特徴がある。

「死絵」とは、おもに著名な歌舞伎役者が亡くなった際に訃報と追善を兼ねて刊行された錦絵で、歌舞伎に関連する浮世絵師や義太夫の太夫などの死絵も作られたという。その特徴は、役者の似顔絵に没年月日や戒名、埋葬された寺院などを添え、また仏事や死を表象するものが描き加えられていることで、単に舞台の上ではなく、また舞台を離れた日常の姿でもない、死後の姿という独特の構成となっている。主に近世後期から刊行され、幕末から明治にかけて盛んになり、最後は昭和初期までつづいたという（「解題」）。

図録では、それぞれの役者ごと、その死亡順に編集されている。前半の図版はカラー頁となっており、役者ごとの死絵の多様性を比較できるようになっている。とくに死絵は、役者の姿だけでなく、その持ち物や周囲の事物、背景などにさまざまな死の表象が込められていることが、その構成上重要であるため、図像が大きく取り上げられていることは、今後の研究の上で利便性をもつ。さらに相互の資料を比較対照することで、版木の流用などから、死亡してからなるべく早く刊行するための対応を見いだすことができるだけでなく、近世末から近代にかけての図像形式の変遷の理解も可能であろう。

後半の「解説・翻刻」部分では、テキスト部分の翻刻があるだけでなく、まず各役者の冒頭に、生没、享年、屋号、俳名を記したうえで、各資料ごとに、名称、役者、戒名、没年月日、享年、菩提寺、絵師、彫刻、版元、改印、辞世等の項目を取り上げている。死絵は戒名や菩提寺、辞世などは同じ役者のものでも異なることがある。やはりテキスト部分も刊行を急ぐため必ずしも正しい情報が記載されていないためであり、その相違からも刊行の先後関係なども検討できるようになっている。さらに「特徴」という項目によって、死絵の図像やテキストから把握できた絵の概要を認識でき、美術史や演劇史外の分野の研究者にも理解しやすいようになっている。

2. 死生観の理解

その死絵が意識的に収集開始されたのは、2001年の企画展示「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」からであるという。この展示は日本の民俗文化における想像力に関するものであり、死への想像力という文化的営為を示す資料として死絵が位置付けられ

たことによる。死絵は、当然美術史や演劇史の中では、従来から認知されていた資料であったが、民俗学や宗教学など他分野ではあまり注目されてこなかった資料群であり、こうして図録として刊行されたことによって、新たな研究領域の基礎的な資料となると思われる。

死絵の特徴は、仏事や死を表象するものが描き加えられていることであり、死後の姿を表象する構図となっている。こうした当時の死の表象のありかを把握することで、死や葬儀についての当時の観念の理解の一助になる。

近年、近世の葬送儀礼が歴史学や考古学分野において次第に蓄積されており、葬具業者等の利用が各階層で進み、葬儀が各階層に浸透しさらに肥大化していることなどが明らかになっている。見立てとなっている死絵を当時の人々が諧謔性までを理解するには、その背景として葬送観、死生観を共有していないと、こうした図像が流通することは困難であろう。歴史的な研究成果と重ね合わせることで、当時の状況がより解明されていくことになる。

さらに死絵は、役者の追善興行や、追善歌謡、追善草双紙、追善刷物などとも関連をもつものであり、今後はこれらの資料群との研究を重ね合わせていく必要がある。

3. 「死」の時間軸

さらに興味深いのは、死者表象のあり方としての時間的方向性である。生前の延長ながらも基本的には死後の姿という時間軸は、死者を描いている岩手県下の供養絵額や山形県のむかさり絵馬などとも通じるものであり、他界観の形成とも密接に関わっている。

その一方で、近代以降の遺影は、生前の姿をそのまま使用するもので、むしろ現世から過去に遡る現世中心である点で、全く逆の方向性である。こうした死絵をはじめとする民俗的な死者の図像が、近代以降説得力を持たなくなり、全国的に遺影に取って替わっていくことは、死に対する時間軸の認識を大きく転換していくことをうかがわせるものでもある。

よって死絵の検討が近代の写真との対照軸としても位置付けられることが可能であろう。佐藤守弘や福岡まどかといった美術史的な観点からも、遺影に対する研究がみられるようになっており、さらに「時の宙づり 生・写真・死」(2010, IZU PHOTO MUSEUM)での遺影に関する展示も、写真史の立場から行われており、遺影が死者の生涯を位置付ける存在としてある点で、「死」の時間軸における死絵の対照性が問題となろう。この点で注目されるのが北部九州に分布する死者を写真に写す習俗である。遺影として祀られるのではなく、記念写真の一枚として家族のアルバムに保持されている。全国的には死者を撮影することがタブーとされていることに対して何故にそうした禁忌がないのか。「死絵」と近代以降の「遺影」の時間軸上の中間形態として注目され、死絵との共通性と異質性について更なる検討が必要となる。

4. 近世の仏教認識

さらに死絵は、近世当時の死生観や葬送観だけでなく、庶民における仏教を中心とする宗教的な知識のあり方など宗教認識を知るうえでも格好の素材である。

例えば、役者を釈迦に見立てて涅槃図の形式をとる死絵は、時代を通じて刊行されている。庶民の間に涅槃会と涅槃図がかなりの深いレベルで理解されていないと、例えば涅槃図の動物の代わりに、死絵では妖怪などが描き込まれる理由も理解できない。また普賢菩薩や文殊菩薩などに役者がなぞらえられているが、これも前提として儀軌類の理解がないと、その需要が見込めないものとなる。

総じて近世仏教が庶民の間に相当程度浸透していることが、このような資料群から見て取ることができる。近世仏教を墮落したものとする従来の理解に対し、その批判がしだいに行われるようになってきているが、思想史や仏教史とは別の資料から照射することができるものと思われる。さらにこうした仏教的知識をもとにしたパロディーは、草双紙などにも多く見られ、近世文学とともに検討する必要があるだろう。

以上、この図録が、歴博の資料収集の基礎の上に、「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」といった企画展示で新たな位置づけを得て集積がなされ図録刊行という点に至ったことは、「博物館型研究統合」の一環として好ましいものであろう。今後はさらに多様な視点から研究が蓄積され、発展させていく必要があり、それによって歴博の目指す理念の実現が図られることが期待される。

紀州徳川家伝来楽器コレクション

三 浦 定 俊

1. はじめに

紀州徳川家伝来楽器コレクションは総点数159件(231点)で、雅楽の楽器を中心に、笙・笛・琵琶・箏・太鼓などの楽器20数種その他、楽譜、調律具、付属品など、様々な時代の楽器で構成されている。本コレクションは昭和28(1953)年に紀州徳川家より財団法人松江博物館へ譲渡されたが、文化財としての重要性と散逸の危機を考慮した文化庁によって、昭和47(1972)年に一括買い上げされ、昭和54(1979)年には東京国立博物館に管理替えされた。さらに昭和58(1983)年には開館に伴い、国立歴史民俗博物館へ移管された。紀州徳川家旧蔵の楽器としては、本コレクション以外にも、国立劇場所蔵の9点などが知られていて、その一部は散逸していることが確認されているが、国立歴史民俗博物館では平成20(2008)年度と平成21(2009)年度の2年にわたって、流出した資料の追加購入を行っている。

本コレクションは、紀州藩の第十代藩主徳川治宝(とくがわはるとみ、1772～1852)がほぼ一代で築き上げた最大級の古楽器コレクションである。意欲的な文化政策を推進した治宝は彼自身、琵琶・笙・和琴などを演奏し、雅楽会では舞楽を舞うなど雅楽へも強い熱意を持っていて、後の伝えによれば、特別に勅許を得て黄金五万両を投じ、国内外、古今の楽器を収集したという。治宝は京都の楽器商神田や楽家の仲立ちを得て、数々の由緒ある楽器を手に入れていき、修理や付属品を新調し、楽器の鑑定や情報の収集を行ったことが本コレクションに付属する文書から知られる。楽器の収集は文化文政期をピークとし、治宝が隠居すると共に終焉に向かった。

本コレクションは、質・量共に充実した古楽器のコレクションとして、音楽史、とりわけ雅楽の歴史の研究に不可欠な資料であり、楽器にまつわる情報を記した付属文書や、装飾された付属品に恵まれていることもその特色となっている。すなわち、それぞれの楽器に伴う、入手に関わる書簡類・伝来書・鑑定書・銘の下書き・修理や製作に関わる情報などを記した付属文書等からは、音楽・楽器に関わる歴史だけでなく、幕末期の大家を中心とした文化のありさまをうかがうことができる。また、当時の工芸の粋を集めて装飾された楽器や箱・袋などの付属品は、美術工芸品としての価値も高い。他分野にまたがる研究の資源として、また展示のための効果的な資源として、本コレクションは多くの可能性を秘めている。

その反面、本コレクションには破損しやすく保存状態の悪いものも多く含まれている上、資料には各種の製作技法や素材が混在していて、調査研究する際の難しさがある。また音楽という、形にのこらないものを対象として、いかに歴史を復元し、展示公開す

るかという課題も抱えている。そのような中でこれまで本コレクションについて行われた調査・研究・展示について概観し、評価する。

2. 資料の調査・研究・展示について

昭和58(1983)年に国立歴史民俗博物館に管理替えされてからほぼ10年後に、2年間の展示プロジェクトを経て、企画展示「弾・吹・打ー日本の楽器とその系譜ー」で、本コレクションの一部が展示され(平成4(1992)年10月10日～11月29日)、展示図録『弾・吹・打ー日本の楽器とその系譜ー』が刊行された。この展覧会は日本だけでなく、中国、韓国、東南アジアなど諸外国の楽器を、琴箏・琵琶・三味線等の弾きもの(弦楽器)と、横笛・尺八・土笛・笙などの吹きもの(管楽器)、太鼓・鐘・銅鑼・拍子木などの打ちもの(打楽器)に分け、わが国の楽器についても、縄文時代の出土品から始まって現代まで広い時代の楽器を展示したものである。このことからわかるように、紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究の成果を展示したと言うより、他の展示品とあわせて並べて、この展覧会では国立歴史民俗博物館が所蔵する楽器コレクションの一部として、本コレクションの資料が展示された。

その後また約10年後に、3年間の「紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究と公開」資料調査研究プロジェクトを経て、平成16(2004)年3月に『国立歴史民俗博物館資料図録3 紀州徳川家伝来楽器コレクション』(414ページ、内、図版306ページ)が刊行された。この図録には、笙・箏・笛等の吹きもの、琵琶・箏・琴の弾きもの、太鼓・鼓等の打ちものに加えて、楽器の入っていた箱や袋にはじまる、琴柱や各種の譜等の付属品を含むすべての資料が306ページのカラー図版として納められている。またコレクションの全容と伝来、その美術工芸的価値と付属資料に関する考察およびコレクションに付属するすべての資料の翻刻が掲載された。その結果、本図録は今後、紀州徳川家伝来楽器コレクションを研究するためには欠かせない、初めての基礎資料となったといえよう。残念ながら本図録は非売品であるが、その内容は次に述べる「館蔵紀州徳川家伝来楽器データベース」に網羅されている。

翌年の平成17(2005)年3月には「館蔵紀州徳川家伝来楽器データベース」が公開された。このデータベースは前年度に刊行された『国立歴史民俗博物館資料図録3 紀州徳川家伝来楽器コレクション』に基づいて、コレクションに含まれるすべての楽器と付属品・付属文書に関する情報を提供し、資料の写真まで閲覧できるようになっている。また画面に表示される関連付属文書をクリックすると、復刻された内容が表示され、非売品である図録が手元になくともコレクションの研究が可能となった点が評価される。

また平成4年の企画展示に続き、2年間の展示プロジェクトを経て、平成17(2005)年に特別企画「紀州徳川家伝来の楽器」(平成17(2005)年8月13日～9月19日)が開催された。この展覧会では図録は刊行されなかったが、同年秋に人間

文化研究機構連携展示「うたのちから－和歌の時代史－」（平成17（2005）年10月18日～11月27日）が開催されて、本コレクション中の「楽所系図」や龍笛・和琴・琵琶などが展示され、展示図録の「第六章 宮廷文化と知の集積 四 中世の御遊－管弦の世界」の箇所、それらについての解説と図版が掲載されている。

その後、平成19（2007）年から平成21（2009）年までの3年間、基盤研究「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」が行われ、今年度末までに研究報告書が刊行される予定である。

この他、コレクション中の笙について、ミニ企画展示「紀州徳川家伝来楽器－笙－」が平成20（2008）年10月17日から12月7日まで開催され、琵琶について特集展示「紀州徳川家伝来の楽器－琵琶－」が平成22（2010）年4月27日から6月20日まで開催された。

以上述べたとおり、紀州徳川家伝来楽器コレクションに関して、『国立歴史民俗博物館資料図録3 紀州徳川家伝来楽器コレクション』の刊行以来、ほぼ毎年のように展示や調査研究が続けられている。

3. 資料の調査・研究・展示に関する評価

紀州徳川家伝来楽器コレクションの調査研究は、その名称・形状・法量・伝来・付属文書など博物館資料として最低限必要な事柄については、収集してから約20年たって刊行された平成16年の『国立歴史民俗博物館資料図録3 紀州徳川家伝来楽器コレクション』によって、基本的な作業はほぼ尽くされたといつて良いと考えられる。ただし個別の資料の時代については、楽器に記された銘や付属文書によって年代が明らかなもの以外は、制作された時代を特定することが現状では困難なため、伝来によって記載したり、材質についても詳細な調査はこれからのゆだねたりしているが、楽器史研究の現状を考えればやむを得ないことであろう。

先にも述べたようにこの図録は非売品であるが、その内容はすべてデータベースとして一般に公開され、本コレクションを研究しようとするものは誰でも利用できるようなっていることは、大学共同利用機関である国立歴史民俗博物館として、その姿勢を大きく評価できる。

また調査研究については、楽器としての機能にとどまらず、資料の美術工芸的価値やそれが制作された文化的背景についても研究を進め、その成果を展示にも生かしていることに、博物館としての特色が出ていると評価できる。反面、本来の機能である音楽を演奏する道具であることについての歴史的研究は、楽器史そのものの研究がまだ十分でないために立ち後れている点は否めない。

しかし例えば、平成16年に刊行された『国立歴史民俗博物館資料図録3 紀州徳川家伝来楽器コレクション』の中の解説で小島美子氏が、コレクションの龍笛の喉の部分をX線透過撮影によって調べた結果、おそらくは折れた笛の修理をきっかけとした能役

者と笛の製作者達の連携が能管の構造を生んだのではないかと指摘し、龍笛から能管へという楽器の変遷を、紀州徳川家伝来楽器コレクションの龍笛と能管は実証しているのではないかと述べている。破損しやすい楽器はしばしば修理を受けたと考えられるが、そのことが新しい楽器を生むきっかけになったのではないかという指摘は、あるいは龍笛だけに限らないことかもしれない。このように調査研究を通じて新たな視点が生まれ、また資料に戻るという方向は、国立歴史民俗博物館の目指す、資料から研究へ、研究から資料へという「博物館型研究統合」の考え方にそったものである。平成19年度から実施された基盤研究「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」の中で、資料に即したこのような研究がどれだけ進展し、その成果が研究報告書として公表されるか期待される場所である。

この調査研究と並行して、平成20年と22年にそれぞれ笙と琵琶に関する展示が行われたが、「博物館型研究統合」の考え方から見て、各種別の楽器を展示する中で基盤研究の成果がどのように生かされたか、また逆にそれぞれ一連の楽器を展示したことにより何か研究的に新しいことが見えてきたのか、このこともまた公表される研究報告書を待ちたい。

以上述べたとおり、紀州徳川家伝来楽器コレクションの資源としての活用状況は、調査研究に関しては、基本的な整理と公開が終わったところであると考えられ、今後さらに楽器としての研究も進める中で、新たな展示計画が生まれていくことを望みたい。またその高い装飾性から、製作当時の文化の有様を見るための美術工芸品として、他の資料と組み合わせた様々な角度からの活用も、国立歴史民俗博物館の所有する貴重なコレクションとして今後さらに期待される。

(2) 外部評価のための参考資料

国立歴史民俗博物館における資料収集の基本方針

【資源の共同利用性】

国立歴史民俗博物館は、日本の歴史と文化に関する研究を組織的かつ持続的に推進するために設置された大学共同利用機関であり、博物館の持つ「資源」「研究」「展示」という三つの機能を有機的に連携させた「博物館型研究統合」という新しい研究スタイルを特色としている。

博物館に不可欠な「資源」として、日本および関連する諸地域の有形無形の資料を収集することは、館にとって中核的な事業のひとつであるが、それにあたっては、館のみの論理ではなく、大学や地域博物館では困難な資料を収集し、共同研究や教育に資するといった、資源の共同利用性の観点にもとづいて行われることが必要である。

そのために、館外の有識者をまじえた資料収集委員会の審議と助言を得ることによって、広い視野による正当性の高い収集を実現する。

【継続性と柔軟性】

実際の収集に当たっては、中長期的な視点を持って計画的な収集を図ると共に、学界の研究状況や社会状況等に柔軟に対応することが必要である。

すでに継続的に収集されているジャンルや大型コレクションを中心に、資料の系統的な充実を図る一方、現代展示の構築に伴って収蔵資料の幅が広がったように、何を博物館資料とするかの自覚的な検討を行いつつ、館の理念に従って資料の収集と保存を図る。また、予期せぬ事情で出現した資料の散逸や流出を防ぐために、収集の機動性・即応性を確保しておくことも、日本の歴史と文化に関わる資源を保全する意味で重要である。

【活用との関係】

資料の収集に当たっては、収集後の活用をも視野に入れる必要がある。共同研究をはじめとする研究の素材とすると共に、総合展示の新構築や企画展示の永続的な資源とすることは、館にとっての一義的な活用である。

そのために実物資料を収集する一方、館の特色でもある複製品の制作による収集も継続し、新たに設定した「汎用資料」の分類も活かして、教育的活用も含めて、必要に応じた制作を行う。

また、資料のデジタル画像化による活用は、各方面の利用に資する効果が高く、収集資料はその素材としての意味も持つ。活用の一形態として、考慮すべきである。

歴博における資料収集基本方針について

1. 本館の資料収集の現状と課題

(1) 資料収集の経緯と現状

国立歴史民俗博物館は、日本の歴史と文化を研究し、その成果の展示を実現するため、創設以来、文書、典籍、地図・絵図、考古遺物、民具、美術工芸品などの歴史資料、民俗資料を、製作も含めて精力的に収集につとめてきた。上記の研究目的を果たすためには、資料にもとづく実証的な調査が不可欠であり、館蔵の歴史・民俗資料を個々の研究グループの構成員が親しく手に取り、詳細な調査・研究をおこなうことで、文献からだけでは得られない知見を蓄積することが、博物館機能を併設する研究機関としての最大の武器となっている。また、研究の成果を公開する総合展示や企画展示の場においても、実物資料および高精度の製作資料が重要な役割を果たすことはいままでのない。

創設以来、歴史、考古、民俗の三分野を中心に、個々の研究者の関心と識見を集約した上で館として計画的に収集をはかってきた結果、今日（18年3月末）21万点を越える資料点数を有するに至り、また、重要文化財の「結城合戦絵巻」や近年の「水木家資料」「平田篤胤関係資料」など、貴重な歴史資料の散逸や国外流出を阻止してきたことは、重要な歴史資料の顕在化を研究資源として学会全体に保証するという社会的な役割も担ってきた。近年、地方の博物館の資料収集能力も著しく低下してきており、貴重な歴史文化遺産の散逸を防ぎ、研究・保存するという観点からも、歴博の果たす役割は以前にも増して大きくなっている。

上記の収集資料は、常設・企画展示、図版目録、資料目録、データベース等などにより、広く研究者・一般に対して公開されてきており、「水木家資料」「平田篤胤関係資料」などは、資料型の共同研究の素材として活用され、それぞれの成果は研究報告、企画展示等に結実している。また研究にもとづく詳細な情報を付したデータベースの公開は、国内の少なからぬ大規模博物館が自館の所蔵資料の研究とそのデータベース公開にまだ十分な成果を提示しえていない中で、研究博物館としてきわめて先進的な役割を果たしているといつてよい。今後、大学共同利用機関としての性格をよりいっそう明確化していくなかで、資料の蓄積とその情報の公開は、ますます重要となってくる。

(2) 問題点

しかしながら、創設以来収集してきた資料は21万点を突破し、収蔵環境に大きな問題を生み出すに至っている。すなわち、本館の収蔵庫は資料の材質により温湿度を調整した階層分けの収蔵がなされているが、資料点数の増加によりすでに収蔵庫の一部の階では飽和状態に達しつつある。また、一部の資料に関しては、急速な劣化の進行により、修理もままならない状況がうまれつつある。

現在第3展示室を皮切りにスタートした総合展示リニューアルとの関係でいえば、旧展示の撤去にともない、少なからぬ大型模型やジオラマ等がすでにその収蔵場所に苦慮する事態に至っている。

こうした事態も受け、平成16年度から「汎用資料」の枠組みを設け、将来的な劣化資料への廃棄も含めた臨機応変の対応と教育普及等の多目的の活用を可能としたが、いまだこのカテゴリーに分類可能な少なからぬ造作資料が未登録のまま留置されている。

また、研究や展示など様々な目的で制作されたデジタルをも含む映像資料も相当な点数にのぼっているが、いまだそれらを館の資料としてどのように位置づけるかは検討されていない。平成17

年度には、資料委員会のもとでのデジタル資料ワーキングが、著作権や人格権等、各種権利関係の整理の済んだ映像等の資料を館内で一元的に管理すべきであるとの提言をおこない全館的に承認されたが、いまだその管理体制の実現には至っていない。

国全体の緊縮財政の影響のもと、本館の資料収集予算も従来に比べると厳しいものとなりつつある。近年では、各分野からの資料購入・製作の希望に対し、ほぼ要望通りの水準で応えることは難しくなりつつある。すでに数年前から資料購入費の部門ごとのおおよその均等割を廃し、購入希望調書の内容によって資料の重要性に優先度を設けるようにしているが、今後はより全館的な視点で限られた財源の有効活用をはかる必要があるだろう。

(3) 課題

館員の関心と識見を中心に収集してきた21万点の資料群は、国内外の研究者の調査研究、あるいは他機関の展示や出版活動に活用され、質と量の両面で我が国の歴史研究に欠かせないものとなっているが、分野によっては大きく欠如した資料もある。学会等の動向や意見も反映させたより広い視野による資料収集計画の策定も必要となるだろう。

今後、公募型共同研究の推進などで共同利用性をよりいっそう明確化していく中で、館蔵資料を館内だけではなく館外研究者にも従来以上に活用される体制を構築することが要請されるであろう。当面は熟覧制度の手直しや即日閲覧対象資料の拡大などが考えられるが、高精度のデータベース化、図録化などを通して、より開かれた資料情報の構築を推進する必要がある。館内に蓄積された多用なデジタル等の映像資料に関しても、権利関係の整備されたものを一元的に管理するとともに利用規程を整備し、館内外の研究に活用しうる体制をつくりあげなければならない。

しかしながら、博物館としての立場から言えば、資料の活用だけではなく、その万全な保存という大きな使命をも負っており、無制限な公開が出来ないことは自明である。貴重な歴史資料を未来へと継承させるためには、保存と活用という二つの機能をどう調整させていくかも大きな課題となるだろう。とくに保存の面では、狭隘化した収蔵スペースの拡充と老朽化した空調設備の改修が喫緊の課題となっている。収蔵スペースの拡充に関しては、もはや館内空間のやりくりでは限界にきており、新しい収蔵庫の建設や、総合展示リニューアルの過程で展示体系から外れた大型模型等をまとめて収蔵展示できる施設など、根本的な解決策が必要である。

2. 今後の資料の収集基本方針

(1) 精選

収蔵庫スペースの狭隘化、購入・製作予算の縮小といった事態を受け、今後は資料収集および製作の重点化あるいは精選といった作業が必要となる。個々の研究者の関心にとどまらず、さまざまな学問分野から研究資源として広く活用しうる可能性を秘めた資料の選択も必要になってくる。

資料製作に関しては、これまで企画展示のたびに製作されてきた大型模型などに関して、費用対効果あるいは展示終了後の収蔵スペース等の関係から、製作の計画に当たってはこれまで以上の吟味が必要となってくる。

一部の資料に関しては、著しく劣化が進行しているものも見いだせる。材質や構造上、近い将来の劣化が見込まれるものに関しては、最終的に廃棄という手段も取りうる「汎用資料」として受け入れることも視野に入れるべきである。

(2) 継続性による特色あるコレクションの形成

資料はある程度以上の量を確保することで、編年研究、様式研究など学問的有効性が高まることが多い。すでに本館では一部の大型コレクションの存在が館外にも知られ、研究や展示に広く活用されるようになっている。こうした継続的な収集活動は既存の資料群の価値をさらに高めるのみならず

らず、共同研究のための基盤形成という面でも大きな意味を持つため、継続した資料収集による特色あるコレクションを形成することを今後も積極的にすすめていかなければならない。

(3) 中・長期的視点での館の諸事業との連携

館を挙げての事業として今後総合展示リニューアルが順次遂行される中で、長期的視点における資料収集面の支援が不可欠になる。各室の展示プロジェクト委員会との連携を密にして、限られた財源を効率的に活用すべく資料収集につとめなければならない。

共同研究においても、基盤型共同研究にたいして、研究対象の館蔵コレクションの充実、あるいは研究対象とする資料群そのものの収集などの点で支援することも想定しなければならないだろう。

(4) 資料収集の正当性の担保および資料収集委員会設置の必要性

大学共同利用機関の博物館としての性格上、当館単独の論理ではなく、広く学会動向をも視野に入れた収集が必要となる。館蔵資料を資源とした公募型共同研究も発足している中で、広く学問世界に共有しうる資料の収集が不可欠である。

また、当館の資料購入・製作の予算は年々縮小しつつあるとはいえ、いまだ他の地方博物館に比すれば潤沢とあってよい。国の予算の支出について国民の目が厳しくなっている昨今、当館の資料収集が正当かつ社会的に意義あるものであることを担保するシステムが必要である。当館における個々の資料受け入れについては、資料委員会、鑑査会、評価会という3重のチェックを経ることで高い信頼性を確保しているが、全体の収集計画等に関しては、学問動向との関連性の確保や散逸・流出資料の確保といった社会的要請を果たすために、館外の有識者をも加えた資料収集委員会（仮称）の設置が望まれる。

こうした外部委員を含めた資料収集のための委員会については、平成17年度中の運営会議ですでに館長から設置の意向が示されている。この委員会の構成や任務については、今後資料購入の実務面との調整をはかりながら構想されなければならないが、たとえば運営会議から資料収集担当委員として若干名、館内から歴史資料センター長、資料委員長、歴史、考古、民俗の各領域から館外有識者1名ずつ程度を委嘱した構成メンバーによって、当館の資料購入計画の妥当性を審議することなどが想定できよう。この館外委員には、当該学問分野を中心に広い識見を有し、とくに歴史資料に対する高い見識のある人選が望まれ、ときには館内教員の知り得ない貴重な資料情報の提供を受けることも考えられる。

(5) 機動性・即応性の確保

館の資料収集は計画的でなければならないが、予期せぬ資料の出現や所蔵者の意向による早期の決断などが必要となる場合も少なくない。このため、年度ごとに機動的かつ即応性のある執行に対処しうるある程度の予算枠を設けておく必要がある。また、流出や散逸の危機にさらされた貴重な歴史資料に関しては計画的な予算の中に盛り込んで購入することが望ましいが、緊急性を要する場合には機動的に対応せざるをえないことも有りうる。

(6) 資料収集対象 附：具体的な継続資料群の例

「日本の歴史と文化」を研究するという本館の性格からすると、その収集対象はおのずと広汎なものとなる。また、実物資料、製作資料、デジタルをも含んだ画像・映像・音響資料、あるいは利用資料といったように、その内容も有形無形の多岐にわたる。こうした館蔵資料の多彩さも歴博の特色である。

学問資源としての蓄積と深化、複数の学問領域における利用の可能性、あるいは既存の資料群の充実といった面を考慮して、以下のような分野の資料を収集することが考えられる。なお、参考までにこれまで継続して収集されてきた資料群の実例を併記した。

○古文書・古典籍資料

古文書・古典籍資料は歴史研究のもっとも基本的な資料であり、歴史系博物館としてこれを精力的に収集することは、研究および展示の両面で必要不可欠であり、現に当館の歴史資料の大半を占めている。創設以来、当館は古代・中世・近世・近代と全時代にわたる文書および典籍資料の収集につとめおり、「田中穰氏旧蔵典籍古文書」「広橋家旧蔵記録文書典籍類」「高松宮家伝来禁裏本」「平田篤胤関係資料」「大久保利通関係資料」などは、各時代の政治史、生活史、文化史、思想史上において重要な基礎資料として、全国的に注目されている。これらの資料は、収蔵後に一部が重要文化財に指定されるなど文化財としての価値の高さもさることながら、研究機関である当館において、常設展示、企画展示プロジェクト、共同研究などに大いに活用され、さらに16年度からは即日閲覧においても活用・公開され、館外の研究者にも重要な研究材料を提供している。

◇継続収集中の主要資料群例

- ・正倉院文書複製
- ・中世文書コレクション
- ・江戸町方文書資料

○生産および生活技術に関する資料

創設以来、生活史および技術史に関する研究は、当館の研究の柱のひとつであった。これにともない、庶民生活や祭祀、あるいはさまざまな生産技術に係る資料が、精力的に蓄積され、国内外に誇る特色を有するに至っている。考古資料から近世の染織資料、武器・武具、あるいは建築関係資料など、多岐にわたるがこうした資料は庶民の生活史を‘もの’から立体的かつ視覚的にたどる資料として、共同研究などに活用されている。

◇継続収集中の主要資料群例

- ・近世染織関係資料（アイヌ服飾関係資料を含む）
- ・炮術関係資料
- ・中世陶磁コレクション
- ・弥生時代青銅器コレクション
- ・中世生産および生活遺跡復元模型
- ・葬送儀礼関係資料

○都市文化・風俗等画像資料

名所絵、演劇、交通等の、都市文化に関わる錦絵・屏風・絵巻等の画像資料は、創設以来当館が継続して収集してきた分野である。また、見世物、妖怪・怪談・死絵、園芸に関する錦絵、摺物等の画像資料は、近年当館が精力的に継続収集してきている分野であり、歴博を特色づけるコレクションとして館外に広く知られ、館外の研究や展示にも利用されている。こうした都市文化に関する錦絵や屏風等の画像資料は、受け入れ時の活用意図に限らず、歴史学、文学、演劇学、民俗学等、利用観点の違いによりきわめて多目的な活用が見込まれるものであり、画像を付した館蔵資料データベースとして公開されており、さらに特定コレクションごとの個別データベースの構築・公開や図録化によって、ひろく学問世界で共有される資源となりうる。

◇継続収集中の主要資料群例

- ・妖怪・怪談コレクション
- ・錦絵コレクション

- ・ 祭礼関係資料
- ・ 見世物関係資料
- ・ 近世園芸関係資料
- ・ 近世水滸伝関係資料

○ 海外との文化・技術交流に関する資料

東アジア諸国、あるいは西欧世界との文化、および技術交流に関わる資料に関しては、たんに人やモノの交流の証左となるだけでなく、異文化表象という意味でも重要な意味を有する。近年当館が精力的に収集してきた分野のひとつであるが、今後世界史的視野で研究と展示をすすめていくとする当館にとって、必要不可欠の資料となる。

◇ 継続収集中の主要資料群例

- ・ 貿易陶磁コレクション
- ・ 輸出漆器コレクション

○ 絵図・地図関係資料

荘園や屋敷絵図、あるいは万国図や日本図等の地図類は、当館が長年継続して収集している分野である。とくに地図に関しては、秋岡武次郎古地図コレクションは国内最大級の地図コレクションとして、地理学のみならず歴史学や民俗学など館の内外で研究・展示に活用されており、近年精力的な収集をはじめた前近代世界図関係資料なども、歴博の地図コレクションの特色を高めるものとなってきている。

こうした特色あるコレクションをさらに充実させることは当館の博物館的機能の特色を高めるという観点からも、今後もこの分野の収集は継続されなければならない。

◇ 継続収集中の主要資料群

- ・ 前近代世界図関係資料
- ・ 前近代日本図関係資料
- ・ 社寺境内図・絵図関係資料

○ 近代戦争関係および戦後生活史関係資料

第6室（現代）展示のオープンに近い将来に控え、第二次世界大戦を中心とする近代戦争関係の資料と、戦後の生活史をたどる資料を収集することは当館の急務である。戦争関係の資料に関しては、戦争体験者の高齢化とそれにとまなう記憶と資料の消失が急速に進んでおり、それらの収集と保存に努めることは、たんに展示のための準備にとどまらず、国立の歴史博物館として重要な責務でもある。

また戦後の国民生活の生活実態・風俗・文化などを物語る資料も、博物館においてどこまでを資料として収集するかという問題を考える上で重要な対象であり、これらの分野における意識的・戦略的な収集は当館の近現代資料を特色づけるものとなるだけでなく、この分野の全国的レベルでの資料保存とその方向性の設定に大きく寄与するものとなる。

◇ 継続収集中の主要資料群例

- ・ 近代戦争関係資料
- ・ 戦後生活史関係資料

○ 映像・音響資料

物質としての資料だけではなく、デジタルを含めた映像あるいは音響による情報も、権利関係を明確にした上で、研究資源として活用されるべく収集していかなければならない。またひとつの映像資料を制作する上で必然的に生み出される膨大な素材映像も、将来の研究資源として良好な状態で保管されなければならない。

歴博における資料受け入れの流れ

博物館資源センター—資料購入経費での購入

教員から、「資料購入希望調書」の提出

↓

資料担当者会議で審議

↓

博物館資源センター—会議で審議

↓

資料収集委員会で審議

↓

鑑査会で当該資料が歴博の収蔵資料に適するか否かを審議

金額100～1000万円未満：館外委員1名、館内委員4名

金額1000万円以上：館外委員2名、館内委員4名

↓

評価会において評価額を決定

↓ 申し出金額100万円以上500万円未満：館外評価委員3名

↓ 申し出金額500万円以上：館外評価委員 5名

↓

資料登録

その他の経費（展示・共同研究・科研など）での購入、館外からの寄贈の場合

各プロジェクト代表、あるいは紹介教員から鑑査会開催要望書の提出

↓

資料担当者会議で審議

↓

↓

↓

↓

↓

鑑査会で当該資料が歴博の収蔵資料に適するか否かを審議

金額100万円未満：館内委員4名

↓

↓

↓

↓

↓

↓

資料登録

館蔵資料活用の諸形態

目的	項目	内 容
共同研究		「基盤研究」で、本館所蔵資料の情報化をはかり、歴史学・考古学・民俗学などの新しい方法論的な基盤をつくる。「基盤研究」の中の公募型は、まとまった館蔵資料の研究を館外に広く公募。
	総合展示	総合展示の展示資料の多くは館蔵の実物資料、もしくは複製資料。
展示	企画展示	「館蔵資料型」の企画展示は、展示資料の大半が館蔵資料。
	特集展示	現在は年間数回、第3展示室副室で館蔵資料をテーマを絞って公開。
情報発信	目録・図録	まとまった点数の資料群の資料情報を採録した資料目録、精細な図版と資料情報を併せた資料図録。
	データベース	館蔵資料全点に関する基礎的な資料情報を公開する「館蔵資料データベース」、個々の教員あるいはプロジェクトによる資料調査研究をもとに、さらに詳しい情報が付与された個別資料データベース。
	熟覧	研究者の事前申請により、館蔵資料の熟覧を許可。
熟覧等	即日閲覧	研究目的の利用者に、事前申請なしに近世・近代資料の一部を閲覧に供する。
	大学利用	事前申請により、歴博の所蔵資料を大学の演習等の利用に供する（ただし、場所は歴博）。
貸付等	資料貸付	館外の博物館、美術館等の展示のために館蔵資料を貸与。ジオラマなど大型資料には長期貸与のものもあり。
	写真原板貸出	出版、放送などの目的に館蔵資料の写真原板を貸与。一部、デジタルデータでの提供も開始した。
大学院教育		総合研究大学院大学日本歴史研究専攻の授業を、歴博資料を用いておこなう。夏期は館蔵資料を用いた資料研究的な集中講義も例年開催している。

(参考)

③「雅楽器(紀州徳川家伝来)」318点
1982年度文化庁から管理換、2008・2009年度購入
担当：日高薫 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	
資料収集	◎																										■	■					
資料調査研究																						■											
共同研究																							■										
展示																																	

④「木戸家資料」1,333件
1984・1987年度受贈
担当：樋口雄彦 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	
資料収集						●																											
資料調査研究																																	
展示																																	

⑤ 「伊能家資料」 7, 063点

1985年度受贈

担当: 岩淵令治 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘	要	
資料収集				●																														受贈	
資料調査研究																																		「伊能家資料」資料調査プロジェクト	
展示																																		資料目録(2011年度刊行予定)	
データベース																																		総合展示第3展示室「文書と絵図は語る」(1987.3～2005.3)	
即日閲覧																																		データベース「館蔵近世・近代古文書」(2005.3公開)	
																																		実物資料、マイクロフィルムズの閲覧(2006.12公開)	

⑥ 「高松宮家伝来禁裏本」 1, 671件

1987・1990年度文化庁から管理換、2008年度購入

担当: 吉岡真之 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘	要	
資料収集																																		管理換(1987・1990年度)、流出資料の購入(2008年度)	
資料目録									◎																									資料目録「高松宮家伝来禁裏本目録[分類目録編]」(2009.3刊行)	
データベース																																		資料目録「高松宮家伝来禁裏本目録[奥書刊記集成・解説編]」(2009.3刊行)	
共同研究																																		データベース「館蔵高松宮家伝来禁裏本」(2009.3公開)	
																																		基礎研究「高松宮家伝来禁裏本の基礎研究」	
																																		基礎研究「高松宮家伝来禁裏本の総合的研究」	
																																		人間文化研究機構連携研究「中世近世の禁裏の文庫と古典学の研究－高松宮家伝来禁裏本を中心として－」	
研究報告																																		『人間文化研究機構連携研究「文化資源の高度活用」 中世近世禁裏の蔵書と古典学の研究－高松宮家伝来禁裏本を中心として－研究調査報告書1』『研究調査報告書2』	
展示																																		人間文化研究機構連携展示「うたのちから－和歌の時代史－」(2005.10.18～11.27)	
																																		人間文化研究機構連携展示「うたのちから－和歌の時代史－」(2005.10刊行)	
即日閲覧																																		展示図録「うたのちから－和歌の時代史－」(2005.10刊行)	
																																		マイクロフィルムズの閲覧(2004.7公開)・紙焼きの閲覧(2004.9公開)	

⑦ 「田中穰氏旧蔵典籍古文書」 488件
 1988・1989年度購入、1990年度文化庁から管理換
 担当：井原今朝男 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘要
資料収集							■	■	◎																							購入(1988・1989年度)、管理換(1990年度)	
資料調査研究																																	「田中穰氏旧蔵典籍古文書」資料調査プロジェクト
																																	資料目録「田中穰氏旧蔵典籍古文書目録」[古文書・記録編]』(2000.3)
																																	資料目録「田中穰氏旧蔵典籍古文書目録」[国文学資料・聖教類編]』(2005.3)
データベース																																	データベース「館蔵中世古文書」(1998.8公開)
即日閲覧																																	マイクログフィルムの閲覧(2004.7公開)
資料目録																																	研究報告第72集「田中穰氏旧蔵典籍古文書」所収記録類目録1(1997.3刊行)

⑧ 「見世物コレクション」 637件
 1997～2001・2003・2008年度購入
 担当：松尾恒一 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘要	
資料収集																																	購入	
資料調査研究																																		「見世物コレクション」資料調査プロジェクト
																																		資料目録「見世物関係資料コレクション目録」(2010.1刊行)
展示																																		総合展示第3展示室「都市の時代」(2008.3.18公開)

⑨ 「砲術関係資料」 1, 832件
 1997・1999～2001年度購入
 担当：宇田川武久 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘要	
資料収集																																	購入	
資料調査研究																																		「館蔵砲術関係資料」資料調査プロジェクト
																																		資料目録「安齋貫砲術関係資料及び所荘吉「青圃文庫」コレクション目録」(2007.3刊行)
データベース																																		データベース「館蔵武器器具」(2005.3公開)
展示																																		「歴史のなかの鉄砲伝来」展示プロジェクト
																																		企画展示「歴史のなかの鉄砲伝来ー種子島から戊辰戦争までー」(2006.10.3～11.26)
																																		展示図録「歴史のなかの鉄砲伝来ー種子島から戊辰戦争までー」(2006.10刊行)

⑩ 『懐溜諸屑』 28冊

1998年度購入

担当：久留島浩 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘	要	
資料収集																	■																	購入	
資料調査研究																																		『懐溜諸屑』資料調査プロジェクト データベース「宿蔵『懐溜諸屑』」(2007.3公開)	
展示																																		総合展示第3展示室「村からみえる『近代』」(2008.3.18公開)	

⑪ 「死絵」(怪談・妖怪コレクションのうち) 434件

1999～2009年度購入

担当：山田慎也 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘	要	
資料収集																																		購入	
資料調査研究																																		「死絵資料」資料調査プロジェクト 資料図録『死絵』(2010.2刊行)	
展示																																		「錦絵はいかにつくられたか」展示プロジェクト 企画展示「錦絵はいかにつくられたか」(2009.2.24～5.6) 展示図録『錦絵はいかにつくられたか』(2009.2刊行)	
																																		総合展示第4展示室「恐れと祈り」(2012年度公開予定)	

⑫ 「平田篤胤関係資料」 8,098点
 2002～2004年度購入
 担当：樋口雄彦 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘	要
資料収集																						■	■	■									購入	
資料調査研究																																		「平田篤胤関係資料」資料調査プロジェクト 資料目録「平田篤胤関係資料目録」(2007.3刊行)
共同研究																																		個別共同研究「平田国学の再検討―篤胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―」 研究報告「平田国学の再検討(一)」(2005.3刊行) 研究報告「平田国学の再検討(二)」(2006.3刊行) 研究報告「平田国学の再検討(三)」(2009.3刊行) 研究報告「平田国学の再検討(四)」(2010.3刊行)
科研費研究																																		基盤研究(B)「平田国学の再検討―篤胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―」
展示																																		「明治維新と平田国学」展示プロジェクト 特別企画「明治維新と平田国学」(2004.10.13～12.5) 展示図録「明治維新と平田国学」(2004.10刊行)
即日閲覧																																		研究速報展示「平田国学と千葉県」(2005.7.1～8.28) 総合展示第3展示室「村からみえる『近代』」(2008.3.18公開) 実物資料、マイクロフィルム等の閲覧(2004.9公開)

⑬ 「紅板縮関係資料」 6件
 2003年度受贈、2004年度購入
 担当：澤田和人 外

年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	摘	要
資料収集																																		受贈(2003年度)、購入(2004年度)
展示																																		「紅板縮め―江戸から明治のランジェリー―」展示プロジェクト 企画展示「紅板縮め―江戸から明治のランジェリー―」(2011年度開催予定) 展示図録「紅板縮め―江戸から明治のランジェリー―」(2011年度刊行予定)

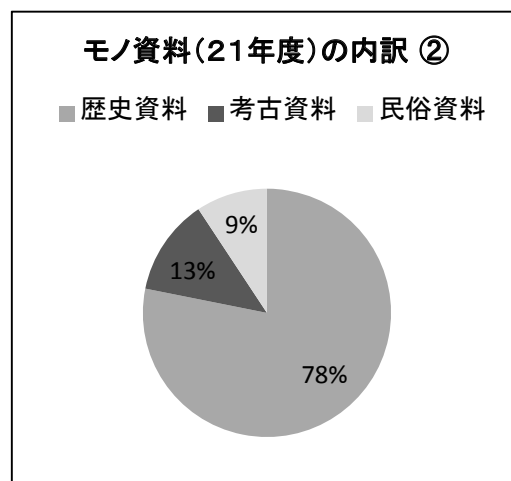
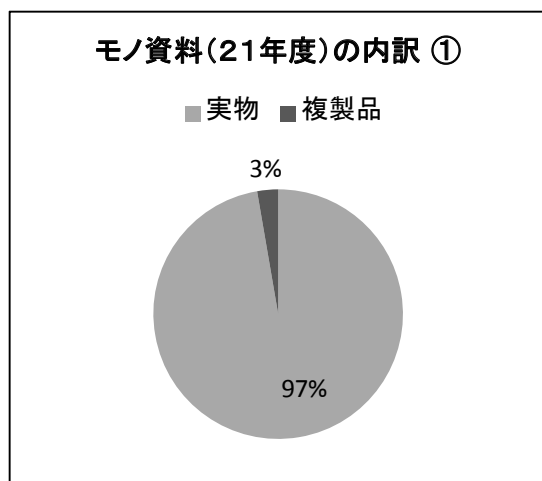
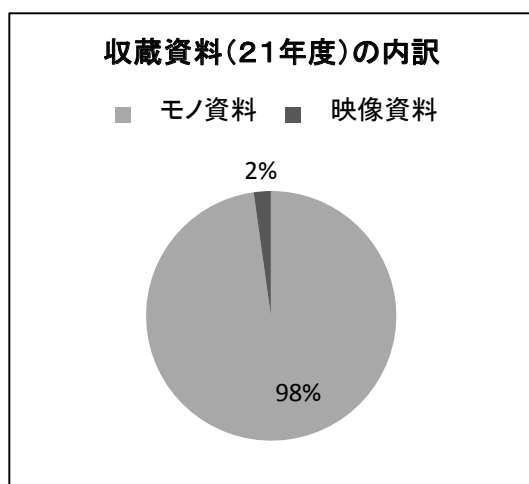
⑭ 「直良信夫コレクション」 2, 914件
 2006年度受贈
 担当：春成秀爾外

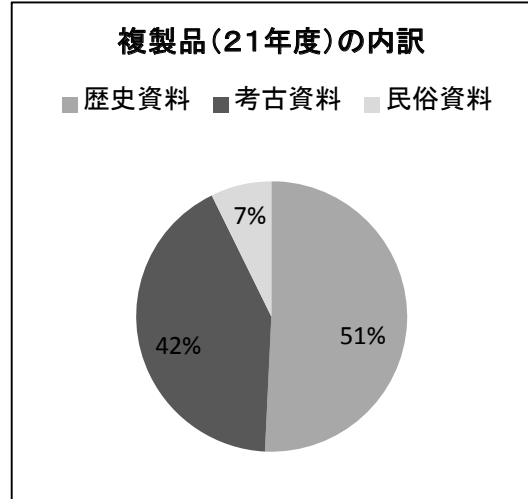
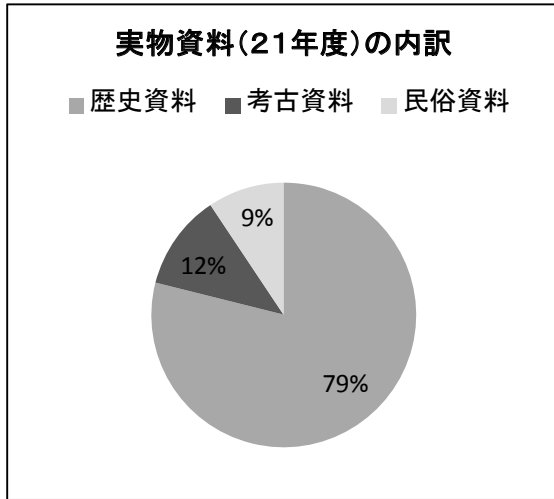
年度	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13
資料収集																										●						
資料調査研究																																
展示																																

収蔵資料点数及び蔵書冊数一覧

<収蔵資料点数>

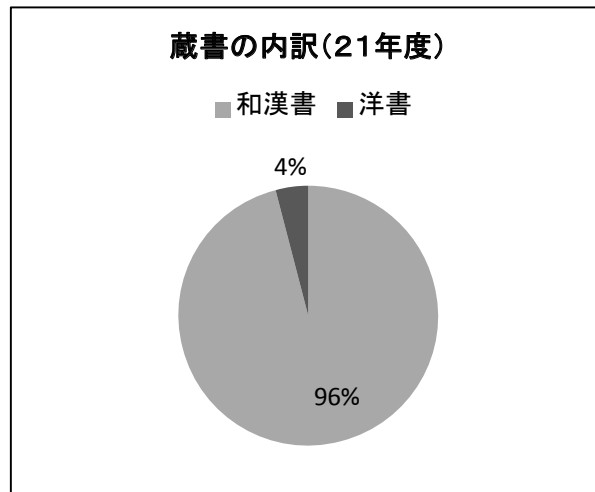
	H16	H17	H18	H19	H20	H21
モノ資料	199,156	206,837	209,481	211,232	217,173	217,890
(対前年度増加数)	(4,169)	(7,681)	(2,644)	(1,751)	(5,941)	(717)
国宝	5	5	5	5	5	5
重要文化財	82	83	85	85	85	85
重要美術品	28	27	27	27	27	27
映像資料	3,732	4,061	4,152	4,527	4,642	4,977
(対前年度増加数)	(587)	(329)	(91)	(375)	(115)	(335)
計	202,888	210,898	213,633	215,759	221,815	222,867
(対前年度増加数)	(4,756)	(8,010)	(2,735)	(2,126)	(6,056)	(1,052)





<蔵書冊数>

	H16	H17	H18	H19	H20	H21
和漢書	256,717	263,408	271,983	275,986	281,969	301,489
(対前年度増加数)	(6,815)	(6,691)	(8,575)	(4,003)	(5,983)	(19,520)
洋書	12,141	12,339	12,473	12,585	12,691	12,724
(対前年度増加数)	(150)	(198)	(134)	(112)	(106)	(33)
計	268,858	275,747	284,456	288,571	294,660	314,213
(対前年度増加数)	(6,965)	(6,889)	(8,709)	(4,115)	(6,089)	(19,553)



《国立歴史民俗博物館所蔵国指定文化財一覧》（平成22年9月現在）

1) 国 宝

資料名称	件数	員数・単位	種別	指定年月日
後宇多院宸記（文保三年具注曆）御自筆本	1	1 卷	古文書	S27.11.22
額田寺伽藍並条里図（麻布）	1	1 舗	古文書	S52.6.11
宋版史記（黄善夫刊本）	1	90 冊	典籍	S41.6.11
宋版漢書（慶元刊本）	1	61 冊	典籍	S42.6.15
宋版後漢書（慶元刊本）	1	60 冊	典籍	S42.6.15
合 計	5	213 点		

2) 重要文化財

資料名称	件数	員数・単位	種別	指定年月日
紙本白描隆房卿艶詞絵巻	1	1 卷	絵画	S33.2.8
紙本著色前九年合戦絵詞	1	1 卷	絵画	S39.5.26
紙本著色洛中洛外図屏風（歴博甲本）	1	1 双	絵画	S15.5.3
紙本著色醍醐花見図屏風	1	1 隻	絵画	S39.1.28
絹本著色宗祇像（三条西実隆賛）	1	1 幅	絵画	S9.1.30
絹本著色足利義輝像	1	1 幅	絵画	S49.6.8
木造地藏菩薩立像（附像内納入品）	1	1 軀	彫刻	S10.4.30
白紬地梅樹下草模様描絵小袖	1	1 領	工芸	H.19.6.8
黒韋威肩白腹巻（大袖付）	1	1 領	武具	S33.2.8
色々威腹巻（大袖付・盛上黒漆小札） ※佐賀鍋島家伝来，伝細川頼元所用	1	1 領	武具	S31.6.28
色々威腹巻（大袖付・盛上黒漆小札）	1	1 領	武具	S31.6.28
太刀（無銘伝国行）	1	1 口	刀剣	S29.3.20
廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち 経光卿記および経光卿記関係資料（＝民経記）	1	58 点	古文書	H1.6.12
廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち 兼仲卿記および兼仲卿記関係資料（＝勘仲記）	1	83 卷	古文書	H2.6.29
廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち符宣抄別本	1	1 卷	典籍	H10.6.30
廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち 弁官補任写本（自筆）寛弘七年至仁平四年（久壽元年）廣橋頼資	1	1 卷	典籍	H3.6.21
廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち 律卷第三，衛禁，職制（端闕）写本（鎌倉期）	1	1 卷	典籍	S45.5.25
廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち 令義解 写本（鎌倉期）	1	1 卷	典籍	S45.5.25
廣橋家旧蔵記録文書典籍類のうち 扶桑略記卷第四未完古写本	1	1 卷	典籍	S15.6.5
越前島津家文書	1	46 点	古文書	S55.6.6
高山寺文書	1	1 双	古文書	S52.6.11
紙本墨書栄山寺寺領文書	1	3 卷	古文書	M37.8.29
紙本墨書官宣旨	1	1 卷	古文書	M37.8.29
紙本墨書起請文	1	1 卷	古文書	M37.8.29
紙本墨書大安寺資財帳	1	1 卷	古文書	M43.4.20

平宗盛筆消息	1	1 幅	古文書	S34.12.18
大江広元筆消息	1	1 幅	古文書	S37.2.2
紙本墨書後醍醐院宸翰消息	1	1 卷	古文書	M35.4.17
紙本墨書後光厳院宸翰消息	1	1 幅	古文書	S13.7.4
愚昧記（承安二年春自筆本）	1	1 卷	古文書	S51.6.5
中右記部類卷第七	1	1 卷	古文書	S53.6.15
伊勢物語（伝為氏筆本）	1	1 帖	典籍	S52.6.11
紙本墨書大和物語	1	2 帖	典籍	S15.5.3
紙本墨書源氏物語	1	6 帖	典籍	S16.7.3
伏見天皇宸翰源氏物語抜書	1	1 卷	典籍	S54.6.6
千載佳句	1	2 帖	典籍	S46.6.22
伏見天皇宸翰和漢朗詠集卷下残卷	1	1 卷	典籍	S55.6.6
紙本墨書万葉集卷第十一	1	1 帖	典籍	S16.7.3
伏見天皇宸翰後撰和歌集卷第四断簡（筑後切）	1	1 卷	典籍	S55.6.6
後奈良天皇宸翰詞花和歌集	1	1 組	典籍	S54.6.6
新古今和歌集	1	2 帖	典籍	S52.6.11
伏見天皇宸翰御歌集	1	1 組	典籍	S54.6.6
紙本墨書奥義抄卷上	1	1 帖	典籍	S16.7.3
白氏文集新樂府上残卷（小野道風本）	1	1 卷	典籍	S56.6.9
宋版春秋経伝集解	1	16 冊	典籍	S33.2.8
宋版後漢書	1	30 冊	典籍	S33.2.8
宋版致道先生讀史管見（金沢文庫本）	1	8 冊	典籍	S33.2.8
宋版備急千金要方（金沢文庫本）	1	33 冊	典籍	S40.5.29
宋版五燈会元（普門院本）	1	7 冊	典籍	S33.2.8
柳原家資料のうち大織冠伝	1	1 卷	典籍	S34.12.18
柳原家資料のうち春日若宮神主祐茂百首和歌	1	1 卷	典籍	S34.12.18
柳原家資料のうち 都玉記（建久九・建暦二大嘗會事）	1	1 卷	古文書	S34.12.18
紫紙金字大方廣佛華嚴経卷第六十三	1	1 卷	典籍	S61.6.6
高松宮家伝来禁裏本のうち千五百番歌合	1	10 帖	典籍	H6.6.28
高松宮家伝来禁裏本のうち袖中抄	1	20 卷	典籍	H5.1.20
高松宮家伝来禁裏本のうち後柏原天皇宸翰禁裏著 到和歌 自三月三日至六月十四日	1	2 卷	典籍	S57.6.5
高松宮家伝来禁裏本のうち後柏原天皇宸翰禁裏著 到和歌 自五月二十七日至六月六日		1 卷	典籍	S57.6.5
高松宮家伝来禁裏本のうち後柏原天皇宸翰御製著 到和歌 文明十五年三月飛鳥井雅親点）		1 卷	典籍	S57.6.5
洛中洛外図屏風（歴博乙本）	1	1 双	絵画	H6.6.28
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち伯家記録	1	7 卷	古文書	H17.6.9
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書本朝世紀 紙背二詩懐紙八通アリ	1	1 卷	典籍	S10.4.30
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書神代系図	1	1 卷	古文書	S16.7.3
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書帝系図 応安四年七月十八日奥書アリ	1	1 卷	古文書	S16.7.3
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち大神宮法楽寺寺領 文書紛失記 康永三年八月日	1	1 卷	古文書	S39.1.28

田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち阿不幾乃山陵記 (方便智院本)	1	1 卷	古文書	S39.1.28
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち春記自長暦二年八月十七日至同年十月二十九日 紙背相大乘宗二諦義林章	1	1 卷	古文書	S39.1.28
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙背墨書文集 紙背二長寛二年書写ノ舍利供養式アリ	1	1 卷	典籍	S9.1.30
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書醍醐雜事記卷第一残卷	1	1 卷	典籍	S9.1.30
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書白氏後集卷第五十九(金沢文庫本) 貞永元年書写加點ノ奥書アリ	1	1 卷	典籍	S9.1.30
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書白氏文集卷第八, 十四, 三十五, 四十九 (金沢文庫本)	1	4 卷	典籍	S9.1.30
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書李楨雜詠百二十首上下 下卷二建治三年書写ノ奥書アリ	1	2 卷	典籍	S9.1.30
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書臣軌下卷	1	1 卷	典籍	S18.6.9
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち大理秘記竹林院左府記, 吉続記, 吉田内府記, 各卷末甘露親長識	1	2 卷	古文書	S39.1.28
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書続詞花和歌集	1	2 帖	典籍	S16.7.3
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書後拾遺和歌抄	1	2 帖	典籍	S16.7.3
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書周易自卷第一(卷第二, 第六補写) 至卷第六	1	6 帖	典籍	S9.1.30
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち江都督納言願文集卷第三, 第六残卷	1	2 帖	典籍	S39.1.28
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書寛平御遺戒 寛平三年春宮権大進光国書写校合ノ奥書	1	1 卷	典籍	H4.6.22
大久保利通関係資料	1	3053 点	歴史	H16.6.8
紙本著色結城合戦絵詞	1	1 卷	絵画	S39.5.26
中右記部類第十九	1	1 卷	典籍	S53.6.15
延喜式卷第五十	1	1 卷	典籍	S25.8.29
千葉県八街町出土銅印(印文「山邊郡印」)	1	1 顆	考古	S46.6.22
鹿児島県広田遺跡出土貝製品 附 土器残欠	1	152 点	考古	H18.6.9
千葉県成田市八代椎木出土梵鐘(宝亀五年二月十二日在銘)	1	1 口	考古	S53.6.15
対馬シゲノダン遺跡出土品	1	51 点	考古	S55.6.6
熊本県植木町マロ塚古墳出土品	1	67 点	考古	S56.6.9
合計	85	3737 点		

3) 重要美術品

資料名称	件数	員数・単位	種別
紙本著色南蛮人来朝図屏風	1	1 双	絵画
紙本墨書平家物語	1	12 冊	典籍
紙本墨書中納言顕基事	1	1 幅	書跡

妙法蓮華經如来神力品卷第二十一（裝飾經）	1	1 卷	典籍
大乘止観法門卷下并後序	1	1 卷	典籍
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書元秘抄東坊城和長筆	1	2 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書久安四年宸筆御八講記（三条公教記）	1	1 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書天仁元年大嘗会記（江記）	1	1 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨画大治五年上醍醐薬師堂吉祥天像供養願文案	1	1 卷	古文書
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書建仁四年具注曆（高山寺本）紙背ニ反音抄アリ	1	1 卷	古文書
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書康和四年七月二十一日尊勝寺供養記	1	1 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書中右記御仏事部類紙背ニ文書アリ	1	1 卷	古文書
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書長秋記（御願供養試楽）永久二年十一月御願供養試楽	1	1 卷	古文書
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書朔旦冬至詔直表文集紙背ニ消息アリ	1	1 卷	古文書
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書僧平珍款状案（延喜九年六月二十七日）	1	1 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書後宇多法皇院宣（文保二年九月十三日万里小路宣秀房奉）	1	1 幅	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち後醍醐天皇綸旨（正中三年三月十七日万里小路宣秀房奉）	1	1 幅	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書清閑寺文書中ニ西華門院御讓状アリ	1	3 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書慈鎮和尚歌集残卷日吉七社歌合	1	1 帖	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書後柏原天皇宸翰古今和歌集天文二十四年四月十八日三条西公条跋	1	1 帖	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち造伊勢二所太神宮宝基本記紙背ニ徳治二年十二月十九日ノ消息アリ	1	1 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち新古今和歌集自卷第一至卷第四	1	1 帖	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち和漢朗詠集上元応二年十月日書写ノ奥書アリ	1	1 卷	書跡
田中穰氏旧蔵典籍古文書のうち紙本墨書西宮記臨時五	1	1 卷	
永安四年銘神獸鏡（呉永安四年ノ銘アリ）	1	1 面	考古・銅
永安五年銘神獸鏡（呉永安五年ノ銘アリ）	1	1 面	考古・銅
伝宮崎県新富町新田原山ノ坊古墳出土鏡	1	3 面	考古・銅
合 計	27	43 点	

＜資料購入・受贈の状況＞

16年度	
2004年度に購入を行った主な資料として、桃太郎画伝絵巻3巻、ナダール撮影幕末遣欧使節団記念写真コレクション13枚、6区袷袷文銅鐸などがあげられる。また、企画展示および総合展示リニューアルに向けての資料として、巖島和歌浦図屏風六曲一双、錦絵コレクション20件、近世・近代染織資料20件をはじめ、貿易陶磁器コレクション、近代戦争関係資料、妖怪・怪談コレクション、葬送儀礼資料、平田篤胤関係資料など多数購入した。受贈資料については復員名簿、近現代女性洋装衣裳他、多数の寄贈があった。	
購入	
資料名称	員数
錦絵コレクション	20件
近世・近代染織資料	20件
近代戦争関係資料	4件
幕末官職出世双六	1件
江戸高名会亭尽	3件
朝顔関係資料	1件
近世食文化関係資料	4件
近世水滸伝関係資料	5件
近世庶民生活関係資料	1件
所荘吉旧蔵コレクション	8件
平田篤胤関係資料	一括
被衣資料	1件
紅板締関係資料	5件
西籍概論	4冊
出定笑話	4冊
サンデー毎日ほか	一括
小金原鹿狩り瓦版	1枚
春色辰巳園	12冊
南柯廼夢	2冊
白棟緯地松皮取檜垣草花模様辻が花裂	10枚一括
ナダール撮影 幕末遣欧使節団記念写真コレクション	13枚
松山藩参勤交代絵巻	1巻
組上絵	4件
絵本江戸土産	9冊
改延まちづくし分	1冊
江戸道中記	1冊
絵本江戸めぐり 完	1冊
江戸方角名所附	1冊
江戸方角名所杖	2件
江戸名所独案内上	1冊
芝田町五丁目名主田中家関係資料	4件
江戸通油町 質商 加藤家文書	一括
書上留	1点
明治二十一年撮影全東京展望写真帖	1帖
琉球談	1冊
出嶋阿蘭陀屋舗景	1枚
出嶋持出入荷物改帳	4件
大清人之図	1枚
唐人陀躍図	1枚
北海道土人風俗	1枚
万国入舶寿語録	1点
山城国木野村土器師関係史料	3件
潮来図誌	1冊
中世陶器コレクション	1件

貿易陶磁器コレクション	7件
銅鼓	1点
6区袈裟襷文銅鐸	1点
アイヌ服飾関係資料	1件
妖怪・怪談コレクション	131件
葬送儀礼資料	42件
巖島和歌浦図屏風	六曲一双
出雲大社及境内周辺図	3幅
受贈	
資料名称	員数
近代戦争関係資料	4件
即位大礼記念帖	1冊
大正震災志附図	1冊
七卿落ちの図・同画讃(2幅対)	2幅
飛田昭規著「頭幽分界靈魂帰宿図説」	1幅
近・現代女性洋装衣装	20件

17年度	
2005 年度に購入を行った主な資料として、内田寛一古地図コレクション2324 点、近世・近代染織資料5 件、花鳥人物蒔絵象嵌飾棚1 基、長崎青貝細工2 件などがあげられる。また、企画展示および総合展示リニューアルに向けての資料として、所荘吉旧蔵炮術秘伝書コレクション122 件をはじめ、東海道五十三次勝景4 帖、法然上人御一代記4 幅、江戸及び諸国名所泥絵集50 枚、近代戦争関係資料、妖怪・怪談コレクション、錦絵コレクションなど多数購入した。受贈資料については、波多野旧蔵和竿コレクション、照臨院旧蔵堂内荘殿具、貿易陶磁器コレクション他、多数の寄贈があった。	
購入	
資料名称	員数
錦絵コレクション	24 件
近世・近代染織資料	5 件
長崎青貝細工	2 件
近代戦争関係資料	35 件
江戸高名会亭尽	3 件
近世水滸伝関係資料	1 件
前近代日本図関係資料	1 件
所荘吉旧蔵コレクション	301 点
被衣資料	2 件
泥絵	1 件
東海道五十三次勝景	4 帖
朝鮮八道図	8 枚
増補華夷通商考	5 冊
享保十一年三月小金御鹿狩之節組々羽織之図	1 冊
ロシア人行列図	1 枚
ロシア船図	1 枚
肥前長崎湊	1 枚
長崎唐人屋敷図巻	1 巻
小浜藩邸図	5 鋪
原昭胤旧蔵資料	3 件
仙台藩江戸関係史料	5 件
松代藩江戸屋敷等関係史料	5 件
江戸の華名物商人ひやうばん	1 枚
江戸大商人乃番附	1 枚
毎日千金繁昌競 初編	1 枚
内田寛一古地図コレクション	2324点
花鳥人物蒔絵象嵌飾棚	1 基
山水花鳥螺鈿化粧簞笥	1 基

江戸及び諸国名所泥絵集	50 枚
妖怪・怪談コレクション	46 件
釈迦涅槃図	1 幅
道益釈迦涅槃像図	1 幅
三世相小鏡	1 冊
法然上人御一代記	4 幅
豆州手石阿弥陀仏窟略縁記	1 冊
江都湯嶋天満宮略縁記	1 冊
勅 法東大悲山笠森寺略縁由記	1 冊
摂泉堺妙国寺蘇鉄略縁起	1 冊
関東一宮船橋両御宮御由緒略記	1 冊
富士山略縁記	1 冊
月輪寺略縁記	1 冊
江島三社弁財天来歴	1 冊
安房国千光山清澄寺略縁起	1 冊
舍利寺境内略縁記	1 冊
釈迦涅槃図(道益図)	1 幅
孝子善之丞感得伝	2 冊
世間常張鏡	1 冊
日蓮聖人註画讃	1 冊
蓮如上人御一生記絵抄	3 冊
圓光大師伝記	7 冊
高野大師行状図画	10 冊
二十四輩順拝図会	10 冊
西国三十三所観音霊場記	10 冊
聖徳太子伝図会	6 冊
受贈	
資料名称	員数
高松宮家装束関係資料	259 点
軍事郵便	1 件
ガラス板写真ネガ	3846 点
照臨院旧蔵堂内荘厳具	34 件
林利三郎日記	61 冊
俣采擇録	1 冊
国史纂論(一・二・三・四・五)	1 冊
山口安彦氏寄贈絵葉書	23 件
大砲(コルベリン砲)	1 門
刀(日本刀)	1 口
貿易陶磁器コレクション	2 件
太田天神山古墳周囲採集の石製品片・埴輪片・土器片	17 点
葬送儀礼資料	1 件
波多野旧蔵和竿コレクション	79 点
波多野元武鈞日誌	1 冊
挟箱	1 点

18年度	
<p>2006 年度のおもな購入資料として、禁裏寺社建築雛形 25 点、小野宮年中行事裏書(「寛平二年三月記」)1 冊、花鳥螺鈿衝立 1 基(長崎青貝細工コレクションに追加)、船橋清原家旧蔵資料 12 冊等がある。このほか、リニューアル関連として、雑誌(「少年倶楽部」「少女倶楽部」等)や東京オリンピックのポスター等を購入した。また寄贈資料では、企画展示「佐倉連隊とその時代」を開催した経緯もあり、近代戦争関係資料および佐倉連隊関連の資料が数多く寄せられたほか、直良信夫コレクション一括を受贈した。</p>	
購入	
資料名称	員数

錦絵コレクション	6 枚
日米伝単等コレクション	5 枚
近世・近代染織コレクション	14 件
長崎青貝細工	1 点
近代戦争関係資料	16 件
江戸高名会亭尽	1枚
所荘吉旧蔵炮術秘伝書コレクション	712 件
禁裏寺社建築雛形	25 点
少女倶楽部	29 冊
少年倶楽部	93 冊
山川惣治画稿	3 面
カストリ雑誌	34 冊
東京オリンピックポスター	5 枚
少年・少女雑誌付録漫画	75 冊
中原淳一・松本かつぢ他少女雑誌付	60 点
漫画・新漫画	30 冊
小野宮年中行事裏書 寛平二年正月記	1 冊
兼仲卿記 弘安11年8月3日条(後半)・同月4日条(前半)および某日条	2 紙
里見氏奉行人連署状	1 通
寛政七年乙卯年三月五日小金原御鹿狩御場絵図	1 枚
御猪狩小金原御場所図	1 枚
紫練緯地菊模様辻が花裂	1 点
船橋清原家旧蔵資料	12 冊
貿易陶磁器コレクション	2 点
東北院職人歌合	1 点
八卦 F-426	1 点
ONOTO#5501	1 点
万年筆(パイロット製)	23 点
四季遊猟図	1 点
怪談・妖怪コレクション	52 件
受贈	
資料名称	員数
関東大震災関係資料	2点
佐倉連隊関係資料	7 件
佐倉連隊建築関係資料	13 点
江尻亮三中尉関係資料	138 件
近代戦争関係資料	16 件
所荘吉旧蔵炮術秘伝書コレクション	712 件
就学牌	1 個
刀剣	1 振
六十六部縁起	1 点
漆工制作関係資料	1 括
倉田家服飾資料	285 件
江戸大名屋敷跡出土木製資料	4 件
棺車	1 台
金鳥香(棒状蚊取り線香)	1 箱
直良コレクション	1 括
めくら般若心経	1 点
秋田方言見立番付	1 点
高射砲の銃身	1 点

19年度	
<p>2007年度の購入資料として、歌川派錦絵版木 345点、阿弥陀の御ゑんぎ 3巻、鏗鏘手練鍛の名刃10点、英雄五人傑 5点、錦絵コレクション(追加) 8点がある。このほか、リニューアル関係として、おもなものは福島鑄郎旧蔵資料 778点を始めとして戦時期生活関係資料 24点や、近代戦争関係資料74点などの近代資料や幕末古写真 55点等を購入した。また寄贈資料では既に受け入れた林榮太郎旧蔵地図コレクションに追加して 359点と水木家資料に追加して黒板勝美書 1点を受贈した。</p>	
購入	
資料名称	員数
歌川派錦絵版木	345枚
阿弥陀の御ゑんぎ	3巻
鏗鏘手練鍛の名刃	10枚
英雄五人傑	5枚
錦絵コレクション	8枚
戦時期生活関連資料	24点
近代戦争関係資料	74点
福島鑄郎旧蔵資料	778点
幕末職人古写真	55点
戦後児童玩具	7点
社会労働運動関係ポスター	35点
室町後期歌集類聚	1冊
受贈	
資料名称	員数
「南氷洋に於ける我捕鯨業」	5巻
めくら吉祥陀羅尼	1枚
英国人宣教師ジョン・バチラーの妻ルイザの写真	1点
林榮太郎旧蔵地図コレクション	359点
黒板勝美書	1幅
佐原の盆灯籠	1組
出羽三山行人 梵天	1基

20年度	
<p>2008年度の主な購入資料として、百鬼夜行図 1巻、白麻地桐樹文字模様染繡帷子 1領、笙(銘「鳳凰丸」)1管、古記録断簡 45枚、『蝦夷島奇観－臙舘獣魚獵部』1冊 がある。このほか、リニューアル関係として、主なものは水俣病「怨」の旗 4点、雑誌『LIFE』1866冊、福島鑄郎氏所蔵資料(追加) 等の現代資料や幕末古写真 29点を購入した。また、寄贈資料では、石井實フォトライブラリー関係資料 1括 やサカアミ(坂網)1点、錦絵玩具画(おもちゃえ)22点等を受贈した。</p>	
購入	
資料名称	員数
古記録断簡	45枚
日本陸軍教本類	24点
戦時記の新聞・郵便貯金・健康保険被保険者証等	14点
好古雑誌 初篇第壱号 合本	1冊
絵葉書、権太在住日本人関係資料等	592点
水俣病「怨」の旗	4点

フリードリヒ二世肖像図螺鈿蒔絵プラケット	1点
名所歌枕	1冊
歌川派錦絵版木	23点
死絵	75点
妖怪・怪談コレクション	33点
錦絵コレクション	3点
佐倉連隊関係資料	1括
雑誌『アサヒクラブ 特集 流血の佐世保』1968年2月2日号	1冊
Occupied Japan 製玩具等	1括
戦後自動車パンフレット	1括
疱瘡絵本『化物語』	1冊
『悪魔避除鍾馗勢』	1冊
幕末古写真	29点
納札 浅草年中行事	14点
伊勢参宮名所之図	1枚
歌川国芳画 誠忠義士伝	4枚
鬱金縮緬地双葉葵文字模様友禅打敷(小袖裂)	1枚
紫縮緬地水辺風景模様染繡打敷(小袖裂)	1枚
段替檜垣牡丹模様唐織九条袷裳(唐織裂)	1肩
白麻地桜柳模様友禅染打敷(帷子裂)	1枚
白紬地獅子模様描絵打敷	1枚
笙(銘「鳳凰丸」)	1管
白麻地桐樹文字模様染繡帷子	1領
納戸木綿地枝垂桜模様友禅染打敷	1領
『蝦夷島奇観一臘舘獣魚獵部』等アイヌ関係資料	17件
『節用料理大全』他絵葉書, 摺物, 錦絵等	26件
妖怪・怪談コレクション	23件
摺物「異年代記」	1枚
手彩色 横浜之祭写真	1枚
『日本の風俗習慣点描』	1冊
明治期生活風俗ポストカード	51点
明治期生活風俗ステレオ写真	21点
明治期生活風俗鶏卵写真	38点
摺物, 絵葉書, 書籍, 木活字等	11件
摺物「吉田花火立物図」	2枚
福島鑄郎氏所蔵資料	62点
雑誌『LIFE』	1,866点
受贈	
資料名称	員数
古銭・紙幣・国債	32点
五・一五事件と二・二六事件関係資料, 戦前絵葉書類	11点
大正・昭和期の双六	28点
三代歌川豊国画錦絵	12枚
疱瘡絵・赤絵コレクション	270枚
水俣病「一株運動」資料	13点
舟形植木鉢	1点
戦時記・占領期の女子学生日記	13冊
戦時下南洋在住日本人への私信	1式
東芝製ターンオーバー型トースター	1点
佐倉連隊一等兵檜谷政吉氏関係資料	219点
大高ヒデ辞令類	11点
石井實フォトライブラリー 地理写真関係機材	1括
錦絵玩具画(おもちゃえ)	22枚
サカアミ(坂網)	1点
図南丸南氷洋捕鯨写真帖	1冊

21年度

2009年度の主な購入資料として、笙(銘「鶯丸」)1管、生田コレクション鼓胴35点、セスティウスのピラミッド螺鈿蒔絵プラーク1点、革命定記2点がある。このほかに、リニューアル関係として、主なものは、筑豊炭鉱略図等の近代産業関係の資料や、現代アイヌ美術工芸品等を購入した。また、寄贈資料では、いざなぎ流祈禱関係資料一括や、旧今治藩士柴田家資料5点、や別役成義関係資料28件等を受贈した。

購入	
資料名称	員数
白綸子地竹鷄模様・白綸子地桐模様繡裂接合打敷(袱紗裂)	1枚
浅葱縮緬地菊文字模様染繡打敷(小袖裂)	1枚
白麻地流水草花模様染繡打敷(帷子裂)	1枚
古代中国青銅器、青銅・鉄工具	13点
笙(銘「鶯丸」)	1管
生田コレクション鼓胴	35点
セスティウスのピラミッド螺鈿蒔絵プラーク	1点
山水蒔絵書物机	1点
『時好』辰之第五号、三越カタログ、資生堂PR誌等	67件
革命定記	2点
天正五年持明院基孝書状	1点
応永二十二年大嘗会仮名記	1冊
正親町院記	1巻
岸和田流砲術伝書	12巻
アイヌ工芸品	6点
筑豊炭鉱略図、手ろくろ等	63件
蒔絵万年筆・シャープペンシル	3点
第一次世界大戦ドイツ人俘虜ケーバライン関係資料	1括
百科絵巻	6巻
ケンペル著 日本誌(蘭訳版)	1冊
ケンペル著 廻国奇観(初版)	1冊
濃萌葱襦子地流水花束模様振袖(小裁)	1領
白綸子地菊垣模様染繡幕(小袖裂)	1張
白綸子地桐文字模様染繡打敷(小袖裂)	1枚
濃茶練緯宝尽模様繡打敷(腰巻裂)	1枚
紺麻地雲流水菊模様筒描幕	1張
下りばら藤繡紋付浅葱紋縮緬地流水水草模様染打敷(小袖裂)	1枚
受贈	
資料名称	員数
歌川国芳作錦絵版木	2枚
いざなぎ流祈禱関係資料	1括
旧今治藩士柴田家資料	5点
近世紙幣・近代割手形	15点
関東大震災写真	50件
別役成義関係資料	28件

＜資料製作の状況＞

16年度	
継続して制作中の正倉院古文書複製9点のほか、倭寇図巻複製1点等があげられる。	
製作資料名	員数
正倉院古文書複製 続々修 第三帙 第九巻・第十巻、第四帙 第一巻～第七巻	9巻
倭寇図巻複製	1巻
海東諸国紀複製	5点
万国総図・人物図複製	2点
平安京左京八条三坊町遺跡出土 銅銭鑄型複製	2点
鎌倉市今小路西遺跡出土 銅銭鑄型複製	3点
福岡市博多遺跡出土 銅銭鑄型複製	2点
堺市堺環濠年遺跡出土 銅銭鑄型複製	7点
浄法寺町コアスカ館跡出土 木葉鋸複製	1点
南部町聖寿館跡出土 木葉鋸複製	1点
厳島神社社殿模型	一式
フヅキグワ複製	2点

17年度	
継続して制作中の正倉院古文書複製12巻のほか、「資料」とは別に新たに創設された、より取り扱い上の自由さを持たせた「汎用資料」が、研究および展示に有効活用されている。	
製作資料名	員数
正倉院古文書 複製 続々修 第四帙 第八巻～第十九巻	12巻
蝦夷国魚場風俗図巻 複製(インクジェット印刷 以下同)	1巻
琉球貿易図屏風 複製	六曲一隻
唐館図 複製	1巻
蘭館図 複製	1巻
江戸城内惣絵図(裏書) 複製	1点
江戸通油町 質商 加藤家文書 複製	10件
中山伝信録 複製	6冊
御大名出世双六 複製	1点
浜浅葉日記 複製	2点
本郷村耕地絵図 複製	1点
改正地球万国全図 複製	1点
新訂万国全図 複製	1点
伊能忠敬日本全圖 大圖 備前, 小豆島 複製	1点
伊能忠敬日本全圖 大圖 越後, 信濃 複製	1点
須弥山儀図 複製	1点
南瞻部州万国掌果之図 複製	1点
伊能忠敬日本全図 中図 複製	1点
江戸名所百人美女 複製	11点
秤の本地A本 複製	1点
秤の本地B本 複製	1点
佐倉連隊兵舎模型	1点
佐倉連隊地模型	1点
神島地模型	1点

18年度	
複製資料として、継続して制作中の正倉院古文書複製品 12巻を作成した他、昨年度に引き続き、「汎用資料」として、主にリニューアル展示用の展示資料を作成した。「汎用資料」は従来の所蔵資料より自由度の高い運用が可能なカテゴリーとして設定され、研究および展示等に活用されている。	

製作資料名	員数
正倉院古文書 複製 続々修 第四帙 第二十～二十一巻、第五帙 第一～四巻	12巻
土佐職人歌合 複製(インクジェット印刷 以下同)	一式
「NEWSMAP Battle for Ormoc Corridor」複製	2点
「NEWSMAP THE PLANNED ASSAULT ON JAPAN」複製	2点
伝単「日本の神風は何処ぞ」複製	2点
伝単「住民に告ぐ」複製	2点
伝単「兵隊に告ぐ」複製	2点
「日露戦争早わかり地図」複製	1点
官軍ビラ 複製	1点
明治二拾七八年戦役日記 複製	1点
伝単「大東亞共榮圏は諸君の指導者の空想に過ぎない」複製	2点
はとや食堂部チラシ 複製	2点
関根房次郎日記 複製	1点
関根房次郎従軍日記 複製	1点
稲田養鯉之図 複製	1件

19年度	
複製資料として、継続して製作中の正倉院古文書複製品 7巻を作成した他、考古関係の複製品および昨年度に引き続き「汎用資料」として、主にリニューアル展示用の展示資料を作成した。	
製作資料名	員数
正倉院古文書 複製 続々修 第五帙 第五～十巻、第十一巻・第十四巻	7巻
中世生産関連資料 複製(追加)	21点
東村山市下宅部遺跡出土多タガ状部分を持つ割り貫き材 複製	1点
いざなぎ流鎮めの小刀 複製	1口
蒙御免貨大見立 複製	1枚
養蚕育手鏡 複製	1冊
いははな集 複製	1冊
海外新聞 複製	2点
追善小島菊 複製	1点
蚕養育拔書 複製	1点

20年度	
複製資料として、継続して製作中の正倉院古文書複製品 5巻を製作した他、昨年度に引き続き「汎用資料」として、主にリニューアル展示用の展示資料を製作した。	
製作資料名	員数
正倉院古文書 複製 続々修 第五帙 第九、十二、十三巻 第六帙 第一巻～第四巻	7巻
いざなぎ流宗石宗三郎資料「大麻」複製	1巻
遠野市長泉寺供養絵額 複製	2面
アイヌ関係資料	3件
洛中洛外図屏風 歴博甲本 複製品	1双
出島カピタン部屋普請分担絵図(文化七年)複製品	1組
水俣病関係資料	4件
西表島節祭関係資料 複製	2件
石垣島登野城村『登野城村旗頭本』複製	1式
通過儀礼関係資料	3件
熊野観心十界曼荼羅 武久本 複製	1幅
佐渡五十年忌法事欄 複製	1式
電動回転式ピラミッド型立体シーサー	1体
妖怪コレクション 複製	8点
「百鬼夜行絵巻」部分複製	1巻
「兵六物語絵巻」部分複製	1巻

「時参不計狐嫁入見図」複製	1枚
「海出人之図(越後国福嶋瀧)」複製	1枚
「越後の国に光り物出て」複製	1枚
「和漢百物語 頓欲ノ婆々」複製	1枚
「本所七不思議 足洗邸」複製	1枚
「水虎相伝妙薬まじない(河童)」複製	1枚

21年度	
複製資料として、継続して製作中の正倉院古文書複製品 7巻を製作した他、昨年度に引き続き「汎用資料」として、主にリニューアル展示用の展示資料を製作した。	
製作資料名	員数
正倉院古文書 複製 続々修 第六帙 第一, 第五, ~第十巻	7巻
ミルク 複製	6点
ハーリー舟(干立) 模型	3点
旗頭(干立) 模型	16点
洛中洛外図屏風 歴博甲本 複製品(インクジェット版)	1双
宇出津暴れ祭り関係資料	6点
比婆荒神神楽関係	2点
おせち食品模型	13点
書籍「筑豊炭鉱絵巻」	1点
縁起物関係資料	39点
下げ物 複製	4点
傘鉾関係資料 複製	4点
浮鯛抄 複製	1点
鳥獵絵馬 複製	1点
書籍「王国と闇」	1点
西表炭鉱写真集	1点

＜資料の修理・修復状況＞

16年度	
雅楽器(紀州徳川家伝来)の内 太鼓	1点
遣足帳	1点
鈴木家資料(古文書)	20点
東遊画卷	1点
武器武具及び砲術資料	11点
平田篤胤関係資料	7点

17年度	
アイヌ服飾関係資料	1点
重文 絹本着色足利義輝像	1点
鈴木家資料(古文書)	9点
武器武具及び砲術資料	5点
東海道凶屏風	1点
重文 宋版備急千金要方(金沢文庫本)	1点

18年度	
高松宮家伝来禁裏本	26点
重文 紙本着色結城合戦絵詞	1点
鈴木家資料(古文書)	4点
武器武具及び砲術資料	7点
東海道路行之図	1点
大坂長崎海路図	1点
水木家資料(古文書)	3点
国立近代美術館遺跡出土品	22点
民俗研究映像資料	8点

19年度	
重要文化財 紙本着色結城合戦絵詞	1点
大分県臼杵磨崖仏古園石仏のうち大日如来座像(模造品)	1点
「南氷洋に於ける我捕鯨業」白黒16mmフィルム	5点
砲術関係資料	5点
沖縄の楽器一式のうち 三線	3点
三味線	2点
胡弓	1点
東海道之図	3点
百鬼夜行絵巻	1点
懐溜諸屑	3点
照臨院旧蔵堂内荘厳具紅絹緬藤模様繡唐幡	1点
鈴木家資料(古文書)	1点
トーマス・T. フープス旧蔵武具類 鉄一枚打出冑	1点
経塚資料コレクション	3点
東京国立近代美術館遺跡出土品	3点
民俗研究映像資料	3点

20年度	
重要文化財 紙本着色結城合戦絵詞	1点
重要文化財 廣橋家旧蔵記録文書典籍類「律」巻第三 衛禁 職制	1点
怪談・妖怪コレクションのうち 百器夜行絵巻	1点
高松宮家伝来禁裏本のうち 隣女集	3点
版本謡曲 誓願寺・鉄輪・鶴・朝長・実盛(古活字版、嵯峨本)のうち	

版本謡曲 朝長(古活字版、嗟峨本)	1点
版本謡曲 実盛(古活字版、嗟峨本)	1点
水木家資料(近世・近代文書)	1件(41点)
照臨院旧蔵堂内荘厳具のうち 紅絹縮地藤模様繡唐幡	1点
近代戦争関係資料のうち ビゴ「日清戦争写真帳」	1点
直良コレクションのうち 写真資料メンテナンス	1件
民俗研究映像資料のフィルムクリーニング	1件(107点)
民俗研究映像資料のデジタル化	2点
石井実フォトライブラリー 写真デジタルデータ化	1件
民俗研究映像資料(「椎葉音楽誌」「黒島民俗誌1, 2」)	3点

21年度	
重要文化財 廣橋家旧蔵記録文書典籍類「令義解」巻第一	1点
怪談・妖怪コレクションのうち 百鬼夜行図	1点
高松宮家伝来禁裏本のうち 御湯殿上之日記	2点
高松宮家伝来禁裏本のうち 太平記絵詞	3点
水木家資料(近世・近代文書)	10件(12点)
照臨院旧蔵堂内荘厳具のうち 紅絹縮地藤模様繡唐幡	1点
平田篤胤関係資料のうち 門人姓名録	1点
三線(知念大工型)	1点
民俗研究映像資料のフィルムクリーニング	1件(79点)
民俗研究映像資料のデジタル化	3点
木戸家史料のフィルムクリーニング 写真デジタルデータ化	1件

＜総合的有害生物管理の状況＞

	H16	H17	H18	H19	H20	H21	
トラップ調査	第1回 設置 5月17日, 展示室 5月24日, 地下ゾーン・収蔵庫 5月24日 回収 展示室 5月31日, 地下ゾーン・収蔵庫 6月7日 第2回 設置 1月31日, 回収 2月14日 (展示室, 地下ゾーン, 収蔵庫を同時に実施)	第1回 設置 展示室 7月25日, 回収 8月8日 第2回 設置 1月16日, 回収 1月30日 (展示室, 地下ゾーン, 収蔵庫を同時に実施)	第1回 設置 7月10日, 回収 7月24日 第2回 設置 1月22日, 回収 2月5日 (展示室, 地下ゾーン, 収蔵庫を同時に実施)	第1回 設置 7月9日, 回収 7月23日 第2回 設置 3月30日, 回収 3月17日 (展示室, 地下ゾーン, 収蔵庫を同時に実施)	第1回 設置 7月14日, 回収 7月28日 第2回 設置 3月30日, 回収 4月13日 (展示室, 地下ゾーン, 収蔵庫を同時に実施)	第1回 設置 8月10日, 回収 8月24日 第2回 設置 2月1日, 回収 2月15日 (展示室, 地下ゾーン, 収蔵庫を同時に実施)	
薬剤散布	ブンガンノン散布 地下ゾーン 12月18日～19日 収蔵庫 12月26日～27日 展示室 12月26日～28日	ブンガンノン散布 地下ゾーン・企画展示室 6月4日～5日 収蔵庫・第4展示室・フロムナード 6月12日～13日 第1・第2展示室 6月19日～20日 第3・第5展示室 7月3日～4日	ブンガンノン散布 第2・第3展示室 5月28日～29日 企画展示室・第1・第5展示室・フロムナード 6月4日～5日 第4展示室・収蔵庫 6月11日～12日 地下ゾーン 6月17日～18日	ブンガンノン散布 第2・第3展示室 5月13日～14日 企画展示室・第1・第5展示室・フロムナード 6月3日～4日 第4展示室・収蔵庫 6月10日～11日 第4展示室・地下ゾーン (荷解き場周辺) 11月25日～26日 第4展示室 12月27日～28日 1月27日～28日 2月24日～25日 3月23日～24日 5月19日～20日 地下ゾーン	薬剤(ブンガンノン、ブンガンンVA)散布 第1・第4展示室 4月20日～21日 収蔵庫・地下ゾーン・研究用図書室 5月10日～11日 第5展示室・企画展示室 5月18日～19日 来館者用図書室 5月25日～26日 第2・第3展示室 (荷解き場周辺) 6月7日～8日 地下ゾーン(第2・第3調査室、荷解き場周辺) 9月15日～16日	薬剤(ブンガンノン、ブンガンンVA)散布 第1回 第4展示室 5月10日～11日 収蔵庫・地下ゾーン・研究用図書室 5月16日～17日 第5展示室・企画展示室・来館者用図書室 5月18日～19日 第2・第3展示室 5月31日～6月1日 第2回 地下ゾーン(第2・第3調査室) 10月18日～19日 第5展示室・第6展示室・企画展示室・来館者用図書室 10月18日～19日	第1回 設置 8月10日, 回収 8月24日 第2回 設置 2月1日, 回収 2月15日 (展示室, 地下ゾーン, 収蔵庫を同時に実施)
燻蒸庫燻蒸 エキヒー ーMS燻蒸	エキヒーMS燻蒸 第1回 5月12日～14日 第2回 6月23日～25日 第3回 8月18日～20日 第4回 9月29日～10月1日 第5回 11月10日～12日 第6回 12月15日～17日	エキヒーMS燻蒸 第1回 8月22日～9月1日 第2回 2月20日～3月2日	エキヒーMS燻蒸 第1回 6月13日～22日 第2回 8月22日～31日	エキヒーMS燻蒸 第1回 5月29日～6月7日 第2回 11月1日～18日	エキヒーMS燻蒸 第1回 9月9日～26日 第2回 12月8日～25日	エキヒーMS燻蒸 第1回 5月18日～6月4日 第2回 11月24日～12月14日 第3回 3月9日～3月30日	
燻蒸庫燻蒸 二酸化炭素 燻蒸	燻蒸利を替えるため、エキヒー仕様からエキヒーMS及び二酸化炭素仕様に燻蒸庫内を改造した。	第1回 5月12日～26日 第2回 6月22日～7月6日 第3回 9月28日～10月12日 第4回 11月10日～24日 第5回 12月7日～21日 第6回 1月11日～25日	第1回 5月10日～25日 第2回 7月12日～27日 第3回 9月20日～10月5日 第4回 12月6日～21日 第5回 1月24日～2月8日	第1回 4月11日～26日 第2回 7月18日～8月2日 第3回 9月12日～27日 第4回 1月16日～31日	第1回 4月15日～30日 第2回 6月6日～23日 第3回 7月16日～31日 第4回 1月21日～2月5日 第5回 3月11日～26日	第1回 7月21日～8月5日 第2回 9月16日～10月1日 第3回 1月13日～28日	

◇展示室燻蒸 6月2日～16日
第4展示室

＜資料の特別利用実績一覧＞

		H16	H17	H18	H19	H20	H21	合計
熟覧	申請数	71	89	101	79	86	82	508
	資料数	2,897	2,599	1,895	1,995	2,299	2,588	14,273
即日閲覧	申請数	20	50	52	55	80	56	313
	資料数	183	575	697	336	732	410	2,933
撮影	申請数	14	20	16	13	27	5	95
	資料数	203	151	319	1,052	1,145	442	3,312
模造	申請数	2	2	1	1	0	3	9
	資料数	2	2	1	1	0	3	9
貸付	申請数	73	62	57	49	61	50	352
	資料数	558	908	488	254	463	427	3,098
映像資料 貸出	申請数				7	7	4	18
	資料数				9	9	5	23
写真原板 貸出	申請数	520	607	569	643	550	625	3,514
	資料数	10,941	12,605	316,486	10,049	8,817	14,859	373,757

(凡例)

平成18年度の写真原板の使用については、高松宮資料調査プロジェクトチームに高松宮本マイクロ全点のコピーを許可したため許可数が突出した。

即日閲覧は、平成16年7月開始。

民俗研究映像DVD貸出は、平成19年11月開始。

Ⅱ. 自己点検評価

国立歴史民俗博物館の自己点検評価について

国立歴史民俗博物館 評価委員会

はじめにー歴博自己点検評価書作成の経緯についてー

平成 23 年度の評価の進め方について、評価についての基本的な考え方や評価する際のポイントを歴博の側から示すことが第 12 回歴博外部評価委員会（平成 23 年 3 月 8 日）において求められた。これを受け、第 13 回歴博外部評価委員会（同年 8 月 11 日）は、歴博が示した「歴博の資源活用に関する評価項目」（別紙 1）を審議して了承し、23 年度はこれにそって、あらかじめ歴博から示された「自己点検評価」を踏まえて外部評価を実施することを決定した。

歴博内の評価委員会（以下、館内評価委員会と略）は、「歴博の資源活用に関する評価項目」をもとに、自己点検票の書式を整え（別紙 2）、「企画展示と特集展示」・「データベース」・「映像資料」のなかから該当するプロジェクトを選んだ（別紙 3）。続いて、各プロジェクトの代表者もしくは関係した館内教員にプロジェクトの自己点検評価を依頼し、館内評価委員会がこの各プロジェクトから提出された自己点検票を集約した。

各プロジェクト代表者による自己点検評価は、研究報告でも事業報告でもそれぞれの観点から行われてきた経緯はあるが、このように評価のポイントを決めて一斉に実施する方法は館内でも初めての試みである。その結果、展示・データベース・映像資料という、それぞれ別個の特質を持った事業を、一つの書式にのっとり自己評価すること自体、無理な点があったため、書き方が区々となったもの、なかには代表者の強い思い入れが反映されたもの、逆に代表者ではない者が記載した例もあって、事実の誤認や誤解される内容を含むことにもなった。しかし、多くの重要な自己評価と改善意見が含まれており、全体としては率直な自己点検評価となったと考えている。

館内評価委員会は、プロジェクトごとの自己点検評価を踏まえたうえで、館としての評価を行うべきであるという方針を確認したうえで、館内評価委員がそれぞれ分野ごとに分担して自己評価を行い、下記のような構成で自己点検評価書を作成した。

なお、昨年度すでに外部評価委員によって実施された対象についても、「（4）平成 22 年度の評価対象」として自己評価をした。また、実際の館蔵資料などの活用状況については、資料熟覧・即日閲覧・資料（実物・レプリカ・写真・映像）貸し出し・大学による利用などについての評価を行い、「（5）館蔵資料の活用状況」にまとめた。

【構成】

はじめにー館内での評価をとりまとめた経緯についてー

- 1 全体の自己評価（資料熟覧・即日閲覧・資料貸し出しなども含めて）
- 2 分野ごとの自己評価
 - (1) 企画展示「侯爵家のアルバム」、企画展示「紅板締め」、特集展示「妖怪変化の時空」に係る資料の活用状況についての総括
 - (2) 「データベース」に係る活用状況についての総括
 - (3) 映像資料「薬師寺花会式ー行法と支える人々ー」、「筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー」、「平成の酒造り」の活用状況についての総括
 - (4) 「平成 22 年度の評価対象」についての総括
 - (5) 館蔵資料の収集および公開・活用状況についての総括

1 全体の自己評価

各プロジェクトを対象とした詳細な評価については、各分野の自己評価に譲り、ここでは総括的な評価を行う。また、実際の資料の活用状況については、資料熟覧・即日閲覧・資料（実物・レプリカ・写真・映像）貸し出し・大学などによる利用などについての評価もここに含めて総括的に評価する。なお、昨年度すでに外部評価委員によって実施された対象についても、「22年度の評価対象」として自己評価をした。

（1）事業全体の意味について

創設以来収集してきた資料群については、「歴博における資料収集基本方針について」によって、収蔵資料の特色および今後の資料収集方針を示している。平成18年度からは、これを前提として運営会議資料収集委員会の審議を受けたうえで収集を継続している。こうした資料群を、現在の歴博の基本的なミッション、就中「博物館型研究統合」を実現するなかで、どのように有効に活用しているのか、について総括的に自己評価する。

まず、限られた予算のなかではあるが、学界でも認められるかたちで収集してきた資料群についての調査研究は、基本的には共同研究として計画的に進めることで、学界に還元するという努力をしてきたことをあげたい。「共同研究」そのものについては、平成18年度の歴博外部評価委員会ですでにとりあげられているが、なかでも「公募型」の館蔵資料研究を進めてきたことは重要である。歴史学・考古学・民俗学にとどまらない隣接諸科学や自然史系の分野の研究者との学際的な共同研究をベースにして実施している。こうした調査研究の直接的な成果は、「資料目録」「資料図録」「データベース」というかたちで計画的に公開（情報発信）してきただけでなく、同時に、その成果のいくつかは「展示」というかたちでも一般に広く公開することができている。民俗資料映像についても、共同研究をふまえて制作し、さまざまな公開・討議の場をもうけ、新たな研究資源としての価値を高める努力をしてきている。

さらに、平成16年度以降は、従来の熟覧に加え、事前の予約なしでも閲覧できる「即日閲覧」というかたちで、館蔵資料閲覧の利便性を高める努力をしてきた。数値としては利用機会が大きく増えているわけではないが、ほぼ安定して需要がある。また、熟覧に供する資料についても、毎年計画的に増やしてきており、公開性を高める努力もしている。資料（現物・レプリカ・制作した模型など）・写真原板・映像資料（とくに公開可能な民俗研究映像）についても、ほぼ毎年、安定した需要があり、それに積極的に応じてきている。平成22年度は、写真原板貸与の申請件数、資料撮影件数がともに増加している。平成18年度以降、「大学のための歴博利用の手引き」を作成して以来、大学院・大学のゼミでの資料熟覧も行われているが、これも平成22年度は増加した。

その意味では、いくつかの課題は残しつつも、館蔵資料を中心に、調査研究・情報公開（発信）・展示・研究的討議という流れのなかで、学界のみならず広く歴史文化資源として共有化する条件は計画的に整備しており、増減はあるものの安定して利用されている。この点については、この2年間についても長期的傾向と大差はない。資料収集と公開・活用については、大学共同利用機関としての博物館が果たすべき「博物館型研究統合」の理念にそった事業ができていると考える。

こうした努力にも関わらず利用機会が大きく増加しないことについては、都内から2時間近くかかるという交通の便の悪さに制約されているが、資料利用に関わる有効な広報活動をしているかどうかについての見直しが必要である。

（2）内容的にどう評価できるか

①研究水準に十分達しているか。

収蔵資料についていうと、おおむね、他分野、多分野の研究者を組織した学際的な「共

同研究」をふまえ、膨大な資料についての計画的な調査を実施しており、研究水準に達していると考ええる。

②歴博ならではの独創性が認められるか。

大学共同利用機関としての研究博物館という性格から、共同研究を組織した調査研究、展示を一環して行うことで、収集した資料を幅広い歴史的・文化的な文脈のなかで位置づけるという点では独創性があると考ええる。写真の使い方という点では、今後の課題も多いが、それも新たな研究課題だとすれば、時期や対象の異なる、したがって展示の性格も異なるが、二つの写真コレクションを使った展示を行ったことの意味は大きい。また、いくつかの資料調査研究、展示だけでなくデータベースなど情報発信の過程で、人文科学と自然科学の学際的協業を行うことができしており、館内に人文科学だけでなく、分析化学や情報工学の研究者を有する歴博ならではの特色を生かすことはできている。

③見やすさ、使いやすさはどうか。

展示という点では、企画展示で展示意図が伝わりにくいという課題を残しつつも、おおむね観客には満足してもらっている。目録・図録やデータベースについても、計画的に調査研究をしてきた結果を反映していると考えている。民俗研究映像については、DVDに収録することとあわせ、制作時に撮影した映像も含めた資料化を進めており、見やすく使いやすいものにしてしている。

(3) 有用性はどう評価できるか？

①学界に対して貢献するものとなっているか。

展示については、学界での展示に対する学術的評価を行おうという動きが始まったばかりなので、その貢献度を具体的に計ることはできていないが、後述するように、むしろ展示批評のあり方をも含め、歴博が積極的に発言する時期にきている。資料目録・図録・データベースについては、全体として刊行後研究者の利用の機会が増えており、学界での新たな研究の進展に貢献しているものと考えている。

②他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。

大学共同利用機関として、資料の調査・研究に関しても、民俗研究映像制作に際しても他の研究機関と協力したり、外部の研究者を組織したり、完成したものをめぐる議論を喚起したりしようと努力はしているが、外部の研究者の参加という点ではまだ十分ではないところもある。展示については、評価の対象としてあがった企画展示はいずれも、館内の研究者が中心となって、膨大な資料をこつこつと整理するなかで行った調査研究の成果という性格が強く、外部の研究者との関係という点では課題を残した。

むしろ、ここでは、資料の即日閲覧という機会を提供していることについて評価したい。平成16年7月から始めた制度だが、毎年50件以上の安定した利用がある。熟覧についても、毎年80件を超えており、貸し付け・写真原板貸し出しともに、ほぼ一定した需要がある。その意味では、資料の活用という点では、外部の研究者にできる限り門戸を開こうと努力してきている。

③国際的に役立つものとなっているか。

展示図録・資料目録・資料図録・データベースはいずれも、日本語を理解できる海外研究者からは高い評価を受けているが、英語での表記がほとんどない（十分ではない）ことはさらに国際的な利用を促進するうえでは大きな制約となっている。その点で、民俗研究映像では、全部ではないが、国際的な共同研究を進めるなかで英語版を作成するなど、研究資源の国際的な共有化を進めていることを特筆したい。

④一般の利用者にとって需要を満たすものになっているか。

企画展示については、来館者にはおおむね好評であり、図録のなかには売り切れるものもあった。民俗研究映像は、年に3回「歴博映画の会」を開催するほか、新作については都内で公開のフォーラムを開催するなど、一般の利用者からのさらなる需要を喚起する機会を設けている。データベースについても、歴史好きの利用者にとっては、その多様な興味に応じることができるような努力をしている。しかし、全体としては、一般に対しての有効な情報発信・広報という点では十分ではなく、大きな課題である。

⑤教育や人材養成に役立っているか。

民俗研究映像のなかには、国際的な共同研究のなかで英語圏の教育に利用することを可能とする英語版を制作しているものがある。また、若手の研究者が、死絵や砲術関係資料などに興味を持ち、研究成果を出し始めているほか、大学のゼミで企画展示を見学に来ていたので、必ずしも意図していたわけではないが、利用は広がっている。なお、データベースが、論文作成時期には利用率が上がっており、学生が有効に使っているようである。

むしろ、ここで強調しておきたいのは、大学・大学院のゼミでの利用の機会が徐々に増えているということである。地の利の問題を考えると、一日がかりになるために機会が急増するわけではないが、定期的に来館して資料を用いたゼミを行っているところもあった。さらに、資料調査研究プロジェクト、展示プロジェクトでは、首都圏の大学院生を非常勤雇用して、整理・調査や展示準備を実施しており、このなかで若手の研究者が育っている。

（４）問題点と改善の方向性について

今回評価の対象となった企画展示は、とくに膨大な館蔵資料を館内研究者が中心となって計画的に調査・研究してきた成果を、展示というかたちで公表したものであり、共同研究というかたちはとったが、外部の研究者を広く組織するという点では十分ではなかった。この点は、多くの資料目録・資料図録やデータベース作成でも同様で、なかには広く外部の多分野の研究者をプロジェクトに組織した事例もあるが、資料整理・調査研究という日常的な業務が重視されるものであるために、やはり十分とはいえない。民俗研究映像でも、館内研究者が監督を行うというメリットがある反面、より多くの研究者の議論を新たに起こしたうえで制作するという点では限界があった。成果物を巡る新たな研究的な議論を喚起する場を積極的に設定するという点でも問題を残した。

この点では、今後、資料に関して、多分野な研究者をも含めた共同研究を、さらに積極的に実施することが必要である。同時に、展示批評を公開の場で行うなど、展示を研究的な評価の対象としていっそう明確に確立させる努力を歴博では行うべきである。このような展示を巡る議論の場から、新たな研究課題が生まれる可能性がある。この点では民俗研究映像で実施しているフォーラムは、こうした方向性を先取りしていると考えられる。

対象とする資料についていうと、写真という資料を用いた企画展示が二つあった。それぞれ写真そのものの歴史的な性格だけでなく、実際の展示意図も異なるが、今後膨大に発掘されるであろう（出続けるであろう）写真をいかに整理・保存・活用するかが問われることになる。館蔵民俗資料の整理・保存・活用も含め、資源としての有効利用を促進させるうえでは不可欠な課題である。

展示、資料収集あるいは整理・修復、データベース制作、民俗研究映像制作などに使える予算が毎年減少するなかで、いかに効率よく事業を展開するのかについても、整理する必要がある。民俗研究映像一つをとっても、これまでと同じ質を維持することは容易ではない。

国際性という点では、展示図録、資料図録・資料目録、データベースで英語を併記する、

あるいは研究を国際的に開くことができるものについては英語版を制作するなど、重点を決める必要はあるが、できるかぎり国際的な利用が可能なものにしていくことは急務である。

また、民俗研究映像および現代展示構築のなかで明確になった著作権をはじめとする諸権利についての整理を行うという点でも課題は残っている。そのうち、事務的に処理できるものについては、管理部を中心にすでにその作業を始めているが、今後ともに留意していく必要はある。

企画展示をはじめとして、歴博の事業についての広報活動が十分でないということもはっきりしている。この点でも、すでに努力を始めているが、中長期的な広報戦略を立てる時期にきている。

2 分野ごとの自己評価

(1) 企画展示「侯爵家のアルバム」、企画展示「紅板締め」、特集展示「妖怪変化の時空」に係る資料の活用状況についての総括

1. 事業自体の意味について

資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や、「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるか。

いずれの展示も、生活史という歴博の目的とする分野にとって重要な資料を収集し、それを研究し、併行して整理、展示する、というサイクルの中で実現したものであり、歴博の目的や活動理念にかなったものといえる。

展示することで新たな研究課題が生じ、新たな収集につながる、という「博物館型研究統合」の意図が具体化されているといえる。

2. 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか。

「侯爵家のアルバム」「紅板締め」は、当館が収集したまとまったコレクションを扱ったものであり、膨大な点数の資料を整理し紹介したこと自体に基礎的な研究として価値があり、また、その過程で明らかにされた成果を展示に盛り込んでいる点でも、研究的に十分水準に達していると言える。

「妖怪変化の時空」は、一貫したテーマの下に収集した資料を元にした展示であり、これまでにもさまざまな形で研究を行い、公表してきたもので、評価も高いと言える。

② 歴博ならではの独創性が認められるか。

歴史系博物館としての視点で収集した資料を扱い、それを展示という形で研究成果を公表した点、特に、単なる記録や美術品としてではなく、歴史的、文化的な文脈でこれらを扱い紹介した点で、独創性があると言える。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か。

資料の特性や展示室の大きさ、構造などによる限界はあるが、それなりの工夫はこらしており、大きな問題点はないと言える。ただ、担当者の意図や展示の意味が理解しにくいという問題は以前から指摘されており、それについては、今回取り上げた展示においても十分達成されたとは言えない。なお改善の余地がかなりあるとすべきであろう。

3. 有用性はどう評価できるか

① 学界に対して貢献するものとなっているか。

「侯爵家のアルバム」「紅板締め」は、資料の整理と基礎的な研究を行って公開したこと自体に大きな意味があり、それぞれ資料目録と図録が完売になったことに見られるように、

反響は少なくなかった。「妖怪変化の時空」は、特に学界を意識してはいないが、テーマや資料について社会にアピールし、多くの研究者の目にも触れた点では、貢献したと言える。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。

共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか。

資料目録や図録の刊行、データベースといった形でそれぞれ資料の全容を公開し、今後の利用を促している点で、大きな効果があったと言え、展示と連動した形で資料の公開を図っていることは、共同利用機関としての責務を果たしていると言える。

展示の準備過程においては、企画展示については、資料調査や展示プロジェクトに館外のメンバーが入っており、特集展示も、これまでの連携展示やシンポジウムなどを反映したものであり、外部の研究機関・研究者も参加する形で行われているが、今回はどちらかという担当者個人の力量と努力に負った面が強く、共同研究を組織してその成果として展示を行うといった、外部の研究者とより一層協業を行う方法もありうる。

③ 国際的に役立つものとなっているか。

資料の公開や活用を図っていることは、当然国際的な利用にも開かれたものであるが、展示場に英文による表記がないことなど、積極的に利用の便宜を図っているとは言えず、活用を促進するためには改善の余地がある。

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か。

知名度の高い人物に関する資料、美しく技術的に高度な資料、テーマ的に人気のある資料をそれぞれ取り上げ、反響もあったことから、需要は満たされていると言える。社会への発信は、それぞれ行われ効果も挙げているが、従前から指摘されている問題として、広報が全体的に弱く、館自体の知名度も必ずしも高くないことから、十分であったとは言えない。

⑤ 教育や人材養成に役立っているか。

一部で大学との連携が行われているが、全体としてはそれほど意識されておらず、特に大学共同利用機関としては、制作の過程における連携や、展示を教育に用いる方法の開発と利用の促進など、今後開拓・改善すべき余地があると言える。

4. 問題点と改善の方向性について

○上記の各項目で検出された問題点は、どのように改善されるべきか。

全体としては、資料の収集・研究・展示という一連の活動として高い水準にあると認められるが、さらにそれを積極的に社会に提示し、活用を図る点では改善の余地がある。

英文の表記を入れるといった技術的な問題について、来館者からの指摘を積極的に収集・分析して、関係部署で定期的に問題を洗い出して改善を図ると共に、従前から指摘されている「わかりにくさ」の改善や、広報や教育的活用の不十分さといった点については、展示担当者の努力に任せるのではなく、館全体の姿勢として意識を高め、体制の見直しを含めて、組織的に改善を図る必要があるだろう。

(2)「データベース」に係る活用状況についての総括

1. 事業自体の意味について

資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や、「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるか。

「江戸商人・職人データベース」は、都市史をテーマとした共同研究、関連する館蔵資料の収集、近世都市を扱った企画展示・総合展示第3室などを背景としている。「古代中世都市生活史データベース」は、共同研究の一環として作成された。「民俗俗信データベース」は、民俗学のみならず歴史学・文学・美術史などの多領域にまたがる素材を対象としたものであり、学際的な意味を持つ。いずれも「博物館型研究統合」の理念に合致した成果であるとみなすことができる。

2. 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか。

いずれのデータベースも、基本的な項目を押さえた上、対象となる資料を網羅したといえるデータ数を擁するものとなっており、質量とも十分に研究水準に達している。

② 歴博ならではの独創性が認められるか。

「古代中世都市生活史データベース」は、共同研究の成果を受けてのデータベース作成であり、複数の他大学の研究者・学生も参加した点は、大学共同利用機関としての特性にもとづく。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か。

「江戸商人・職人データベース」は、書籍の形で刊行された類似の内容を持つデータブックよりも検索項目が多く、利便性に優れている。また、いずれのデータベースも人間文化研究機構の研究資源共有化・統合検索システムからも利用が可能であり、利用者にとってはアクセスしやすい環境となっている。

3. 有用性はどう評価できるか

① 学界に対して貢献するものとなっているか。

「江戸商人・職人データベース」は、近世史のみならず近世文学、近世考古学など、関連する学問分野にも貢献できる。「古代中世都市生活史データベース」は、1960年代に集成された中世物価史料に関する刊行物以来の成果であり、対象とする時代の幅を大きく広げるとともに、消費物資に関する百科事典的な情報源としての価値も併せ持たせることができた。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。

共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか。

そもそも広く公開されることを前提としたデータベースである。また、共同研究の成果、あるいは共同研究と並行しながらのデータベース作成もあり、作成過程や利用面での外部の研究者の参加は十分である。

③ 国際的に役立つものとなっているか。

インターネット上で公開されたものであり、海外の研究者にも役立つものである。人間文化研究機構の研究資源共有化・統合検索システムの英文ページからは、英語により操作説明にもとづき利用することが可能である。内容面では、「民俗俗信データベース」の場合、東アジアの他国でも同様の調査が進んでいることから、将来的には国際的な比較研究に利用されることも期待される。

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か。

「江戸商人・職人データベース」は、東京 23 区を表示項目化することによって、より身近な利用方法を提供した。「古代中世都市生活史データベース」は食べもの、「民俗俗信データベース」は占い・伝承など、研究者以外の一般の人々にも興味関心を引きやすい内容を含んでいる。

⑤ 教育や人材養成に役立っているか。

データベース全体の統計では卒論の執筆時期になると利用頻度が高まる傾向があることから、利用者の中には学生も含まれ、あるいは大学での教育に取り入れられていることなども想定される。また、データベースの作成過程では、多数の大学生が従事し、博物館の実務を体験するという意味でも教育・人材養成に寄与するところがあった。

4. 問題点と改善の方向性について

○上記の各項目で検出された問題点は、どのように改善されるべきか。

「江戸商人・職人データベース」については今後も入力データを増やし続けていく必要がある。また、完成したデータベースがより広く活用されるように広報にも力を入れるべきである。

(3) 映像資料「薬師寺花会式一行法と支える人々」、「筆記の近代誌一万年筆をめぐる人びと」、「平成の酒造り」の活用状況についての総括

1. 事業自体の意味について

資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や、「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるか。

民俗研究映像は、共同研究会での議論をもとに、担当教員が自ら監督となって撮影・制作し、民俗研究の成果を映像として発表するものである。完成した作品と撮影素材はすべて歴博の著作物として保存し、映像の研究資料として活用している。とくに新作は歴博映像フォーラムで上映するとともに、その分野の専門家を招いての討論を加え、広く研究成果を公開するよう努めている。また、過去の作品は「歴博映画の会」で公開し、担当教員が解説を加えることで、一般に向けて民俗文化への理解を深めている。これらの他、作品のDVDは国内外の映画祭や講演会等での上映、個人の研究者、大学での授業、学術シンポジウム等への貸出業務を行い、様々な機関と分野で活用されている。

以上のように、民俗研究映像は共同研究での制作から資源化を経て、館内外の様々な事業で広く活用されているものであり、大学共同利用機関としての歴博の役割や博物館研究理念に適ったものといえる。

2. 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか。

共同研究会に撮影対象に関わる専門分野や映像人類学の研究者、映像作家等を招き、企画段階から完成作品の鑑賞に至るまで討論を繰り返すことにより、当該分野の研究として、かつ映像作品として一定以上の水準を保つよう心がけている。撮影素材は1作品につき100時間を超えるものもあり、急速に変化する現代社会の様子を、文字以外の媒体で把握・保存する映像記録として、貴重な研究資料となっている。

② 歴博ならではの独創性が認められるか。

担当教員がプロデューサーと監督の役割を兼任し、撮影対象についての研究成果を踏まえて、企画段階から撮影・編集に至るまですべての制作過程に直接携わるものであり、①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であり、研究成果を発表する手段としての映像による論文であること、以上の3点を原則としていることに、歴博としての独創性を有している。このような映像の記録・収集・蓄積は、歴史学・考古学・民俗学等の協業をめざした研究機関としての博物館でなければ実現不可能であり、これを継続的におこなってきた点は高く評価されている。

また、共同研究会では制作準備から制作、保存、活用に至るまでのガイドラインを作成し、新たな課題が見つかり次第、それらを順次改善させている。このガイドラインは、映画会社との契約や出演者との権利関係を処理するためのノウハウをも示した歴博独自のものとなっている。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か。

近年の作品はDVDに収録しており、手軽に利用できる。

DVD移行後は、長いものでは120分にもわたる民俗研究映像をいくつかのチャプターに分け、観たいところを自由に選択できるようにしたため、一層便利になった。また、以前のVHSには、スペースの都合上タイトルと制作年度程度しか示すことができなかつたが、DVDにおいては、ジャケットに短い解説文や写真を印刷することが可能になり、利用者に内容をわかりやすく紹介することができるようになった。平成13～16年度はVHS、平成12年度以前は16ミリに作品を収録していたが、それらも順次撮影素材と合わせてDVD化を進め、保存と活用の便を高めている。

撮影素材については、祭礼・儀礼の動作や物づくりの過程など、一連の動作を細かく観察できるようビデオカメラを長回しで記録し、当館で一括して保存することで、研究資料として様々な場面で活用できるように工夫している。

なお、完成した作品と撮影素材は、すべて当館の著作物として権利関係を処理しているため、再編集や公開等で長期的に活用することができる。

DVDという媒体は広く普及しており現状では利用に問題はないが、今後の映像メディアの進歩に対応するかたちで、記録内容を保存し、媒体を更新していく必要がある。

3. 有用性はどう評価できるか

① 学界に対して貢献するものとなっているか。

例えば、平成21年度制作の「平成の酒造り」は青木隆浩の論文「大正後期～昭和初期の北関東地方における産地間競争の激化と越後杜氏の採用動向」（酒史研究22、平成17年）を踏まえたものであり、平成20年度制作の「筆記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－」に関しては、当館で万年筆職人に関する資料を体系的に収集することにより、映像資料ともの資料を合わせた資源化への展開の可能性を示した。平成18年度制作の「興福寺 春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々」と「薬師寺花会式－行法と支える人々－」はアメリカ・イリノイ大学のシンポジウムでそれぞれ上映され、アメリカの日本研究者から高い評価を受けた。

映像を制作した翌年には、毎年東京都内で歴博映像フォーラムを開催し、新作を公開上映するとともに、それに関する専門分野の研究者を招いて講演と討論をおこなうことで、研究成果としての民俗研究映像の位置づけを確認している。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。

共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか。

映像フォーラムにおいては、国内のみならず海外の館外研究者を招き、活発な討論をおこなっている。

また、製作したDVD映像は、研究・教育の資料として活用されるよう、専門の研究機関へ寄贈するとともに、個人の研究者やシンポジウム、学術的な映画祭等に向け、資料係を通じて貸出業務をおこなっている。その他、教育・研究目的であれば、他の研究機関や外部の研究者でも自由に活用できるように配慮した貸出条件を設定している。

③ 国際的に役立つものとなっているか。

平成17年度から日本語版の他に英語版を作成し、国内の留学生に向けた教育や、諸外国

での上映に活用できるように努力している。実際、平成 18 年度制作の「興福寺 春日大社～神仏習合の祭儀と支える人々」と「薬師寺花会式～行法と支える人々～」はアメリカ・イリノイ大学のシンポジウムでそれぞれ上映され、高い評価を得た。今後は、英語版のわかりやすさを向上させるとともに、中国語等、他言語への翻訳をめざしている。

さらに、より多くの人々の活用をうながすためには、海外に向けて広く宣伝することが必要であり、現在はその手段として国際映画祭や海外の映像人類学映画祭への出展を検討している。

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か。

1 作品 20 枚ずつという限られた数の DVD を保存管理する必要性から、一般の利用者に対する貸出は制限しているが、その代わりに当館講堂で年 3 回「歴博映画の会」を開催し、過去の民俗研究映像を上映したうえで、教員が解説を加えている。

当館のホームページで情報を発信するとともに、財団法人歴史民俗博物館振興会を通じてチラシを作成・配布し、イベントの周知を図っているが、その結果、参加者が 100 人から多いときでは 250 人を超える人気イベントになっている。今後もその高い需要に応じるため続けていく予定である。

⑤ 教育や人材養成に役立っているか。

制作した個々の教員が大学の講義や一般向けの講演会などで上映し、教育に役立っている。また外部の教育機関から講義用に貸出を求められることもある。

あわせて、映像製作にあたっては、大学院学生などを補助員として登用し、新たな民俗誌の可能性を現場で模索できたという点で、高い教育効果が認められた。

4. 問題点と改善の方向性について

○上記の各項目で検出された問題点は、どのように改善されるべきか。

ハイビジョンに代表される高画質化や映像編集ソフトのアップグレード、めまぐるしいメディアの変換、それらに係る機材と人件費の高騰など、映像資料の保存・活用には不透明な要素が多い。今後はハードとソフトの両面でいかに迅速な対応をとっていけるかが、長期的に映像資料を保存・活用するための必要条件となっていくと思われる。

なお、映像資料の利活用を推進するためには、著作権に関わる書類の整理が不可欠であるが、保存に必要な文書の適正な管理について認識の齟齬があったため、メディア変換や再編集の契約等に際して、混乱を生じるケースが発生した。この件については、管理部において、契約書等法人文書の保存についての実態を把握し、取扱い方法の改善をおこなったが、映像資料の長期的な保存・活用のためには、引き続き適切な運用を心がけることが望まれる。

また、民俗研究映像は、対象によっては年度を超えて調査・撮影が必要な場合があるが、現行の予算制度のもとでは、対象を限定しなければならない場合が少なくない。このような現状を認識したうえで、年度を越えた研究を実現するための方策を模索し、計画的な執行をおこなう必要がある。

(4)「平成22年度の評価対象」についての総括

1. 事業自体の意味について

資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や、「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるか。

ほとんどのプロジェクトに対する評価は、博物館型研究統合の理念にそって行われた研究活動の成果物として刊行された、というものであったが、直良コレクションだけは、「縄文はいつから」企画展図録との関係性が読み取れない、という意味がよくわからない評価となっている。おそらくコレクション資料の1点が展示に使われたことに起因する混乱ではないかと推察される。

具体的には平田資料群の保存は、歴博のような国の機関で行うべき事業であるという提言、計画的な収集計画のもとで集積されたことによってまとめられた資料群という評価を受けた砲術関係資料（自己点検結果と同じ）のように、歴博の機関としての性格と結びつけて評価を得た事業があった反面、スタッフの層の薄さからやむを得ないとしながらも、展示・研究の実績がもっとも乏しいという評価を受けた瓦コレクションもあった。

2. 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか。

どのプロジェクトも一定の評価を得ていて、なかには死絵・平田・砲術・瓦のように今回のプロジェクトによって新たな知見を得ることが出来たという高い評価を受けたものがある。

死絵は、新たな学問領域の基礎的な資料であるという高い評価が与えられ、プロジェクト代表による自己点検結果とも一致している。平田関係資料も、日本の古代研究の創成期を解明する重要な資料群であり、従来のイメージを四つの点で一新したという評価が与えられている。砲術も三つの新説を提起したという評価である。

課題として、徳川家の楽器には楽器としての道具の歴史的評価をもう少し、と望む声もあった。

② 歴博ならではの独創性が認められるか。

方法論として自然科学と人文科学との学際的協業をあげる評価が多くみられた。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か。

特に瓦と楽器の評価が高かった。カラー写真を使うことによってカタログだけでもかなりの情報を読み取ることが出来るという評価を得た瓦や、楽器は索引の作り方が高い評価を受けている。

課題としては、コレクションの来歴や履歴も載せて欲しいという意見や、写真と実測図の番号が一致しないという指摘を受けた瓦や、砲術データベースの使い勝手の悪さを指摘する評価もあった。

3. 有用性はどう評価できるか

① 学界に対して貢献するものとなっているか。

それぞれが属する学界においておおむね、良という評価を受けているようである。刊行後に問い合わせや引き合いが増えた資料も、死絵、砲術、楽器、瓦を中心に指摘されている。

直良については目録の作成だけでは研究プロセスの共有化が十分でないという指摘もあった。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。

共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか。

展示・研究・資料プロジェクト方式をとる歴博には基本的に備わっている機能が十分に発揮されているという評価であった。

③ 国際的に役立つものとなっているか。

瓦や楽器、直良など中国や朝鮮の資料が含まれているものについて評価されているもののほか、オランダ人による資料調査が行われた砲術、ライデン大学博物館でかつて一部が展示され、現在行われている機構連携在外資料プロジェクトの課題になっている死絵など、があげられる。また楽器のように英文キャプションをつけた上での展示を目指していくことで国際的な認知を目指すという自己点検を行ったプロジェクトもあった。

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か。

楽器の図録が非売品である点を補うためにデータベースでカバーした点が高い評価を受けている一方で、瓦はデータベースでの公開とネット検索の実現を将来的に問われている。

一方、教科書に載るほど関心が高い、誰が鉄砲を伝えたのか、という部分で、ボルトガル人か和寇かといった狭い論争に、マスコミの関与で陥り、それに巻き込まれてしまった砲術のようなプロジェクトの存在が自己点検で確認された。

⑤ 教育や人材養成に役立っているか。

死絵や砲術など若手研究者の研究テーマになっている事業もある。

<平成22年度の評価対象>

瓦コレクション

平田篤胤関係資料

砲術関係資料

見世物関係資料

死絵

紀州徳川家伝来楽器コレクション

直良信夫コレクション

(5) 館蔵資料の収集および公開・活用状況についての総括

1. 事業自体の意味について

創設以来収集してきた資料群については、「歴博における資料収集基本方針について」によって、収蔵資料の特色および今後の資料収集方針を示している。平成 18 年度からは、これを前提として運営会議資料収集委員会の審議を受けたうえで収集を継続している。こうした資料群を、現在の歴博の基本的なミッション、就中「博物館的研究統合」を実現するなかで、どのように有効に活用しているのか、について総括的に自己評価する。

まず、限られた予算のなかではあるが、学界でも認められるかたちで収集してきた資料群についての調査研究は、基本的には共同研究として計画的に進めることで、学界に還元するという努力をしてきたことをあげたい。「共同研究」そのものについては、平成 18 年度の歴博外部評価委員会ですでにとりあげられているが、なかでも「公募型」の館蔵資料研究を進めてきたことは重要である。歴史学・考古学・民俗学にとどまらない隣接諸科学や自然史系の分野の研究者との学際的な共同研究をベースにして実施している。こうした調査研究の直接的な成果は、「資料目録」「資料図録」「データベース」というかたちで計画的に公開（情報発信）してきただけでなく、同時に、その成果のいくつかは「展示」というかたちでも一般に広く公開することができている。民俗資料映像についても、共同研究をふまえて制作し、さまざまな公開・討議の場をもうけ、新たな研究資源としての価値を高める努力をしてきている。

さらに、平成 16 年度以降は、従来の熟覧に加え、事前の予約なしでも閲覧できる「即日閲覧」というかたちで、館蔵資料閲覧の利便性を高める努力をしてきた。数値としては利用機会が大きく増えているわけではないが、ほぼ安定して需要がある。また、熟覧に供する資料についても、毎年計画的に増やしてきており、公開性を高める努力もしている。資料（現物・レプリカ・制作した模型など）・写真原板・映像資料（とくに公開可能な民俗研究映像）についても、ほぼ毎年、安定した需要があり、それに積極的に応じてきている。平成 22 年度は、写真原板貸与の申請件数、資料撮影件数がともに増加している。平成 18 年度以降、「大学のための歴博利用の手引き」を作成して以来、大学院・大学のゼミでの資料熟覧も行われているが、これも平成 22 年度は増加した。

その意味では、いくつかの課題は残しつつも、館蔵資料を中心に、調査研究・情報公開（発信）・展示・研究的討議という流れのなかで、学界のみならず広く歴史文化資源として共有化する条件は計画的に整備しており、増減はあるものの安定して利用されている。この点については、この 2 年間についても長期的傾向と大差はない。資料収集と公開・活用については、大学共同利用機関としての博物館が果たすべき「博物館型研究統合」の理念にそった事業ができていると考える。

こうした努力にも関わらず利用機会が大きく増加しないことについては、都内から 2 時間近くかかるという交通の便の悪さに制約されているが、資料利用に関わる有効な広報活動をしているかどうかについての見直しが必要である。

2. 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか。

収蔵資料についていうと、「歴博における資料収集基本方針について」にそって、かつ各学界を代表する外部委員の意見をふまえて収集してきており、今後の研究に利用できる水準に達していると考ええる。

②歴博ならではの独創性が認められるか。

大学共同利用機関としての研究博物館という性格から、共同研究を組織した調査研究、展示を行い、幅広い歴史的・文化的な文脈のなかで位置づけることが可能な資料群を収集してきており、その意味では独創性があると考えられる。この2年間では、松田家資料や南都楽人辻家資料などを新たに収集するとともに、錦絵コレクションや怪談妖怪コレクションなど既存コレクションを増加したことをあげたい。

③見やすさ、使いやすさはどうか。

使いやすさという点では、都内から歴博へのアクセスがよくないために、十分とはいえないが、この5年間の熟覧・即日閲覧件数は安定している。しかし、毎年どのような資料群が即日閲覧に加わったのか、などについての情報発信などは十分ではなく、ホームページ上での更新にとどまっている。

3. 有用性はどう評価できるか

①学界に対して貢献するものとなっているか。

展示での利用、新たな資料目録・図録の刊行、館蔵資料データベースの更新後には、全体としては研究者がその資料群を利用する機会が増えている。平成22年度では、展示で利用した本多家資料、岩見国亀井家資料などであり、展示や資料目録の公開を行うことと相まって、学界での新たな研究の進展に貢献しているものと考えている。これ以外には、例年の傾向ではあるが、平田篤胤関係資料・廣橋家旧蔵記録文書典籍類・田中穰氏旧蔵典籍古文書・伊能家資料などの利用頻度が高い。

②他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。

資料の即日閲覧という機会を提供していることについて評価したい。平成16年7月から始めた制度だが、毎年50件以上の安定した利用がある。熟覧についても、毎年80件を超えており、貸し付け・写真原板貸し出しとともに、ほぼ一定した需要がある。平成22年度は増加した。

③国際的に役立つものとなっているか。

展示図録・資料目録・資料図録・データベースはいずれも、日本語を理解できる海外研究者からは高い評価を受けているが、英語での表記がほとんどない（十分ではない）ことはさらに国際的な利用を促進するうえでは制約となっている。その点で、民俗研究映像では、一部ではあるが、国際的な共同研究を進めるなかで英語版を作成するなど、研究資源の国際的な共有化を進めている。

④一般の利用者にとって需要を満たすものになっているか。

熟覧の機会は、資料の取り扱い上での問題から原則として研究者に限定されている。指導教員からの推薦書があれば大学院生の利用も認めてきており、研究上での利用を促進する努力をしている。即日閲覧については、とくにマイクロフィルムでの利用は、一般の利用者にも認めている。

⑤教育や人材養成に役立っているか。

民俗研究映像のなかには、国際的な共同研究のなかで英語圏の教育に利用することを可能とする英語版を制作しているものがある。また、若手の研究者が、死絵や砲術関係資料などに興味を持ち、研究成果を出し始めているほか、大学のゼミで企画展示を見学に来るなど、利用の機会が増えている。なお、データベースの利用率が、論文作成時期には上がるという傾向にあり、学生が卒論作成などで有効に使っているものと思われる。

むしろ、ここで強調しておきたいのは、大学・大学院のゼミでの利用の機会が徐々に増えているということである。地の利の問題を考えると、一日がかりになるために機会が急増するわけではないが、定期的に来館して資料を用いたゼミを行っているところもあった。少なくとも平成22年度は、東北大震災のために春休みの利用ができなかったにもかかわらず、利用は増加している。さらに、資料調査研究プロジェクト、展示プロジェクトでは、首都圏の大学院生を参画させて、整理・調査や展示準備を実施しており、このなかで若手の研究者が育っている。

4. 問題点と改善の方向性について

資料熟覧・即日閲覧・資料（実物・レプリカ・写真・映像）貸し出し・撮影・大学や大学院による利用状況についていうと、この5年間をとってみても、大きな増減はなく、ほぼ安定して利用されている。資料収集の面でも、収蔵資料を利用した共同研究・展示も計画的に行っており、資料をほぼ有効に活用していると自己評価できる。

しかし、都内からの交通の便がよくないという地理的条件によって、利用が制約されていることはたしかだとしても、基本的にはホームページ上でしか資料情報を発信していないこともたしかである。この点、展示や資料目録・資料図録の公刊などで、情報公開が進む機会があると、その利用頻度が増える傾向にあるということに鑑みると、どのような資料をあらたに収集し、どのように利用できるのか、という点の情報をきめ細かく示す必要がある。

国立歴史民俗博物館運営会議 外部評価委員会
歴博の資源活用に関する評価項目

平成23年度、「企画展示」「データベース」「映像資料」についての評価をお願いするにあたり、評価項目として、以下の点をあらかじめお示ししたい。

【総論的評価】

1. 事業自体の意味について

資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や、「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるか。

【個別評価】

2. 内容的にどう評価できるか

- ① 研究水準に十分達しているか
- ② 歴博ならではの独創性が認められるか
- ③ 見やすさ、使いやすさは十分か

3. 有用性はどう評価できるか

- ① 学界に対して貢献するものとなっているか
- ② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか
共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか
- ③ 国際的に役立つものとなっているか
- ④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか 社会への発信や貢献は十分か
- ⑤ 教育や人材養成に役立っているか

4. 問題点と改善の方向性について

上記の各項目で検出された問題点は、どのように改善されるべきか

事業名 _____

担当者名 _____

1. 事業自体の意味について

資源の高度活用という観点から見て、歴博の設置目的や、「博物館型研究統合」という活動理念にふさわしいものと言えるか。

2. 内容的にどう評価できるか

① 研究水準に十分達しているか。

② 歴博ならではの独創性が認められるか。

③ 見やすさ、使いやすさは十分か。

3. 有用性はどう評価できるか。

① 学界に対して貢献するものとなっているか。

② 他の研究機関や外部の研究者との関係はどうか。
共同利用機関として、十分門戸を開いていると言えるか。

③ 国際的に役立つものとなっているか。

--

④ 一般の利用者にとって需要を満たすものとなっているか。社会への発信や貢献は十分か。

--

⑤ 教育や人材養成に役立っているか。

--

4. 組織、予算、運営方法等に問題はないか。

上記の各項目で検出された問題点は、どのように改善されるべきか。

--

自己点検対象一覧

No.	企画展示・特集展示
1	侯爵家のアルバムー孝允から幸一にいたる木戸家写真資料ー（樋口雄彦）
2	紅板締めー江戸から明治のランジェリーー（澤田和人）
3	妖怪変化の時空（常光徹）
データベース	
4	江戸商人・職人（岩淵令治）
5	古代中世都市生活史（小島道裕）
6	民俗俗信（常光徹）
7	総括的評価（安達文夫）
映像資料	
8	薬師寺花会式ー行法と支える人々ー（松尾恒一）
9	筆記の近代誌ー万年筆をめぐる人びとー（小池淳一）
10	民俗研究映像の制作と資料化に関する研究（平成の酒造り）（青木隆浩）

.....

国立歴史民俗博物館外部評価報告書
～歴博の資源について～

平成24年3月30日発行

編集 国立歴史民俗博物館評価委員会

発行 国立歴史民俗博物館

千葉県佐倉市城内町1-1-7番地

印刷 株式会社 太陽堂印刷所